

冷水バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

筑紫野市・朝倉郡夜須町所在遺跡群の調査

1982

福岡県教育委員会

冷水バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

筑紫野市・朝倉郡夜須町所在遺跡群の調査

序

冷水道路は、国道 200 号線バイパスとして福岡県道路公社が昭和49年から建設の計画を進めてこられたものであります。県教育委員会は、県道路公社から委託を受けて、この道路建設計画地内に埋蔵する文化財を昭和51年度から56年度までの6年間にわたり道路建設計画等に応じて発掘調査を実施してきたのであります。

この報告書は、この間に実施した筑紫野市および朝倉郡夜須町所在の8遺跡の調査記録であります。その内容は、縄文時代の遺物、弥生時代の集落跡、古墳、奈良・平安時代の建物・溝等です。本報告書を学問研究に、文化財愛護の普及あるいは学校教育等にご活用いただければ幸甚に存じます。

また、本文中に記名した方々はもとより、種々のご協力をいただいた関係各位に深く謝意を表します。

昭和 57 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会

教育長 友 野

隆

例 言

1. この報告書は、冷水バイパス建設によって破壊される遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、昭和51年度の子備調査を基に、福岡県道路公社の委託事業として、昭和55・56年度に福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、下記のとおりである。

I	……………	福岡県教育庁管理部文化課	栗原 和彦	
II	……………	〃	浜田 信也	
III—1	……………	〃	浜田 信也	
—2	……………	〃	馬田 弘稔	中間 研志
—3	……………	〃	浜田 信也	
—4	……………	〃	浜田 信也	中間 研志
—5	……………	〃	馬田 弘稔	中間 研志
—6	……………	〃	馬田 弘稔	中間 研志
—7	……………	〃	浜田 信也	中間 研志
—8	……………	〃	中間 研志	栗原 和彦

4. 掲載図の実測・製図には、栗原、前川威洋(故人)、浜田、中間、馬田があたり、整理補助員の平田春美、豊福弥生の両氏に多大なる援助を願ったほか、一部を奥村俊久君（筑紫野市教育委員会）にお願いした。掲載写真は各担当者が撮影したが、遺物の一部は九州歴史資料館の石丸洋氏の指導の下に平島美代子氏にお願いした。
5. 遺物の整理作業にあたっては、岩瀬正信氏の下に、九州歴史資料館の整理作業員が行なった。
6. 本書の編集は、浜田と中間が担当した。

本文目次

	頁		頁
I 調査の経過	1	5. 浮殿C遺跡	37
II 位置と環境	5	1. はじめに	
III 各遺跡の調査	7	2. 遺構と遺物	
1. 池田8号古墳	7	3. 小 結	
1. はじめに		6. 浮殿D遺跡	41
2. 遺構と遺物		1. はじめに	
3. 小 結		2. 遺構と遺物	
2. 池田遺跡	17	3. 小 結	
1. はじめに		7. 大島遺跡	51
2. 遺構と遺物		1. はじめに	
3. 小 結		2. 遺 構	
3. 浮殿A遺跡	23	3. 遺 物	
1. はじめに		4. 小 結	
2. 遺構と遺物		8. 八ヶ坪遺跡	163
3. 小 結		1. はじめに	
4. 浮殿B遺跡	33	2. 遺構と遺物	
1. はじめに		3. 小 結	
2. 遺構と遺物			
3. 小 結			

図 版 目 次

- 図 版 1 (1) 池田 8 号古墳墳丘近景 (南より)
(2) 池田 8 号古墳開口後 (西より)
- 図 版 2 (1) 石室閉鎖石の状態
(2) 石室閉鎖石除去後の状態
- 図 版 3 (1) 墳丘内列石
(2) 墳丘内列石 (南側)
- 図 版 4 (1) 石室奥壁
(2) 石室内敷石の集石状態
- 図 版 5 (1) 墳丘除去後の状態 1
(2) 墳丘除去後の状態 2
- 図 版 6 (1) 墳丘除去後の状態 3
(2) 墳丘除去後の状態 4
- 図 版 7 (1) 墳丘除去後の状態 5
(2) 墳丘除去後の状態 6
- 図 版 8 須 惠 器
- 図 版 9 須惠器・土師器
- 図 版 10 (1) 池田遺跡全景 (北より)
(2) 池田遺跡全景 (南より)
- 図 版 11 (1) トレンチ近景 (南より)
(2) 溝
- 図 版 12 (1) 土 壙
(2) 中央付近遺構
- 図 版 13 (1) 中央付近遺構
(2) 縄文土器出土黄色土落込み
(3) 同上土層断面
- 図 版 14 (1) 硬玉製勾玉
(2) 縄文土器底部・石核
(3) 勾玉出土状態
(4) 縄文土器底部出土状態
- 図 版 15 (1) 縄文土器 (外面)

- 図版 15 (2) 縄文土器 (内面)
- 図版 16 (1) 浮殿A遺跡地下式横穴
(2) 地下式横穴 (竪穴部より玄室部を望む)
- 図版 17 (1) 地下式横穴 (玄室部より竪穴部を望む)
(2) 地下式横穴竪穴部
- 図版 18 (1) 覆石土壙墓 (南より)
(2) 同 上 (東より)
- 図版 19 (1) 覆石下の土壙
(2) 土 壙
- 図版 20 (1) 第1・2号石棺墓遠景 (東より)
(2) 第1・2号石棺墓 (北より)
- 図版 21 (1) 第1・2号石棺墓 (西より)
(2) 第1号石棺墓 (南より)
- 図版 22 (1) 第1号石棺墓 (北より)
(2) 第2号石棺墓 (西より)
- 図版 23 第2号石棺墓 (粘土・蓋石除去の各状態)
- 図版 24 (1) 浮殿B遺跡地下式横穴 (西より)
(2) 地下式横穴 (東より)
- 図版 25 (1) 浮殿C遺跡トレンチ内遺構出土状態
(2) トレンチ内段落ち部
- 図版 26 (1) トレンチ内遺構出土状態
(2) トレンチ内溝出土状態
- 図版 27 (1) 浮殿D遺跡発掘前全景 (南より)
(2) 中央区全景 (東より)
- 図版 28 (1) 北区全景 (南より)
(2) 南端トレンチ
- 図版 29 (1) 北区遺構出土状態 (北より)
(2) 北区南西隅遺構出土状態 (南より)
- 図版 30 (1) 掘立柱建物
(2) 第1号土壙土器出土状態
- 図版 31 土師器・砥石
- 図版 32 (1) 大島遺跡東側全景 (西より)
(2) 大島遺跡全景 (東より)

- 図版 33 (1) 第1号住居跡(西より)
(2) 第2号住居跡(北より)
- 図版 34 (1) 第3号住居跡(南より)
(2) 第4号住居跡(西より)
- 図版 35 (1) 第19・21～24号貯蔵穴(西より)
(2) 第26～31号貯蔵穴(南より)
- 図版 36 第8・10・12・22号貯蔵穴
- 図版 37 (1) 第12号土壙・第37・22号貯蔵穴
(2) 第39・21号貯蔵穴
- 図版 38 第26・27・32・33号貯蔵穴
- 図版 39 第34・41・46・47号貯蔵穴
- 図版 40 第1・6・7・9・12号土壙
- 図版 41 (1) 第1号竪穴
(2) 第2号竪穴
(3) 溝(西より)
- 図版 42 弥生時代前期甕
- 図版 43 弥生時代前期甕・鉢・壺
- 図版 44 弥生時代前期壺
- 図版 45 弥生時代前期蓋, 中期甕
- 図版 46 弥生時代中期壺
- 図版 47 弥生時代中期壺・鉢等
- 図版 48 弥生時代中期蓋・高坏
- 図版 49 (1) 弥生時代中期器台
(2) 第2号竪穴出土甕
(3) 打製石鏃
- 図版 50 (1) スクレイパー
(2) 石のみ・砥石
(3) 石 庵 丁
(4) 土 製 品
- 図版 51 (1) 紡 錘 車
(2) 太型蛤刃石斧
(3) 磨製石斧
(4) 磨 石

- 図版 52 縄文土器
- 図版 53 縄文土器 (内外面)
- 図版 54 (1) 八ヶ坪遺跡全景 (南より)
(2) 八ヶ坪遺跡B区全景 (北より)
- 図版 55 (1) 第1号住居跡 (東より)
(2) 第1号住居跡周壁溝
- 図版 56 (1) 第2号住居跡 (北より)
(2) 第2号住居跡床面土器出土状態
- 図版 57 (1) A区全景 (南より)
(2) 溝1土層断面
- 図版 58 (1) 溝3 (北より)
(2) 溝4 (東より)
(3) 溝5・6 (東より)
(4) 溝7 (北より)
- 図版 59 (1) 溝3北端土器出土状態
(2) A区東南隅包含層土器出土状態
(3) 第1・2号掘立柱建物
(4) 第3・4号掘立柱建物
- 図版 60 第2号住居跡出土土師器
- 図版 61 (1) 第2号住居跡出土遺物
(2) 溝3北端出土土器
- 図版 62 (1) 溝3北端出土土器
(2) 溝4出土土器
- 図版 63 溝4出土土器
- 図版 64 A区東南隅包含層出土遺物
- 図版 65 B区東端段落ち出土遺物

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 冷水道路および調査遺跡 (1/20,000)	2
第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第 3 図 池田 8 号古墳周辺地形図 (1/1,000)	8
第 4 図 池田 8 号古墳墳丘実測図 (1/200)	9
第 5 図 墳丘土層図 (1/60)	10
第 6 図 石室実測図 (1/60)	11
第 7 図 土器実測図 1 (1/3)	13
第 8 図 土器実測図 2 (1/3)	14
第 9 図 土器実測図 3 (1/3)	15
第 10 図 耳環実測図 (1/2)	16
第 11 図 池田遺跡周辺地形図 (1/1,000)	18
第 12 図 池田遺跡地形図 (1/400)	19
第 13 図 遺構配置図 (1/200)	20
第 14 図 縄文土器実測図 (1/2)	21
第 15 図 石核・勾玉実測図 (2/3)	22
第 16 図 土師器・青磁実測図 (1/3)	22
第 17 図 浮殿 A 遺跡周辺地形図 (1/1,000)	24
第 18 図 遺構配置図 (1/300)	25
第 19 図 地下式横穴実測図 (1/60)	26
第 20 図 覆石土壙墓実測図 (1/40)	27
第 21 図 青磁・指環実測図 (1/2・1/1)	27
第 22 図 土壙実測図 (1/40)	28
第 23 図 第 1 号箱式石棺実測図 (1/30)	29
第 24 図 第 2 号箱式石棺実測図 (1/30)	30
第 25 図 浮殿 B 遺跡周辺地形図 (1/1,000)	34
第 26 図 浮殿 B 遺跡地形図 (1/300)	35
第 27 図 地下式横穴実測図 (1/60)	36
第 28 図 縄文土器実測図 (1/2)	36
第 29 図 浮殿 C 遺跡周辺地形図 (1/1,000)	38
第 30 図 調査区実測図 (1/400)	39

第 31 図	出土遺物実測図 (1/3)	39
第 32 図	浮殿D遺跡周辺地形図 (1/1,000)	42
第 33 図	浮殿D遺跡地形図 (1/600)	43
第 34 図	掘立柱建物実測図 (1/60)	44
第 35 図	第 1 号土壙出土土器実測図 (1/3)	45
第 36 図	第 2 号土壙出土土器実測図 (1/3)	46
第 37 図	その他の遺構出土土器実測図 (1/3)	47
第 38 図	包含層出土土器実測図 (1/3)	48
第 39 図	砥石実測図 (1/2)	47
第 40 図	縄文土器実測図 (1/2)	50
第 41 図	大島遺跡周辺地形図 (1/1,000)	52
第 42 図	第 1 号住居跡実測図 (1/60)	53
第 43 図	第 2 号住居跡実測図 (1/60)	54
第 44 図	第 3 号住居跡実測図 (1/60)	55
第 45 図	第 4 号住居跡実測図 (1/60)	56
第 46 図	貯蔵穴実測図 1 (1/50)	57
第 47 図	貯蔵穴実測図 2 (1/50)	58
第 48 図	貯蔵穴実測図 3 (1/50)	60
第 49 図	貯蔵穴実測図 4 (1/50)	62
第 50 図	貯蔵穴実測図 5 (1/50)	63
第 51 図	貯蔵穴実測図 6 (1/50)	64
第 52 図	貯蔵穴実測図 7 (1/50)	65
第 53 図	土壙実測図 1 (1/40)	69
第 54 図	土壙実測図 2 (1/40)	70
第 55 図	竪穴実測図 (1/40)	73
第 56 図	溝断面図 (1/60)	74
第 57 図	第 1・2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	75
第 58 図	第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	76
第 59 図	第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	77
第 60 図	第 3・4 号住居跡出土土器実測図 (1/4)	78
第 61 図	第 1・2・4・9 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	80
第 62 図	第 10・12 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	81
第 63 図	第 16・17・19 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	82

第 64 図	第20～25号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	83
第 65 図	第27・28号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	84
第 66 図	第29・30号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	85
第 67 図	第30号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	86
第 68 図	第30～32・34号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	87
第 69 図	第35・36・38～40号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	88
第 70 図	第43・44号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	89
第 71 図	第44・45号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	90
第 72 図	第46号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	91
第 73 図	第46～48号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	92
第 74 図	第2～5号土壙出土土器実測図 (1/4)	93
第 75 図	第6・9号土壙出土土器実測図 (1/4)	94
第 76 図	第11・12号土壙出土土器実測図 (1/4)	95
第 77 図	第2号竪穴、溝出土土器実測図 (1/4・1/6)	96
第 78 図	溝下層出土土器実測図1 (1/4)	97
第 79 図	溝下層出土土器実測図2 (1/4)	98
第 80 図	溝上層出土土器実測図1 (1/4)	100
第 81 図	溝上層出土土器実測図2 (1/4)	101
第 82 図	溝上層出土土器実測図3 (1/4)	102
第 83 図	溝上層出土土器実測図4 (1/4)	103
第 84 図	溝上層出土土器実測図5 (1/4)	104
第 85 図	溝上層出土土器実測図6 (1/4)	105
第 86 図	溝上層出土土器実測図7 (1/4)	106
第 87 図	溝上層出土土器実測図8 (1/4)	107
第 88 図	溝上層出土土器実測図9 (1/4)	108
第 89 図	溝上層出土土器実測図10 (1/4)	109
第 90 図	石鏃実測図 (2/3)	148
第 91 図	スクレイパー実測図 (1/2)	149
第 92 図	土製品・磨製石器実測図 (1/2)	150
第 93 図	石斧・磨石・砥石実測図 (1/2)	151
第 94 図	縄文土器実測図1 (1/2)	155
第 95 図	縄文土器実測図2 (1/2)	156
第 96 図	縄文土器実測図3 (1/2)	157

第 97 図	縄文土器実測図 4 (1/2)	158
第 98 図	八ヶ坪遺跡周辺地形図 (1/20,000)	164
第 99 図	各トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	163
第 100 図	第 1・2 号住居跡実測図 (1/60)	165
第 101 図	第 1 号住居跡出土土師器実測図 (1/3)	166
第 102 図	第 2 号住居跡出土土師器実測図 1 (1/3)	168
第 103 図	第 2 号住居跡出土土師器・砥石実測図 2 (1/3)	169
第 104 図	第 2 号住居跡出土玉実測図 (2/3)	170
第 105 図	第 2 号住居跡出土鉄器・土製品・須恵器・縄文土器実測図(1/2)	171
第 106 図	溝 1 土層断面実測図 (1/40)	172
第 107 図	溝 2 出土土師器実測図 (1/3)	173
第 108 図	溝 3 北端出土土器実測図 (1/4)	173
第 109 図	溝 4 出土土器実測図 1 (1/4)	176
第 110 図	溝 4 出土土器実測図 2 (1/4)	177
第 111 図	溝 4 出土土器実測図 3 (1/4)	178
第 112 図	溝 6 出土弥生土器・須恵器実測図 (1/3)	180
第 113 図	溝 7 出土須恵器・土師器実測図 (1/3)	181
第 114 図	A 区東南隅包含層出土土器実測図 1 (1/4)	182
第 115 図	A 区東南隅包含層出土土器実測図 2 (1/4)	183
第 116 図	B 区東端段落ち出土須恵器・土師器・土製品実測図 (1/3)	185
第 117 図	B 区東端段落ち出土石製模造品実測図 (1/2)	186
第 118 図	第 1・2 号掘立柱建物実測図 (1/60)	187
第 119 図	第 3・4 号掘立柱建物実測図 (1/60)	188
第 120 図	第 5 号掘立柱建物実測図 (1/60)	189
第 121 図	A 区各ピット出土須恵器・土師器・白磁実測図 (1/3)	189

付 図 目 次

- 付図1 浮殿D遺跡遺構配置図 (1/200)
付図2 大島遺跡遺構配置図 (1/200)
付図3 八ヶ坪遺跡遺構配置図 (1/200)

表 目 次

- 第1表 調査遺跡一覧表…………… 3
第2表 大島遺跡・貯蔵穴一覧表……………67～68
第3表 大島遺跡・土城一覧表……………71
第4表 大島遺跡・弥生期土器観察表……………111～147
第5表 大島遺跡・石器・土製品一覧表……………152～153
第6表 八ヶ坪遺跡・第2号住居跡出土玉計測表…………… 171

I 調査の経過

一般国道 200 号線は、北九州市八幡西区を起点とし筑豊地方の直方市・飯塚市を経て筑紫野市原田に至り、一般国道 3 号線につながっている。福岡県の北部と中・南部を短絡する重要な幹線であるため、近年の交通混雑の状況はすさまじいものである。建設省や福岡県では、交通混雑の解消や車社会の発達に応じて、直方市下境から嘉穂郡桂川町までの約20kmに、同国道バイパスを建設した。

ところで、同国道は三郡山系中の冷水峠を越えなければならない。同峠は道路勾配が急な上、急カーブが多く、さらに冬季の積雪・凍結により、しばしば交通が規制されるなどの欠点があり、早期改良が望まれていた。

福岡県道路公社(以後県道路公社と略す)は、料金を徴収することのできる道路の新設や維持・改良などの管理を総合的に行うなど、地方幹線道路の整備を促進することを目的として、昭和49年12月に発足した。

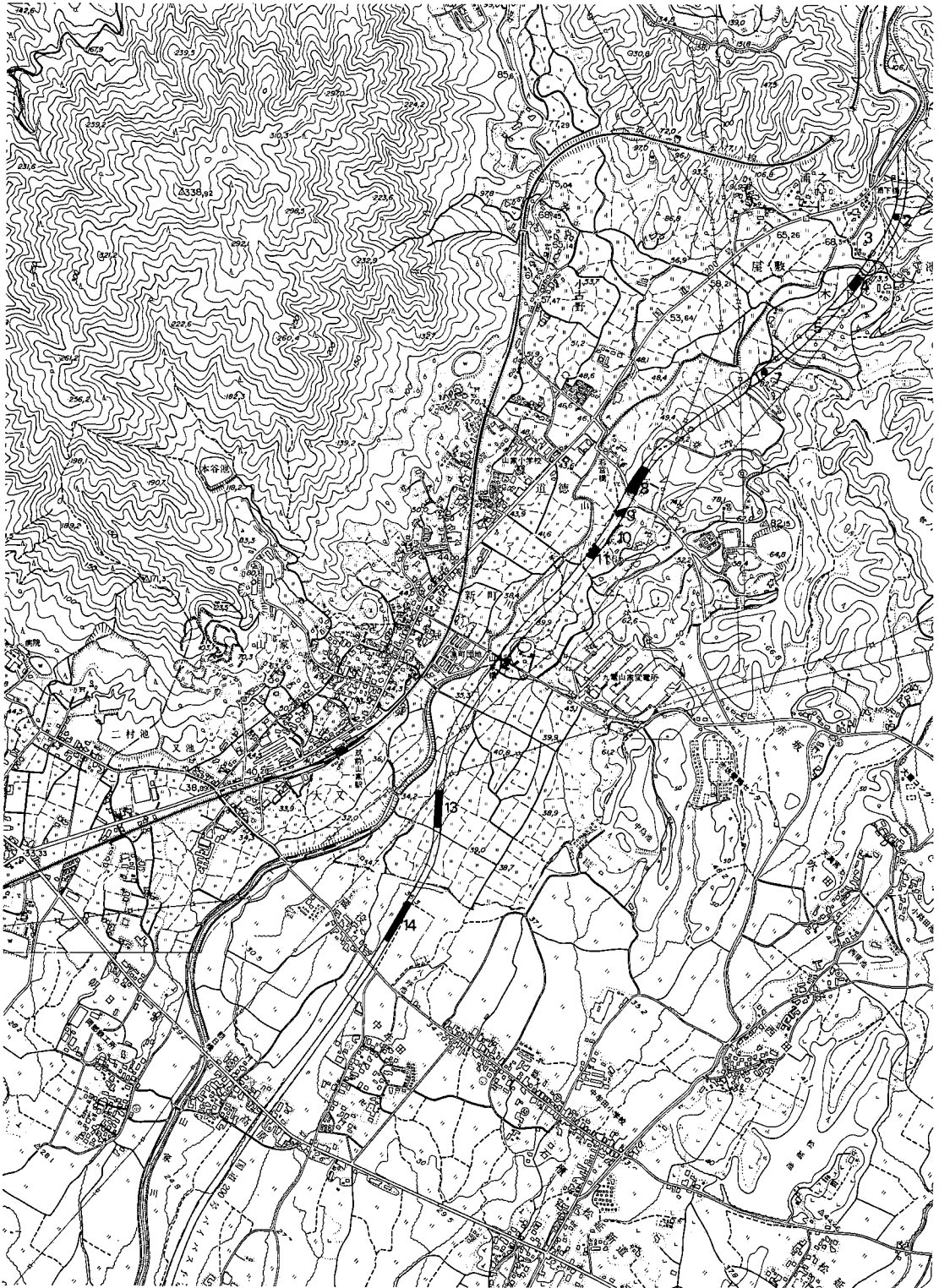
九州地方建設局では、桂川町以西の同国道バイパスの基本的な路線計画を作成していたが、嘉穂郡筑穂町内野付近から、朝倉郡夜須町朝日付近までの約10kmの間を有料道路とし、この間を冷水バイパスとして県道路公社が建設することとなった。

福岡県教育委員会(以後県教委)は、冷水バイパス建設計画地周辺の文化財等の分布状況について九州地方建設局における基本設計の段階で一応把握はしていたが、県道路公社に事業が引き継がれると共に、同公社と協議をすすめ、路線決定の資料を得る目的で再度分布調査を実施した。この結果、国・県指定の文化財は、建設計画予定地には遺存していなく、発掘調査によって保存を必要とするような文化財が発見された場合を例外として、基本的な路線計画を了解した。

分布調査によって認められた埋蔵文化財包蔵地については、県道路公社との協議により、県教委が委託を受けて発掘調査することとなった。

発掘調査は、昭和51年度から実施することとなったが、用地未買収という状況のもとでは本調査の実施は困難な状態であったので、予備調査的な事業でしかなかった。本格的な発掘調査は昭和55年に始まるが、この間にルートの変更などで1・3・6地点は要発掘調査地区から除外されることとなった。

本調査は、用地買収済の地区から始めることとした。昭和55年度に第2・第14地点の発掘調査を実施し、昭和56年度は第5・7・8・9・12・13地点の発掘調査を実施した。このうち、5・12地点はトレンチ調査で、9地点は全面の表土剥ぎ作業の段階で遺構のないことが解かり、



第 1 図 冷水道路および調査遺跡 (1/20,000)

それ以上の調査は実施しなかった。また、7地点は用地買収が遅れ、昭和57年3月に実施することとなり、当報告書に掲載することはできなかった。

なお、第1表に示すとおり、所在地は全て筑紫野市大字山家となっているが、これは国土調査によって旧地名を廃止し統一したものであって、遺跡名は旧地名の小字を付し、8～11地点は字名が同じであるところから、A・B・C・Dを付した。

第1表 調査遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	種別	調査期間	調査面積	備考
1		嘉穂郡筑穂町内野	散布地			路線外
2	池田8号古墳	筑紫野市大字山家 3304-1	円墳	昭和56年3月12日～3月27日	300m ²	
3		筑紫野市大字山家 3297		昭和51年8月2日～8月25日	30m ²	予備調査遺構なし
4	池田遺跡	筑紫野市大字山家 3442-2	集落跡(?)	昭和51年6月16日～6月23日 昭和51年7月8日～7月30日	1,000m ²	
5		筑紫野市大字山家 3480,3510,3511		昭和56年6月3日～6月4日	260m ²	トレンチ調査遺構なし
6						欠番
7	池田9号古墳	筑紫野市大字山家 3720-3	円墳	昭和57年3月1日～3月13日		
8	浮殿A遺跡	筑紫野市大字山家 3686-4, 3686-5	墓地	昭和56年11月24日～12月8日	400m ²	
9	浮殿B遺跡	筑紫野市大字山家 4100	墓地	昭和51年9月1日～9月27日	60m ²	予備調査
				昭和56年7月27日～7月29日	300m ²	本調査
10	浮殿C遺跡	筑紫野市大字山家 4113	集落跡(?)	昭和51年9月24日～10月5日	70m ²	予備調査
11	浮殿D遺跡	筑紫野市大字山家 4114, 4116	集落跡	昭和51年10月7日～12月28日	1,100m ²	
12		筑紫野市大字山家 4235,4238,4241-1,4241-3		昭和56年4月14日～4月18日	300m ²	トレンチ調査遺構なし
13	大島遺跡	筑紫野市大字山家 4178, 4180-3, 4181	集落跡	昭和56年6月15日～8月11日	1,200m ²	
14	ハヶ坪遺跡	朝倉郡夜須町中牟田字ハヶ坪	集落跡	昭和55年7月26日～10月27日	3,010m ²	

昭和51年の予備調査に始まり、その後のルート変更や用地買収の遅延から本調査の着手は遅れ、数年のブランクを置き、前述のような経過のもとに6年という年月を要して発掘調査は終了した。

調査関係者は次のとおりである。

総括	福岡県教育委員会	教育長	友野 隆
	福岡県教育委員会管理部文化課	課長	藤井 功
庶務	〃	主任主事	三瓶 寧夫
	〃	〃	古賀 秀幸
調査	〃	調査二係長	栗原 和彦

調 査	福岡県教育委員会管理部文化課	主任技師	前川 威洋(故人)
	〃	〃	浜田 信也
	〃	〃	中間 研志
	〃	〃	馬田 弘稔
	〃	〃	池辺 元明
	〃	調査補助員	稲富 裕和
	〃	〃	川村 博
	〃	〃	田浦 郁子

なお、発掘調査にあたっては、福岡県道路公社、施行業者ならびに地元の方々に種々のご配慮をいただいた。記して感謝の意を表すところである。

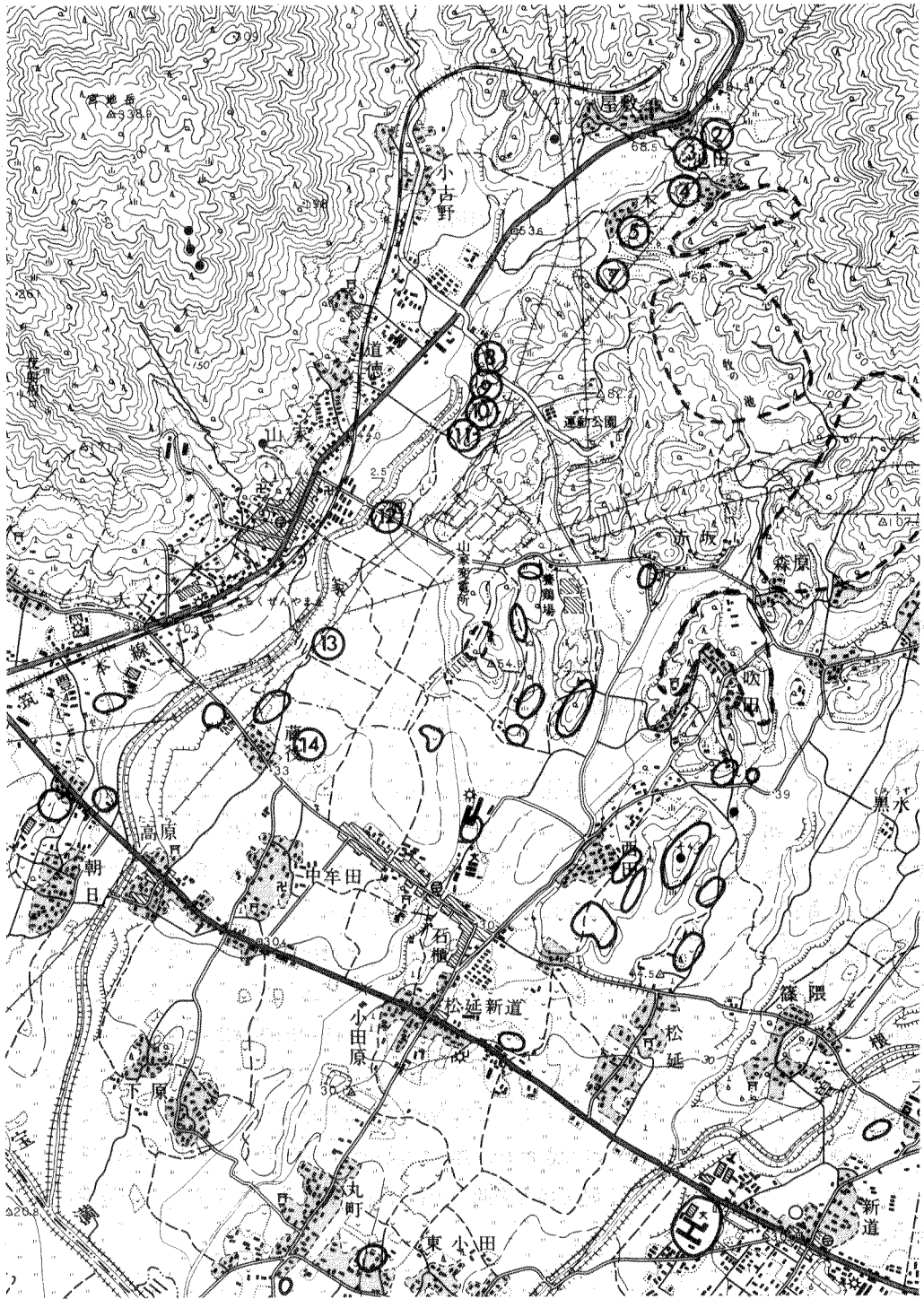
Ⅱ 位置と環境

冷水バイパスは、国道200号線のバイパスとして建設される。車社会の発達と既設国道の狭少から起る交通混雑を解消する為にあちこちで国道バイパスが建設されている。国道200号は北九州市八幡西区で、国道3号から分かれ、筑豊を經由し筑紫野市で再び国道3号に合流する。ほぼ国鉄筑豊本線に沿って南下する国道200号は、筑豊と筑紫平野を割する三郡山塊すなわち冷水峠を越えて山家川沿いに下り、筑紫平野に出てくる。

山家川は筑紫平野の北部を潤す宝満川の支流である。宝満川やその支流域には数多くの遺跡が所在する。山家川を挟んで対峙する宮地岳と砥上岳の両山麓にも多くの遺跡地が知られている(第2図)。宮地岳中腹の殿様塚1号墳は近年知られた装飾ある石室で、円文や盾が描かれている。砥上岳山麓には、池田古墳群や牧の谷古墳群等の弥生時代から古墳時代の遺跡地が多い。

今回、調査の対象となった国道200号冷水バイパスは、砥上岳南西麓の山家川の南に沿って平野部から峠に向かって延びるルートで計画された。バイパスは同岳南西麓に展開する丘陵を横断し、低台地を縦断する。分布調査で要調査地域は14ヶ所があげられたが、予備調査をも含め調査を実施したのは、No. 2(池田古墳)、No. 4(池田遺跡)、No. 8(浮殿A遺跡)、No. 9(浮殿B遺跡)、No. 10(浮殿C遺跡)、No. 11(浮殿D遺跡)、No. 13(大島遺跡)、No. 14(八ヶ坪遺跡)の8遺跡であった。

池田古墳は、砥上岳南西麓に延びる丘陵先端に所在する。山家川沿いに展開する平野部の最深部に位置し、墳頂からはよく平野部が望める。池田の集落を挟んで対峙する丘陵上には、7基の円墳から成る池田古墳群が遺存する。池田遺跡は、池田の集落のある丘陵の先端に所在する。浮殿の遺跡群は山家川沿いに南西に延びる丘陵上やその裾部に所在する。A遺跡は標高62mの丘陵端部に位置し、谷を挟んで標高52mの平坦な丘陵にB遺跡がある。両遺跡とも中世代の墓であり、近接することから同一遺跡と見てもよからう。C遺跡はさらに小谷を挟んだ丘陵の緩斜面に所在するものである。D遺跡はC遺跡の所在する丘陵の南西裾部に広がる低い台地上に遺存する集落跡である。さらに山麓から南西に幅広く延びる台地上のほぼ中央北縁すなわち山家川に面する位置に大島遺跡が所在する。この台地の先端付近に八ヶ坪遺跡が所在している。恐らく両遺跡は幅広く展開するものと思われ、弥生時代から古墳時代までの大集落が遺存するものであろう。さらに大島遺跡で縄文時代後期の土器片が多数採集されており、隣接地に同時代の遺跡の遺存するものと思われる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ 各遺跡の調査

1. 池田8号古墳

Ⅲ 各遺跡の調査

1. 池田8号古墳

1. はじめに

池田8号古墳は、砥上岳の南西麓にあり、北に延びる丘陵端に所在する。その先端部には、山家川が西に流れ、これより西に平野部の広がる場所である。古墳は標高102mの平坦部の先端に位置し、構築にあたっては丘陵斜面を利用しているため、墳丘はそれほど高くない。平坦部は墓地となっており、この古墳のほかにもそれらしい石材などが散在していたが、古墳としての確証は得られなかった。当古墳は1基のみの所在ではなく、筑紫野市教育委員会にて周辺に池田古墳群が確認されている(註1)。当古墳はこの古墳群の1基と考えられ、8号墳とした。

2. 遺構と遺物

(1) 墳丘 (第3・4図, 図版1・3)

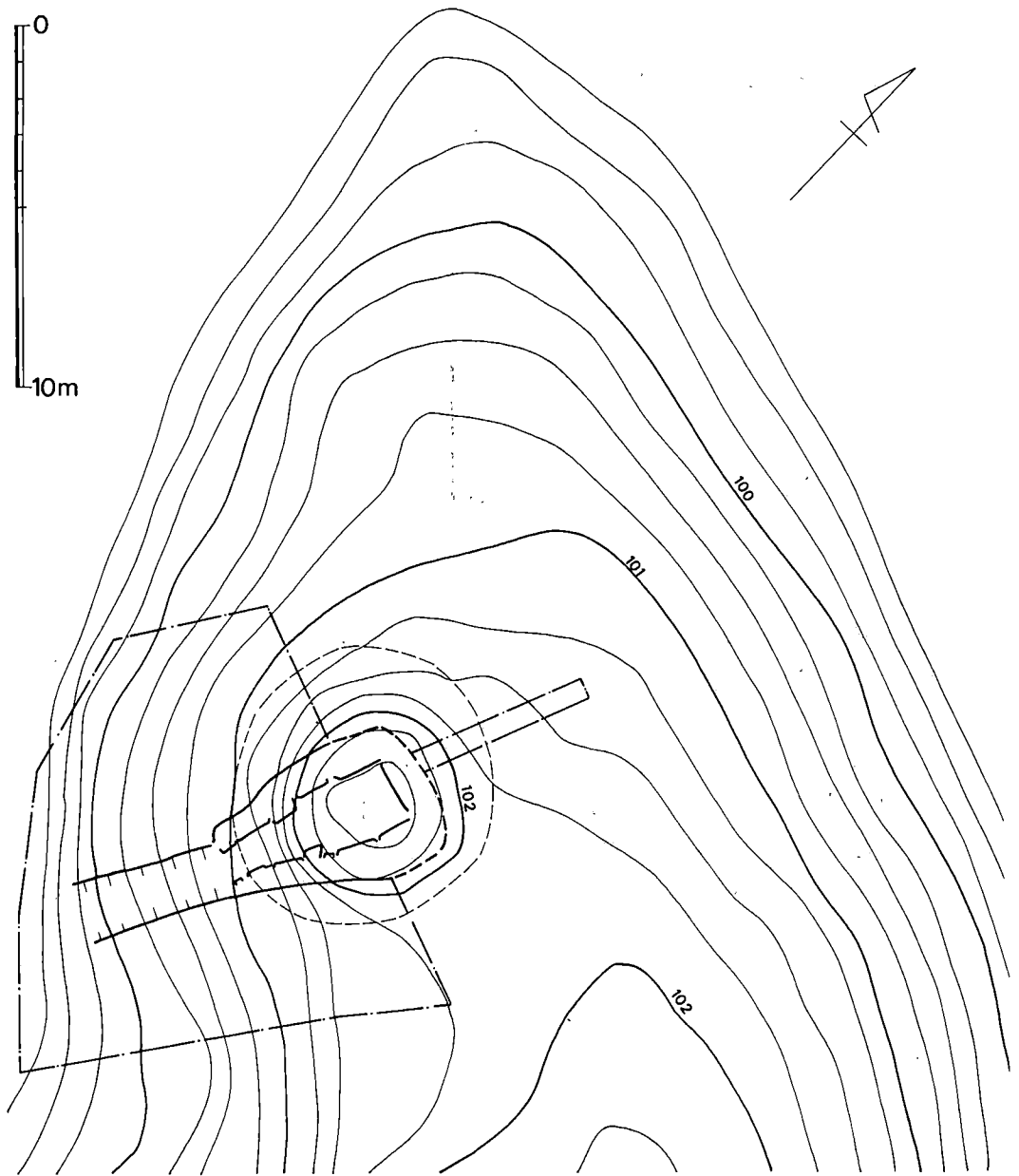
墳丘は南北径7.9m、東西径7.2mを測る。高さは、平坦部より1.1mで低い。墳丘の盛土状態は細いものでなく、厚く広く積み上げている。石室の掘り方が深いため、石室はほとんど掘り方内におさまり、このため盛土は掘り方内と積石間を封土後に天井石を載せ、一気に積上げを完了しているようだ。この盛土再開にあたっては、ほぼ掘り方線にそうように盛土の流出を防ぐためのものと思われる石を配している(図版3)。全体に盛土は薄く石室の天井石が露呈している状態であった。掘り方は墓道をも含め、やや不整な羽子板状を呈し、深さは約3.1mを測る。

(2) 石室 (第5図, 図版2・3・4)

石室は、南西(平野部)に向け開口する単室の横穴式である。腰石には巨石を配し、その上部は大小の石を積み上げている。奥壁は巨石を立て、間隙を小石で埋めているという状態である。積み上げにあたっては、石の面をそろえており、その点には十分留意している。羨道部は、それほど大きな石は使用していない。天井石を受けていた石が一部で崩落しており、積み方はやや雑である。床面は大小の角礫を敷いていたものと思われるが、盗掘によりほとんどが動かされていた。敷石は若干の遺存状態と石の量からして、上下2段あったと思われる。石室の両袖間と羨道部のほぼ中央付近の2ヶ所に框石を据えている。羨道部の框石の外側に板状の石を立て、



第 3 图 池田 8 号古墳周辺地形図 (1/1,000)

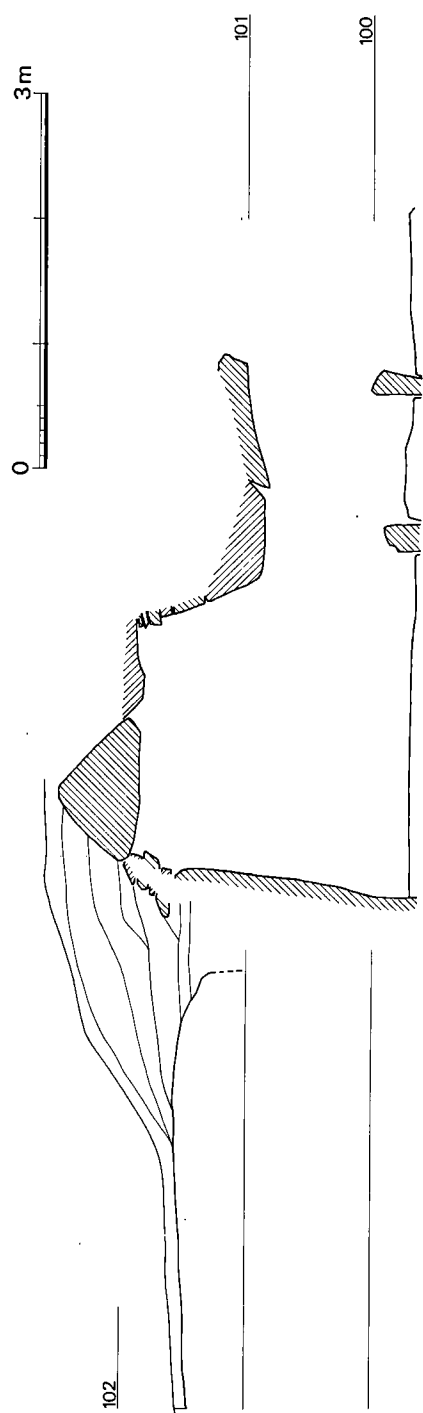
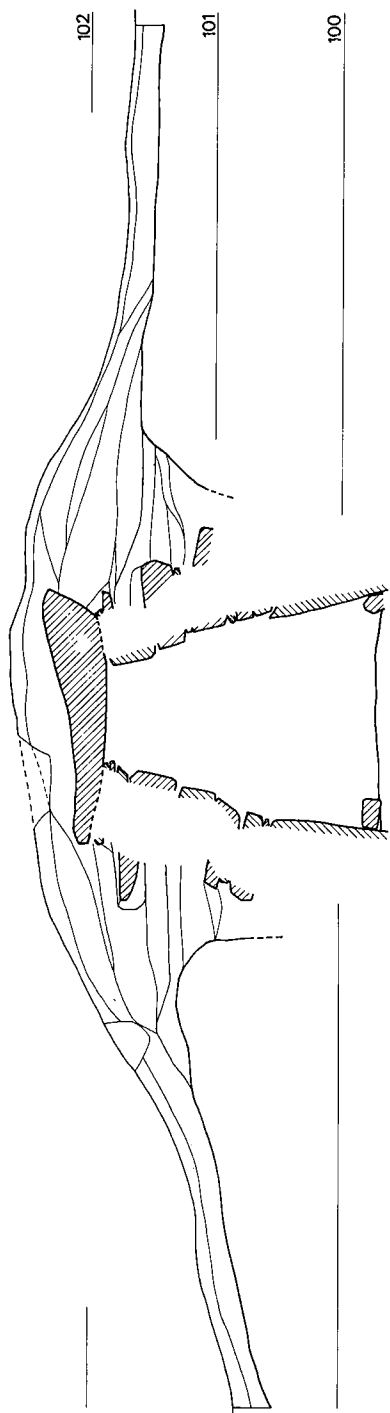


第 4 図 池田 8 号古墳墳丘実測図 (1/200)

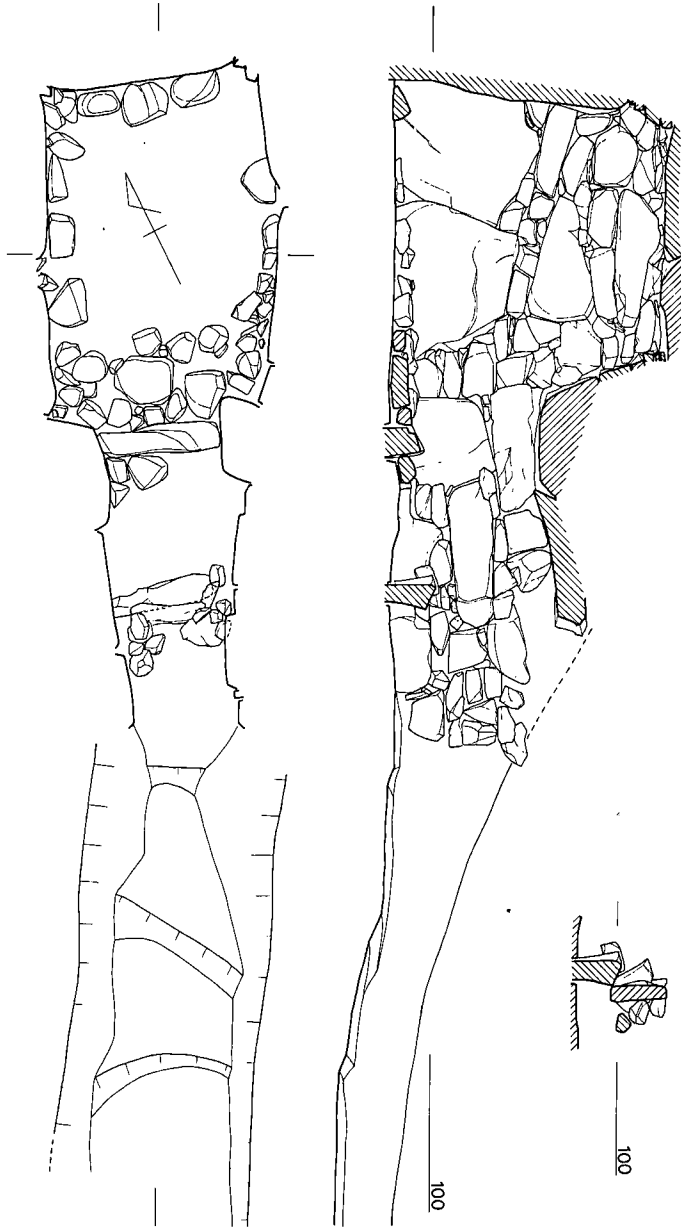
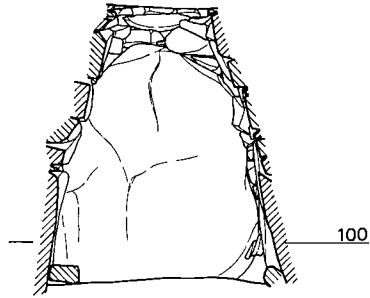
小石と封土をもって閉鎖している。

石室の規模は、主軸長 4.2 m である。玄室はやや不整な長方形を呈し、長さ 2.7 m 、幅約 1.8 m 、高さ約 2.25 m を測る。また、羨道部にも柵石間に敷石があった模様であり、構造的には単室の石室であるが、この柵石間を前室に見立てているようである。

墓道は、 4 m ほどの長さで確認された。その先端部との落差は 50 cm ほどで、道底は 3 段に平



第 5 图 墳 丘 土 層 图 (1 / 60)



第 6 图 石 室 实 测 图 (1/60)

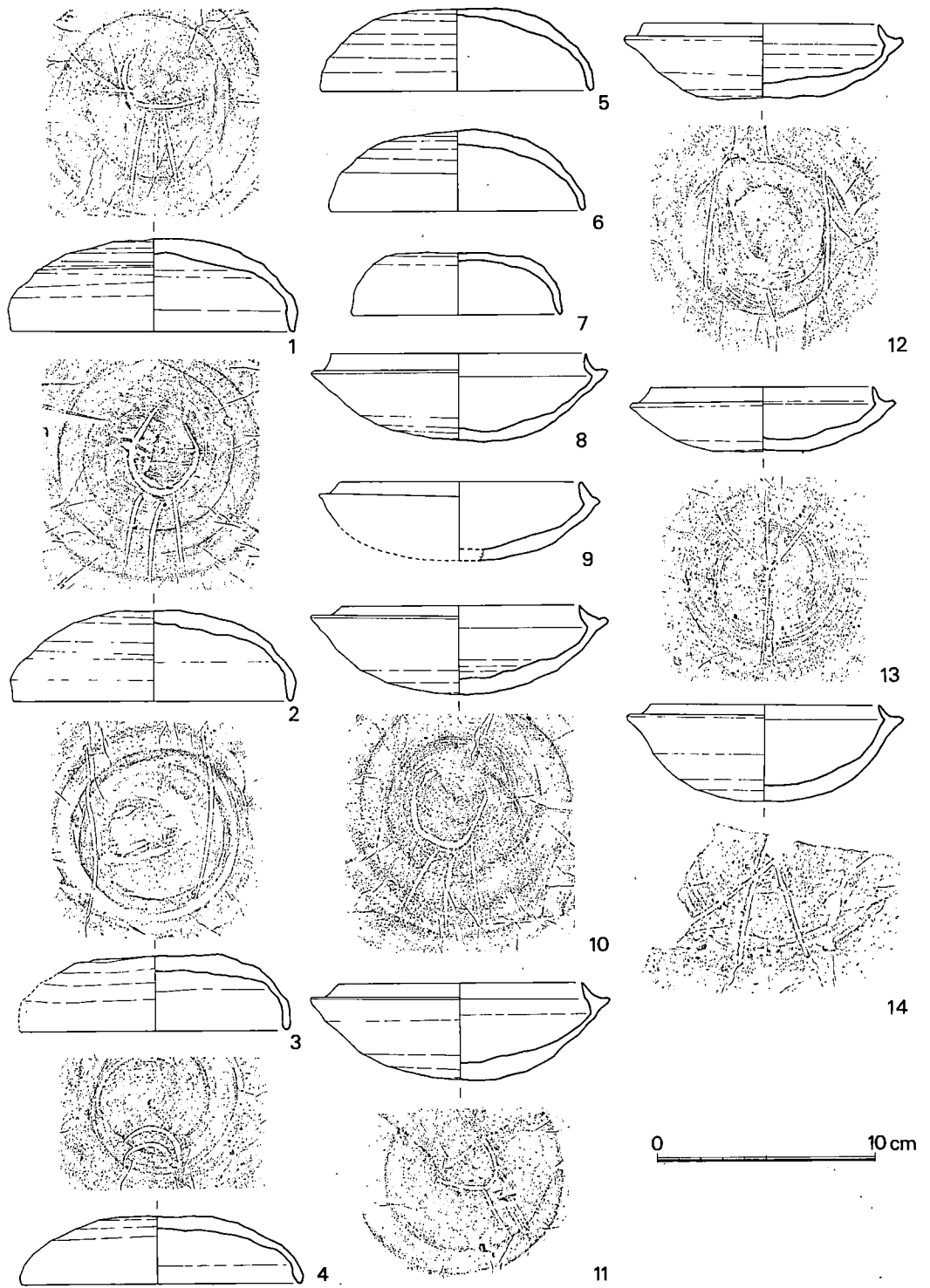
坦部を設けている。

(3) 遺物 (第7~10図, 図版8・9)

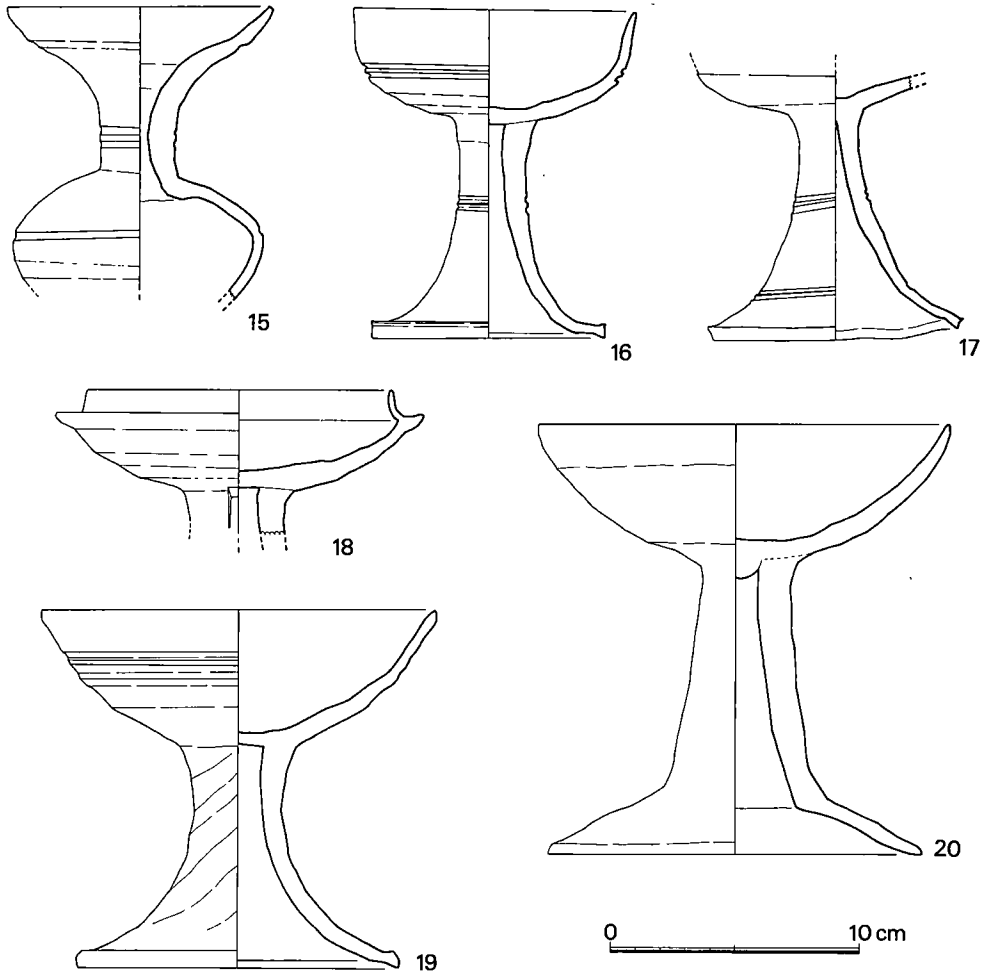
遺物の出土は、石室内から耳環1個のみで、他は墓道部からの出土である。墓道埋土中よりの出土で、須恵器、土師器のみである。甕などは細片となって集中していた。

坏蓋(1~7) 1は径12.8cm, 器高4.3cmを測る。端部はやや肉厚となり内側に1稜を有す。外面の中ほどより上部は回転ヘラケズリで、他は水びき、撫でである。焼成良好で、胎土に若干の粗い砂粒を含む。天井部外面にヘラ記号がある。灰色を呈す。2は径12.6cm, 器高4.1cmを測る。1と同じような造りである。胎土に若干の粗い砂粒を含むが、焼成良好で紫灰色を呈す。1と同様にヘラ記号がある。3は径12cm, 器高3.5cmを測り、前二者に比べ天井部が平坦になっている。この部分は回転ヘラケズリである。焼成良好で、胎土に若干の粗い砂粒を含む。天井部外面にヘラ記号がある。淡紫灰色を呈す。4は径13cm, 器高3.1cmを測る。やや扁平な感のある器形である。身受け部はやや傾き、若干肉厚となっている。胎土に若干の粗い砂粒を含むが焼成良好である。天井部外面にヘラ記号がある。淡紫灰色を呈す。5は径12.2cm, 器高3.8cmを測る。やや丸味のある器形をなす。天井部は器肉が薄くなっている。胎土は粗い砂粒を若干含むが焼成良好である。濃紫灰色を呈し、天井部外面に横一棒に半円のヘラ記号がある。6は径11.4cm, 器高3.7cmで、やや丸味のある器形である。焼成は良いが、胎土は粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。淡灰茶色を呈す。7は径9.5cm, 器高2.8cmを測る。天井部は平坦となり箱形の器形である。紫灰色(内面), 灰色(外面)を呈す。短頸壺の蓋とも考えられる。これらの蓋の天井部外面は、すべて回転ヘラケズリである。

坏身(8~14) 8は径13.6cm, 器高4.1cmを測る。全体に器肉は薄い仕上りである。口縁部は、受け部から内傾しながらも端部は直立している。胎土はよく精製されており、焼成も良好である。紫灰色を呈す。9は半損品であるが、径約12.9cm, 器高3.5cmを測る。器肉は全体に厚い。蓋受け部は短かく、平坦部もほとんどない。焼成良好であるが、胎土に粗い砂粒を含み、器肌に浮き出ている。灰黒色を呈す。10は径13.6cm, 器高4.1cmを測る。厚みのある口縁部は他に比べ大きく内傾している。焼成良好で胎土に若干の粗い砂粒を含む。内面は紫灰色、外面は灰色を呈すも、自然灰釉がかかっている。外底部に、1・2と同様のヘラ記号を記す。11は径13.8cm, 器高4.4cmを測る。やや深みの丸味のある坏身である。底部の器肉が非常に厚い。蓋受け部は平坦で、口縁部は内傾している。胎土は精製されており、焼成も良好である。内面は紫灰色、外面は灰黄色(自然灰釉)を呈す。外底部に10と同様のヘラ記号がある。14は半損品であるが、径12.6cm, 器高4.4cmを測る。径に比べ深みがあり丸味のある器形をなす。全体に器肉が厚いが、口縁部の器肉は薄く、内傾している。焼成は良好であるが、胎土は粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。淡紫灰色を呈す。外底部にヘラ記号がある。13は径12.2cm, 器高2.9cmを測る。底部はやや平坦となっている。焼成良好であるが、胎土に粗い砂粒が多く、



第 7 图 土 器 实 测 图 1 (1/3)



第 8 図 土 器 実 測 図 2 (1 / 3)

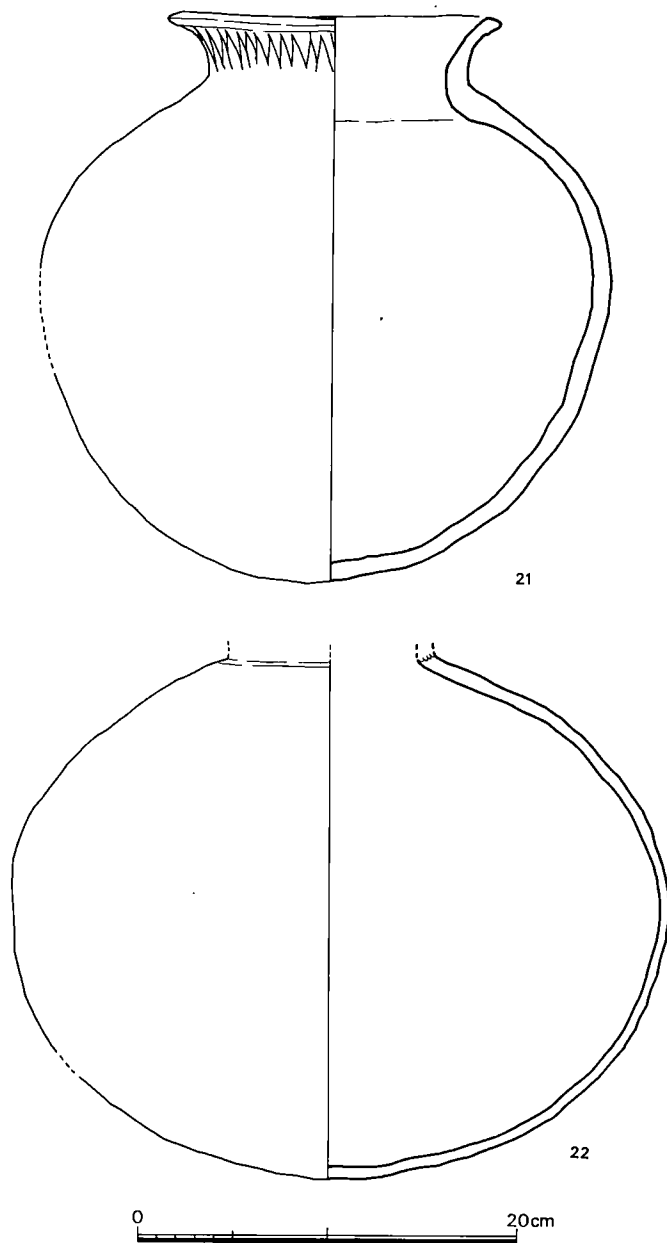
器面に浮き出ている。暗灰色を呈す。外底部にヘラ記号がある。12は径12.8cm，器高3.5cmを測る。底部は平坦になっている。焼成良好であるが，胎土は粗い砂粒を含み，これが器面に浮き出ている。紫灰色を呈す。外底部にヘラ記号がある。3の坏蓋とセットとなるものと思われる。

これらの坏身の外底は回転ヘラケズリの整形を施している。他面は水びき，内底部はナデである。

壺 (15) 胴下部を欠失する。細い頸部から大きく外反する口縁部となっている。胴部に比べ器肉が厚い。胴部は算盤玉状をなしている。頸部に2条の，胴部に1条の浅い沈線がめぐる。焼成はよいが，胎土に粗い砂粒を含む。灰黒色を呈す。

高坏 (16~20) 16は無蓋の高坏である。坏部径11.4cm，器高13.2cm，脚端径9.4cmを測

る。坏部はやや深く、これに細い脚がついている。脚部はラッパ状に開き、端部は跳ねあげ、内側に一稜を有す。坏部に2条、脚体部に2条のヘラ描き沈線を施す。焼成は良好であるが、胎土に粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。紫灰色を呈す。17は坏部を欠失する。器高13cm前後と考えられる。脚端径は10.2cm前後であろう。坏部は、その中ほどに一段を有す。脚はラッパ状に開く、端部は上下に跳ね出している。脚部の2個所に各々2条のヘラ描き沈線を施す。焼成良好で、胎土には細砂粒を含む。灰黒色を呈し、焼き歪みのある土器である。18は脚部を欠失する。有蓋の高坏である。坏部径14.8cmを測るやや大きなものである。蓋受け部は大きく、平坦部をなし、口縁部は内傾しながらもその端部は直立している。脚部には3個所に長方形の透しがある。焼成は良好で、胎土に粗い砂粒が多く、器面に浮き出ている。淡紫灰色を呈



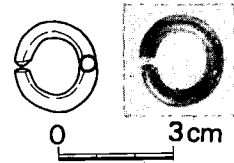
第9図 土器実測図3 (1/3)

す。19は坏部径15.8cm, 器高15.4cm, 脚端径13cmを測る土師質の土器である。坏部中ほどに2条の沈線状の凹線があり、その下方は回転ヘラケズリ整形である。他は水びき整形であり、脚部は胎土をひねった痕跡がみられる。整形やつくりは須恵器の手法を用いる。焼成あまく、胎土に粗い砂粒が多い。いわゆる赤焼土器か。20は坏部径16.5cm, 器高17.2cm, 脚端径15cmを測

るやや大きな土師器高坏である。脚体部は粗いヘラ削りの後に撫でによる整形である。他は水びき、撫でによる整形を行なっている。焼成あまく、胎土に粗い砂粒が多い。赤茶褐色を呈す。土師器高坏片はこの他9個体分があるが、いずれも小片である。又、これらは脚の短いもので、焼成不良で非常にもろいものばかりである。

甕 (21) 口縁部径17.5cm, 胴部径29.8cm, 器高29.8cmを測る。口縁部が若干歪み, 胴部には須恵器片が窯着している。頸部の鋸歯文はヘラによる施文で, 半周するのみである。胴部外面上部は格子目の叩きで, 下胴部はカキ目で叩きを消す。内面は同心円叩きである。焼成は良好であるが, 胎土に粗い砂粒が多く, 器肌に浮き出ている。

横瓶 (21) 口縁部を欠失する。胴部径34.1cmを測る。やや薄手の製品である。胴部最大部に孔(擬頸部)を粘土板でふさぎ整形しており, 胴部の整形は口頸部を造る以前に完了しているようで, 図示する頸部より右は平行文叩きで, その他は平行文叩きのあとカキ目を施している。胴部内面は同心円叩きである。



第10図
耳環実測図(1/2)

耳環(第10図) 石室より出土した。径2.05×1.85cmを測る。断面は円形で0.35cmである。鉄地金銅張りのものである。

3. 小 結

池田8号古墳は, 7地点の9号古墳と同じで, 池田古墳群の中心からやや離れたところに位置し, 単独に丘陵の先端に所在する。池田古墳群は, 筑紫野市教育委員会により7基が確認されており, 冷水バイパス建設に係る分布調査によって新に8・9号墳が発見された。発掘調査を実施したのは8号墳だけで, 当古墳群の実体は正確に把握しがたい。筑紫野市教委の調査に係る7基の古墳群は, 墳径が20mを越えるものもあるが, 5m弱という小規模なものがある。主体部は判明するものは横穴式石室であり, 複室ものもある(註2)。

8号墳は, 古墳としてはよく見られるもので, 何ら変化のあるものではない。丘陵斜面をうまく利用し, 墳丘盛土を容易にしている。石室は盗掘を受け, 副葬品などの検出はなく, 墓道での須恵器・土師器のみの発見にとどまった。出土遺物のうち, 18の高坏は, 明茶色を呈し, 土師質の土器であるが, 整形の手法は須恵器のそれと同じで, いわゆる「赤焼土器」といわれるものである。最近この種の土器がよく発見されており, 整理・検討の進められているところであり, 今後の研究に待つところである。

須恵器は坏(身・蓋)が多く, これらに記された篋記号のうち, 1・2・10・11に描かれた記号は特徴あるものである。坏は, その形態からⅢb期に属し, 当古墳はおおむね6世紀後半頃に築造されたものであろう。

註1 福岡県教育委員会編「福岡県遺跡等分布地図」(筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編)1980年

註2 註1に同じ



1 池田8号古墳墳丘近景



2 池田8号古墳（開口後）



1 石室閉鎖石の状態



2 石室閉鎖石除去後の状態



1 墳丘内列石



2 墳丘内列石 (南側)



1 石室奥壁



2 石室内敷石集石状态



1 墳丘除去後の状態1



2 墳丘除去後の状態2



1 墳丘除去後の状態 3



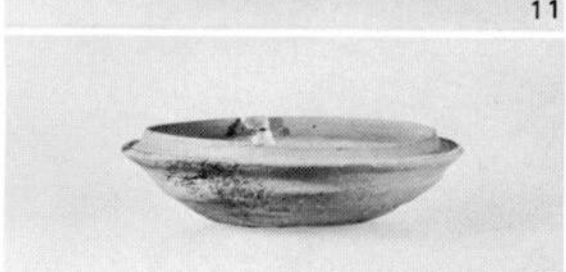
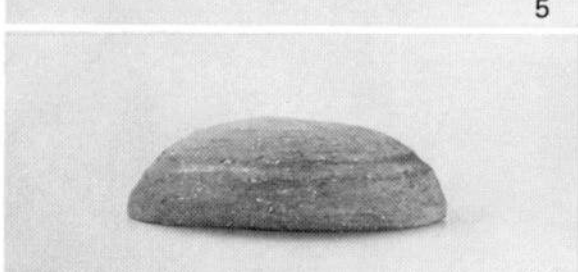
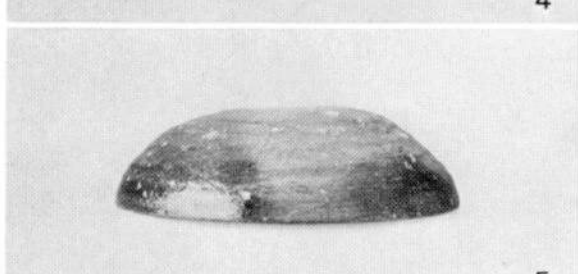
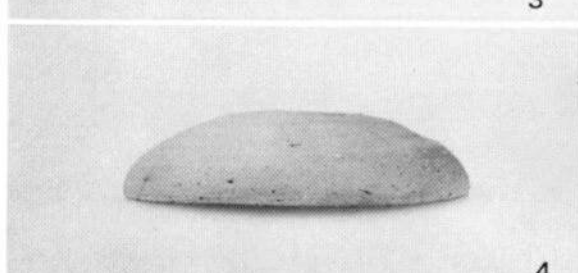
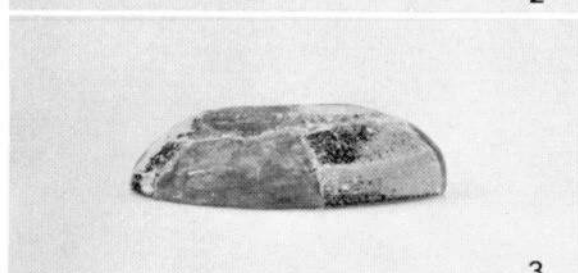
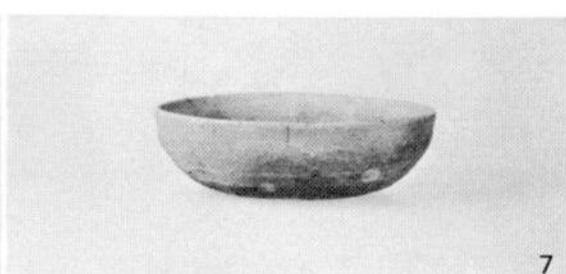
2 墳丘除去後の状態 4



1 墳丘除去後の状態 5



2 墳丘除去後の状態 6





18



16



17



15



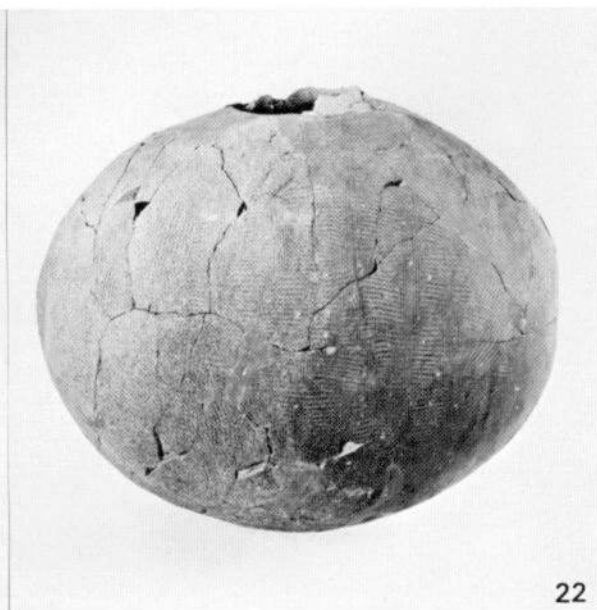
19



20



21



22

Ⅲ 各遺跡の調査

2. 池田遺跡

2. 池田遺跡

1. はじめに

水稲が作付けされていない水田を調査対象地として借り上げたが、周囲の水田の漏水防止のために小範囲の試掘にとどめた。幅5mのトレンチを、南区で10m、北区で20mの長さで設けて発掘し、土壙・柱穴様小ピット等の遺構と縄文土器・須恵器片等の遺物が出土した。

2. 遺構と遺物

遺 構

水田耕作土中から、土師器・須恵器・サヌカイトの小片が多数出土した。上から40cm掘り下げて床土を除去すると、灰黄褐色の花崗岩バイラン土に至り、遺構が検出された。

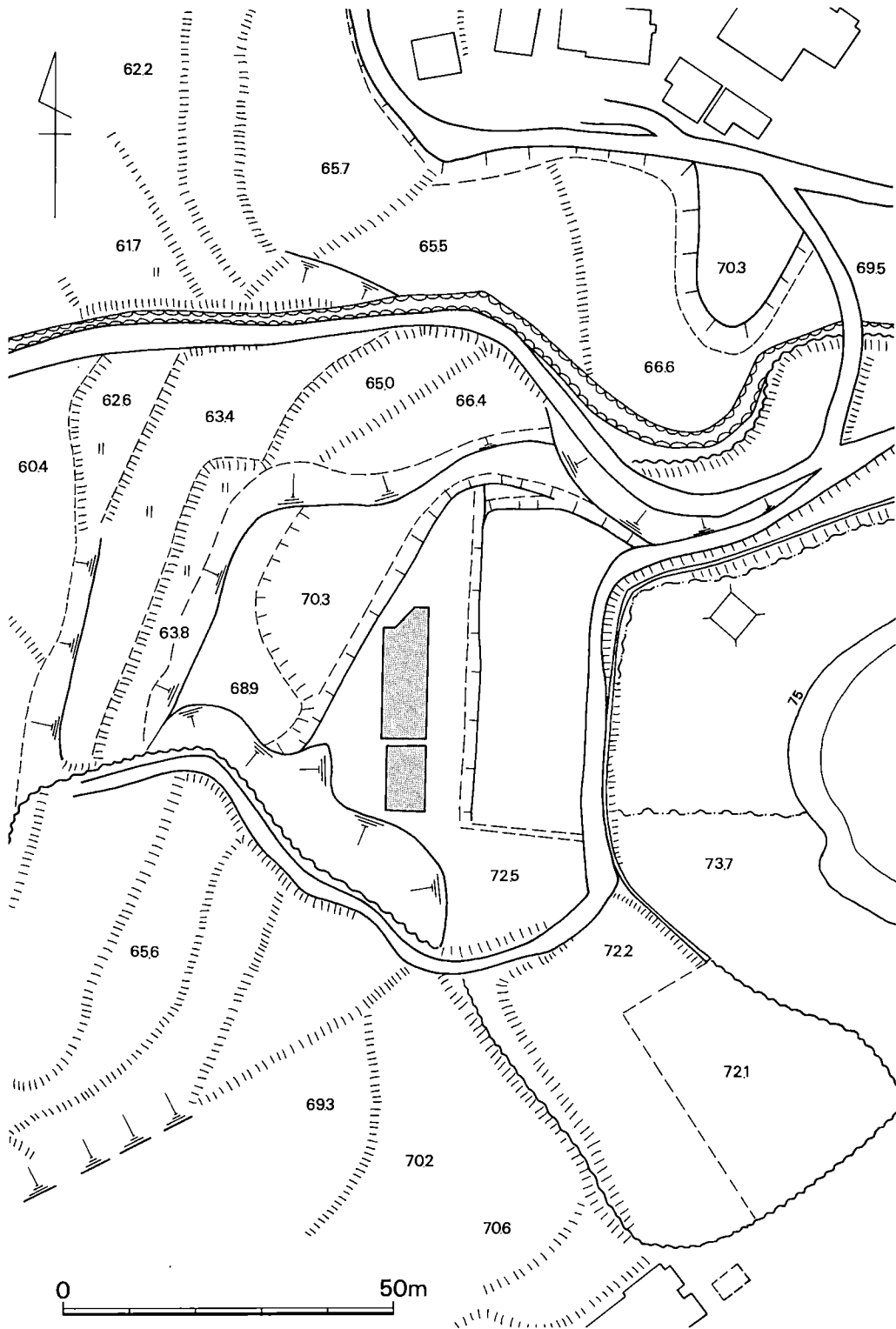
南区トレンチでは、径約60cmで深さ10cm前後の小ピットが若干と、長さ2.84m×幅1.48m×深さ0.43mの隅丸長方形土壙が検出され、須恵器等の小片が出土した。

北区トレンチでは、柱穴様小ピットと不整形土壙が検出された。柱穴様小ピットは、トレンチ北半部に多く、図版14—3に示したピット内上部から勾玉(第15図)が出土したのをはじめ、他のピット内から土師器・須恵器破片が出土した。南半部には不整形ピットが多く検出され、東西方向に列状に連続するかのような状態を示し、径10cm大の花崗岩の石が若干認められた。ピット内の埋土は、須恵器片を出す柱穴様小ピットの暗灰褐色埋土と異なり、黄褐色を呈しており、床面に凹凸が多く、縄文時代早期の押型文土器片が出土した。このため、北区トレンチを西側に拡大し、第14図に示すような底部片が出土したが、この不整形ピット内からまとめて出土するという状態ではなく、小片が散在して埋土中から検出された。

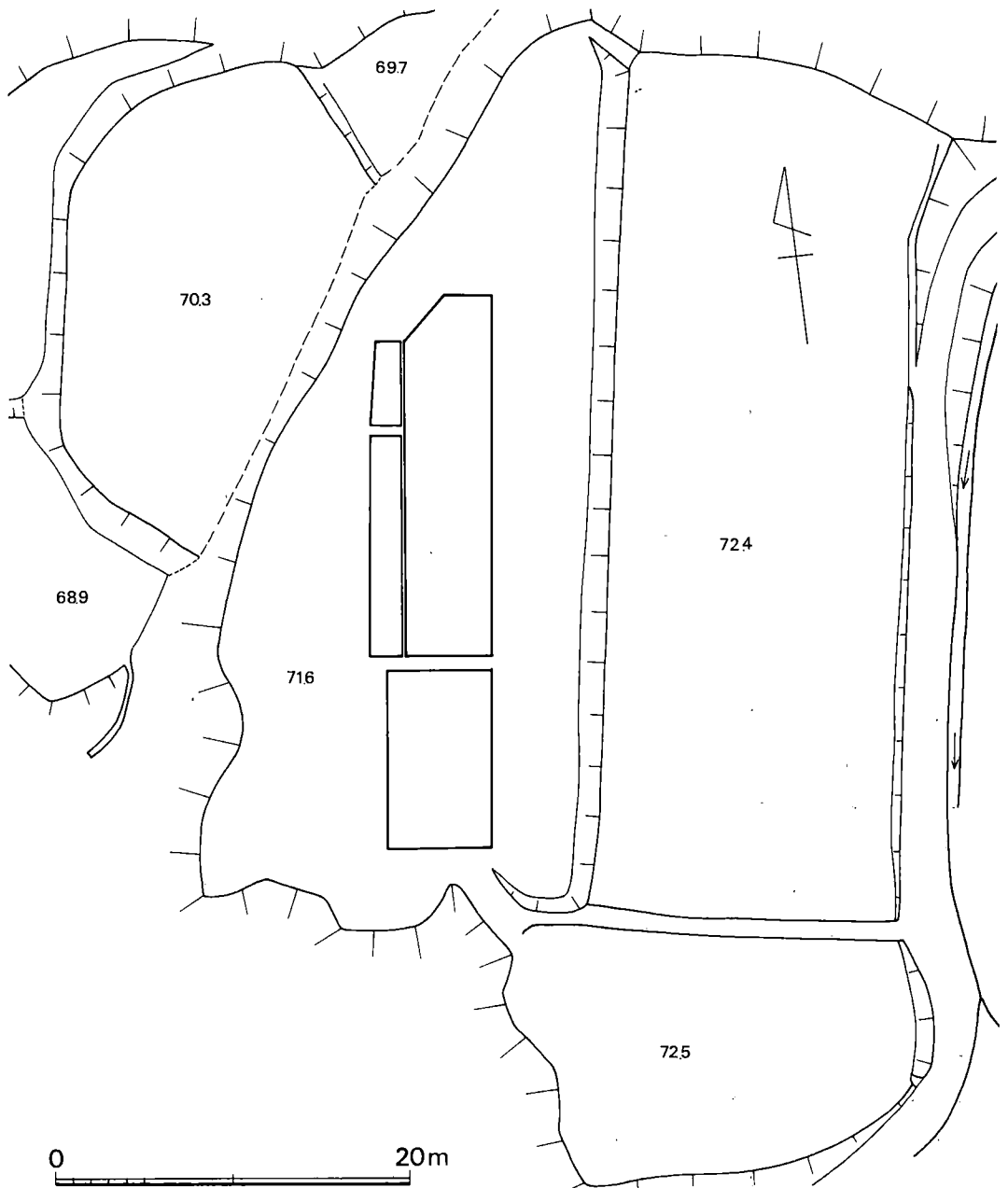
出土遺物

縄文土器 (第14図)

第2・3トレンチの不定形竪穴及び黄色土落込み等から縄文早～前期の土器片若干の出土をみた。1～6は楕円形押捺文を施すもので各種ある。1は、ピット内出土で、外面及び内面上端、更に口唇部にも、横走の楕円形文様を押捺する。口縁外反して開く類で、焼成良く、暗褐色をなし、胎土に微砂粒を混入する。2も外反して開く類であるが、楕円形押捺文を外面は斜走、内面上端は横走させる。黄色土落込出土、焼成やや不良で暗褐色をなし、微砂粒を混入する。

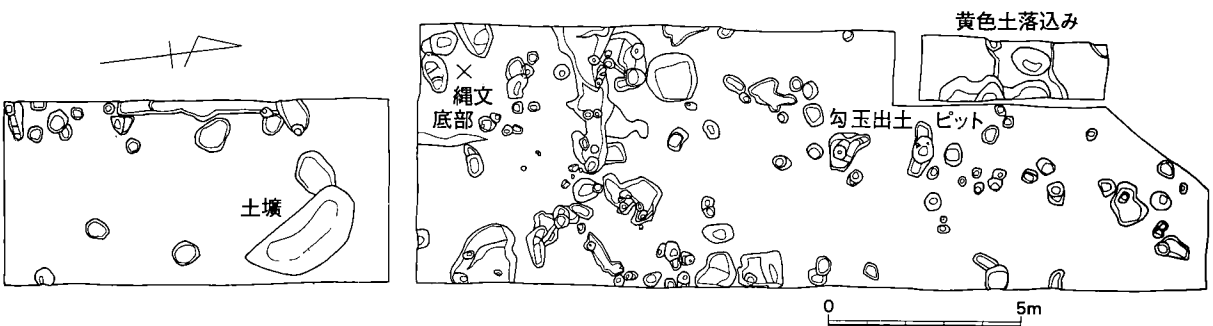


第11図 池田遺跡周辺地形図 (1/1,000)



第12図 池田遺跡地形図 (1/400)

3も黄色土落込出土で、外面にやや小さめの楕円形押捺文を縦走させるもので、焼きやや不良で褐色をなす。4は大きい楕円形押捺文を横走させるもので、黄色土出土。焼きは良く、黄褐色をなす。5は斜走させるもので、暗褐色をなす。6は、外面の殆んどが剥落するが、厚手で大きい楕円形押捺文を縦走させるものでピット12出土品。7は、薄手で横走する山形押捺文を



第13図 池田遺跡遺構配置図 (1/200)

施す。黄色土落込出土で、焼きは良く黄褐色をなす。8は尖底部で焼きは良く黄褐色をなし、胎土に砂粒多く含む。押捺文土器の底部となろう。9・10はアナグラ属貝殻による条痕文を表裏に施すもので、6は黄色土落込出土、焼きは良く黄褐色をなす。7は微砂粒を含み、淡赤褐色をなす。11は粗製土器口縁で、外面に強い指横ナデを施す。焼きは良く明黄白色をなし、砂粒多く含む。この他にも粗製土器片若干が出土している。12・13は突帯文を付し刻目を施すタイプで、12は黄色土落込出土で暗褐色をなす。13は4区黄色土出土で、黄褐色をなす。

以上の土器のうち、押捺文土器群は、1・2の口縁の形態等より、早期後半～末の、田村式・ヤトコロ式の段階と考えられ、中でも田村式併行期の可能性が強い。9・10は前期轟式系の条痕文土器であろう。12・13の突帯文土器も前期の一種であると考えられる。これらの時期の明確な遺構は確認し得なかったが、全体として包含層的な出土状況を示しており、当地より上の段付近に遺跡の中心部が考えられるところである。

石器 (第15図-1)

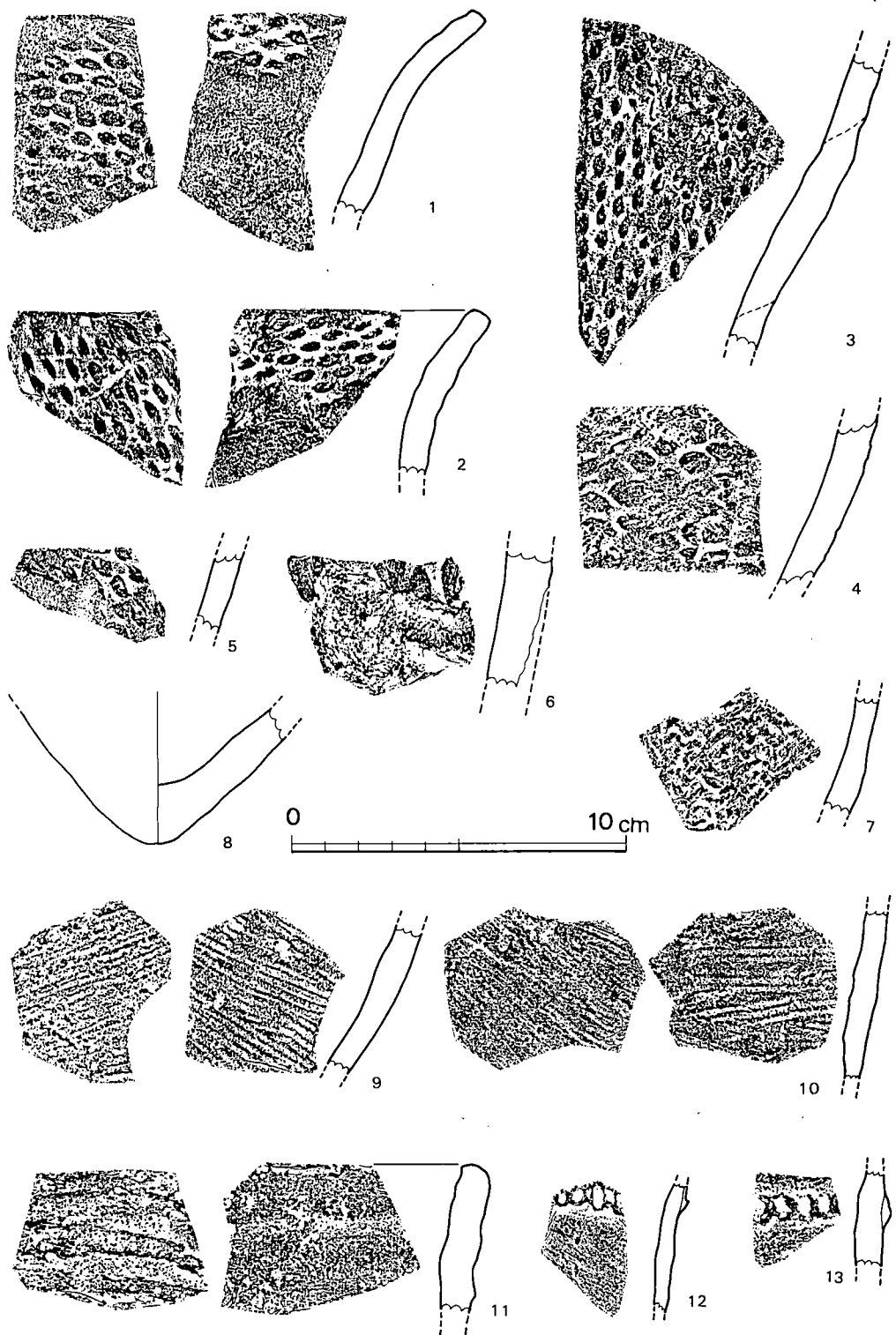
サヌカイト製の石核で、ピット内出土品である。円錐形石核が二次的に半裁されたものかと考えられる。縦長の細い石刃状剥片を剥ぎ出したものである。

勾玉 (第15図-2)

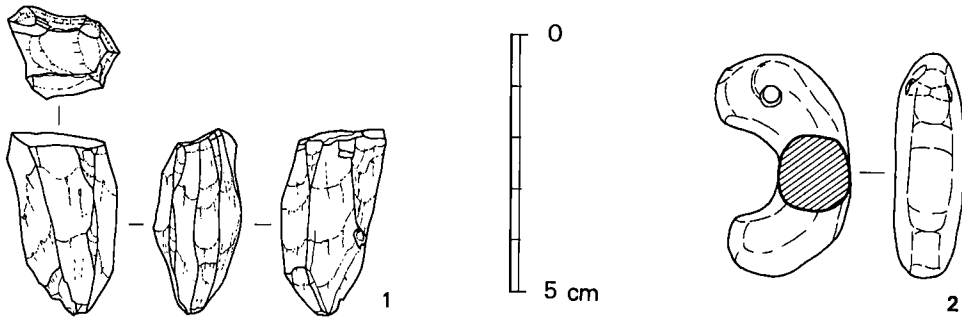
硬玉製の大型のもので、全体に丁寧に磨研する。孔は両面より穿孔され、孔の上側に両面とも穿孔時の挟り部がみられる。表面の半分以上は(黄)乳白色で、灰緑色部も鈍く彩を欠く。重さ19.5gを量り、周辺の古墳副葬品等が混入したものかと考えられる。

土師器 (第16図1～5)

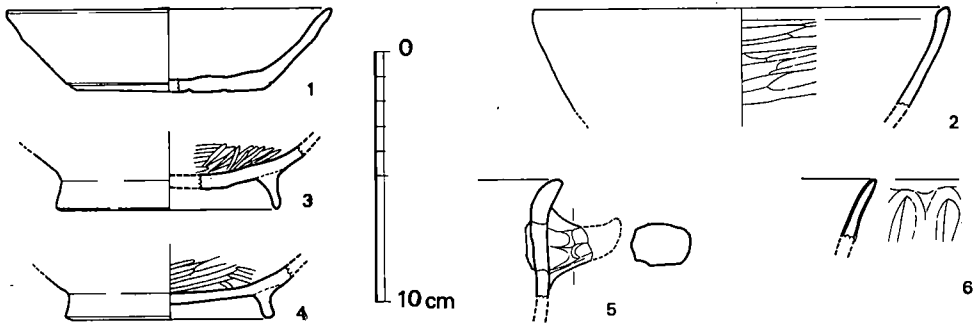
1は口径12.9cm、器高3.3cm、底径7.5cmで、薄手精製、胎土精良で暗茶色をなす。P.11出土品。底部はヘラ切離しでスノコ状圧痕がみられる。2は、口径16.7cmの大型の椀状品で、内面ヘラ磨きを施す。P.13出土、胎土精良で焼成良く、黄白褐色をなす。3は内面黒色土器で、高台径9.0cmを測る。胎土精良、外面淡褐色をなす。4は黒色土器で、高台径8.3cm胎土精良。3・4・5ともに拡張区1・2層出土品。5は、口径15cm程度の小型の甕形土器に把手を付けたもので、内外面雑な横ナデを行なう。外面に煤付着し、把手は器壁に挿入するタイプである。



第14図 縄文器実測図(1/2)



第15図 石核・勾玉実測図(2/3)



第16図 土師器・青磁実測図(1/3)

青磁(第16図-6)

鑄蓮弁の青磁碗で、胎土は灰色で密、釉は厚く、暗青緑色を呈する。

3. 小 結

遺跡は標高70m前後の舌状台地で、西側の眼下13m下には山家川が南流し、東の後背地には山塊がせまるという好立地にある。縄文時代早期の住居等の遺構が存在していたことが、出土遺物によって考えられるが、その後須恵器を出土する歴史時代に一部攪乱され、開田によってパイラン土地山面まで著しく削平を受けて縄文期の遺構は明確には確認されなかった。



1 池田遺跡全景（北より）



2 池田遺跡全景（南より）



1 トレンチ (南より)



2 溝



1 土壇



2 中央付近遺構



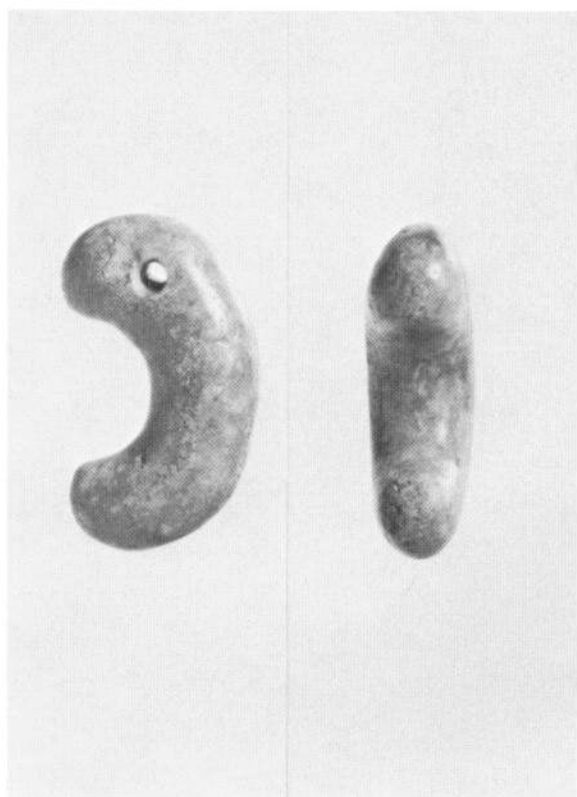
1 中央付近遺構



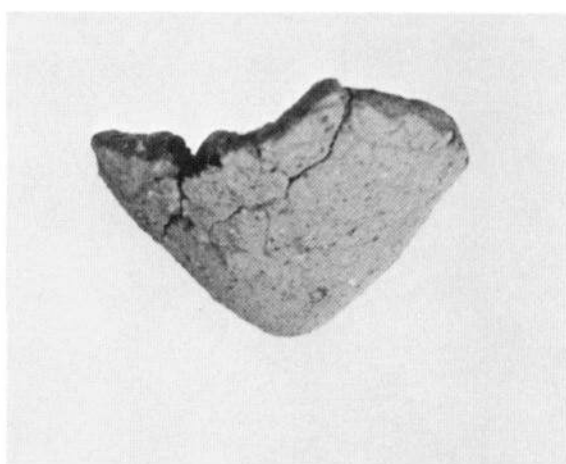
2 縄文土器出土黄色土落込み



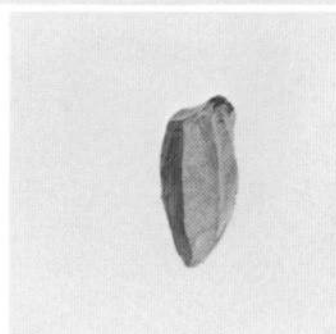
3 同上土層断面



1 硬玉製勾玉



2 繩文土器底部



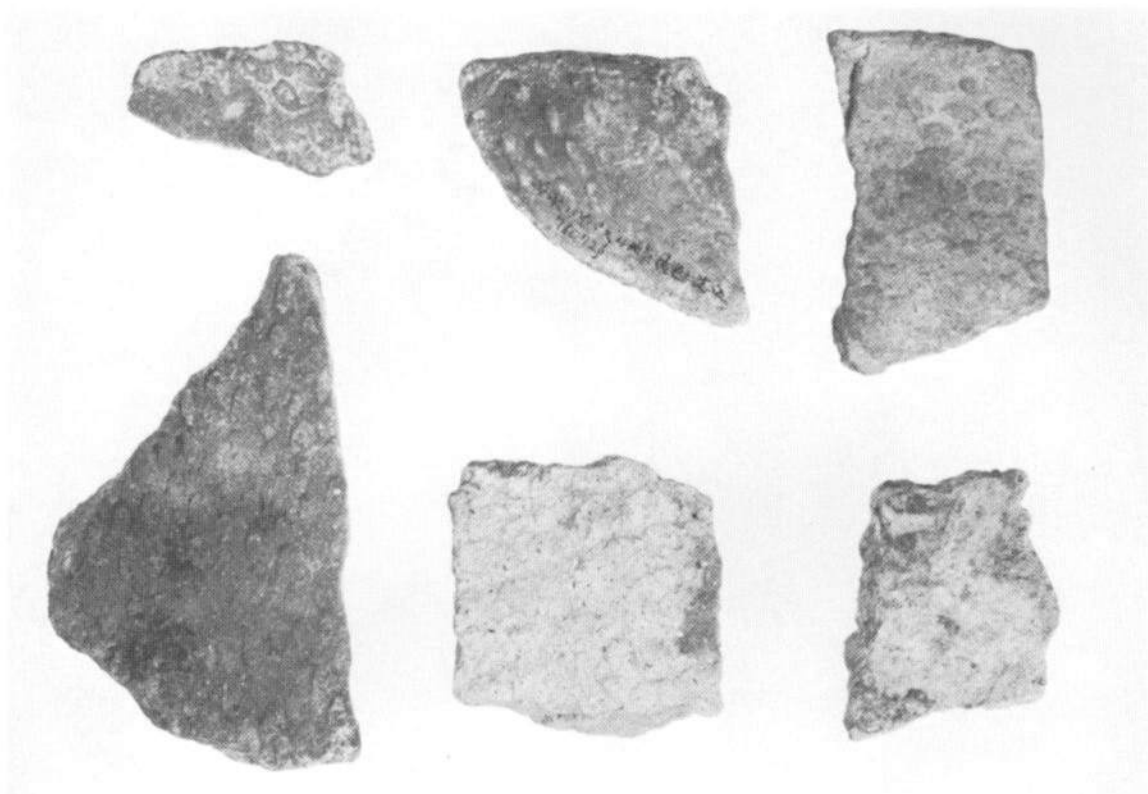
石核



3 勾玉出土狀態



4 繩文土器底部出土狀態



1 繩文土器 (外面)



2 繩文土器 (内面)

Ⅲ 各遺跡の調査

3. 浮殿 A 遺跡

3. 浮殿 A 遺跡

1. はじめに

砥上岳山麓に展開する低丘陵の一つに所在する。丘陵は西に延び、標高62.5 mを測る。丘陵は細い尾根が続き、その先端付近が若干広くなっており、この部分に遺跡は所在している(第17図)。丘陵端部は県道によって分断されており、最もよく遺構の遺存している部分は削平されているものと思われる。遺構は丘陵頂部付近に地下式横穴、覆石土壙墓、土壙があり、先端に箱式石棺墓2基が検出された(第18図)。

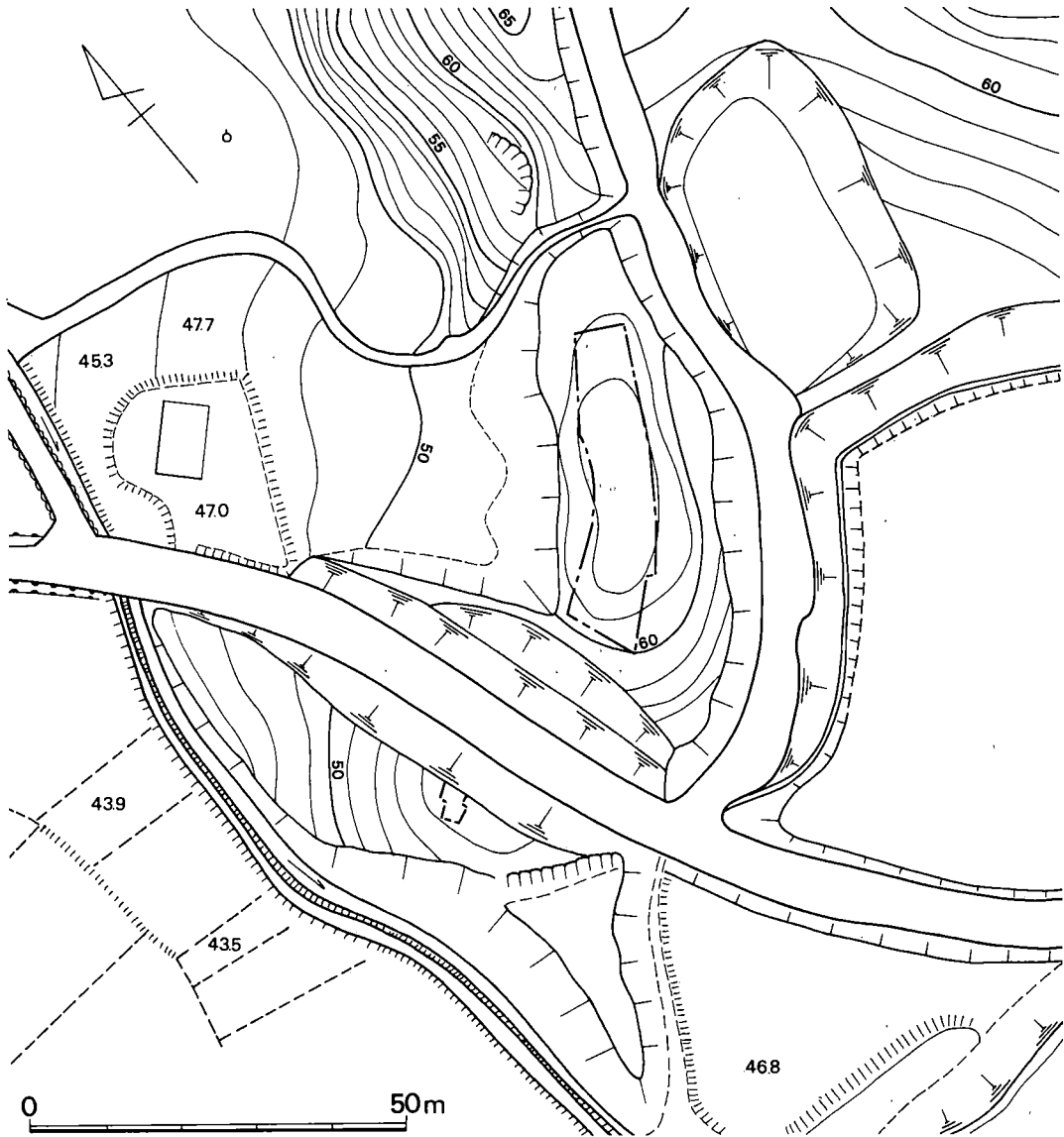
2. 遺構と遺物

(1) 地下式横穴 (第19図, 図版16・17)

天井部が崩壊し、その全容は定かではない。幅110 cm、深さ230 cmほどの竪坑を掘り、その下底部から横穴を穿った構造のものと考えられる。玄室は竪坑底より10 cmほどの段差をつけ奥壁側の床面が下がっている。玄室プランは長方形状となり、竪坑側に三角形に延びる部分は羨道部と考えられる。この間の床面は玄室部に比べ、若干の傾斜をもって造られている。これによると、玄室は長辺約2.2 m、幅は、奥壁側で160 cm、羨道側で115 cmを測る。羨道は長さ約100 cmほどと考えられ、天井部はアーチ状をなし、その高さは110 cm前後と考えられる。玄室の高さは側壁などの遺存状態から110 cm以上はあったと推定されるのみである。副葬品などの遺物は全くなかった。

(2) 覆石土壙墓 (第20図, 図版18, 19-1)

平坦部から斜面にかかる位置に設けられた遺構である。調査前から表土層の礫群の一部がわりあい広い範囲で露呈していたが、調査の結果土壙上部に集中していることがわかり、周辺部のものは崩壊などにより動いているものであることがわかった。花崗岩礫は、河原石をほとんど使用したもので、2.7×1.8 mの長円形の範囲に積み上げられ、土壙内にまで及んでいた。土壙は長辺250 cm、短辺125 cm、深さ62 cmを測る大きなもので、南側壁には半円形の浅い掘り込みがある。当初南側の半円形の掘り込みは木根の抜き跡かと思われたが、角礫が原位置の状態を確認されたことから、何らかの付属施設であると考えられる。角礫の間には、ほとんど土が



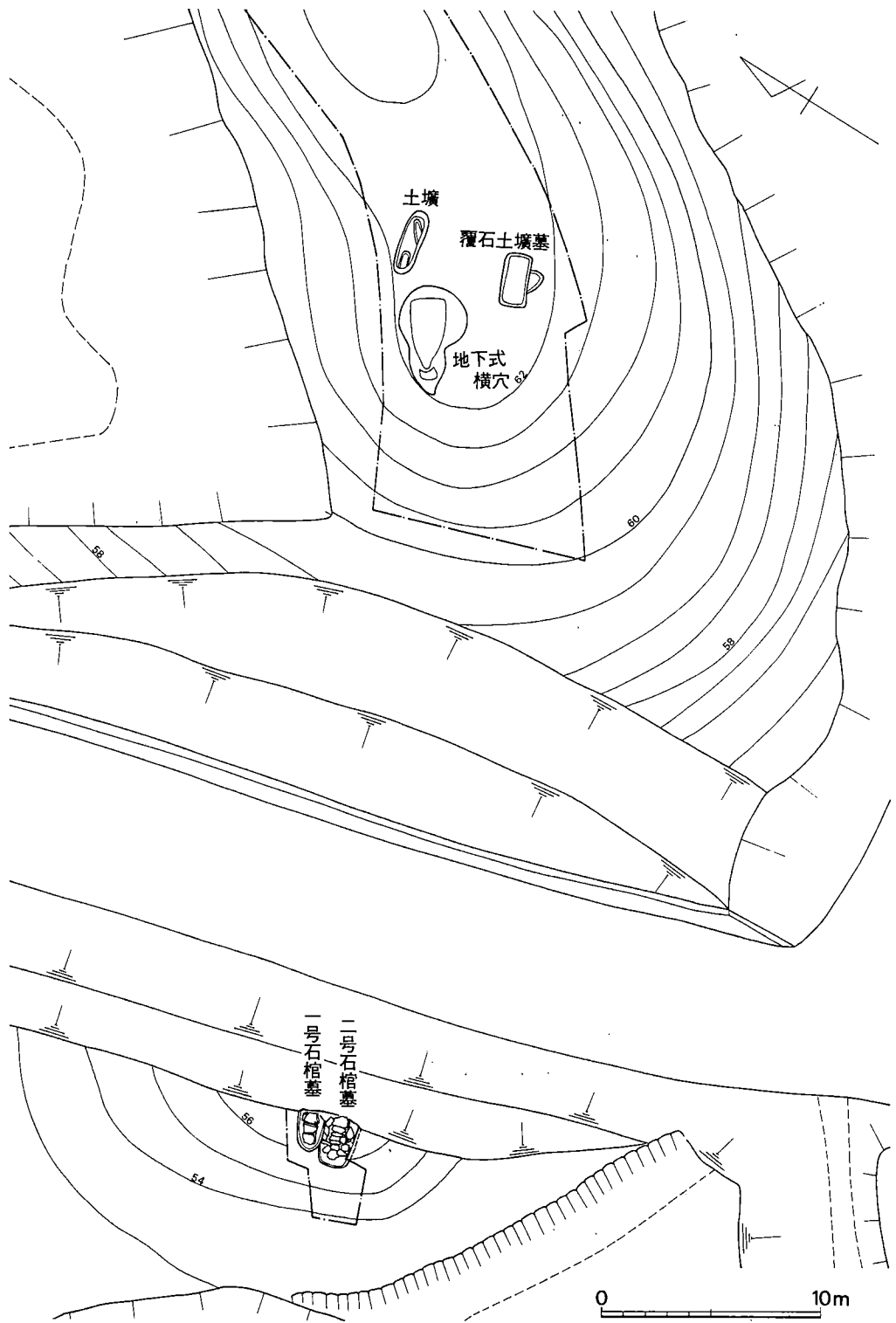
第17図 浮殿A遺跡周辺地形図 (1/1,000)

詰っておらず、腐植土の流れ込み程度で、その上部から土を覆ったという状態ではなかった。さらに、これらの角礫が石棺あるいは石室状に組み立てられていたという状態でもなかった。本来、土壌内に埋没した礫群は、木板で覆われた土壌の上部に積上げられていたものと推定される。

遺物は、土師器・青磁の小片と指環が発見された。

土師器は坏の底部小片で、底部には板目がある。

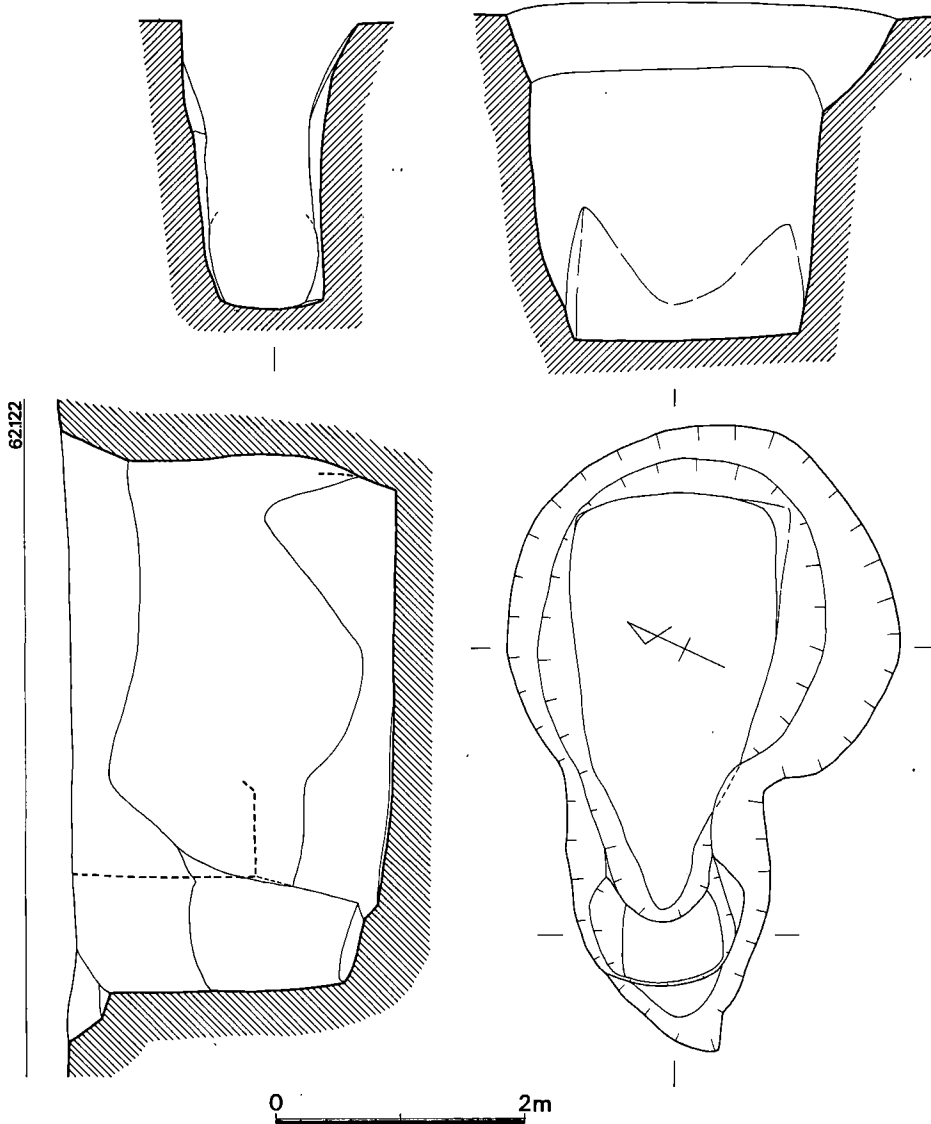
青磁(第21図)は、碗の口縁部小片である。濁緑色を呈す釉でありよくないが、胎土は灰



第 18 图 遗 构 配 置 图 (1/300)

62122

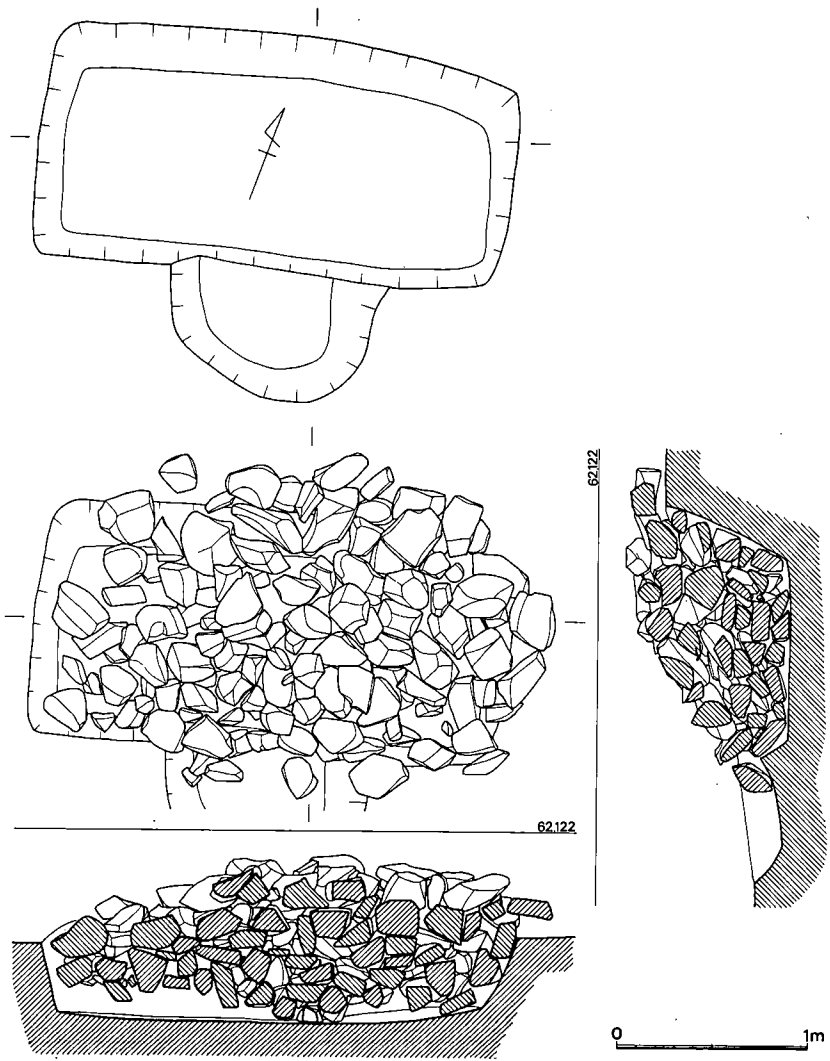
62122



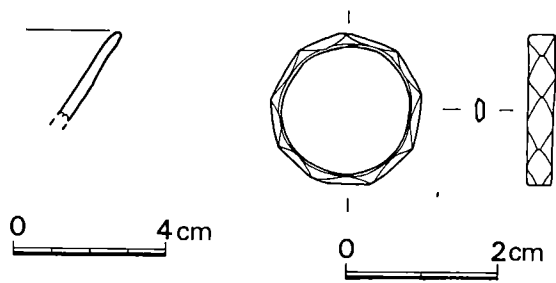
第19図 地下式横穴実測図 (1/60)

色を呈し、よく精製したものである。

指環 (第21図) は、壙底より検出された。内径18.5mm, 外径20mm, 厚さ15mmを測る。外面に9個の菱形文を打ち出しており、環は9角形をなす。質の悪い金製品で、やや白味の色調である。表面に小さな気泡痕が多くみられる。



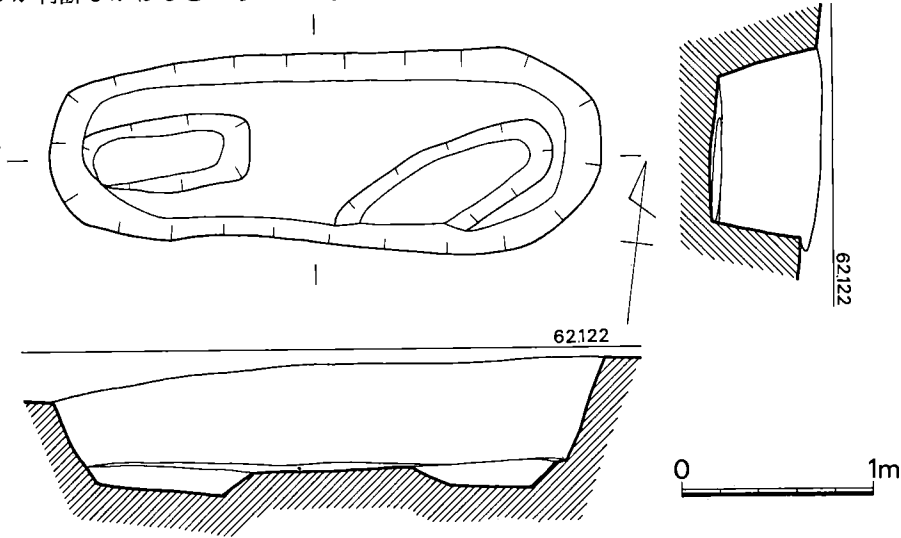
第20图 覆石土墩墓实测图 (1/40)



第21图 青磁·指环实测图 (1/2·1/1)

(3) 土壙 (第22図, 図版19-2)

隅丸長方形をなすもので、長辺 290 cm, 短辺 70~78 cm, 深さ 55 cm を測る。壙底の 2ヶ所に小壙があるが、東側の壙は木根跡の可能性が強く、当遺構には関係のないものと思われる。西側の壙は軸線上に掘られたもので、長さ 90 cm, 幅 40 cm, 深さ 13 cm を測る。この小壙がどのような意図で掘られたかは不詳である。また、遺構には副葬品などの遺物が全くなく、墓としてよいものか判断しかねるところである。



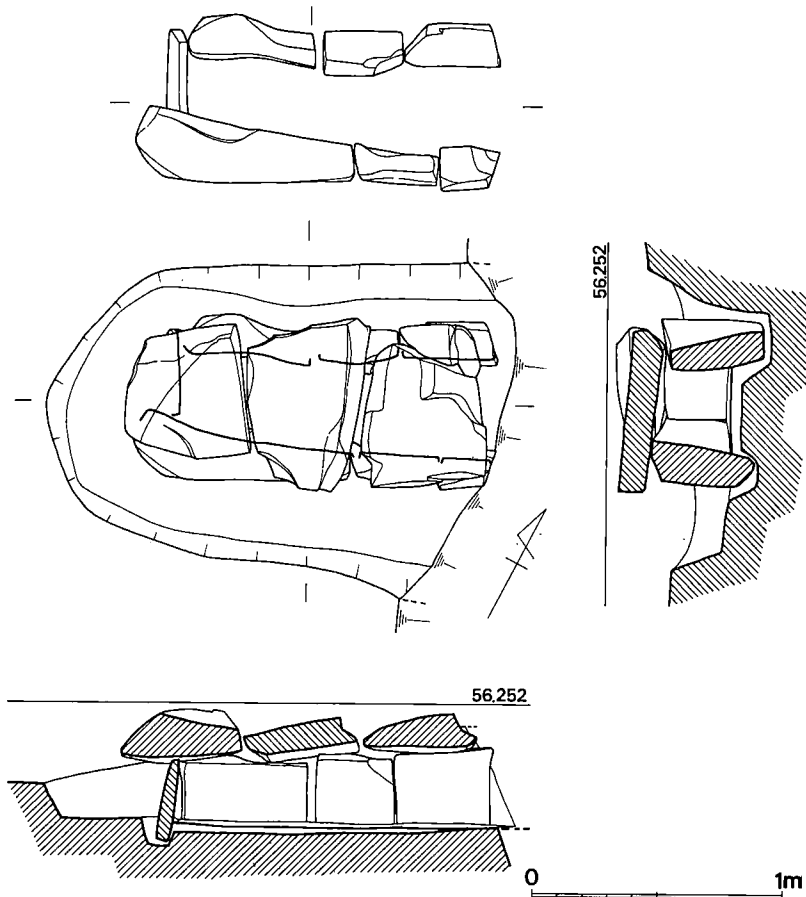
第 22 図 土 壙 実 測 図 (1/40)

(4) 箱式石棺墓

箱式石棺墓は 2 基が確認された。当初 1 基が崖面に露呈して、その所在は解かっていたが、調査の結果、その南側にもう 1 基あることが解かった。発見順に 1 号・2 号石棺墓とした。いずれも花崗岩パイラン土の地山に土壙を掘って納めている。

1 号箱式石棺墓 (第23図, 図版21-1~22-1) 当棺は、東側を道路建設工事によって壊されている。棺は隅丸長方形の浅い土壙内に組まれたものである。土壙は、長さ 185 cm 以上、幅約 125 cm, 深さ約 30 cm を測る規模のものである。土壙の南辺は、2 号石棺の土壙を切っていることから、1 号棺は 2 号棺より新しいものである。石棺は花崗岩を使用しているが、棺材としては精選されたものではない。棺の両側にそれぞれ 3 個の石を配し、木口には板状の石を据えている。いずれも壙底に浅い掘り込みを設け、据えている。蓋石は、板状のものが 3 枚残っていた。棺体や石蓋との間隙には黄白色の粘土を充填し、目張りとしている。

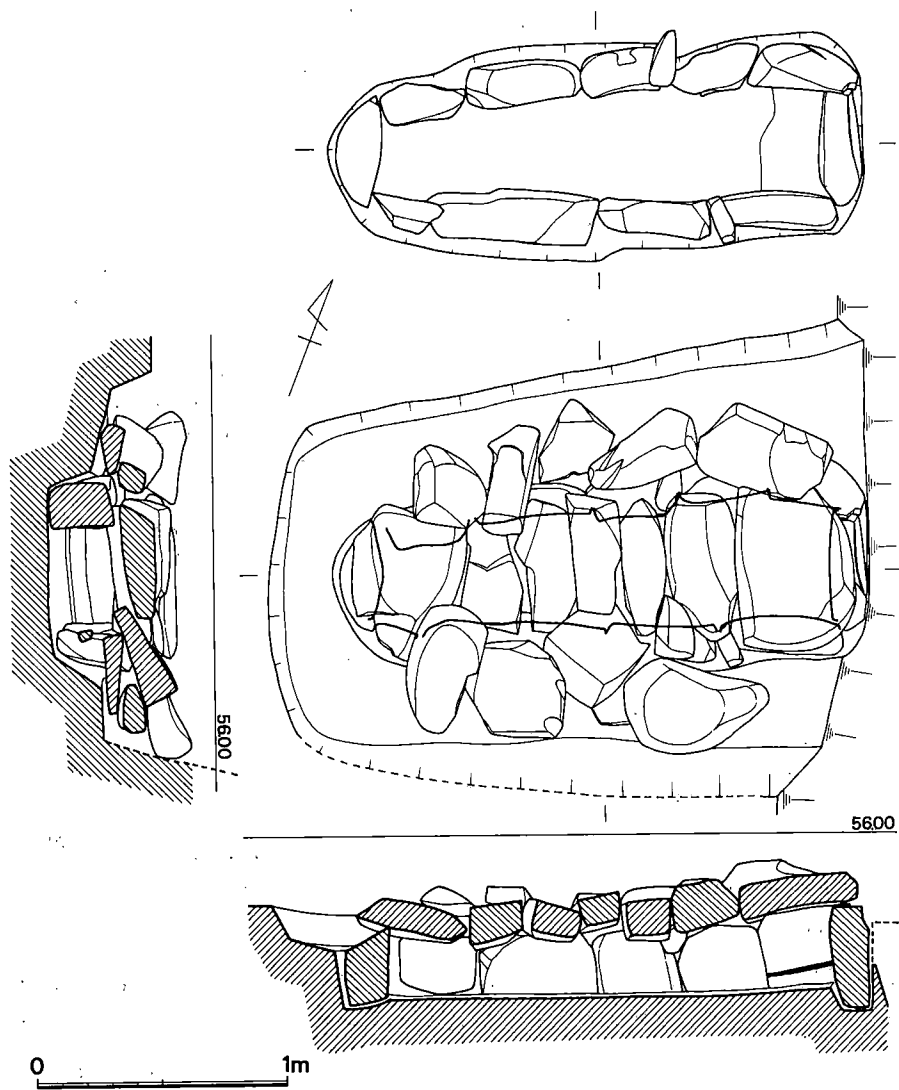
石棺の現存規模の内法は、長さ 135 cm 以上、幅は西側木口部で 30 cm, 東側は 37 cm を測る。石棺の遺存状態からして、蓋石は少なくとも遺存するような大きさの蓋石がもう 1 枚あったと考えられ、棺内法の長さは 160 cm ほどであったと思われる。なお、棺内壁には朱が塗布されてい



第23図 第1号箱式石棺墓実測図 (1/30)

た。遺物は全く検出されず。

2号箱式石棺墓 (第24図, 図版22) 1号棺に比べやや低いレベルにあり, 1号棺の南に接して検出された。当棺も東側が削平を受けているが, 土壌のみが壊れ, 石棺にはおよんでいない。上部に大きな木根があり, 棺の南側を十分に調査できなかったが, 棺の内容を知るには支障のあるものではない。土壌は長方形状を呈し, 東側が広がっている。長さ232cm以上, 幅は185~130cm, 深さは40cmほどである。土壌は二重となり, 石棺は内側の深さ20cmほどの不整形な掘り方に組まれている。石棺は, 7個の蓋石がなされているが, 両端が板状であるほかは, 柱状のものを使用している。棺の両側には, 4~5個の割り合い大きな石を並べ, 南側中央の石は, 蓋石の下に入り込んでおり, さらにその下にもう1枚の板石を置いている。この部分は側石に石材の関係から大きな間隙のあるところで, これを補足する意図をもって置かれたようで, これらの配石が, 蓋石の配置と同時に行なわれたものと考えられる。蓋石間と両側配石間には黄白色の粘土で目張りをしている。



第 24 図 第 2 号箱式石棺墓実測図 (1/30)

棺体は、両側に4～5個の石を立て、木口には1石を配している。いずれも厚みのある石である。両木口のみが、墳底に小壘を掘り据えているが、側壁は墳底にそのまま据えている。棺の内法は、長さ179cm、幅30～55cmである。東側の木口部に床面より5cmほどの高さに、厚さ2cmで黄白色粘土を張っており、棺の幅などから、この部分が頭位と思われ、この粘土敷部は粘土枕と考えられる。

棺内および土壘内より遺物は全く検出されなかった。

3. 小 結

当遺跡では、埋葬遺構の発見があったが、覆石土壙墓を除く他の遺構からは、なんら遺物の出土がなく時期の判定に困惑するところである。

覆石土壙墓は、積石墓の一種であると思われる。出土遺物からして中世代の遺構と考えられる。

地下式横穴、土壙は覆石土壙墓の時期からしてほぼ中世代に属するものと思われる。

箱式石棺は、2号棺のような配石をもつ石棺はあまり知られていないと思われるが、最近発掘された糸島郡志摩町稲葉古墳で同様な石棺が発見されている。当棺は、封土と周溝をもち、明らかに高塚古墳の主体部としてあり、出土遺物から古墳時代に属することがわかっている。当遺跡の石棺もその構造・規模からして古墳時代に属するものと考えられる。



1 浮殿A遺跡地下式横穴（西より）



2 地下式横穴（竪穴部より玄室をのぞむ）



1 地下式横穴（玄室側より竪穴部をのぞむ）



2 地下式横穴竪穴部（上より）



1 覆石土墳墓 (南より)



2 同 上 (東より)



3 底面出土指輪



1 覆石土墳墓覆石除去後の土墳



2 土墳



1 第1・2号石棺墓遠景（東より）



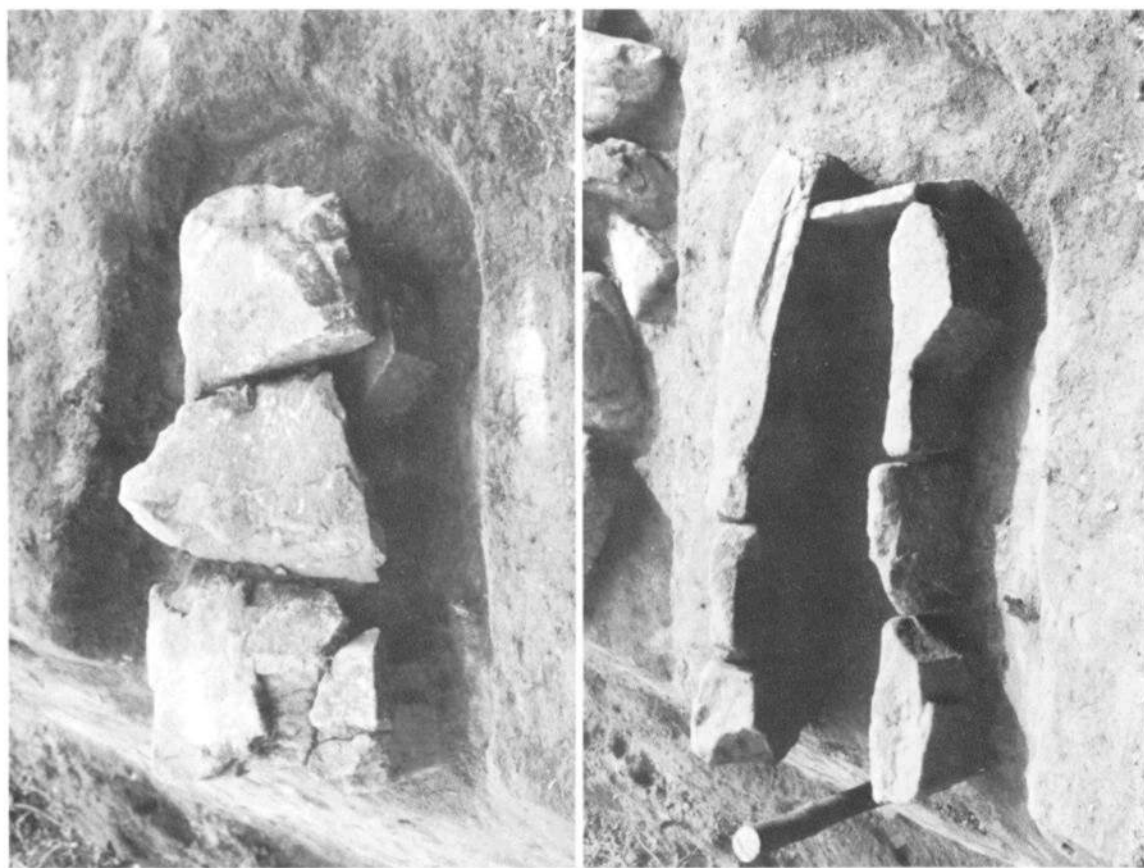
2 第1・2号石棺墓（北より）



1 第1・2号石棺墓（西より）



2 第1号石棺墓（南より）



1 1号石棺墓(北より)



2 2号石棺墓(西より)



2号石棺墓 粘土・蓋石除去の各状態

Ⅲ 各遺跡の調査

4. 浮殿 B 遺跡

4. 浮殿 B 遺跡

1. はじめに

浮殿A遺跡の南に小谷を挟んで、短い丘陵の端部付近に所在する。丘陵端は水路の建設で削られ、丘陵上も開墾により削平されている。標高52mの丘陵の平坦部で、斜面にやや寄った位置で地下式横穴が確認された(第26図)。当丘陵は、厚さ20cmほどの表土層で覆われ、その下は堅い花崗岩層よりなっている。この表土層には、開墾時に削平されたと思われる遺構の遺物が若干散乱していた。縄文土器片や黒曜石片などである。調査は、予備調査(トレンチ掘り)と本調査(全面発掘)を実施したが、遺構は予備調査で確認し調査した地下式横穴のみである。

2. 遺構と遺物

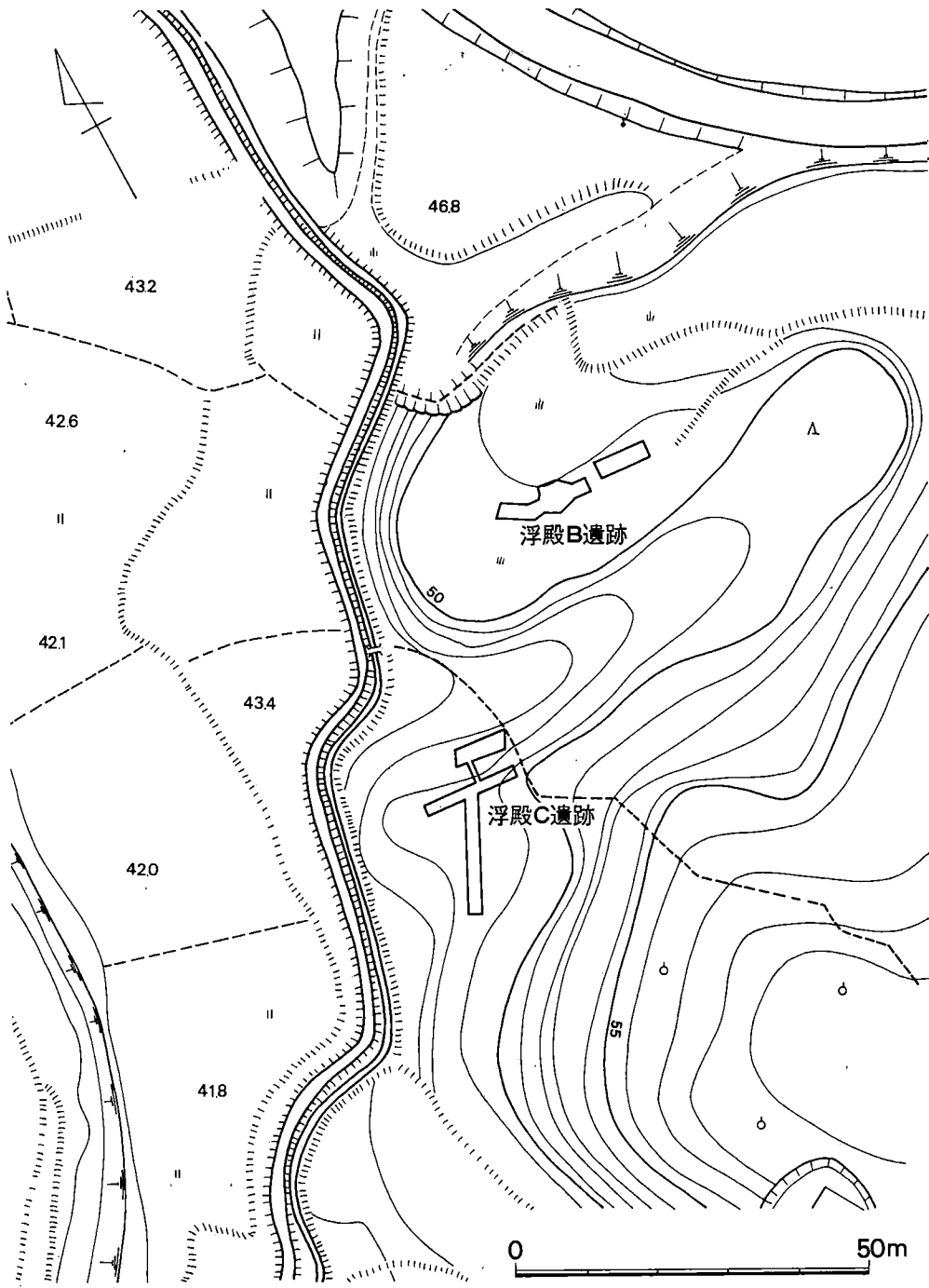
地下式横穴(第27図, 図版24)

堅い花崗岩層に穿たれている。天井部は崩壊していたが、その他の崩れはあまりみられなかった。遺構は、深さ1.8mほどの竪穴を掘り、この下底部から横穴を掘っている。竪穴は若干の傾斜をもって掘られている。玄室は竪穴より45cmほど深く、横長方形を呈す平面形である。主軸長約1.6m、幅2.4mを測る。天井部の高さは1.5mほどと推定される。羨道部は側壁の遺存状態から40cm前後と考えられるが、本来の高さとその形状は不明である。閉鎖石等の遺存はなかった。当遺構に係る遺物の出土はなかったが、埋土中より縄文土器片を採集した。

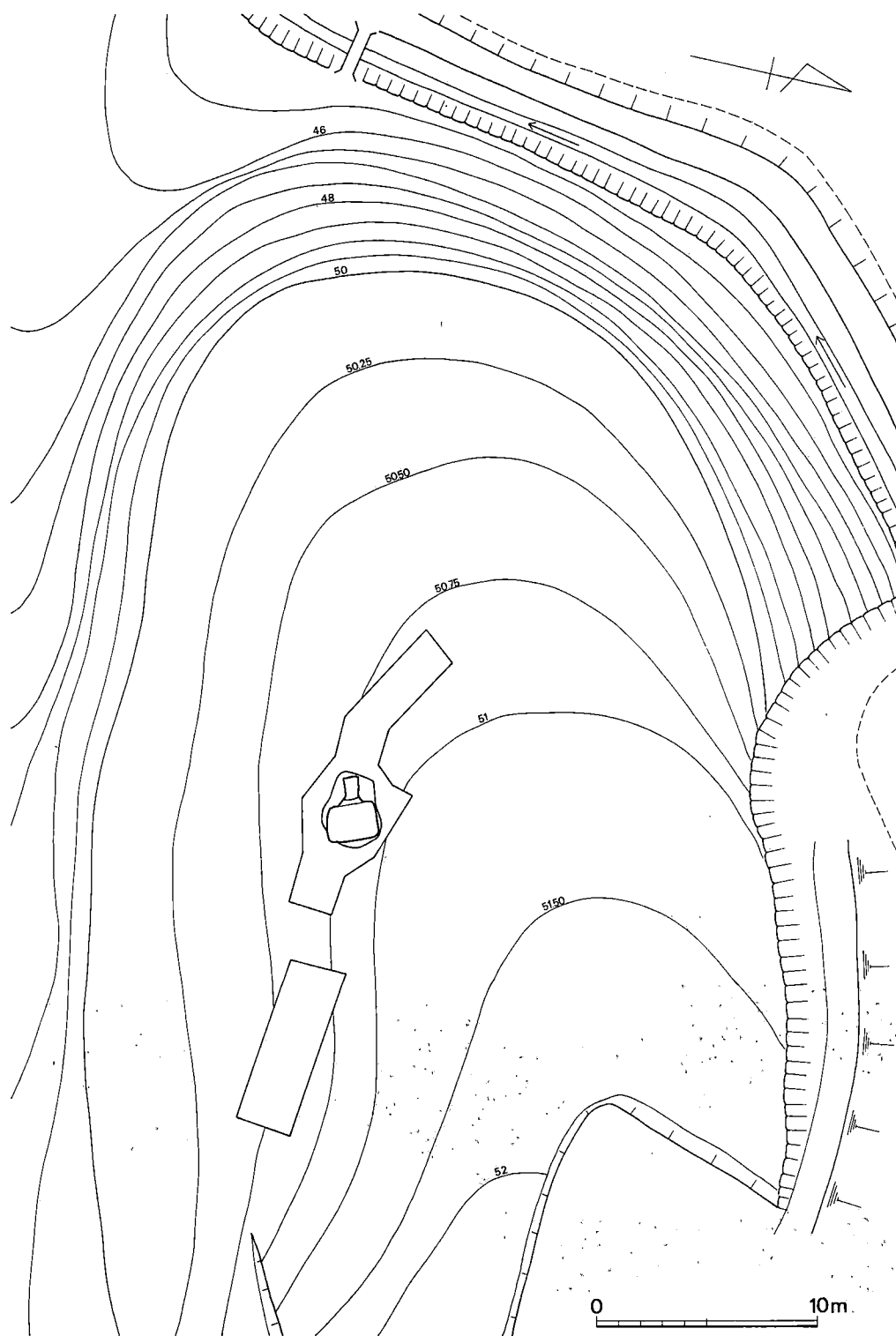
出土遺物(第28図)

遺物は地下式横穴内の崩壊土中に混入していた縄文土器である。孰れも粗製土器片で、1は口縁片で内面に横位条痕が残る。粗石英粒、雲母片を多く含み、暗茶～黒色をなす。2は胴部片で、外面に横位の強い指ナデ痕を残す。粗石英、長石等多く含み、内面黒色、外面淡～暗褐色を呈する。3も外面に強い横位の指ナデを施し、内面黒色、外面暗茶褐色をなす。

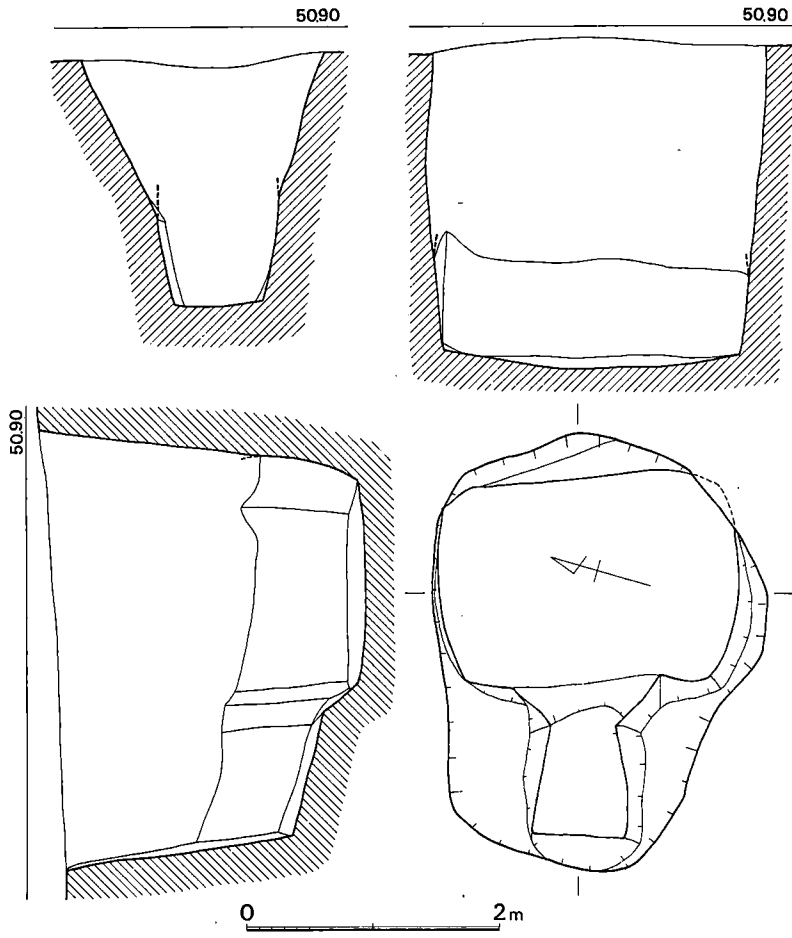
以上の他に、発掘時に『後・晩期の研磨された浅鉢形土器の口縁部』が出土したという。現物が所在不明で図示し得ないものの、上記した粗製土器も、後・晩期の所産であろうと考えるところである。



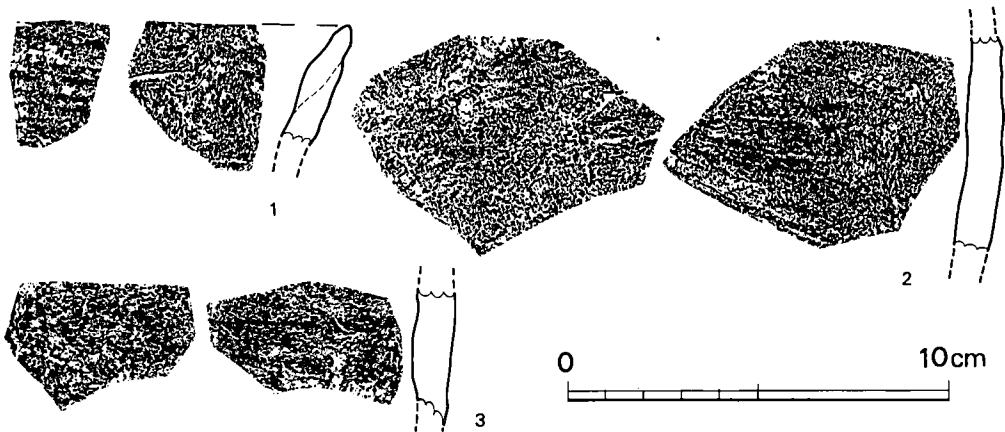
第 25 图 浮殿B 遺跡周辺地形图 (1/1,000)



第 26 图 浮殿 B 遗迹地形图 (1/300)



第 27 図 地下式横穴実測図 (1/60)



第 28 図 縄文土器実測図 (1/2)



1 浮殿B遺跡地下式横穴（西より）



2 地下式横穴（東より）

Ⅲ 各遺跡の調査

5. 浮殿 C 遺跡

5. 浮殿 C 遺跡

1. はじめに

約 500 m² の山麓先端部の畑地を借り上げたが、現状は笹に覆われていたため伐採し、全面発掘のため中央部に、南北方向に幅 1.7 m、長さ 17 m のトレンチを当初掘り下げたが、15 cm の表土層下は黄褐色粘質地山層に至り、既に平坦に開墾されていたため、新たに東西方向の 2 本のトレンチを掘り下げるにとどめた。

2. 遺構と遺物

遺構 (第30図)

中央部の南北方向のトレンチ内の 6 個の小ピットは平坦に削平された面から確認されたが、何らの遺物も出土せず、表土から縄文時代のサヌカイト製石鏃 1 個が出土した。

上述のトレンチの北側に接続する東西方向のトレンチ内からは、同様に 5 個の浅い小ピットが検出され、南北方向の畑作時の溝内から、土師器片、土鍋片が数点出土した。

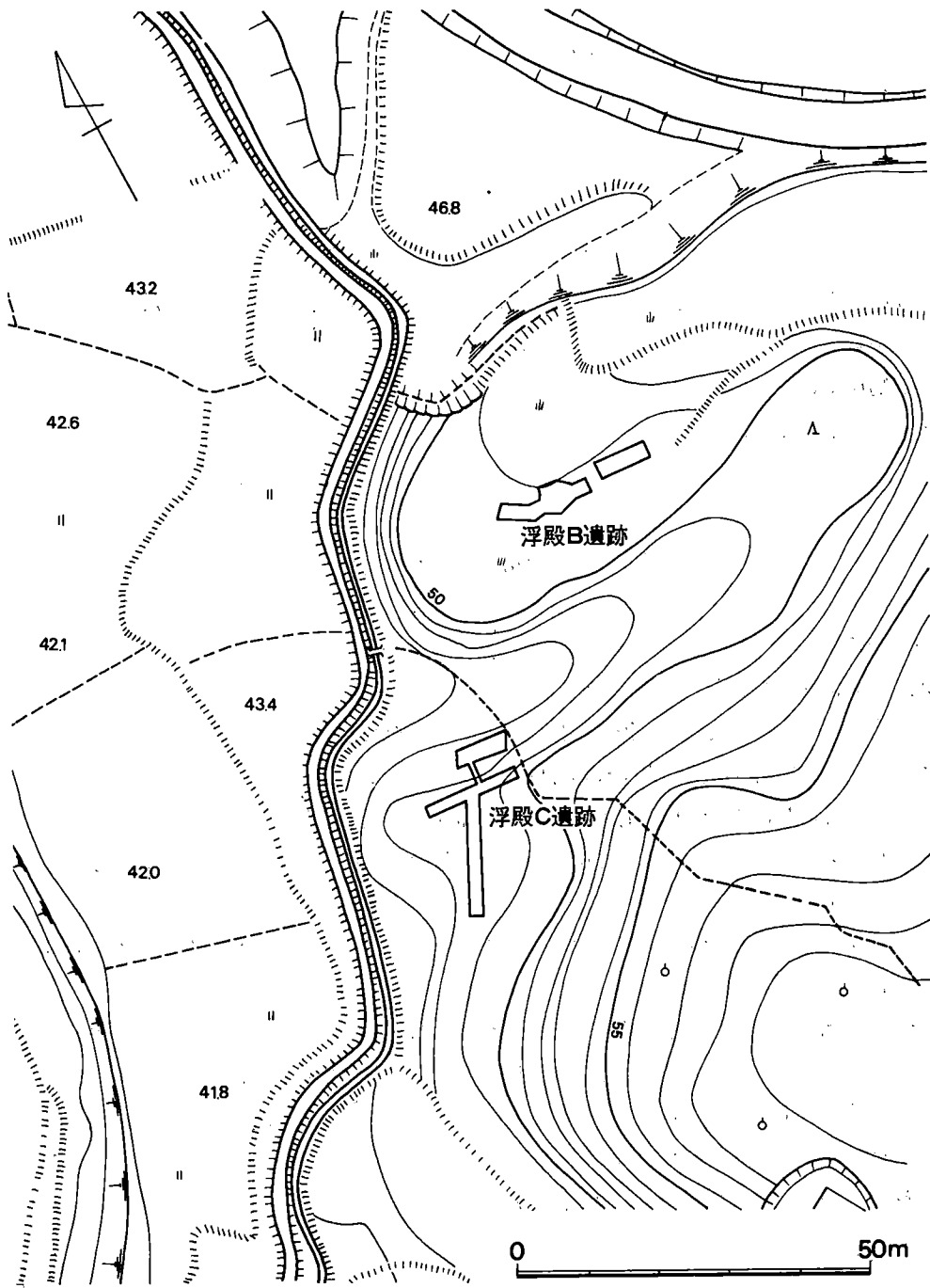
北側のトレンチの東隅で、幅 1 m の、床面が固い溝状遺構が検出され、土鍋 1 片が出土した。

遺物 (第31図)

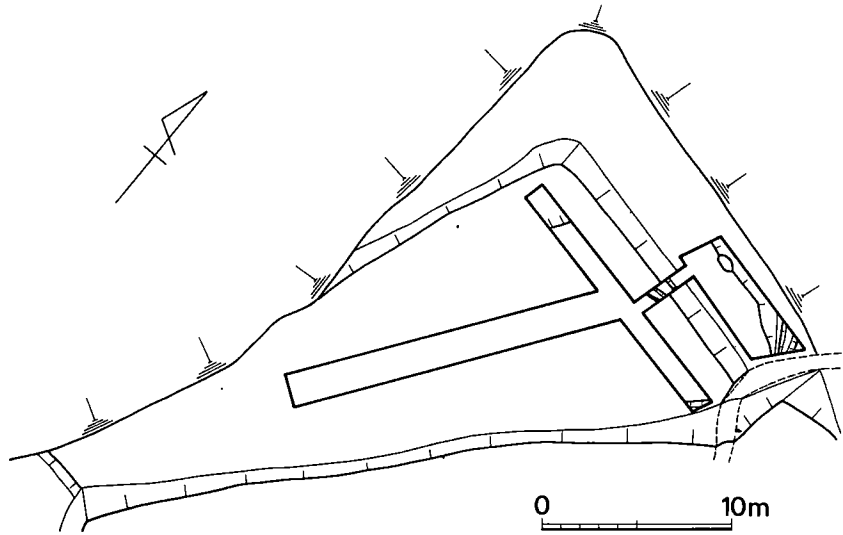
土鍋 (第31図 2) 土師質で、口縁外面を肥厚させる。内外面横ナデ、胎土に粗砂かなり含み、淡褐色をなす。

褐釉壺 (第31図 1) 底部片で、外面を削り、内面には強い回転ナデによる稜がみられる。釉は黄灰色を呈し、外面下端までは施さず、胎土に細砂粒多く含む。底部付近のみ焼きが悪く、黄赤色を呈し、他は灰色をなす。

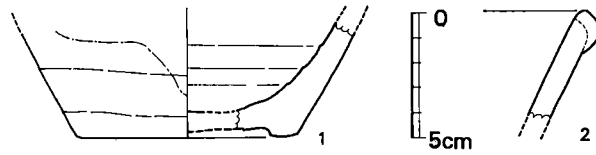
以上の遺物の他に、耕作土中より、『縄文期のサヌカイト製石鏃 1 個出土』しているとのことであるが、現物所在不明のため、図示し得なかった。



第 29 图 浮殿 C 遺跡周辺地形図 (1/1,000)



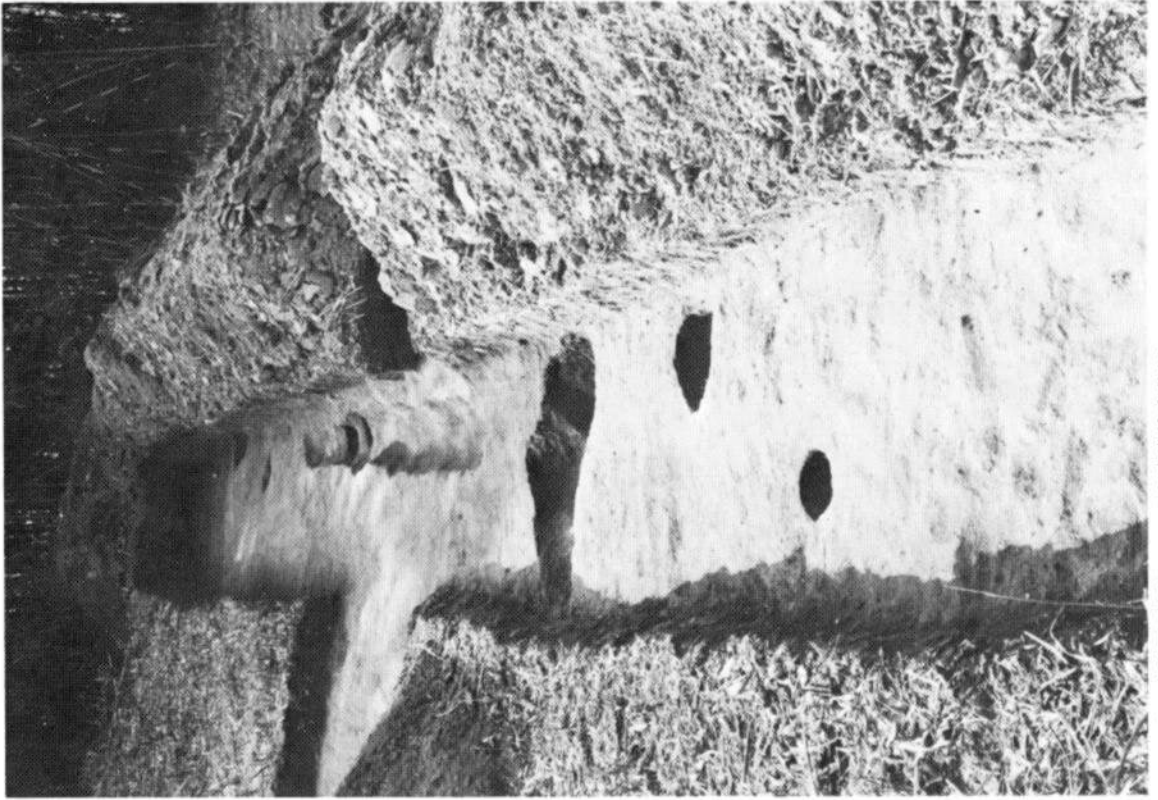
第 30 図 調査区実測図 (1/400)



第 31 図 出土遺物実測図 (1/3)

3. 小 結

西側の水田との比高差約 3 m で、東側には山麓がせまり、北側は急傾斜して 5 m 下に谷川水が西流する狭い平坦部であるが、戦後の開拓によって著しい削平を受けて、遺構はほとんど消滅していた。中世の土鍋片が出土しているので何らかの遺構は存在していたものと考えられる。北側の溝状遺構は、床面が固く踏みしめられた様な状態で、東側の山への登攀小道に接しており、中世以降の小道であったことが考えられる。



1 浮殿C遺跡トレンチ内遺構検出状況



2 トレンチ内段落ち部



1 トレンチ内遺構検出状況



2 トレンチ内溝

Ⅲ 各遺跡の調査

6. 浮殿 D 遺跡

6. 浮殿 D 遺跡

1. はじめに

西側山麓で、水田との比高差1 mの舌状に広がった畑地を借り上げたが、野菜が植えられていたために、中央の北半部と山からの傾斜面に近い東側の一部を発掘した。

2. 遺構と遺物

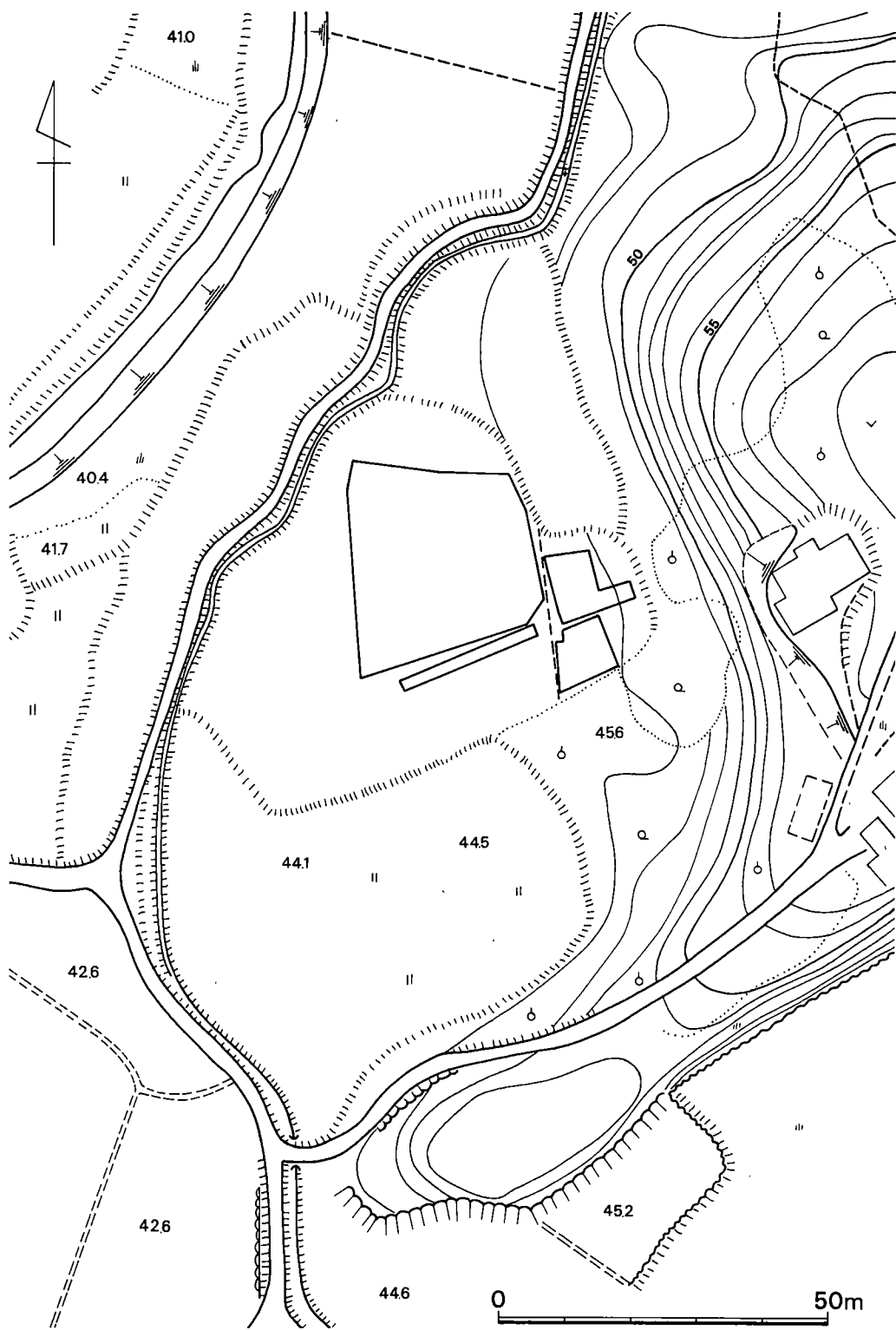
(1) 遺構 (付図1)

第1トレンチでは、中央部に東西方向に幅2 m×長さ22 mで設定した。上から30 cmまでの耕土から更に20 cmの間は、暗褐色砂質の遺物包含層で多くの土師器・須恵器片と共に少量の弥生土器片が混在して出土した。この包含層を除去すると、表土から50 cm下で暗褐色粘質土に至り、根石が床面で検出された柱穴や溝状遺構等が多く出土したためトレンチの北側を中央区として発掘した。

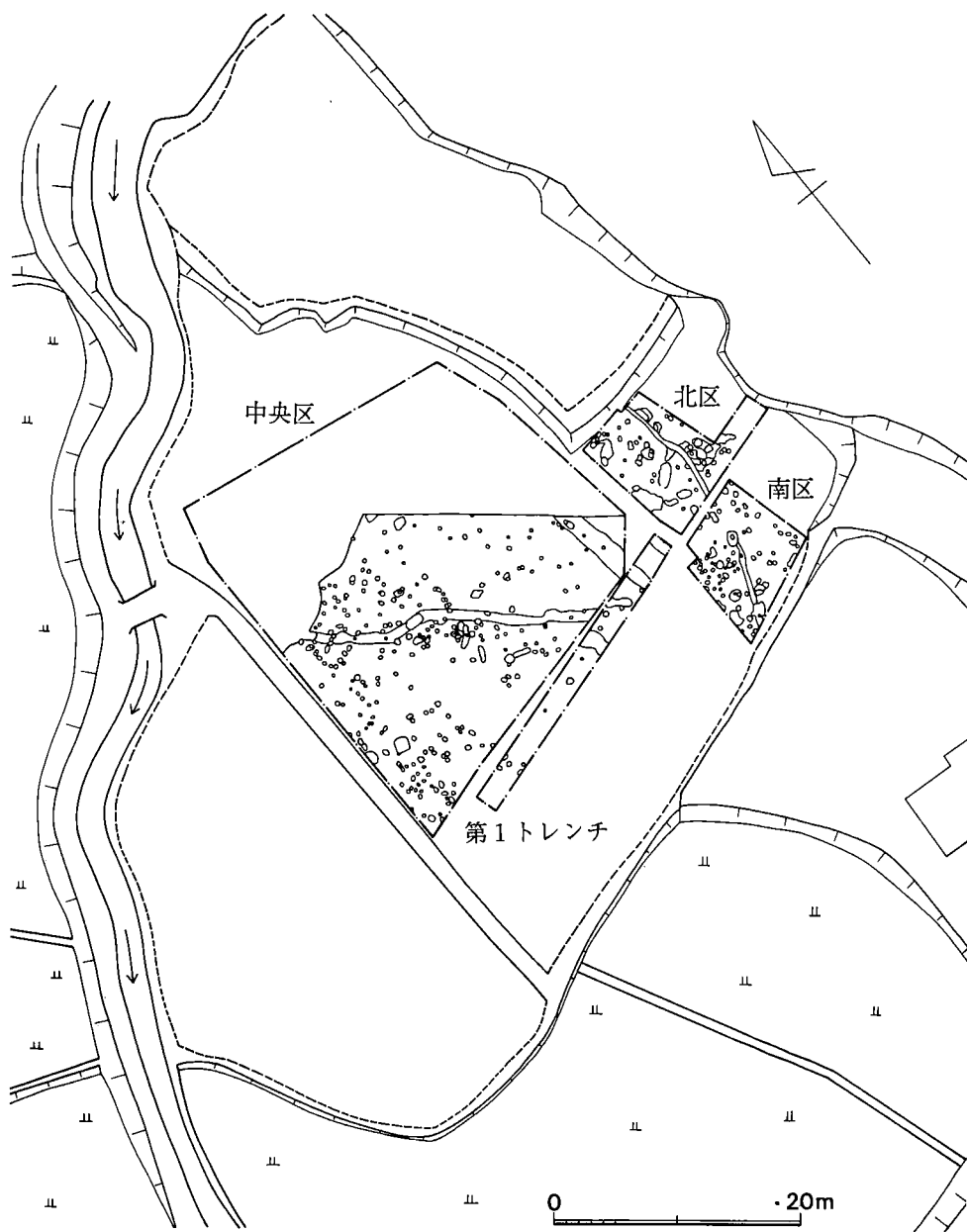
中央区では、西側で方形の第3土壌が、中央で掘立柱建物が1棟検出され、建物を切って同じ方向で発掘区外にのびる幅30 cmで深さ10 cmの溝1が検出された。溝1は遺物はなく新しいものと思われる。南東部隅で幅76 cm・深さ30 cmの床面が平らな溝2が検出された。多数の柱穴様ピットの中には7号ピットからは小皿が2枚重なった状態で出土したが、他のピットからは土師器・須恵器・弥生土器の小片が出土したのみで、建物等の遺構の確認には至らなかった。第3土壌周辺では西側に向って傾斜が認められ、丹塗高杯等の弥生中期の土器片の出土が包含層中から多く認められた。

東側では中央区のトレンチを延長し、幅40 cm深さ10 cmの南北方向の溝3が検出されたため、その北側と南側に発掘区を拡張した。この溝3は両拡張区にも連続したが、遺物の出土はなかった。北側拡張区の溝3の西側は中央区に向って傾斜する。南側の拡張区では柱穴様小ピットが多く検出されたが、建物等の確認には至らなかった。溝3の南端部で、この溝に切られて土壌1が、その西側で土壌2が検出されている。

掘立柱建物 (第34図) 柱穴は径20 cm、深さ40 cm前後である。1間の心心間の距離の平均は2.13 mを測り、主軸方向S 65° Eで、2×3軒の規模の掘立柱建物である。東側には半間幅の



第 32 图 浮殿 D 遗迹周边地形图 (1/1,000)

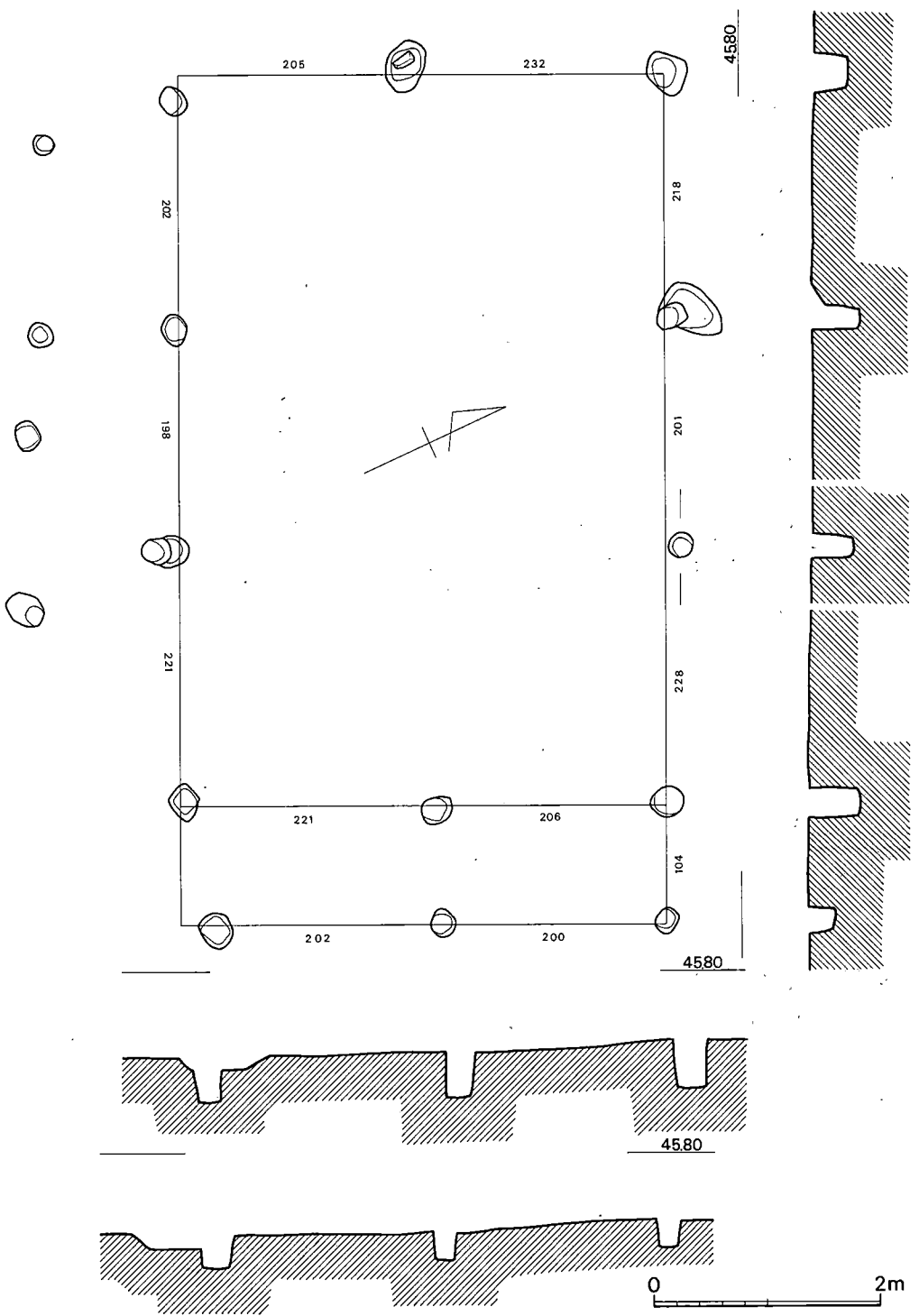


第33図 浮殿D遺跡地形図(1/600)

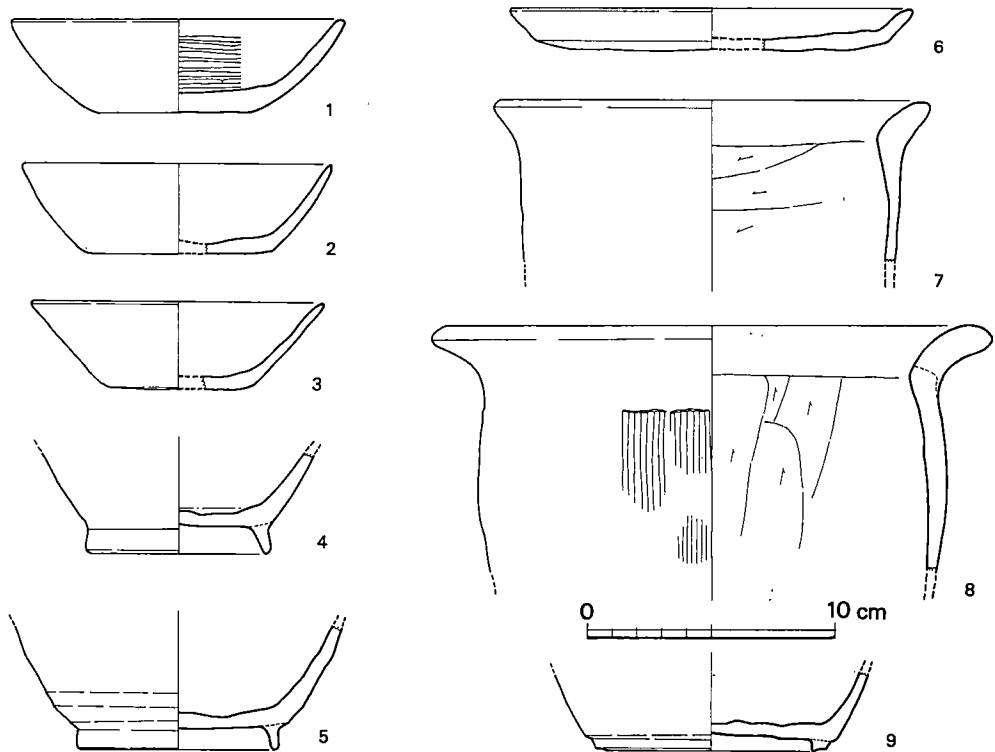
底を設す。柱穴内からは平安時代の遺物が出土している。

土壇1は、 $0.9 \times 1 \text{ m}$ の隅丸方形で深さ約 0.8 m の規模である。壇内からは中層から下層にかけて、土師器では完形の杯をはじめ甕片が若干の須恵器片と共に出土した。

土壇2は、壇内からの土師器片が若干出土したのみであるが、掘り方近くで須恵器の高台付



第 34 图 掘立柱建物实测图 (1/60)



第 35 図 第 1 号土壙出土土器実測図 (1/3)

杯が出土した。

土壙 3 は、 $1.05 \times 1.15 \text{ m}$ の隅丸方形を呈し、深さ 30 cm の規模である。埋土は暗褐色粘質土で第 36 図に示した甕や杯が一括して出土した。

(2) 遺物

第 1 号土壙出土土器 (第 35 図)

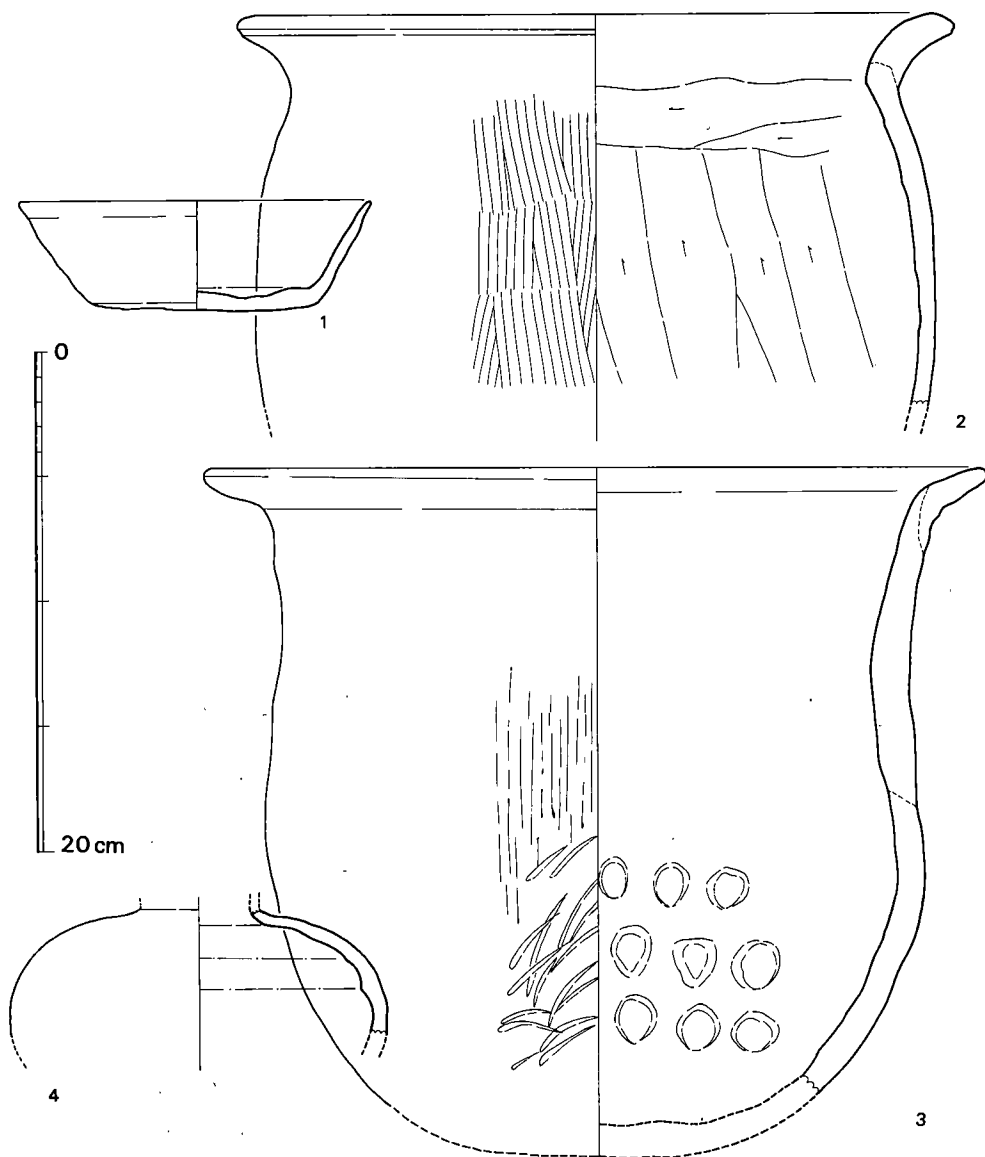
土師器

杯 (1~3) 1 は完形品で、底部ヘラ切り後ナデ調整を行ない、内面は横位のヘラ磨きを施す。口径 13.4 cm 、器高 3.7 cm 、底径 6.1 cm を測り、胎土精良、明黄茶色をなす。2 は、全体に著しく磨滅し、胎土精良で、復元口径 12.4 cm 、器高 3.6 cm 、底径 7.5 cm を測る。3 も全体に磨滅して、小片であるため、口径底径に問題がある。2 同様底部はヘラ切離しによるものであろう。

高台付椀 (4・5) 4 は、体部が高台付根より直線的に開く類で、全体に磨滅しており、細砂多く含み、明茶色をなす。5 は、体部外面下半をヘラ削りしており、胎土精良で全体にかなり磨滅する。

皿 (6) 復元口径 16.2 cm 、器高 1.7 cm で、胎土精良、明茶色をなす。

甕 (7・8) 7 は、小型で張らない胴部につくる類で、内面横方向に削り、粗砂かなり

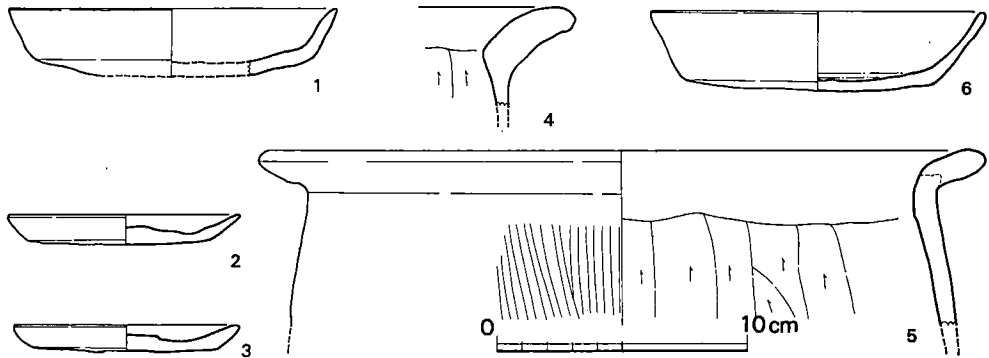


第 36 図 第 3 号土城出土土器実測図 (1/3)

含み、外面に強い二次焼成を受ける。8は、口縁が強く反転して、僅かに張る胴部となり、内面縦のヘラ削り上げ、外面は粗い縦ハケを施す。

須恵器

杯 (9) 内端で接地する短かい高台を付け、体部はやや直線的に立ち上がるものである。胎土に細砂若干含み、焼きはやや甘く、灰色をなす。



第 37 図 その他の遺構出土土器実測図 (1/3)

第 3 号土壙出土土器 (36図)

土師器

杯 (1) 口径14.0cm, 器高4.3cm, 底径9.0cm, 底部はヘラ切離し後ナデつける。

甕 (2・3) 2はやや胴が張り, 反転外反する口縁につくる。内面ヘラ削り, 外面やや太く粗雑な縦ハケを施す。3はやや下ぶくらみの胴の上半から開き始め, 口縁で更に屈折して開く類である。内面は削らず丁寧なナデ, 外面は板状工具縁で削り上げるような擦痕がみられる。下半にはヘラによる粗い擦痕が残る。外面頸部以下には煤付着する。

須恵器

短頸壺 (4) 内外面回転ナデで, 内面には稜を残す。粗砂僅かに含み, 焼きやや甘く外面淡青灰色, 内面暗灰褐色をなす。

その他の遺構出土土器 (37図)

須恵器皿 (1) 4とともに3区P.2出土品である。口径13.2cmで, 体部内外面回転ナデ, 焼きは良いが, 底部のみ生焼け気味である。

土師器小皿 (2・3) 孰れも3区P.7出土品で, 口径9.3・9.1cm, 器高1.1・1.2cm, 底径7.3・7.5cmを測る同工同種品である。底部はヘラ切り離し後, スノコ痕を残す。胎土精良, 焼成良く淡褐色をなす。

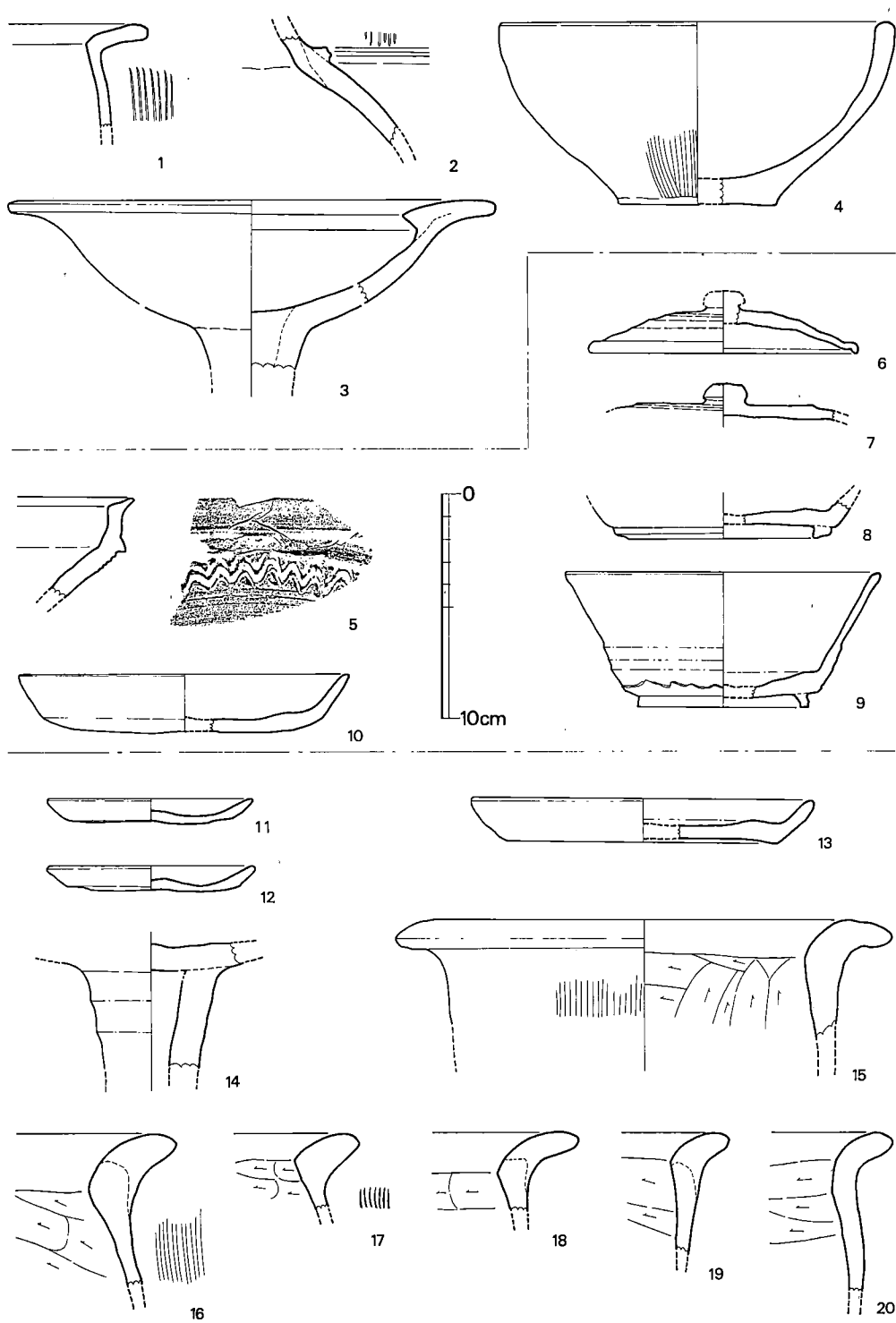
土師器甕 (4・5) 4は3区P.2出土, 内面ヘラ削り上げ, 粗砂多く含み, 茶~暗黄色をなす。5は掘立柱建物のNo.1柱穴出土品で, 内面削り上げ, 外面粗い縦ハケを施す。

土師器杯 (6) 中央区直線溝出土品で, 底部糸切り離し, 口径13.4cm, 器高3.2cm, 底径10.0cmを測る。石英粒かなり含み, 淡褐色をなす。

包含層出土の遺物 (第38~40図)

遺跡の各地点の第2層から各時代・各種の遺物が出土した。うち, 弥生時代中期土器は西端の用水路寄りの近辺に集中して出土した。

弥生土器 (1~4)



第 38 图 包含層出土土器実測図 (1/3)

甕 (1) 口縁を直角気味に付けるもので、外面粗い縦ハケ、内面はナデる。粗石英かなり含み暗褐色をなし、外面には煤が付着する。

壺 (2) 頸部と胴部の境に口唇状凸帯を付け、外面横ヘラ磨き丹塗りを施す。頸部には縦ヘラ暗文がみられる。

高杯 (3) 鋤先状口縁となるもので、全体に極めて磨滅著しいが、全面丹塗りと考えられ、胎土精良である。

鉢 (4) 壺下半のみの如き形状をなし、部分的にしか残らないが内面丹塗りを行ない、外面下半にはわりと粗い縦ハケを施す。

須恵器 (5~10)

杯蓋 (6・7) 釦形の撮みを付けるもので、天井外面ヘラ削り、口縁部は丸味を帯びた鳥嘴状となる。

高台付杯 (8・9) 8は内端で接地する短かい高台を付ける。焼きやや甘く暗灰色をなす。9は細身の高台を付け、やや直線的に開く体部の深い器形となる。胎土精良で焼きやや甘く、淡灰色をなす。

皿 (10) 底部ヘラ切り後ナデており、口径14.7cm、器高2.6cmのやや深いタイプである。

甕 (5) 外面の凸帯下に櫛描波状文を施し、内外面回転ナデ、内面灰かぶり、外面灰黒色をなす。須恵器のうち、他の奈良末前後のものとは異なり、この1点のみ古墳時代の所産である。

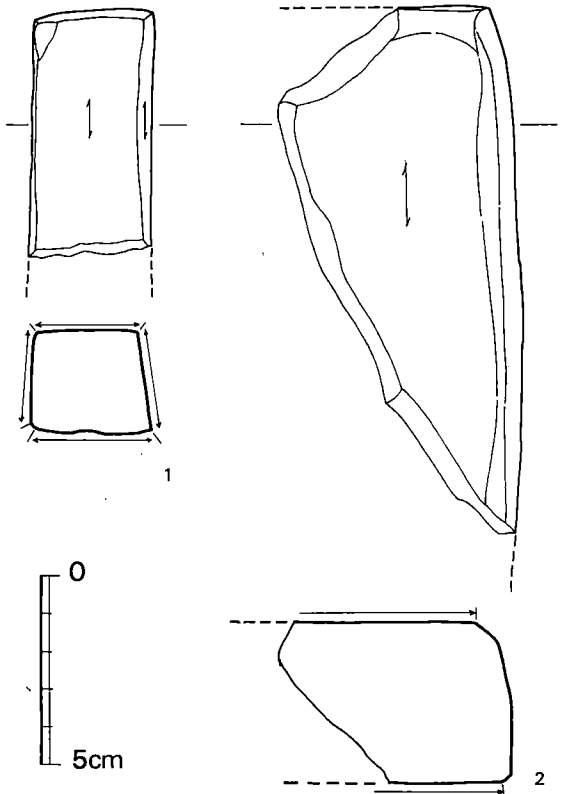
土師器 (11~20)

小皿 (11・12) 口径9.1~9.2cm、器高1.1cm、底径7.2~7.7cmの同工であり、底部はヘラ切りでスノコ状圧痕が残る。胎土精良で、焼き良く淡褐色をなす。

皿 (13) 口径15.3cm、器高2.0cmで全体に厚手である。器表磨滅し、胎土精良で白褐色をなす。

高杯 (14) 長脚の類で、広い皿状の杯部につくる類であろう。胎土精良、淡茶色をなす。

甕 (15~20) 口縁の形態、胴の張り方で各種ある。孰れも内面ヘラ削りを行ない、外面には粗い縦ハケを施すものが多い。20は頸部内面で稜をなさず、丸く外反するタイプである。外



第39図 砥石実測図(1/2)

面に煤付着するものが多い。

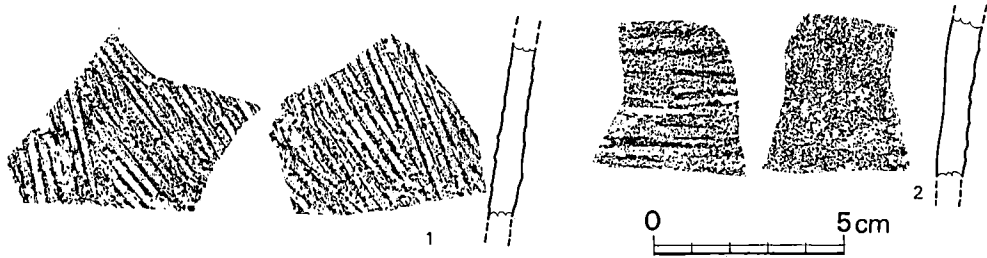
縄文土器 (第40図)

1は、内外面にアナガラ属貝殻による斜め条痕が著しく、薄手で、胎土に粗石英粒かなり含み、外面茶色、内面暗褐色をなす。2は、外面のみに粗い横位条痕を残し、胎土に粗石英粒多く含み、外面暗黄褐色、内面暗～黒褐色をなす。

1は前期的な条痕文土器とみられるが、2は粗雑であり、後・晩期の粗製土器となるものかと考えられる。

砥石 (第39図)

1・2ともに砂岩製の粗砥である。1は小型で四面とも使用しており、2は大型で上下面のみ使用する。



第40図 縄文土器実測図(1/2)

3. 小 結

遺跡の南側には50cm下に谷水田が作られており、弥生時代中期の大きめの土器破片が中央区の西側の包含層で出土したことから、この舌状台地に住居等の遺構が存在したことは十分に考えられる。また包含層内からは中央区で多くの奈良末～平安時代初頭の土師器・須恵器片が、中世の磁器片と共に出土をみている。縄文土器片も表採されているので、確認された遺構は少なかったが、順次多くの遺構が営まれ、攪乱を受けてきた複合遺跡であると言えよう。



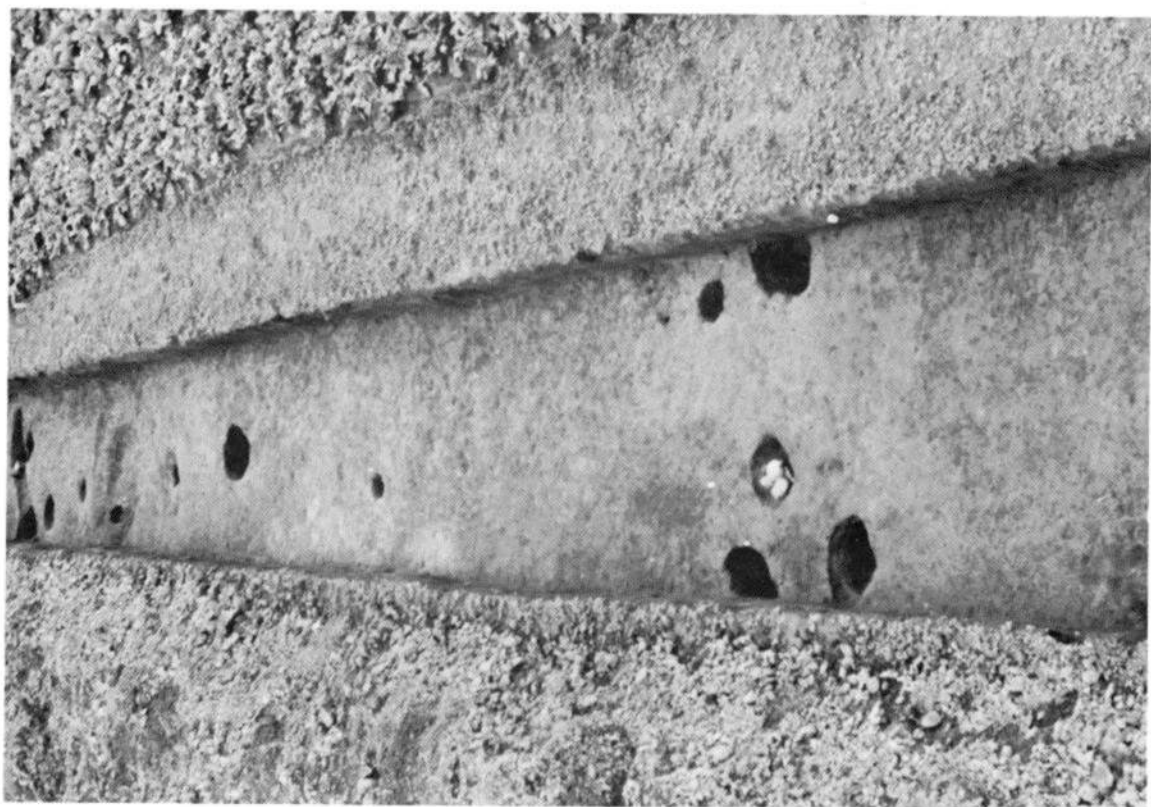
1 浮殿D遺跡発掘前全景（東より）



2 中央区全景（東より）



1 北区全景 (南より)



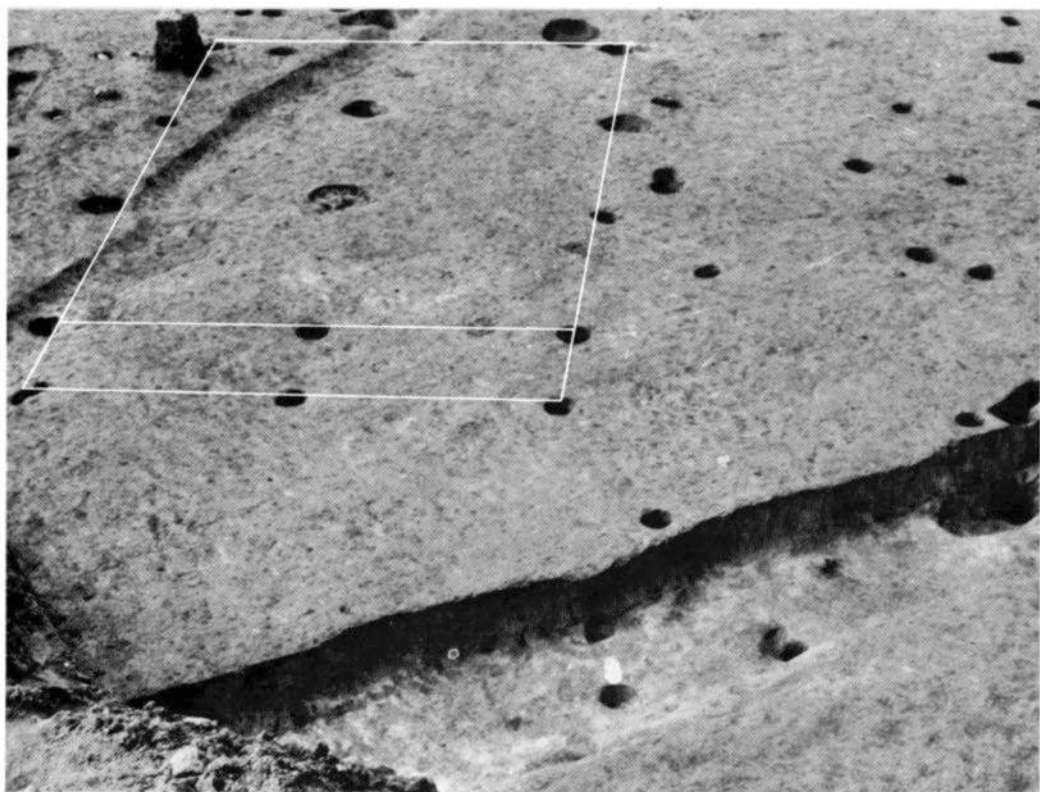
2 第1トレンチ (東側より)



1 北区遺構 (北より)



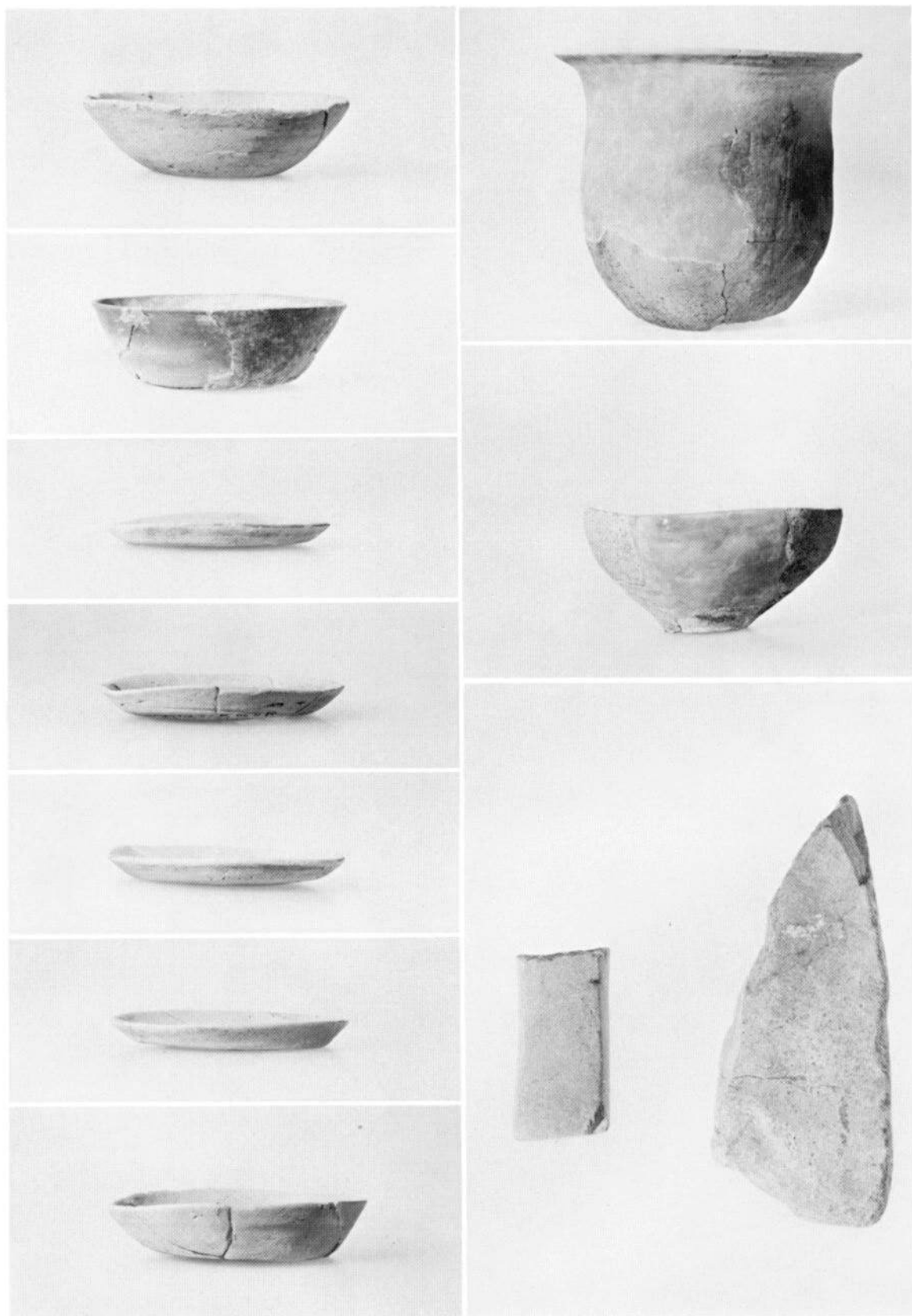
2 北区西南隅遺構 (南より)



1 掘立柱建物



2 1号土城土器出土状态



浮殿D遺跡出土遺物

Ⅲ 各遺跡の調査

7. 大島遺跡

7. 大 島 遺 跡

1. は じ め に

大島遺跡は、山家川南岸に展開する低台地上に所在する。台地は東から西へゆるやかな傾斜をもち最高部で標高42 m前後で、広い範囲で展開し、筑紫野市と朝倉郡夜須町域にまたがる。当遺跡は、この台地のほぼ中央部の北側縁に位置し、台地の先端部付近に第14地点の八ヶ坪遺跡が所在する。

当遺跡は、標高38 m前後の高さにあり、低地との比高差は4 mほどである。遺跡は台地の縁に所在することから、水田整地の為に一部が削平されている。遺構は表土下20~50cmの深さにあり、西に低くなっている。

遺構は、調査区の東半部に住居跡・貯蔵穴等が集中し、西半部に溝等が遺存する。2号住居跡の北東に谷状の落ち込みがあり、北側に深く傾斜をもち、恐らく台地の縁であるため、土砂崩れの跡と考えられ、堆積土から見てもそのように判断された。また、当遺跡の地山は砂質土層からなり、貯蔵穴などでは湧水があった。

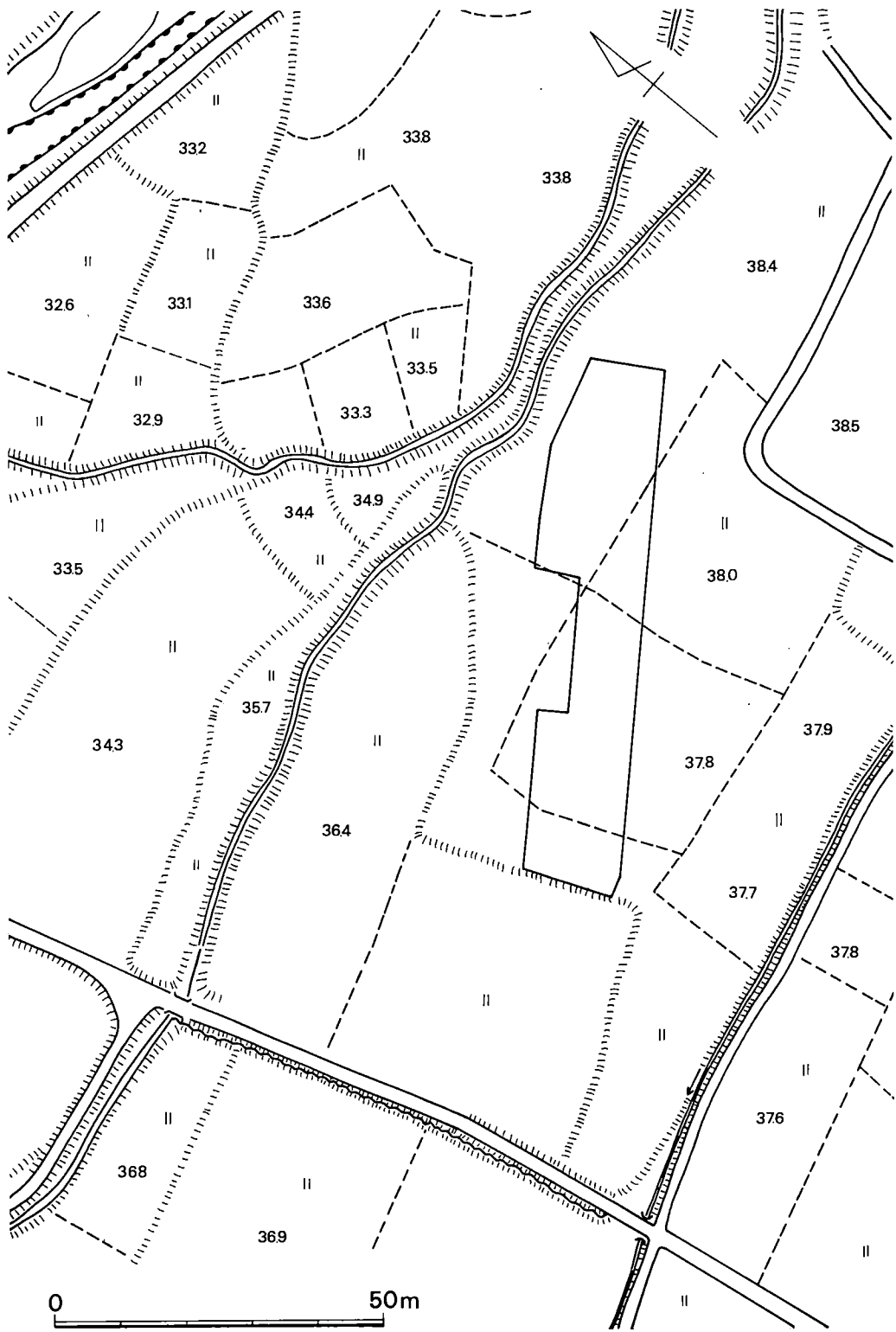
2. 遺 構

遺構は、住居跡4、貯蔵穴49、土塹14、竪穴2、溝1である。

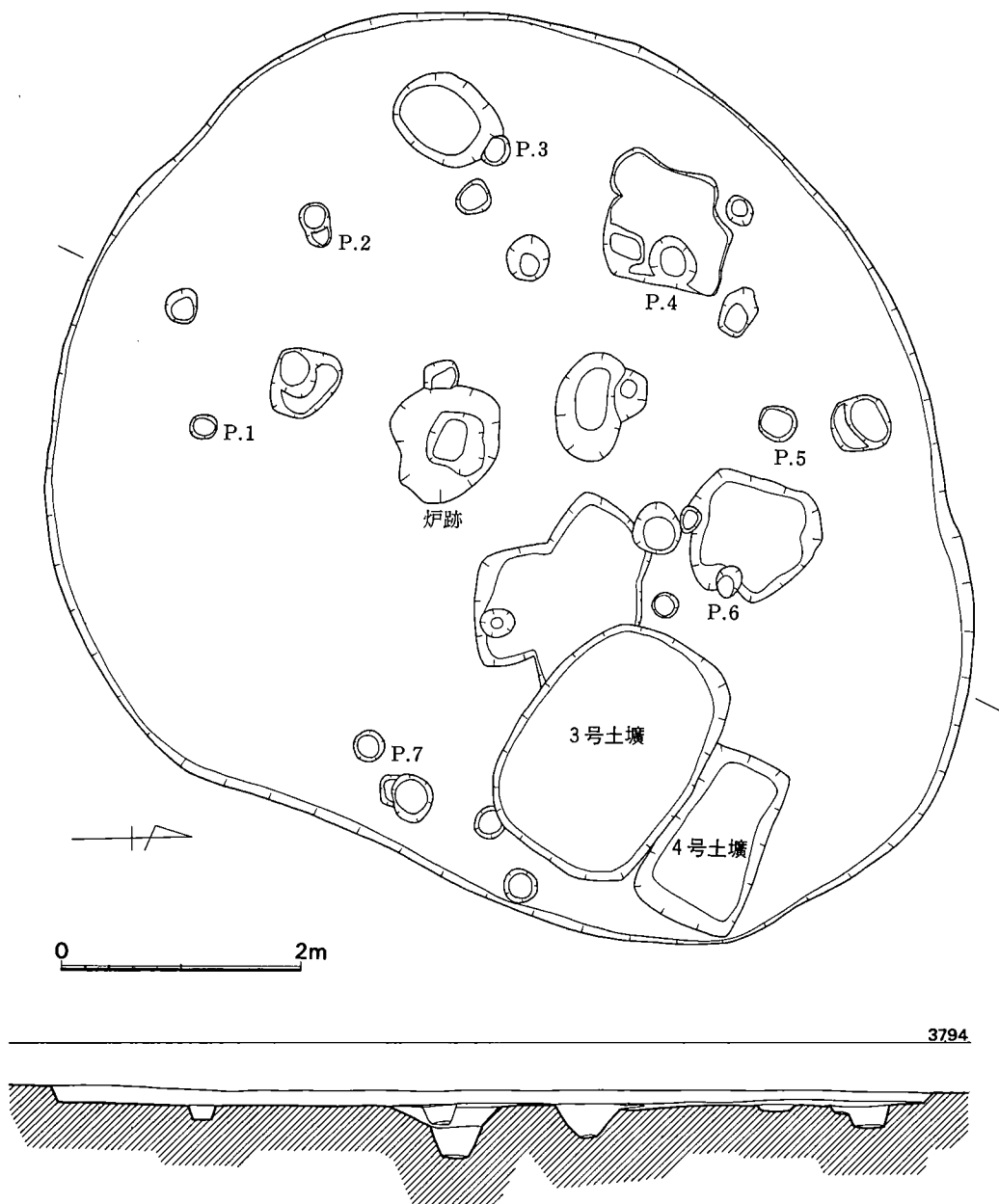
(1) 住 居 跡

1号住居跡(第42図、図版33—1) 不正円形を呈する住居跡である。畑地であるため削平を受け遺構は浅く残っていた。3・4号土塹と重複し、埋土と地山の差が不明瞭で明確でなく、若干の土質の相違をもとに一部発掘した。これによると、長径8.3 m、短径7.1 mを測るが、周壁より約1 m内側の円状に柱穴と考えられる小ピット(P1~P7)があり、これからすると、直径7.1 m前後の規模の円形を呈していたのではないかと推定され、これを基に北東部に若干の張り出しを加えたプランを意図したものと思われ、その点については確証を得ない。

住居跡は、ほぼ中央に深さ30cmほどの不正形プランの炉跡があり、柱穴と考えられる小ピットは7つが確認された。10~20cmと柱穴としては非常に浅いもので、柱穴としてなしうるかは疑問のあるところであるが、周壁より約1 m内側の円上にほぼ位置し、柱間が1.6 m前と一致することから柱穴として考慮した。恐らく9本柱の住居跡ではないかと考えられる。



第 41 図 大島遺跡周辺地形図 (1/1,000)

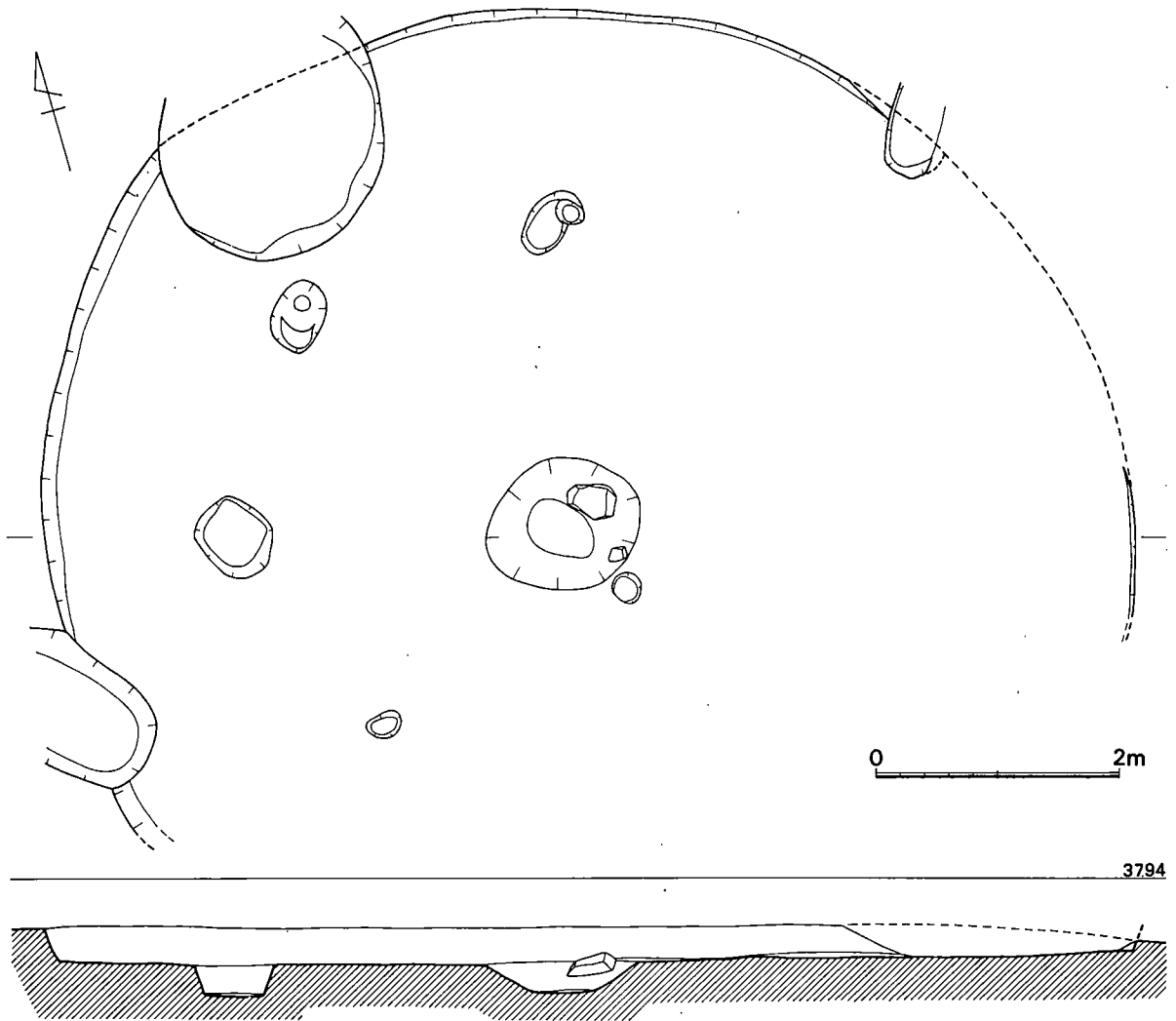


3794

第 42 図 第 1 号住居跡実測図 (1/60)

3・4号土壙との前後関係は、出土した土器に時期差はなく確認し得なかった。1号竪穴、11号土壙よりは新しい。

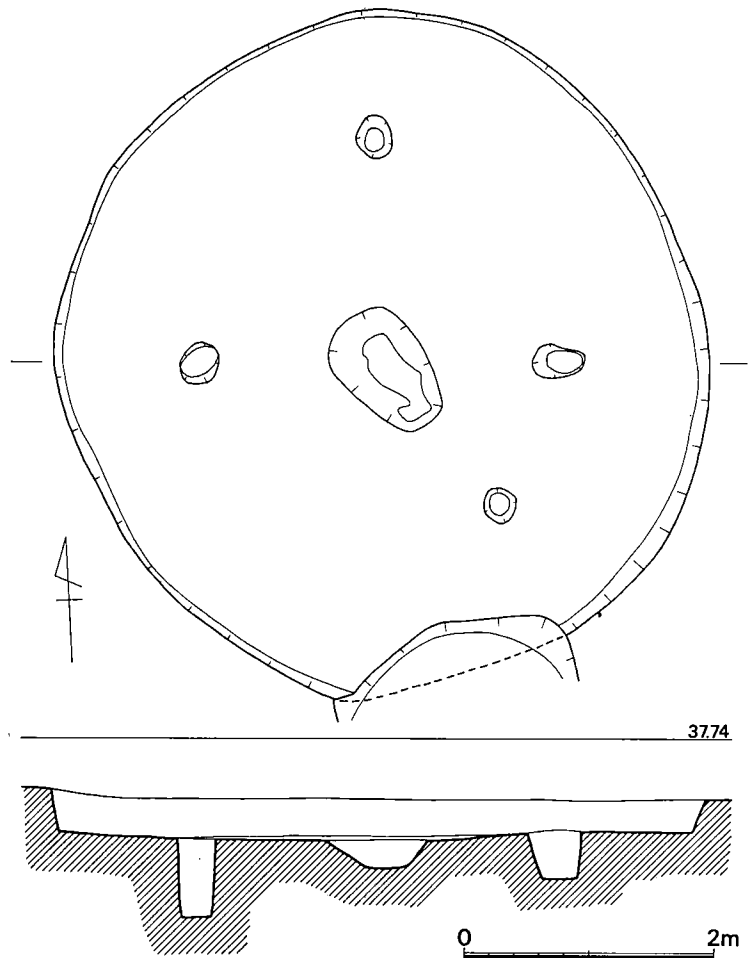
出土遺物は土器(1~7)がある。弥生時代前期に属す。



3794

第 43 図 第 2 号住居跡実測図 (1/60)

2号住居跡(第43図, 図版33-2) 遺構は調査区外に広がっており完掘し得なかったが, 径約9mの円形住居跡と考えられる。貯蔵穴と重複し, 土砂崩壊により, その全容を知り得ない。ほぼ中央に円形を呈する深さ20cmほどの壙がある。これは灰・炭などが埋土に認められ炉跡と考えられる。壙内上部に角礫2個があり, 1個は若干焼けている。柱穴と考えられるピットは3個が確認されたが, 住居としては不十分な数である。円形住居跡としては, その規模は大きいものであり, 全容を知り得なかったのは残念である。



第44図 第3号住居跡実測図(1/60)

4号貯蔵穴・2号土壙より古いが、1～3号貯蔵穴との前後関係はつかめなかった。

出土遺物は、弥生前期の土器(8～29)と土製紡錘車(27)が出土。

3号住居跡(第44図, 図版34-1) 小規模の円形住居跡で、径約5.4mを測る。深さも40cm前後あり、わりあい遺存度の良い遺構である。ほぼ中央に長形状を呈する炉跡がある。柱穴は4本と考えるが、東側の2柱穴の位置に疑問の残るところである。柱穴の深さは30～60cmあり、他の住居跡のものに比べると深い。

重複する遺構との前後関係は、5・6・41・43号貯蔵穴より新しく、4・7号貯蔵穴より古い。出土遺物は、土器(30～36)、黒曜石製鏃(7)がある。弥生時代前期に属す。

4号住居跡(第45図, 図版34-2) 2号住居跡の北に隣接する。2号住居跡との前後関係は不明である。発掘時には、44・45号貯蔵穴の遺存することが、確認されず、円形プランを

呈する住居跡として掘さくを初め、発掘作業終了頃に2基の貯蔵穴の遺存することが解り、これら2基との前後関係はつかめ得なかった。また、住居跡の西側をも作業工程からして完掘できなかったが、恐らく円形プランを呈する住居跡と考えられる。

43号貯蔵穴より新しく、10・18号貯蔵穴より古い。出土遺物は、土器(37~40)、土製品(22)がある。弥生時代前期に属す。

(2) 貯蔵穴(第46~52図、図版35~39)

貯蔵穴は、調査区の東側に集中して検出され、その広がりにはさらに東に延びるものと推定される。49基を確認し、47基を発掘調査した。

1号貯蔵穴(1) 円形プランを呈す。2号住居跡と重複するため浅く遺存するが、断面は袋状を呈するものである。遺物は土器(41~43)が出土。弥生時代前期のものである。

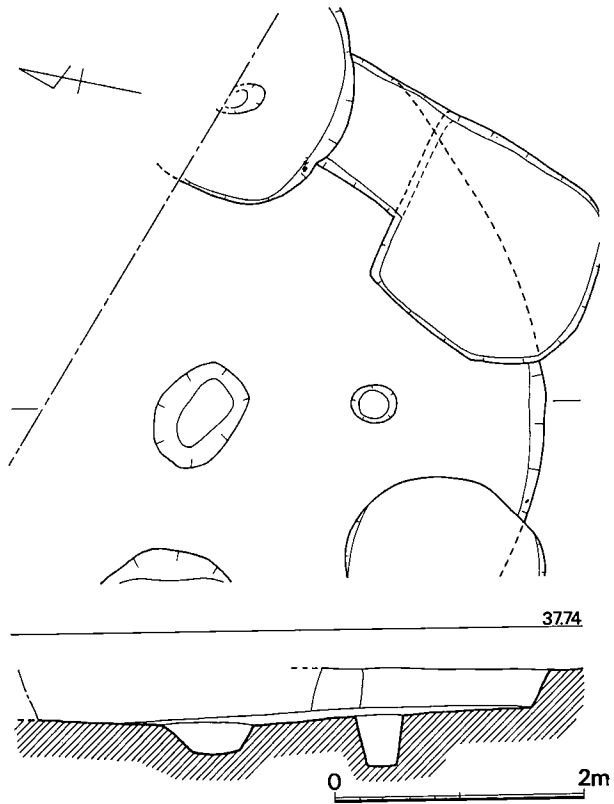
2号貯蔵穴(2) 円形プランを呈す。断面は袋状をなし、底中央がやや深くなっている。3号貯蔵穴と重複するが、これより古いものと考えられる。弥生時代前期の土器(44~48)が出土している。

3号貯蔵穴(3) 円形プランを呈す。上部が崩壊しているが、断面は袋状をなす。遺物は土器の小片が多いが、弥生時代中期のものが少量含まれており、2号住居跡や2号貯蔵穴より新しいものと考えられる。

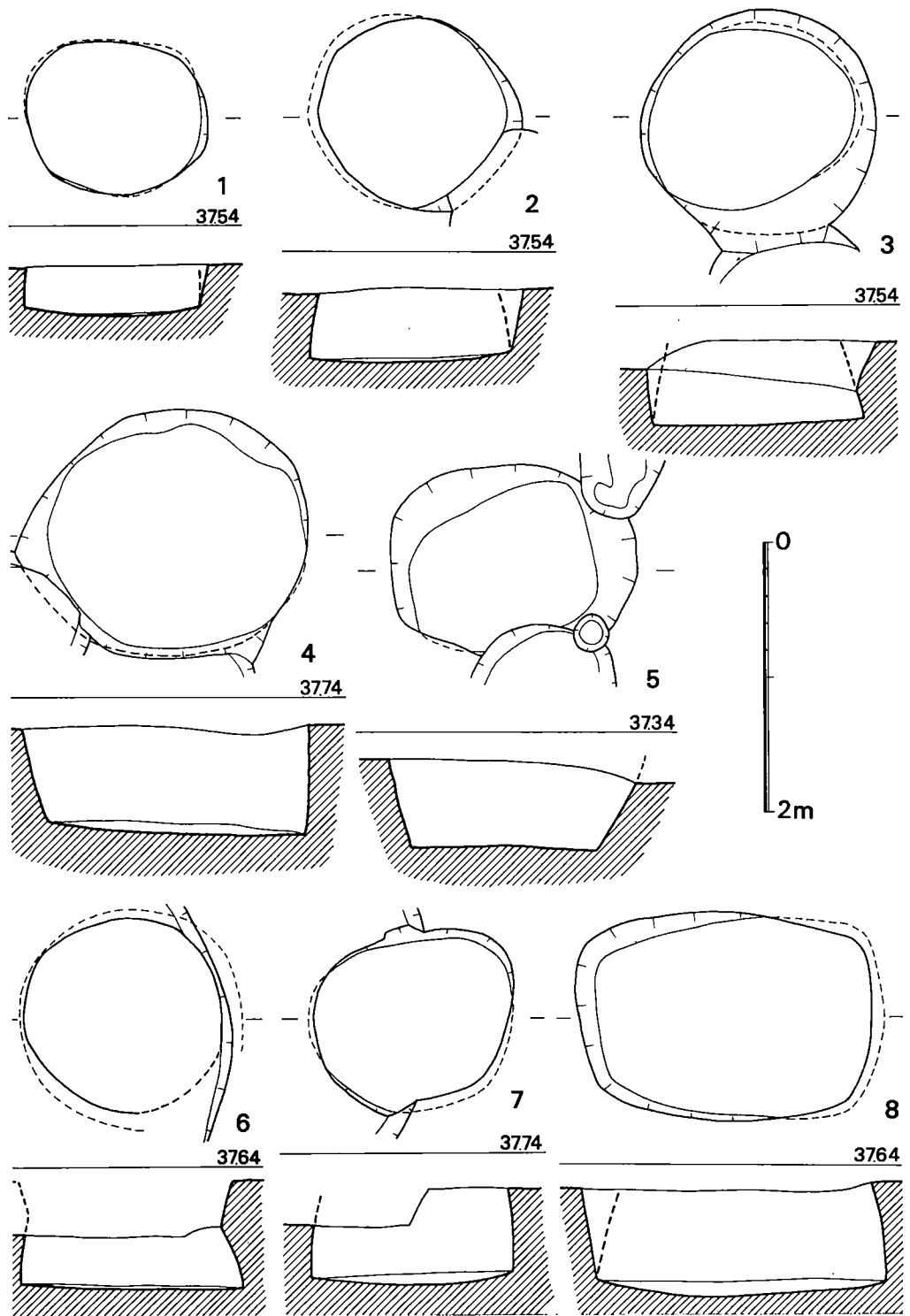
4号貯蔵穴(4) 円形プランのやや大型の貯蔵穴である。2・3号住居跡より新しい。弥生時代前期の土器(49~51)が出土。

5号貯蔵穴(5) 隅丸長方形を呈す。3号住居跡より古いものである。上部が崩壊しているので、断面が袋状を呈すか否かは不詳である。遺物の出土はないが、3号住居跡との関連から弥生時代前期のものであろう。

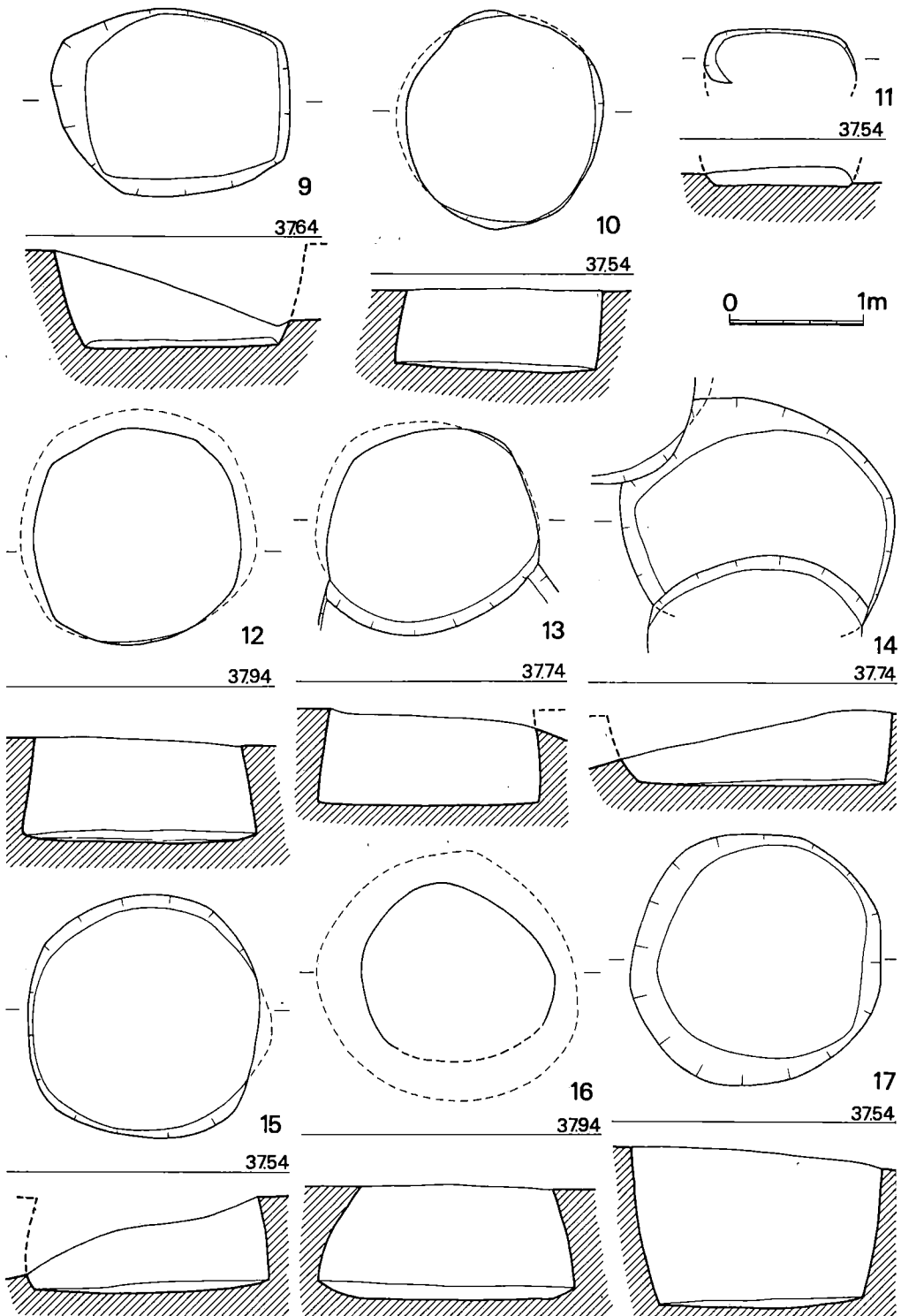
6号貯蔵穴(6) 3号住居跡内で検出された。基準杭を設置しており完掘されていない



第45図 第4号住居跡実測図(1/60)



第 46 图 貯藏穴 実測图 1 (1/50)



第 47 図 貯蔵穴実測図 2 (1/50)

が、円形を呈するものと思われる。断面は袋状を呈す。弥生時代前期に属し、磨石(48)が出土。

7号貯蔵穴(7) 3号住居跡と重複し損壊しているが、円形プランを呈するものであろう。断面は袋状を呈し、底中央がやや深くなっている。弥生時代前期に属す壺形土器の肩部と土製紡錘車(29)が出土、3号住居跡より古い。

8号貯蔵穴(8) 隅丸長方形のプランを呈す。西側壁が崩落しているが、断面は袋状をなすものと思われる。弥生時代前期の土器小片が出土。

9号貯蔵穴(9) 隅丸長方形のプランを呈す。地山崩壊により東側が損壊している。床面は平坦である。弥生前期に属す土器(52~53)が出土。

10号貯蔵穴(10) 3号住居跡に隣接して発見された。円形プランを呈す。断面は袋状をなすものと思われる。弥生時代前期の土器(54~56)のほか石匙(21)が出土。

11号貯蔵穴(11) 地山崩壊により、ほとんど原状を留めない。遺物の出土はない。

12号貯蔵穴(12) 円形プランを呈し、断面は袋状をなす。遺存状態の良好なものである。弥生時代前期の土器(57~64)が出土。

13号貯蔵穴(13) 14号貯蔵穴と重複し、新しいものである。円形プランを呈し、断面は袋状をなす。弥生時代前期の土器小片が出土。

14号貯蔵穴(14) 不整円形のプランを呈す。平面規模に比べ、深さが浅い。13・15号貯蔵穴より古い。弥生時代前期の土器(65)が出土。

15号貯蔵穴(15) 円形プランを呈す。14号と同じく地山崩壊により上部の両側が崩壊している。これも平面規模に比べ浅いものである。弥生時代前期に属すと考えられる土器の小片が若干出土。

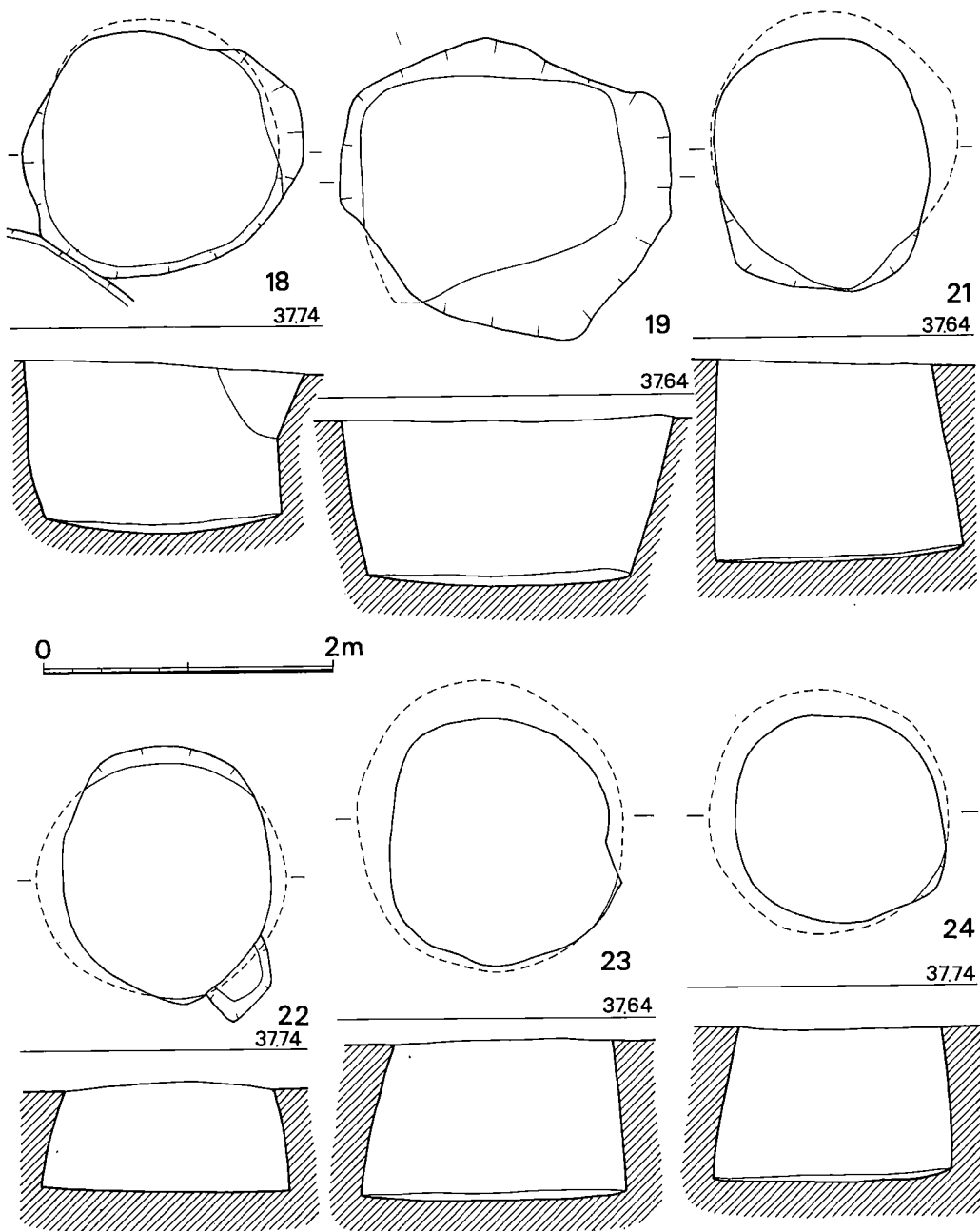
16号貯蔵穴(16) 調査区外に若干広がり、上部を完掘していないが、円形プランを呈すものであろう。遺存状態の良好なもので、断面の袋状を呈す状態がよく解る。弥生時代前期の土器(66~69)が出土。

17号貯蔵穴(17) 円形プランを呈す。粗い砂質土が地山となっており、深く掘られているが、壁の崩落が著しく、原状は袋状をなす断面形と思われる。弥生時代前期の土器(70)が出土。

18号貯蔵穴(18) 3号住居跡に接して発見された。円形プランを呈す。上部が崩壊しているが、断面は袋状をなすものであろう。床面は割り合い深いものである。3号住居跡より古く、42・43号貯蔵穴より新しい。弥生時代前期の土器の小片が若干出土している。

19号貯蔵穴(19) 砂質土の地山であるため遺構上部の崩壊が著しい。本来は長方形プランを呈していたものであろう。床面は台形状プランを呈す。床面は深い。弥生時代前期の土器(71~81)が出土。

20号貯蔵穴(20) 21・39号貯蔵穴と重複し若干崩壊しているが、方形プランを呈すものであろう。床面の両側に長形状の浅い落ち込みがある。弥生時代前期の土器(82~83)が出土。



第48図 貯蔵穴実測図3 (1/50)

21号貯蔵穴 (21) 不整形円形を呈すプランである。遺存状態の良好なもので、断面は袋状をなし、深さは最大のものである。弥生時代前期の土器 (87・88・91・92・98) が出土。

22号貯蔵穴 (22) 円形プランを呈す。遺存状態良好なもので、断面は袋状をなす。弥生

時代前期の土器（93・96・97）と黒曜石製石鏃（6）が出土。37号貯蔵穴より新しい。

23号貯蔵穴（23） 遺構上部が崩壊しているが円形プランを呈すもので、断面は袋状をなす。床面は平坦で、わりあい深い。弥生時代前期の土器（84）が出土。

24号貯蔵穴（24） 円形プランを呈す遺存良好なものである。断面は袋状をなす。弥生時代前期の土器（85・89・94・95）と大型石斧（43）が出土。

25号貯蔵穴（25） 遺構の上部が崩壊しているが、円形プランを呈すものである。断面は袋状をなすものと思われる。弥生時代前期の土器（86・90）が出土。

26号貯蔵穴（26） 円形プランを呈す。床面のやや浅いものである。弥生時代前期の土器小片が若干出土している。

27号貯蔵穴（27） 遺構上部が崩壊している。円形プランを呈すもので、床面中央がやや深くなっている。弥生時代中期の土器（99・102～108）と土製紡錘車（28）が出土。

28号貯蔵穴（28） 遺構上部が崩壊しているが、長円形プランを呈すもので、断面は袋状をなすものであろう。弥生時代前期の土器（100・101）が出土。

29号貯蔵穴（29） 30号貯蔵穴と重複し損壊するが、方形プランを呈すものと思われる。断面は袋状をなし、床面中央が深くなっている。弥生時代前期の土器（109～111）と片刃石斧（33）と石斧（44）が出土。

30号貯蔵穴（30） 円形プランを呈す。遺構上部を若干損壊するが、断面は袋状をなすものであろう。弥生時代中期の土器（112～133）と石鏃（1）、石庵丁（35）、砥石（52）が出土。29号貯蔵穴より新しい。

31号貯蔵穴（31） 北側が調査区外に広がり完掘していないが、円形プランを呈すものであろう。断面は袋状をなす。弥生時代前期の土器（134）と石鏃（10）が出土。

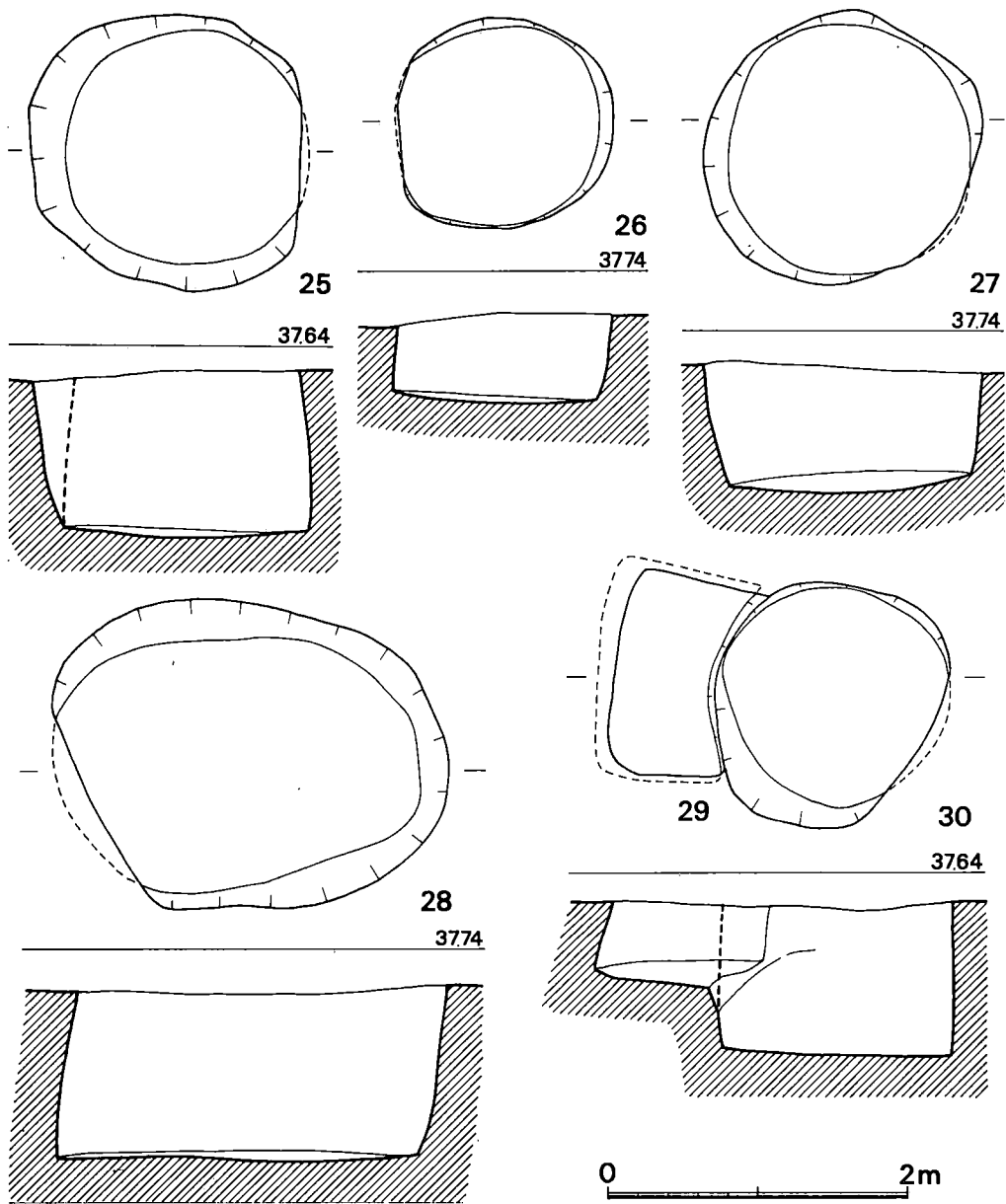
32号貯蔵穴（32） 長方形プランを呈す小型のものである。土壌かとも思われたが、断面が袋状をなすところから貯蔵穴とした。33号・34号・37号貯蔵穴も同様なものである。弥生時代前期の土器（135～137）と石庵丁（36）が出土。

33号貯蔵穴（33） 小型の長方形プランを呈す。壁の一部が袋状をなす。弥生時代前期の土器小片が出土。

34号貯蔵穴（34） 長方形プランを呈す小型のものである。床面中央がやや深くなっている。弥生時代前期の土器（138～146）が出土。

35号貯蔵穴（35） 円形プランを呈す遺存状態良好なもので、断面はフラスコ状をなす。弥生時代前期の土器（147～151）が出土。

36号貯蔵穴（36） 46号貯蔵穴と重複し、一部損壊するが、円形プランを呈すものである。遺存状態はよく、断面は袋状を呈す。弥生時代前期の土器（152～153）と石鏃（9・13）が出土。

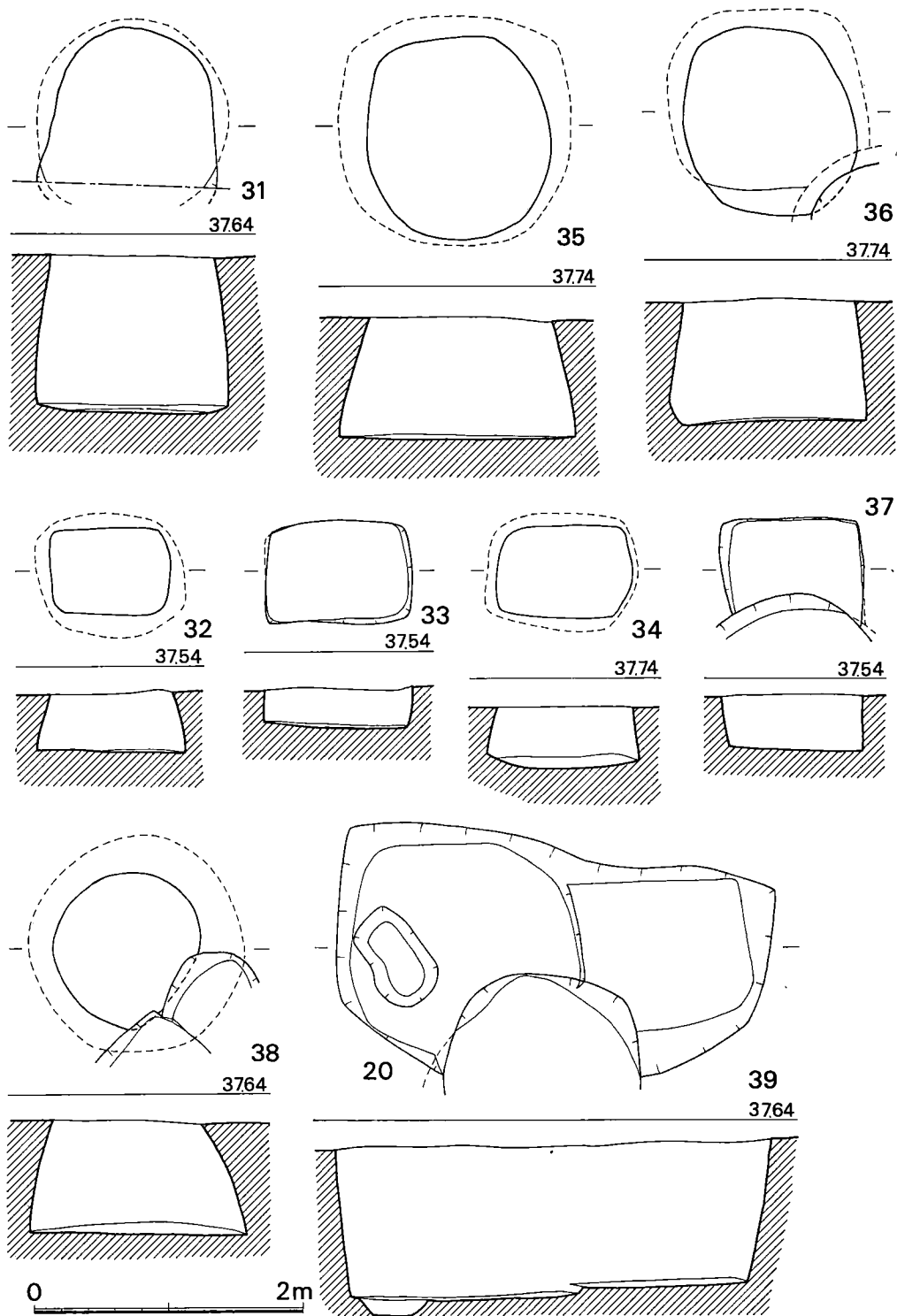


第49図 貯蔵穴実測図4 (1/50)

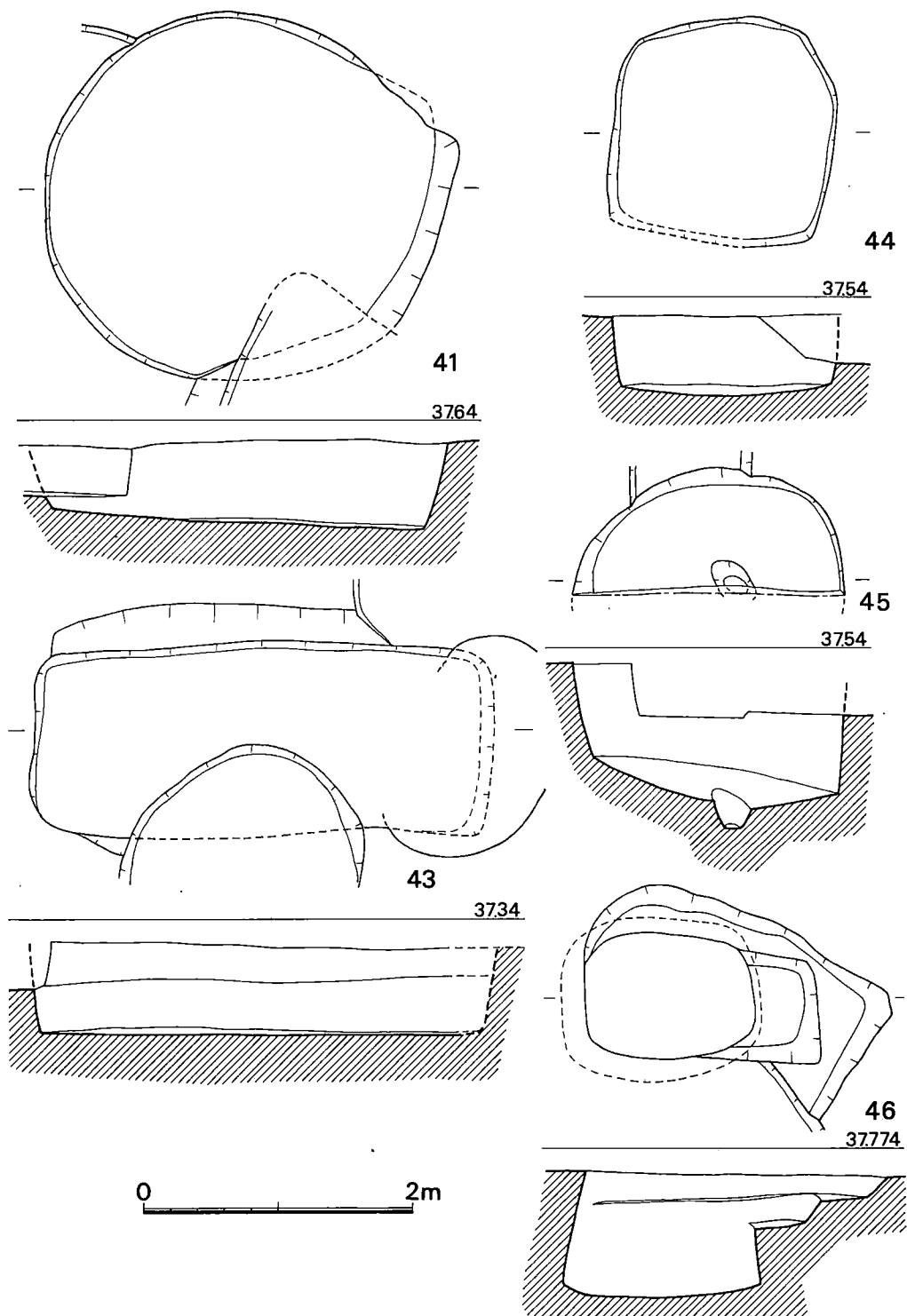
37号貯蔵穴 (37) 22号貯蔵穴と12号土壌が重複し、損壊が著しい。方形あるいは長方形を呈すプランと思われる。弥生時代前期の土器小片が出土。

38号貯蔵穴 (38) 47号貯蔵穴より古く、これにより一部が損壊する。円形プランを呈す。断面はフラスコ状を呈す。弥生時代前期の土器 (154~164) が出土。

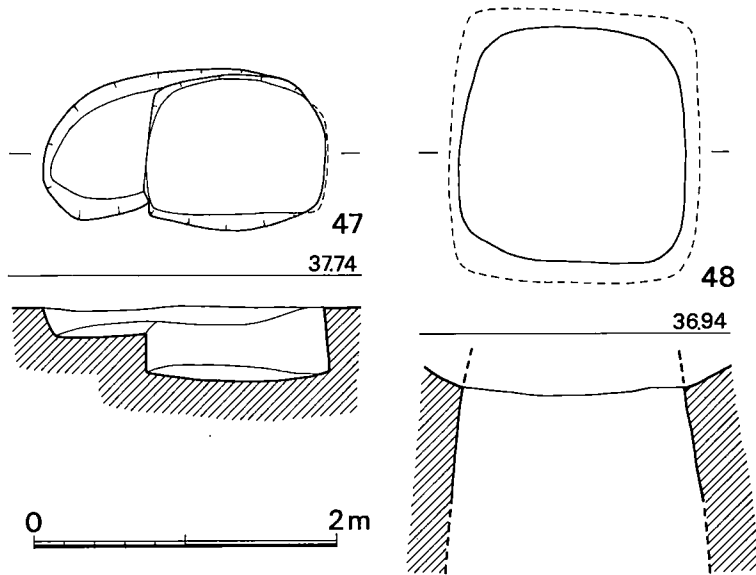
39号貯蔵穴 (39) 20・21号貯蔵穴より古い。両者により損壊著しいが、長方形プランを



第 50 图 貯藏穴 实测图 5 (1/50)



第 51 図 貯蔵穴実測図 6 (1/50)



第 52 図 貯 蔵 穴 実 測 図 7 (1/50)

呈するものであろう。弥生時代前期の土器（165～167）が出土。

40号貯蔵穴（40） 3号住居跡，39号・40号貯蔵穴と重複し損壊が著しい。円形プランを呈すものと思われるが，その規模については不詳である。弥生時代前期の土器（168）が出土。

41号貯蔵穴（44） 円形プランを呈し，最大のものである。平面形に比べ床面は浅い。3号住居跡と39号・41号貯蔵穴より古い。弥生時代前期の土器小片と片刃石斧（34）が出土。

42号貯蔵穴 未掘の貯蔵穴である。38・41号貯蔵穴により損壊が著しい。

43号貯蔵穴（43） 長方形プランを呈す長大なものである。西側辺が明確に把握できなかったが，長辺は340 cm前後と考えられる。平面的な規模に比べ非常に浅い床面である。3号・4号住居跡や10号・18号貯蔵穴より古い。弥生時代前期の土器（169～171）が出土。

44号貯蔵穴（44） 方形プランを呈す。4号住居跡と重複するが，前後関係は解からなかった。弥生時代前期の土器（172～178）と石匙（15）と砥石（51）が出土。

45号貯蔵穴（45） 4号住居跡の調査時に確認された。前後関係は不詳である。完掘できなかったが，円形プランを呈すものであろう。床面は摺鉢状を呈し，ほぼ中央に小ピットがある。弥生時代前期の土器（179～180）が出土。

46号貯蔵穴（46） 長方形の浅い壙内に掘られたもので，南側上部に方形の浅い掘り込みをもつ。長方形プランを呈し，断面は袋状をなす。弥生時代中期の土器（181～190）と石庵丁（18・19）が出土。

47号貯蔵穴（47） 46号貯蔵穴と同種のもので，北側に半円形の浅い掘り込みをもつ。断

面は袋状を呈す。弥生時代前期の土器（191～196）と石庖丁（16・17）が出土。38号貯蔵穴より新しい。

48号貯蔵穴（48） 溝底の検出時に確認された。隅丸方形プランを呈す。砂質土の地山であるため、湧水という条件が重なり壁の崩落がはなはだしいため完掘できなかった。深さは130cm以上あると思われ、最も深いものである。弥生時代前期の土器（197～203）が出土。溝より古い。

49号貯蔵穴（49） 13～15号貯蔵穴と重複し、損壊が著しい。円形プランを呈すものと考えられるが、その規模は把握困難であった。

貯蔵穴は49基が発見され、47基を発掘した。別に区分した土壇14基が貯蔵の用をなすとすればその数は60基を越えることになる。また、調査区外にも遺跡は広がることから基数はもっと増えるものと思われる。

49基の貯蔵穴を概観すると次のようなことがいえる。

①、平面形が円形を呈するものが28基あり、不整形円形などを加えると32基になる。円形プランが大半を占める。

②、32・33・34号のように、長方形プランを呈す小型のものがある。いずれも前期に属す。この種の貯蔵穴の発見例はなく、むしろ土壇とした10・13号に類似したものが、春日市門田遺跡で小竪穴としてとりあげられている（註1）。

③、46・47号のように、一方に浅い壙をもつ、いわゆる二段掘りの貯蔵穴がある。貯蔵穴本体は何ら他のものと変わりなく、付帯施設をもつところに特徴がある。

④、貯蔵穴は前期に属するのが主体で、中期のものもあるが、規模・構造にあまり変化はみられない。

⑤、当遺跡の貯蔵穴は、立地的条件かとも考えられるが、周辺の丘陵上に所在する貯蔵穴群に比べ、深さが浅い。遺構検出時の遺構面の掘りすぎを考慮しても、90cm以上の深さを呈すものは17基で、3分の1弱という割である。全体的に見て大型は少ない。

⑥、大型のものは、41・43号貯蔵穴がある。41号のような円形で大型のものはあまり類例がない。宗像市長尾遺跡で、前期に属す同規模のものがある（註2）。43号の大型で長方形のものは、小郡市北内畑遺跡（註3）や横隈山遺跡（註4）で発見されている。

⑦、時期的には、27・30・46号が弥生中期前葉に属し、他は前期後半に属すものである。

註1 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第3集 福岡県教育委員会 1977

「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第7集 福岡県教育委員会 1978

註2 宗像市教育委員会が、昭和55年12月から56年1月に発掘調査し、筆者が担当し実見す。

註3 「北内畑遺跡」小郡市文化財調査報告 第7集 小郡市教育委員会 1981

註4 「横隈山遺跡」小郡市教育委員会 1974

第2表 貯藏穴一覧表

単位 cm

号	平面形	口辺径	底辺径	深さ	出土遺物		時期	摘要
					土器	石器製品		
1	円形	134 × 114	130 × 116	(38)	④①~④③		前期	
2	円形	152 × 142	150 × 144	(56)	④④~④⑧		〃	
3	円形	172 × (170)	158 × 138	(64)			〃	2号住居跡・2号貯藏穴より新(?)
4	円形	(214) × 183	192 × 162	78	④⑨~④⑪		〃	3号住居跡より新
5	隅丸長方形	185 × —	140 × —	65			〃	3号住居跡より古
6	円形	147 × 145	167 × 164	80		④⑧	〃	3号住居跡より古
7	不整円形	146 × 128	154 × 132	70		④⑨	〃	3号住居跡より古
8	隅丸長方形	218 × 158	214 × 147	78			〃	
9	隅丸長方形	176 × 140	145 × 123	72	④⑫~④⑬	④⑪	〃	
10	円形	147 × 158	148 × 154	62	④⑭~④⑯		〃	4号住居跡より新
11	不詳	(104) × —	—	(14)			〃	
12	円形	154 × 160	176 × 174	80	④⑰~④⑱		〃	
13	円形	154 × 150	165 × 150	72			〃	14号貯藏穴より古
14	不整円形	204 × —	186 × —	56	④⑲		〃	13・15号貯藏穴より古 49号貯藏穴より新
15	円形	172 × 182	178 × 166	70			〃	14号貯藏穴より新
16	円形	144 × 134	194 × 186	85	④⑲~④⑳		〃	
17	円形	188 × 187	154 × 158	120	④㉑		〃	
18	円形	174 × 168	164 × 170	122			〃	42・43号貯藏穴より新
19	長方形	(230) × 184	(198) × 138	115	④㉒~④㉓		〃	
20	方形	(182) × (186)	168 × 160	104	④㉔ ④㉕		〃	21・39号貯藏穴より古
21	不整円形	174 × 146	190 × 171	142	④㉖④㉗④㉘④㉙ ④㉚		〃	20・39号貯藏穴より新
22	円形	178 × 143	170 × 172	76	④㉛ ④㉜ ④㉝	④⑥	〃	37号貯藏穴より新
23	円形	150 × 173	184 × 200	110	④㉞		〃	
24	円形	140 × 143	166 × 170	110	④㉟④㊱④㊲④㊳	④③	〃	
25	円形	180 × 182	162 × 153	112	④㊴ ④㊵		〃	
26	円形	143 × 140	138 × 133	60			〃	
27	円形	182 × 181	162 × 164	88	④㊶④㊷~④㊸	④㊹	中期	
28	長円形	247 × 204	243 × 165	116	④㊹ ④㊺		前期	
29	方形	128 × —	138 × —	60	④㊻~④㊼	④㊽ ④㊾	〃	30号貯藏穴より古
30	円形	164 × 154	150 × 150	104	④㊽~④㊾	④㊿④①④②	中期	29号貯藏穴より新
31	円形	— × 120	— × 142	116	④③	④⑩	前期	

32	長方形	90 × 64	110 × 92	48	⑬⑭~⑰	⑳	前期	
33	長方形	110 × 76	106 × 74	30			◇	
34	長方形	102 × 113	70 × 88	46	⑬⑭~⑰		◇	
35	円形	136 × 150	172 × 170	90	⑱~⑲		◇	
36	円形	138 × 125	132 × 146	92	⑳~㉑	㉒ ㉓	◇	46号貯蔵穴より古
37	長方形	— × 106	— × 100	42			◇	22号貯蔵穴・12号土壌より古
38	円形	108 × 162	120 × 162	84	㉒~㉓		◇	47号貯蔵穴より古
39	長方形	— × 156	— × 112	108	㉔~㉕		◇	20・21号貯蔵穴より古
40	円形	106 × —	96 × —	61	㉖		◇	3号住居跡, 39・41号貯蔵穴より古
41	円形	306 × —	282 × 260	64		㉗	◇	40・42号貯蔵穴より新 3号住居跡より古
42	円形(?)	—	—	—				未掘
43	長方形	(340) × 152	(324) × 134	70	㉘~㉙		前期	3・4号住居跡, 10・18号貯蔵穴より古
44	方形	170 × 164	160 × 155	58	㉚~㉛	㉜ ㉝	◇	4号住居跡より新(?)
45	円形	198 × —	183 × —	108	㉞ ㉟		◇	4号住居跡より新(?)
46	長方形	190 × 92	146 × 120	92	㊱~㊲		中期	36号貯蔵穴, 11号土壌より新
47	長方形	186 × 103	129 × 88	48	㊳~㊴	㊵ ㊶	前期	38号貯蔵穴より新
48	隅丸方形	152 × 150	(178) × (164)	(130)	㊷~㊸		◇	溝より古
49	円形(?)	—	—	(20)				未掘

(出土遺物の○数字は挿図番号に一致, 時期は弥生時代である。)

(3) 土壌 (第53・54図, 図版40)

土壌は14基が確認された。これらのいくつかは、小型の貯蔵穴に類似するが、構造的に見てやや異なる点から区別した。一覧表を付すので参照されたい。

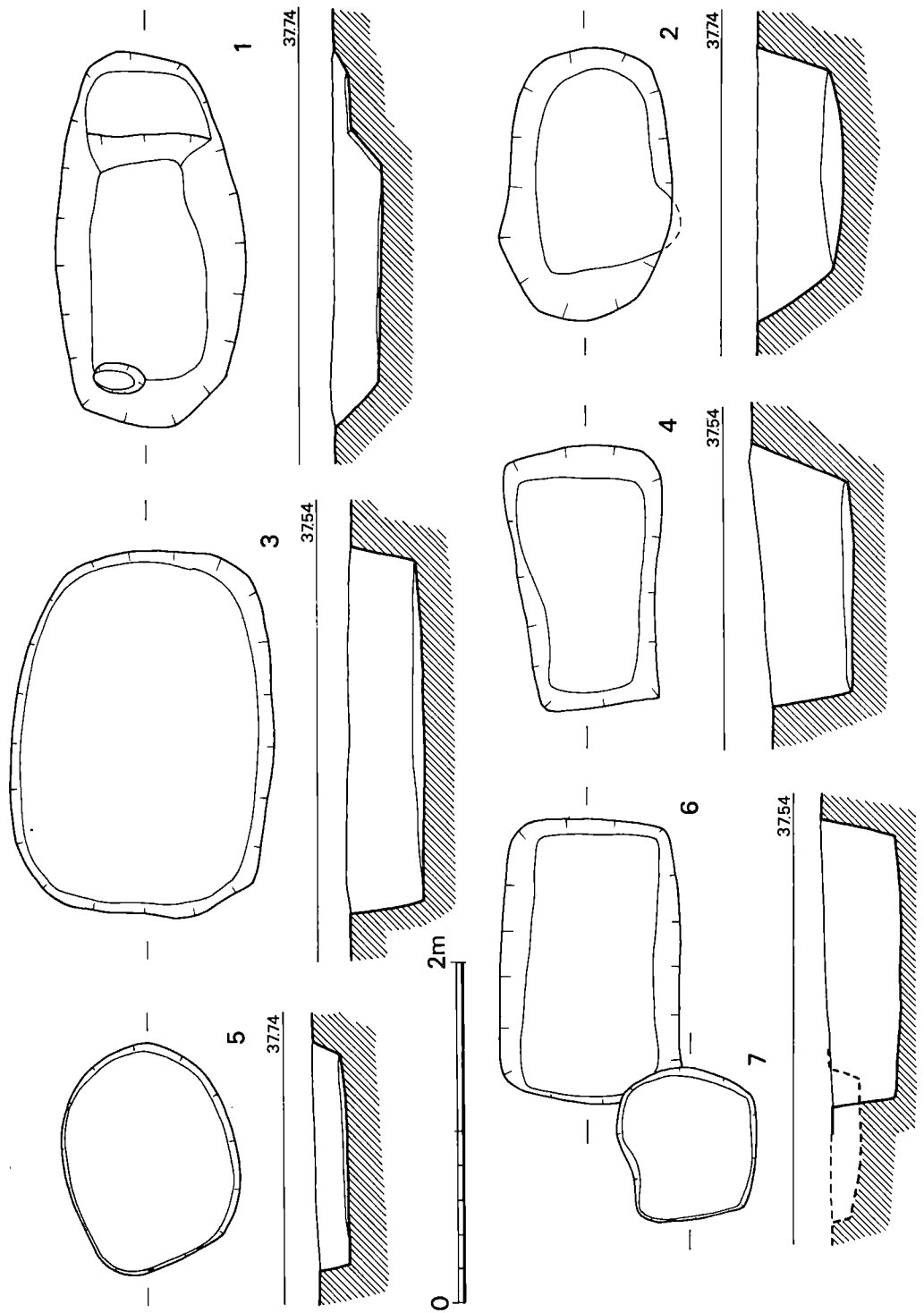
1号土壌(1) 隅丸長方形のプランを呈す。壙内南側に一段を有し、北側に小ピットがある。壙内より弥生時代前期の土器小片が出土。

2号土壌(2) 隅丸長方形のプランを呈す。壙底は中央部分がやや深くなっている。2号住居跡より新しい。壙内より弥生時代中期前半の土器(204~206)が出土している。

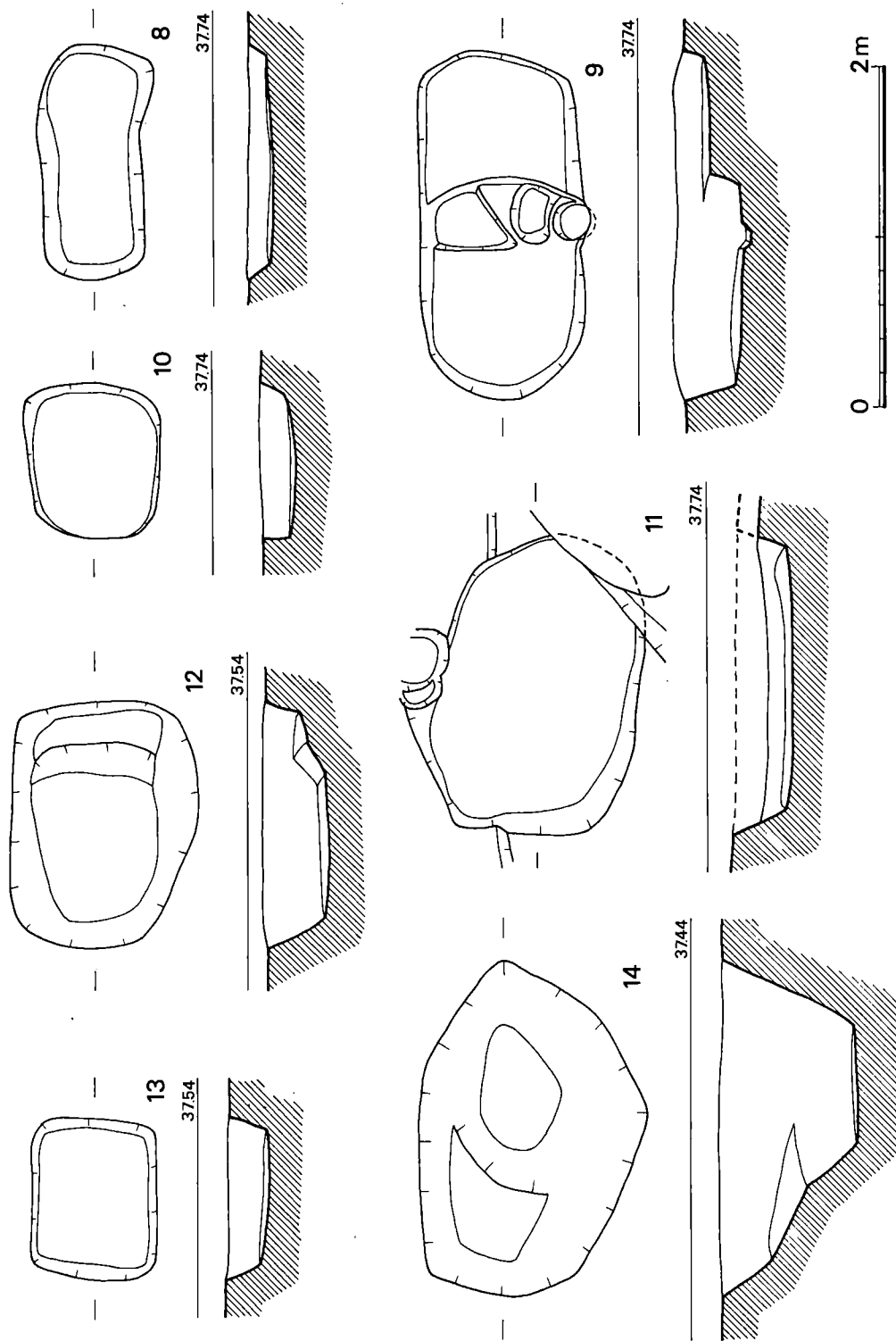
3号土壌(3) 1号住居跡の調査時に確認されたものである。土壌の中で最大規模を測る。隅丸長方形のプランを呈す。壙内より弥生時代前期の甕形土器(207)が出土している。

4号土壌(4) 1号住居跡内で3号土壌に接して確認された。撓形をなす平面形である。3号土壌より古い。壙内より弥生時代前期の土器(208~212)が出土している。

5号土壌(5) 不整円形の浅いものである。壙内より弥生時代前期の土器(213~214)が出土。



第 53 图 土 坑 实 测 图 1 (1/40)



第 54 图 土 城 实 测 图 2 (1/40)

第3表 土 壙 一 覧 表

単位 cm

号	平面形	規 模			出 土 遺 物		時 期	摘 要
		長 辺	短 辺	深 さ	土 器	石 器 土 製 品		
1	隅丸長方形	218	112	28	㉑～㉒		前 期	
2	隅丸長方形	160	96	51	㉓		中 期	
3	隅丸長方形	212	152	45	㉔～㉕		前 期	4号土壙より新
4	撓 形	154	$\frac{90}{(70)}$	58	㉖ ㉗		〃	3号土壙より古
5	不 整 円 形	134	102	20	㉘		〃	
6	長 方 形	170	106	47		㉙	〃	7号土壙より古
7	不 整 方 形	88	82	17				6号土壙より新
8	不 整 長 方 形	86	62	15				
9	隅丸長方形	230	94	40	㉚～㉛	㉜	前 期	
10	隅丸長方形	90	80	20				
11	隅丸長方形	176	115	34	㉞～㉟	㊱ ㊲	前 期	1号住居跡, 46号貯蔵穴より古
12	隅丸長方形	146	110	40	㉠～㉡	㉢ ㉣	〃	37号貯蔵穴より新
13	長 方 形	84	74	25				
14	不 整 形	196	133	80				

(出土遺物の○数字は挿図の番号に一致, 時期は弥生時代である。)

6号土壙(6) 長方形プランを呈す。7号土壙より古い。壙内より215の浅鉢形土器が出土。打製石匙(16)が出土している。

7号土壙(7) 不整形を呈す平面形である。最も小規模なもので、石庖丁片(37・38)が出土。

8号土壙(8) 不整形プランを呈す。壙底は浅く、出土遺物はない。

9号土壙(9) 隅丸長方形プランを呈す。壙底は2段となり、底ほぼ中央に円形等の小ピットがある。発掘当初は、47号貯蔵穴と同様なものと思われたが、完掘後にやや異なることが解り土壙として取り扱った。壙内より弥生時代前期の土器(216～219)と打製石匙(17)が出土している。

10号土壙(10) 隅丸長方形プランを呈す。7号土壙に類似する。壙底浅く、遺物の出土はない。

11号土壙(11) 隅丸長方形のプランをなすものと思われる。1号住居跡と46号貯蔵穴が重複し、かなり損壊している。両者より古いもので、壙内より弥生時代前期の土器(220～223)が出土している。

12号土壙(12) 隅丸長方形のプランを呈す。2段掘りの壙底となっている。弥生時代前

期の土器小片(224~228)と手捏ね土器(23)と黒曜石ブレイド(14)が出土。

13号土壙(13) 10号土壙に類似する小規模なものである。遺物の出土はない。

14号土壙(14) 不整形プランを呈す。壙底は2段である。他と比べプランにまとまりのないもので異なるものかとも思われる。遺物の出土はない。

土壙は14基が確認された。小型の貯蔵穴とその規模・平面形が類似するが、壁の立ちあがりに相異があるので土壙にしたものがある(10・13号)。平面形からみると隅丸長方形を呈するものが多く、14号を除けば形状的には整った形を呈す。又、9号のように二段掘りで、46・47号貯蔵穴と構造的に類似するものがあるが、14基の土壙をみると、貯蔵穴との間には、床面の深さに大きな相違がみられる。

しかしながら、これらのいくつかは貯蔵穴群の中に施けられ、さらに重複するものもあり、その用途は判定しかねているところであるが、貯蔵穴と同様の機能をはたしていたことも考えられる。

2号土壙が中期の中葉頃に属すほかは、いずれも前期後半に属すものである。

(4) 竪穴

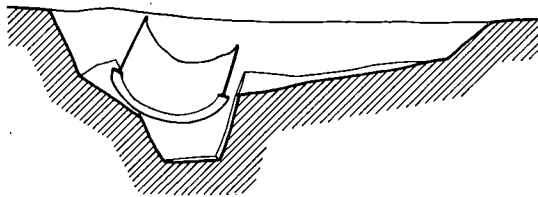
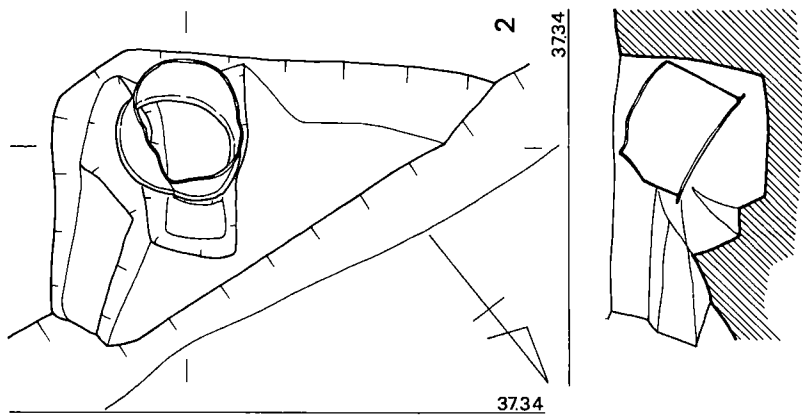
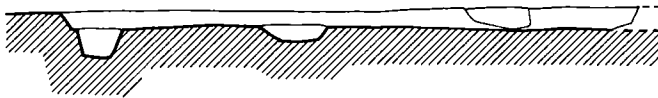
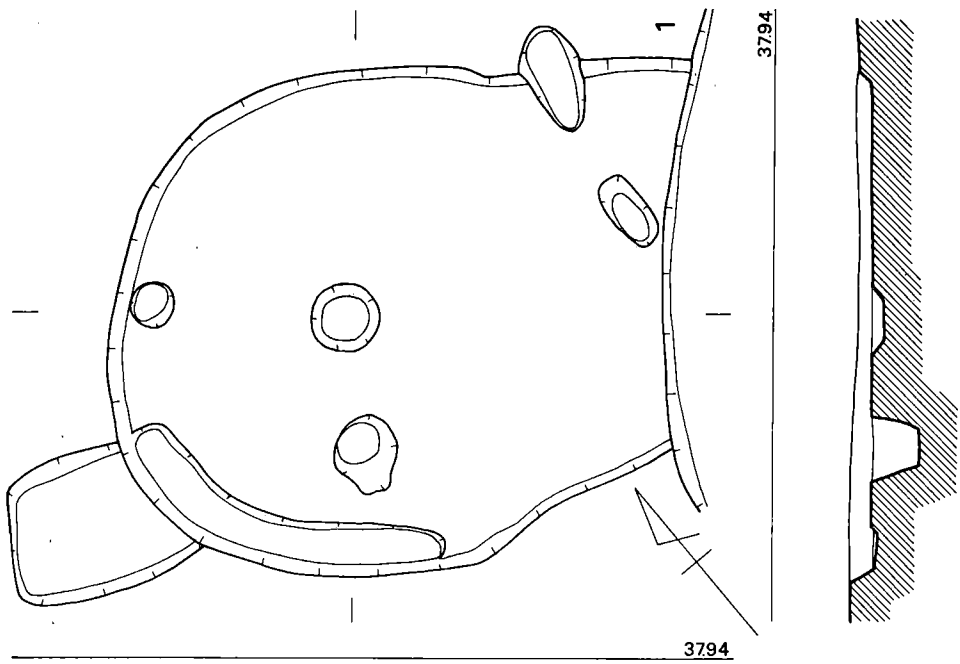
2基の竪穴が検出された。意図不明な遺構である。

1号竪穴(第55図1, 図版41-1) 遺構の東側が1号住居跡により削平されている。浅い遺構で幅2.65m, 長さ2.9m以上の規模のものである。床面に小ピット南側の壁沿いには浅い溝状の施設がある。遺物は打製石匙(4)が出土。土器小片から弥生時代前期に属す。

2号竪穴(第55図2, 図版41-2) 溝と重複して検出された。遺構検出作業の段階では、両遺構の埋土が真黒色土で、ほとんど区別がつかず、この竪穴の埋土も溝の一部と考えていた。溝の法面検出時に当遺構の遺存することが解かった。

竪穴は方形プランを呈するものと考えられ、その一角に大型甕を伏せている。その下には長さ1m, 幅0.5mの長方形プランを呈す壙を掘っている。甕(229)は南側に傾き口縁が壙内に落ち込んでいるが、本来は壙上面に伏せておかれたものであろうか。甕の下胴部は、同一個体と思われる部分(230)が、溝埋土の上層から出土している。残念ながら、土器片の不足からこれらが一つの甕として復原できなかったが、同一個体とするならば、甕の傾きからして、下胴部が溝側にあることから、自然に崩壊したことは解せないことであって、意図的に下胴部を欠き、竪穴内に別途に置いたとする事が考えられ、また、溝の構築によって壊されるというような出土状態ではない。このような状況から、2号竪穴は溝より新しいものと考えられる。

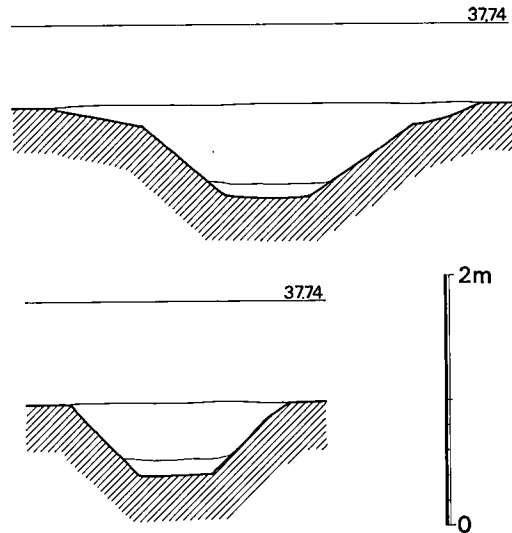
また、当遺構の南東側の近接する位置に小さなピットがあり、ピット内に大型甕片がびっしり詰った状態で発見されている。このような周辺状況をふまえても、当遺構の性格については明確に判断し得ず、大型甕が、同時期の甕棺墓に使用される甕と同じであることから、埋葬遺構かとも考えられるが、熟考の余地が十分ある。遺物は手捏ね土器(24)と土錘(25)がある。



第 55 图 竖 穴 实 测 图 (1/40)

(5) 溝 (付図2, 第56図, 図版41-3)

調査区の西半部において検出された。西端は削平により、東側は調査区外に延びる為、全体的にどのように展開するものか不明である。溝は約53mの長さを発掘した。幅は東側が広がっている。幅は最も広いところで約4.5m、最小部で約2mである。深さは0.6~0.8mであって、西側に低くなっている。溝の中ほどの南側に重複して不整な掘り込みが検出されたが、これは枝状に分れる小溝の一部と考えられ、調査区外に延びているものと思われる。



第56図 溝断面図 (1/60)

溝は、ほぼ東西に台地の縁に沿って構築されている。その北側には住居跡や貯蔵穴群が遺存するが、その南側の遺構の有無や内容が不明であり、溝の性格を判断するには、やや論拠の薄いところであるが、調査区西半部の溝南側において遺構の全くない点から、この溝が、台地の縁に所在する住居跡、貯蔵穴群を防禦あるいは区域を示す為のものであろうと推察される。

溝内は、薄い砂層が下に堆積し、あるていどの水の流れはあったと考えられる。これを下層とし、その上層に厚く真黒色土が堆積していたが、細かく分層できるものではなく、遺物はこの上下2層に分けて取り上げた。下層に弥生時代前期の土器(233~268)が、上層からは弥生時代中期の土器(269~367)の土器が出土している。その他石製品や土製品がある。

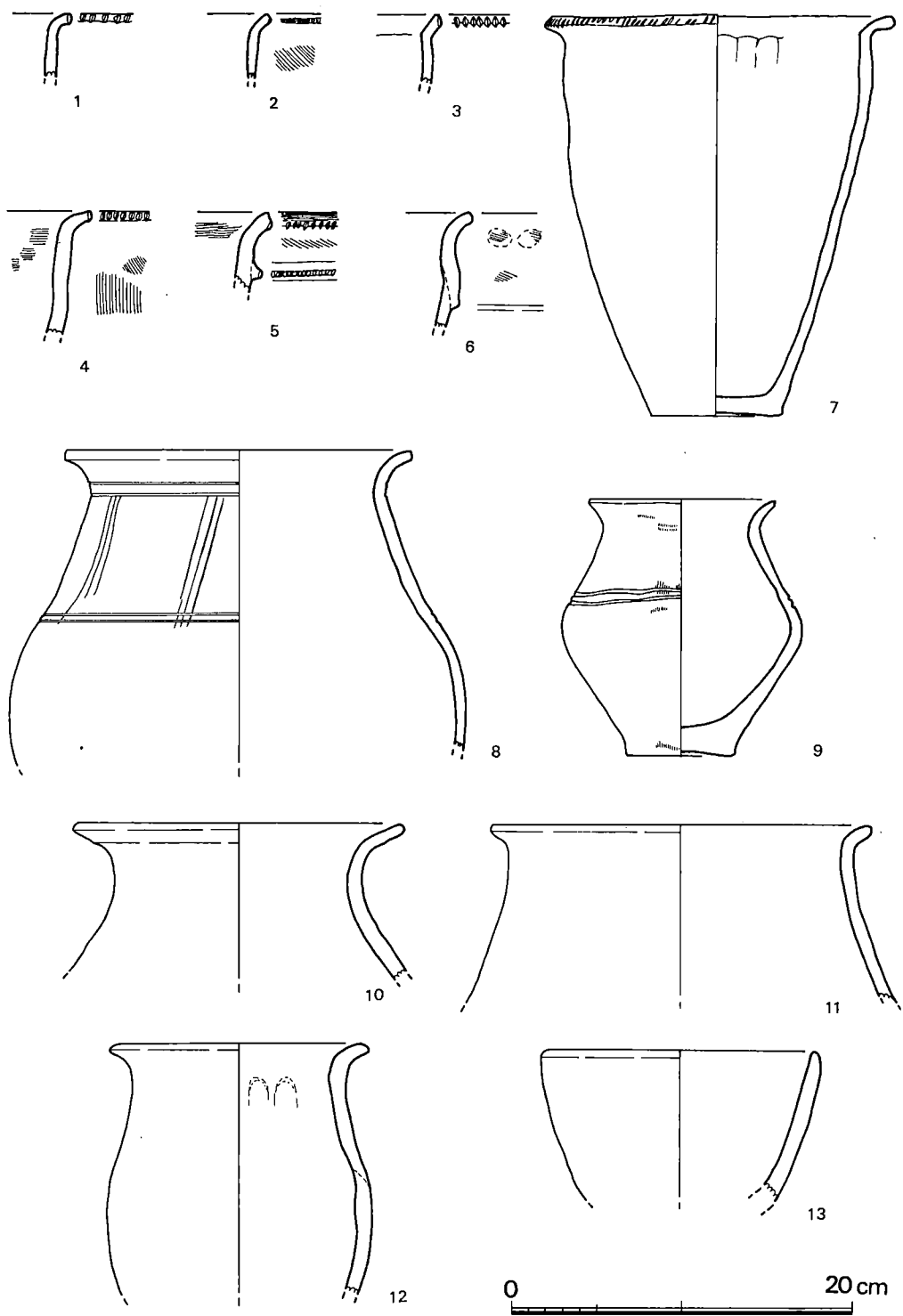
3. 遺物

(1) 住居跡出土土器 (第57~60図)

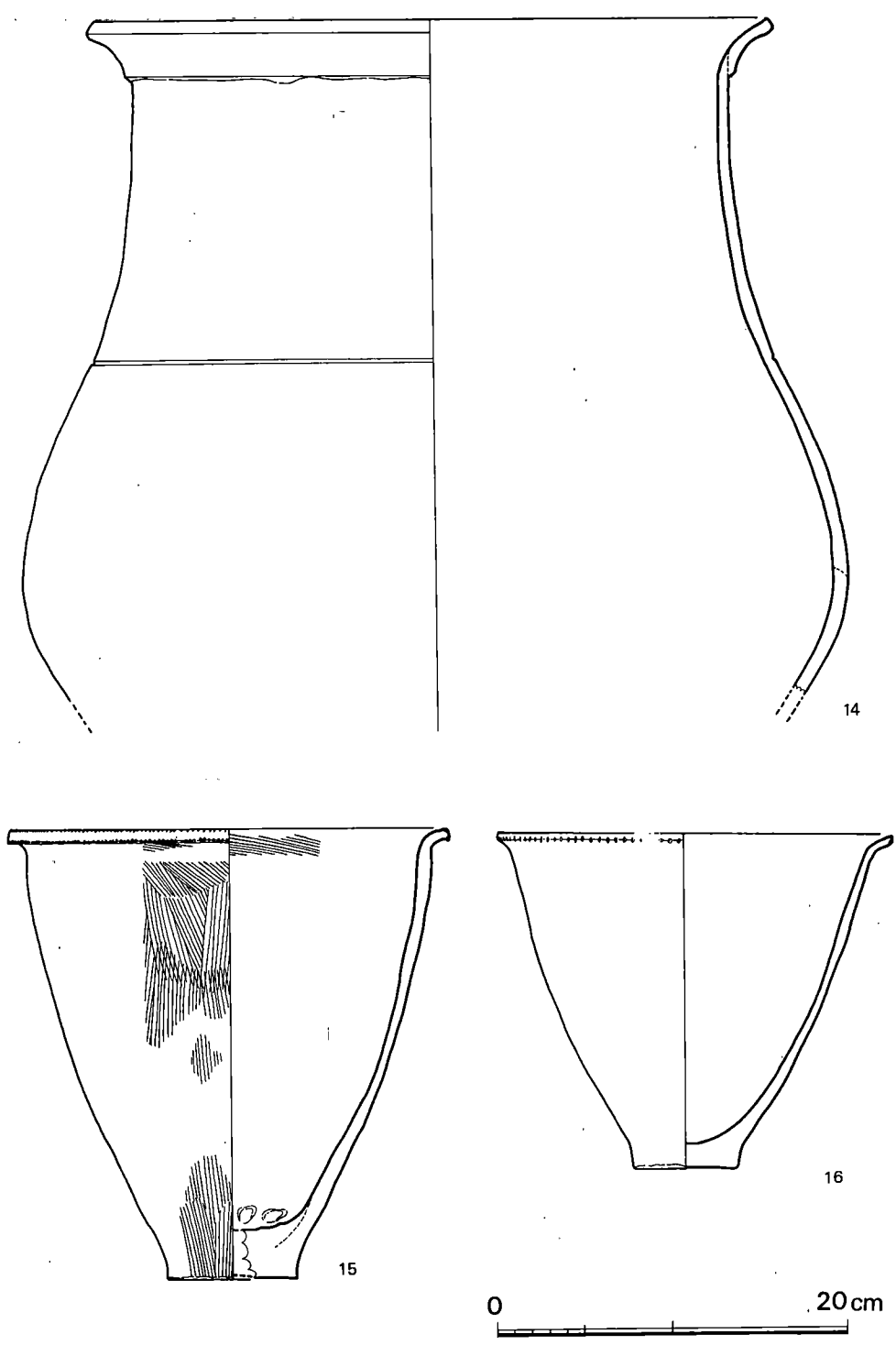
住居跡は4軒が発掘され、大型の2号住居跡から多量の土器の発見があったが、他住居跡の土器は小片で量的に少ない。したがって、2号住居跡出土土器を中心に検討をなすことになる。

壺は、如意形口縁をなすものである。11は外反する口縁は短かく、古相を呈するものである。14は口縁下の粘土接合部が肥厚し、段となって残る。整形はヘラミガキになるもので、9のように刷毛目をヘラミガキによって消しているものもある。底部は38のように明瞭で、一見円板貼付け状をなす古式の相を示すものがある。

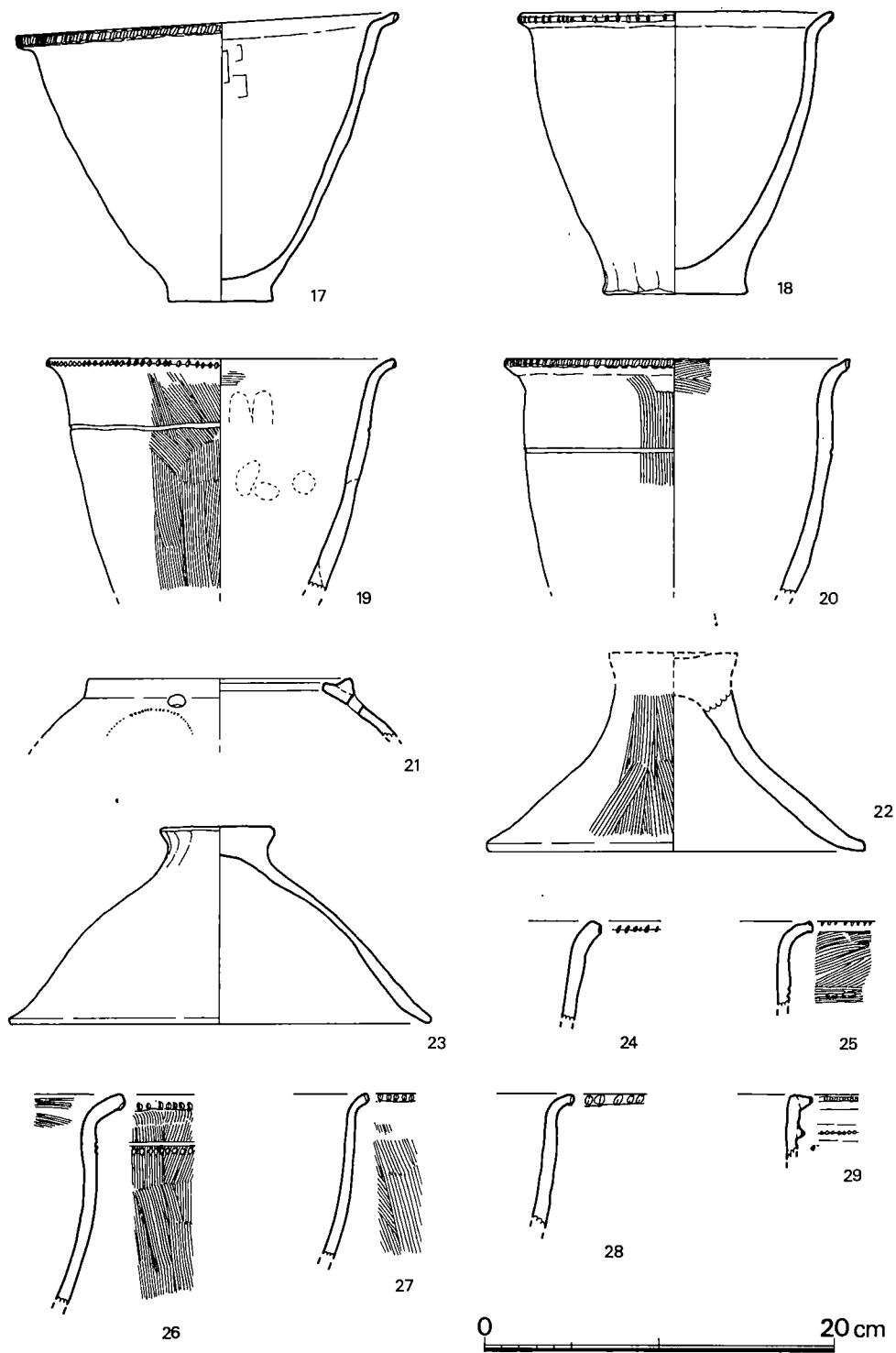
甕は如意形口縁をなすものが多い。中でも3のように口縁下内面に稜をなす特徴あるものが



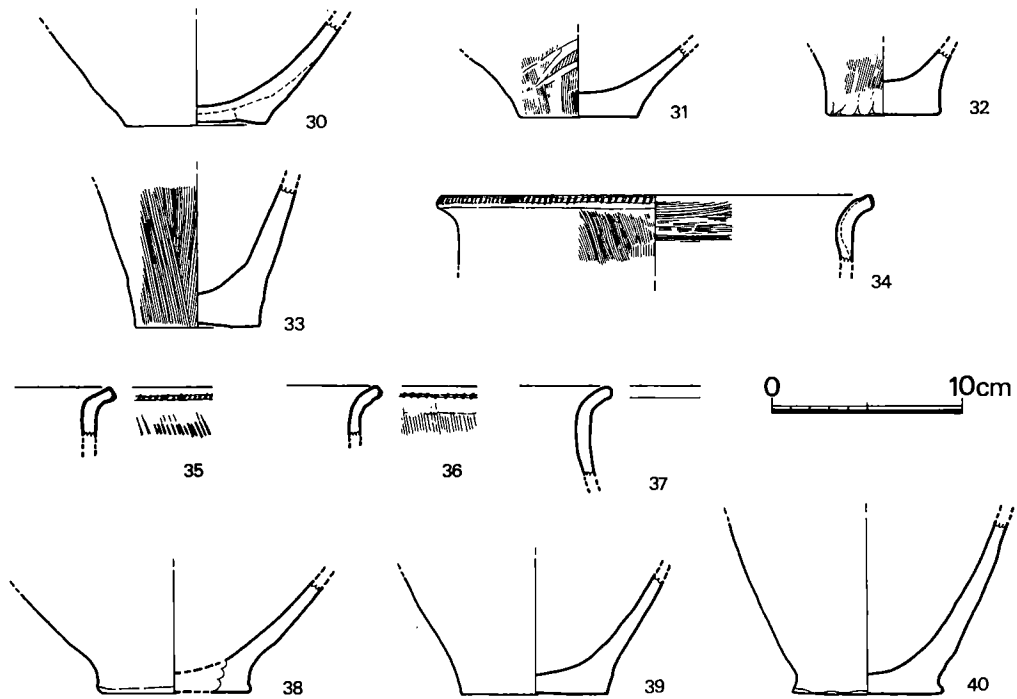
第 57 图 第 1·2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 58 图 第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 59 图 第 2 号住居跡出土土器実測図 (1/4)



第 60 図 第 3・4 号住居跡出土土器実測図 (1/4)

あり、24のように軽く外反し、直口縁に近い形状のものもある。このほか擬口縁に粘土帯を貼付け口縁部をつくるものがある(29)。いずれも口唇部と突帯に刻目を施すが、篋によるものと刷毛目工具の端部使用のもの(19・26)がある。体部の整形は、大半が刷毛目を施すが、ナデによるもの(24・28)と板状工具による擦過の観察されるものがある。後者は、16・17・18の甕で、口径の大きさに比べ胴部のやや短いタイプにみられる整形である。この板状工具の擦過痕は、あるいは刷毛目工具の一端を器面に軽くあて、削ったという状態であって、一つの整形法として追求すべき点である。

文様的には口唇部の刻目のほかに、胴部に沈線をめぐらし、沈線下に刺突文を施すものもある(25・26)。

無頸壺(21)は他に例がなく、溝出土の中期のものがある。擬口縁に断面三角形の突帯を貼付けて口縁部をつくり、口縁下に孔を穿つ。整形は内外面とも横ヘラミガキで、中期のものとは、形状や整形に相違を見る。又、貝殻腹縁による弧文を施すが、貝殻利用の文様を施すのはこの土器だけである。

蓋は厚手のもの(22)と薄手のもの(23)のがある。前者は刷毛目整形によるもので、後者は内外面ともヘラミガキ整形で、形状と共に製法に相違がみられる。使用方法あるいは対象が異なることが起因しているのであろうか。

以上、住居跡出土の土器について概観したが、所謂板付Ⅱ式に属すもので、中でも古式に位置するものであろう。

(2) 貯蔵穴出土土器 (第61~73図)

前期の土器

器種的には、壺・甕・蓋が出土しており、甕が圧倒的に多い。

壺は如意形口縁なす。完形品が少なく、その全容は把握しがたい。いずれも内外面をヘラミガキ整形を施し、口縁下あるいは肩部に沈線をめぐらすものもあり、54の小型壺は、計6条の沈線を各部にめぐらし飾りたてている。又、文様的には、肩部に弧文や斜格子文等を篋により描くが、斜格子文(147・155)は稀な例であって、土壌から同一個体と思われる様なものが2点(214・216)出土している。底部はその立上りが明瞭であるが、56のように中期的な様相をみせるものもある。

無頸壺は2点の出土している(75・202)。やや異なる形状を見せるが、いずれもヘラミガキ整形をなし、202は篋描きの弧文を施す。

甕は、口縁部が如意形を呈すもの、粘土帯を貼付け口縁部をつくるものがある。又、前者には口唇部の薄くなるものや厚くなるものがある。後者は、貼付け粘土帯の断面が、三角形のものと円形状のものに分けられるが、円形状のものは1点のみ(159)である。43・44・177などは古式の様相を呈すものである。如意形口縁を示すもので、口縁下の粘土接合部が肥厚するものや口縁下内面に稜を有すものもある。

口唇部あるいは突帯に刻目を施すのが通例であって、そうでないものも若干ある。刻目は篋によるものであるが、中には刷毛目工具によるものと考えられるものがあり(83・85)。刻目自体には、細小なものや細長いものと太いものなど種々ある。

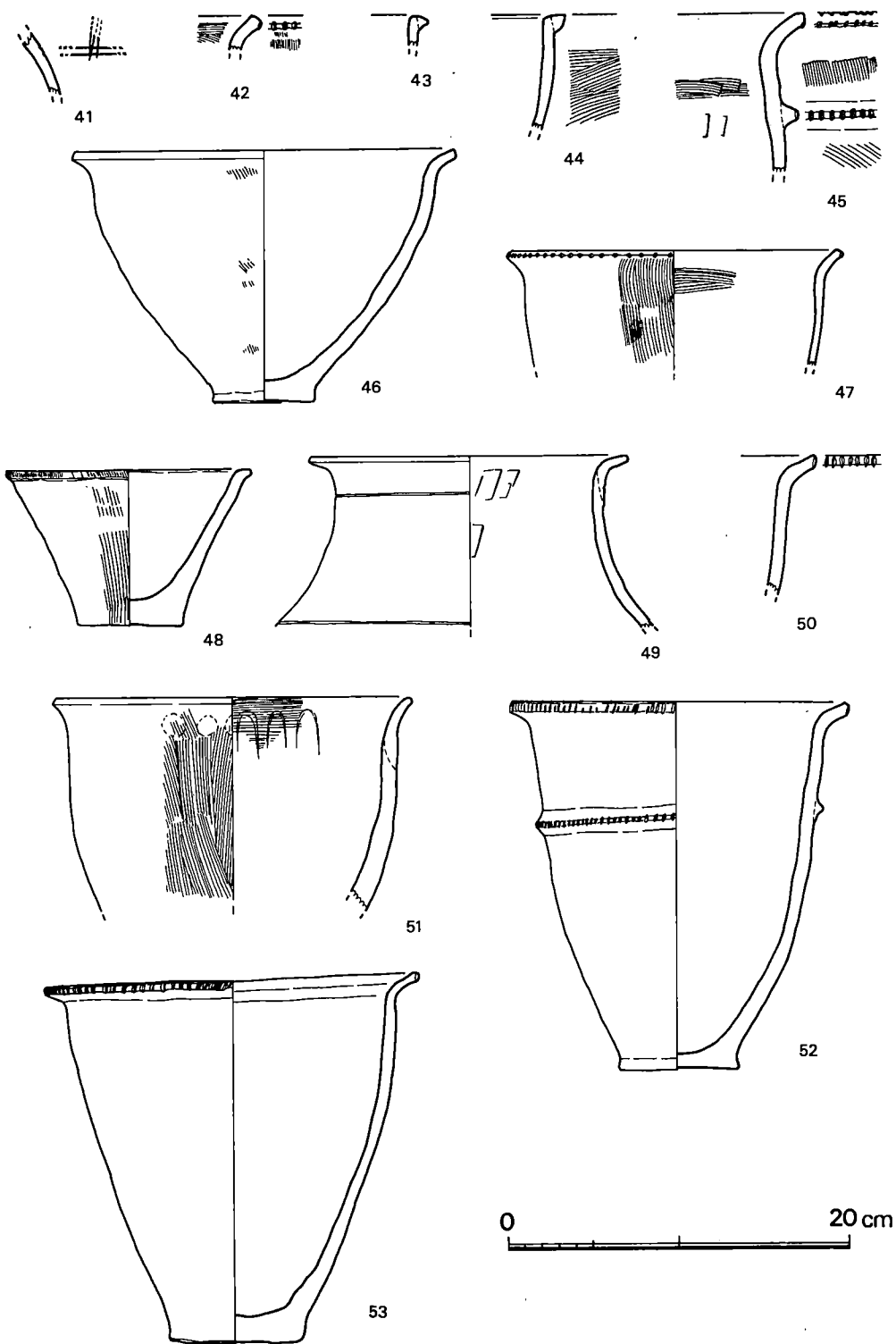
体部の整形は刷毛目によるものが多いが、板状工具による擦過痕が見られるもの(52・110・140・141・157・169~171)や丁寧なナデによるものもある(53・111・176)。また、口縁下内面に刷毛目を施すものがあり、胴部内面に刷毛目を施すものは極めて少ない(110・111)。

68の甕はやや特異な形状を呈すものである。

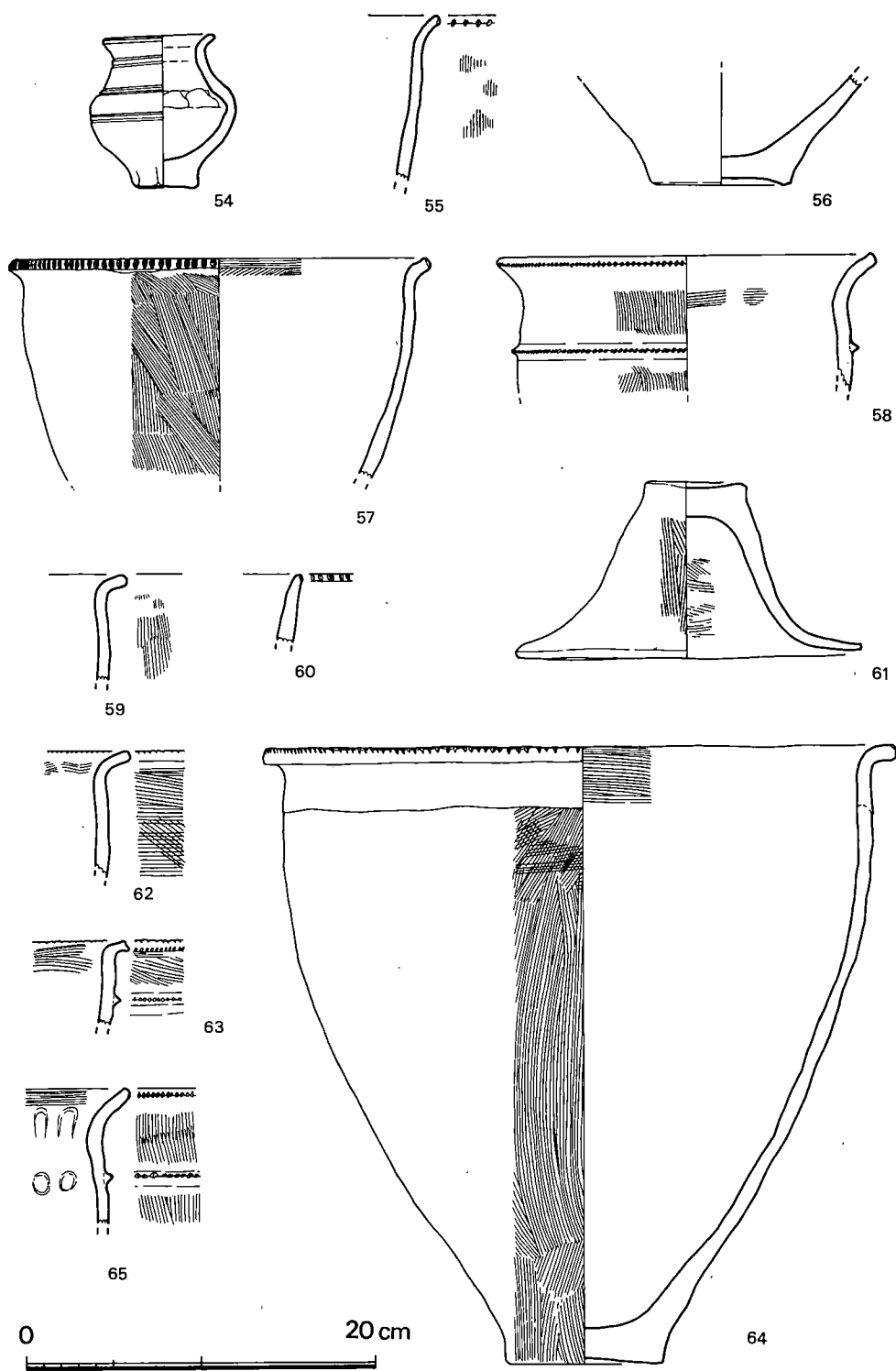
鉢は46・48・177がある。48は蓋形土器の可能性が強い土器である。46・177は如意形口縁をなし、いずれもヘラミガキ整形である。前者は刷毛目を消している。48は体部が直線的で、整形も刷毛目で明らかに前二者とは異なる。又は46と共伴し、形態的に異なり蓋としてあつかうのが妥当であろう。

蓋は48・61・98・150の4例がある。48・61は天井部が大きく平坦である。150の天井部はやや高くなり撮み状をなす。98は小片であるが、内外面ともヘラミガキ整形を施すもので、他とはやや形状の異なるものであろう。

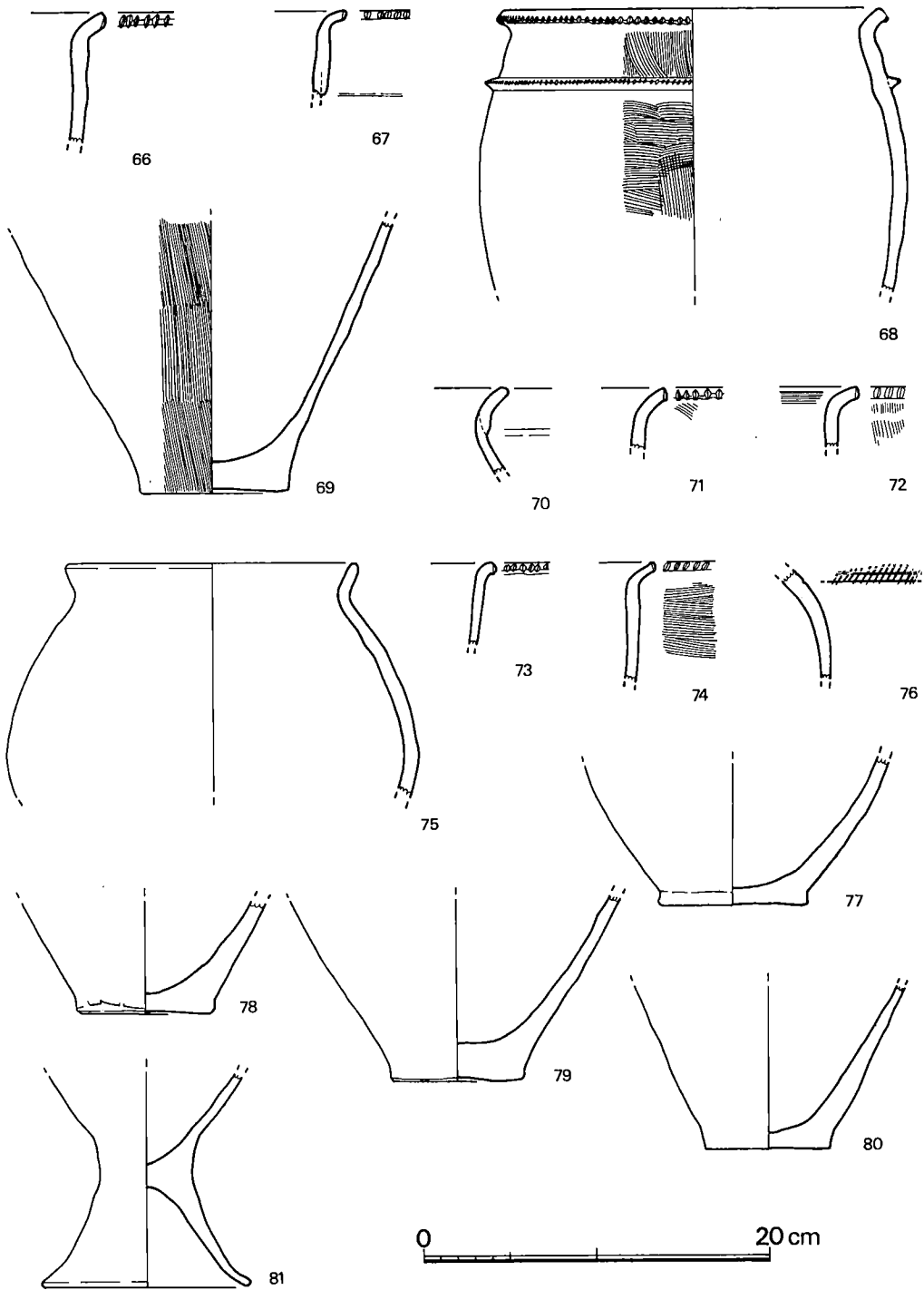
中期の土器



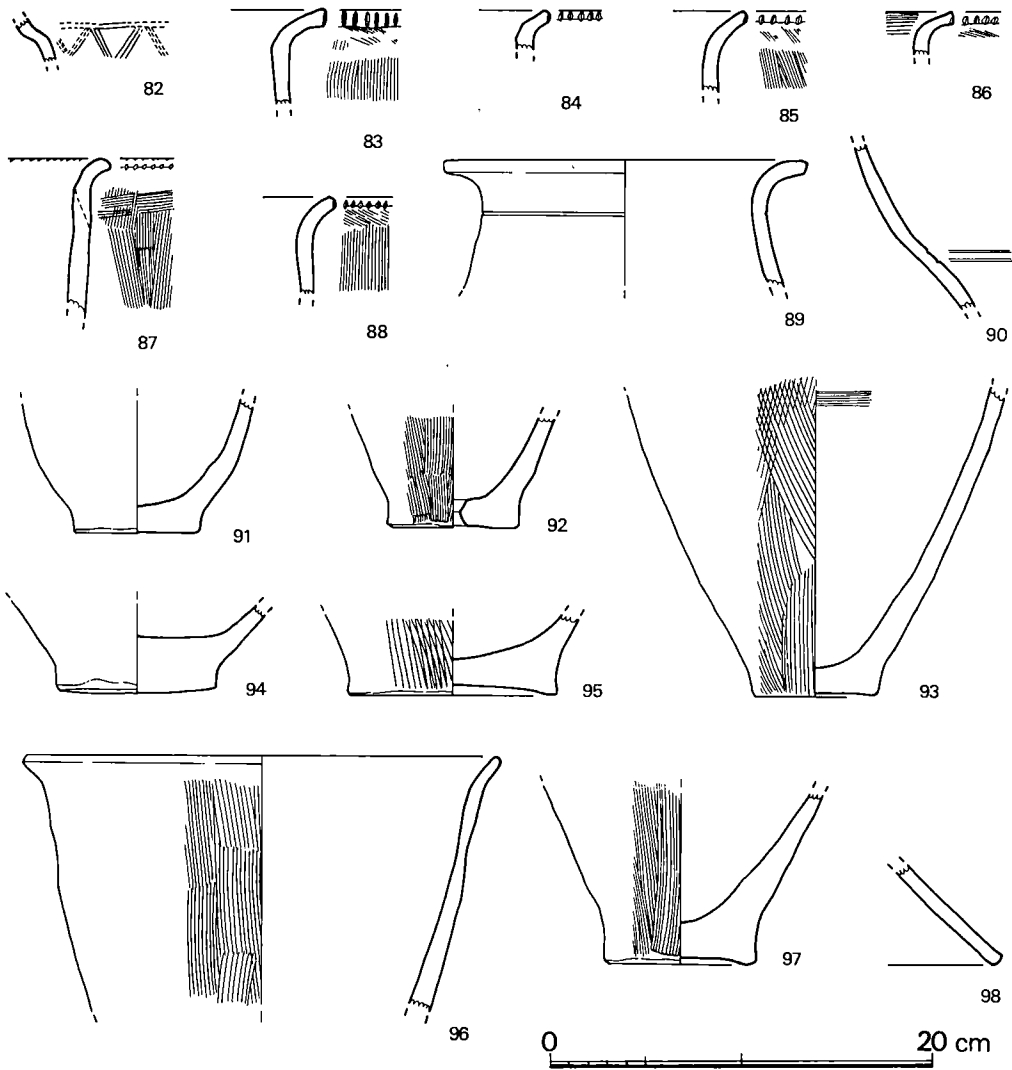
第 61 图 第1·2·4·9号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



第 62 图 第10·12号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



第 63 图 第16·17·19号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



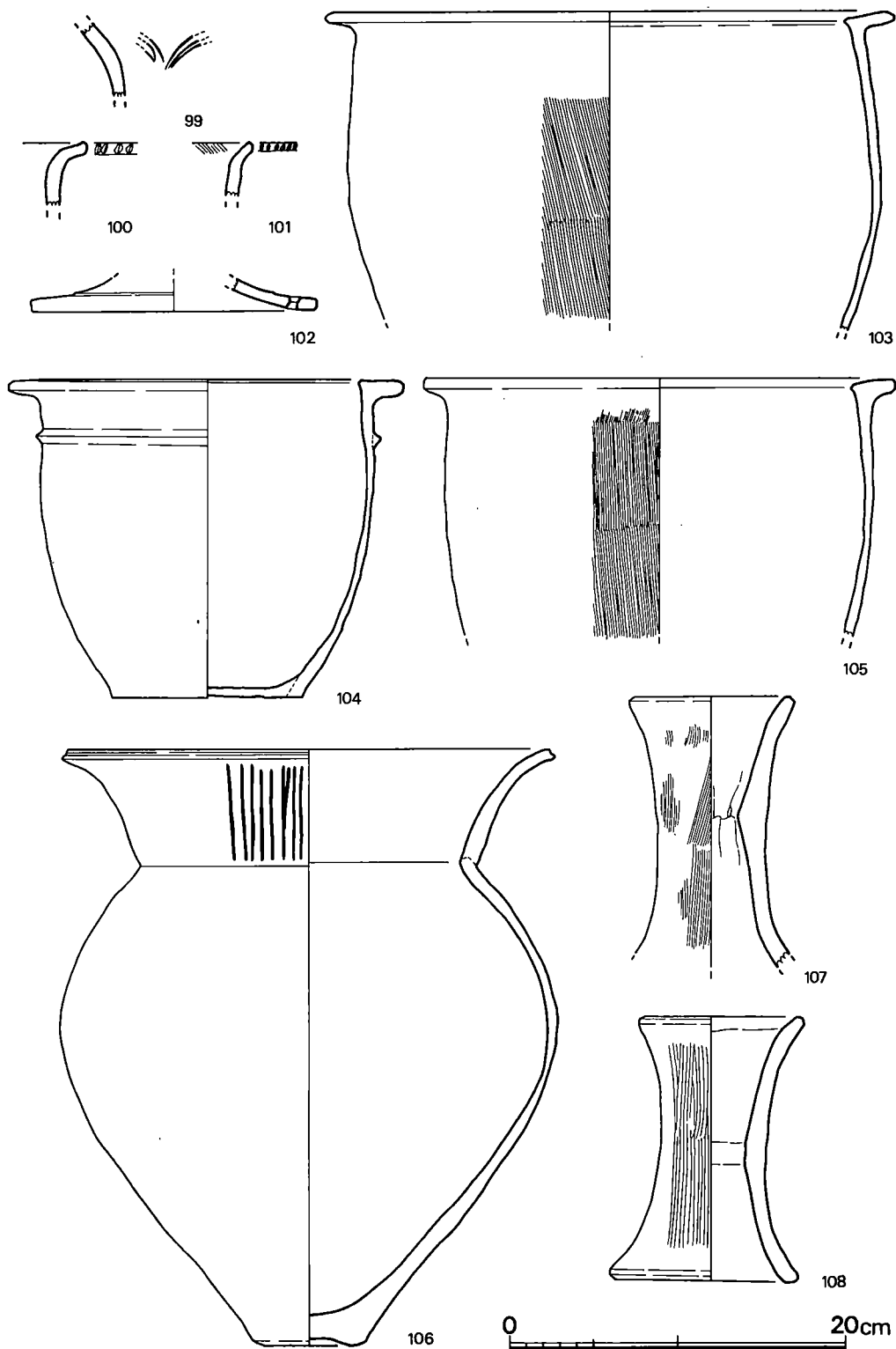
第 64 図 第20～25号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

器種は壺・甕・鉢・蓋・器台があり、甕が非常に多い。27・30・46号貯蔵穴から出土。

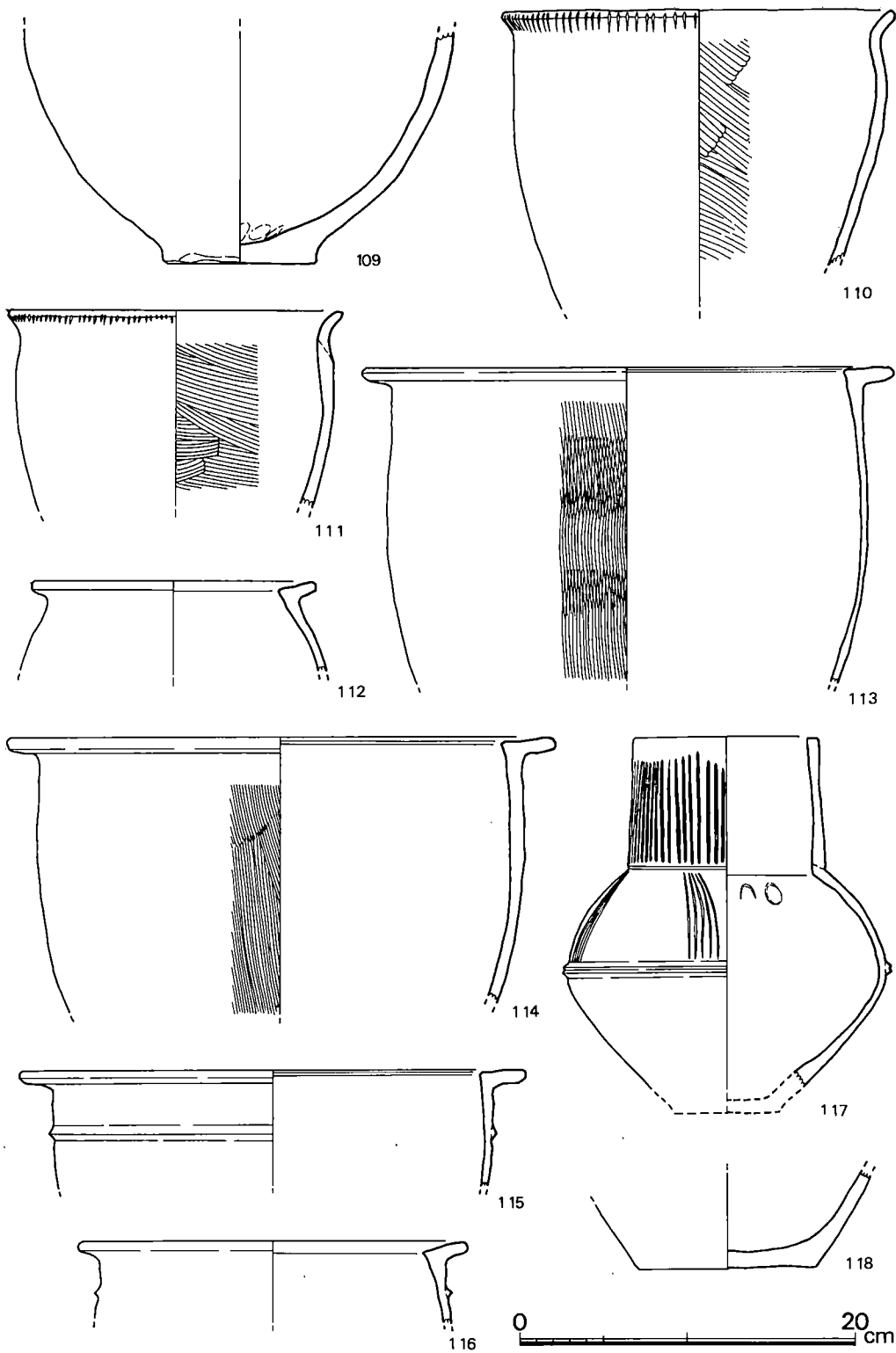
壺は106・117・189の3点ある。大きさや形状に差異があるものの、器面の調整はミガキとナデを施し、丁寧な仕上げである。106・117は頸部に篋描きの暗文を施している。溝出土の土器と比較して、両者とも同時期の所産になるものであろう。117は肩部に篋描きの細い条線を施し、これも溝出土の壺形土器に共通するところである。

189は鋤形口縁をなし、溝出土の土器に多くみられる土器である。

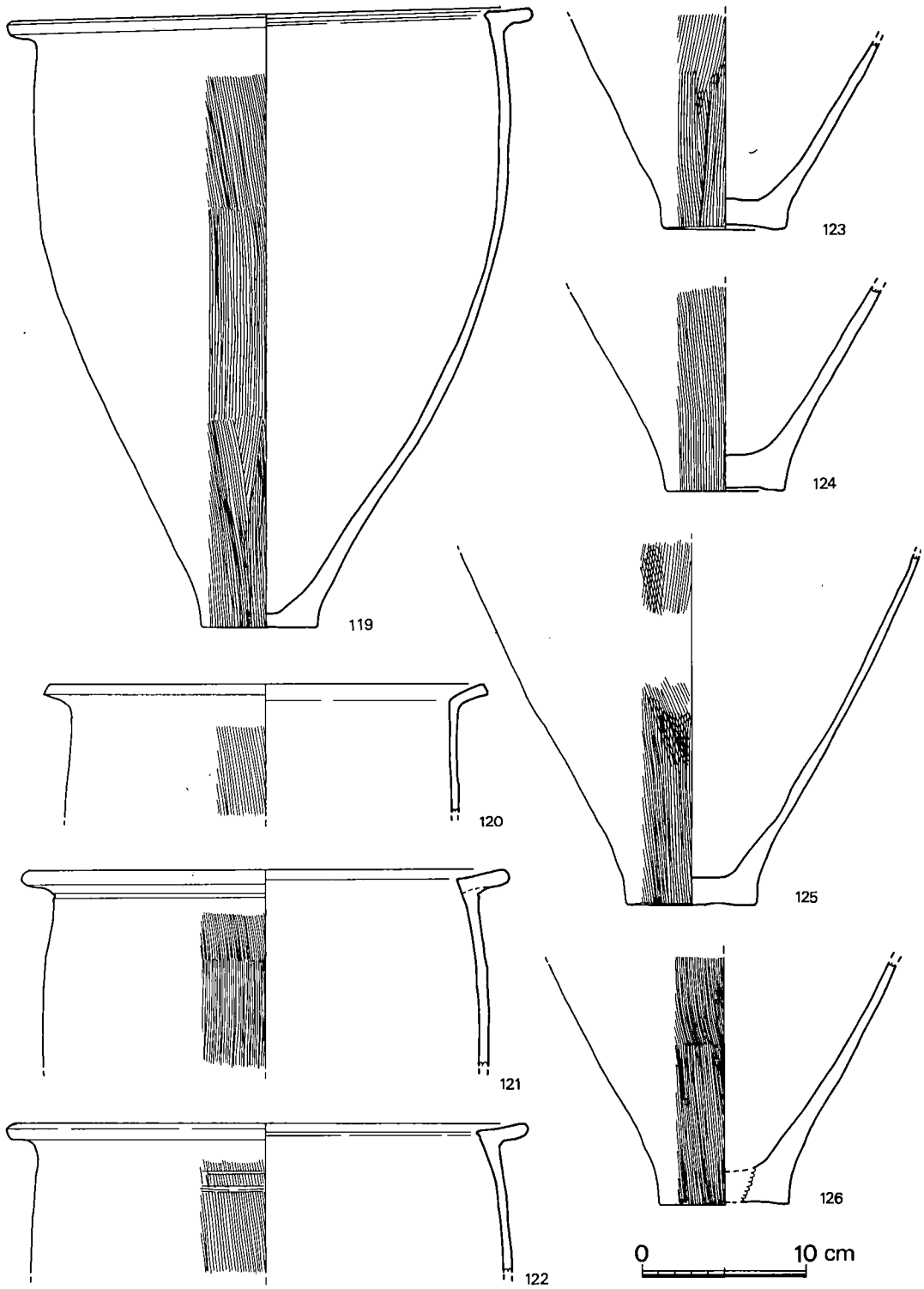
無頸壺(112)は、内傾する平坦口縁をなすもので、内側に明瞭な稜がつく。溝出土のもののように口縁部に孔はない。



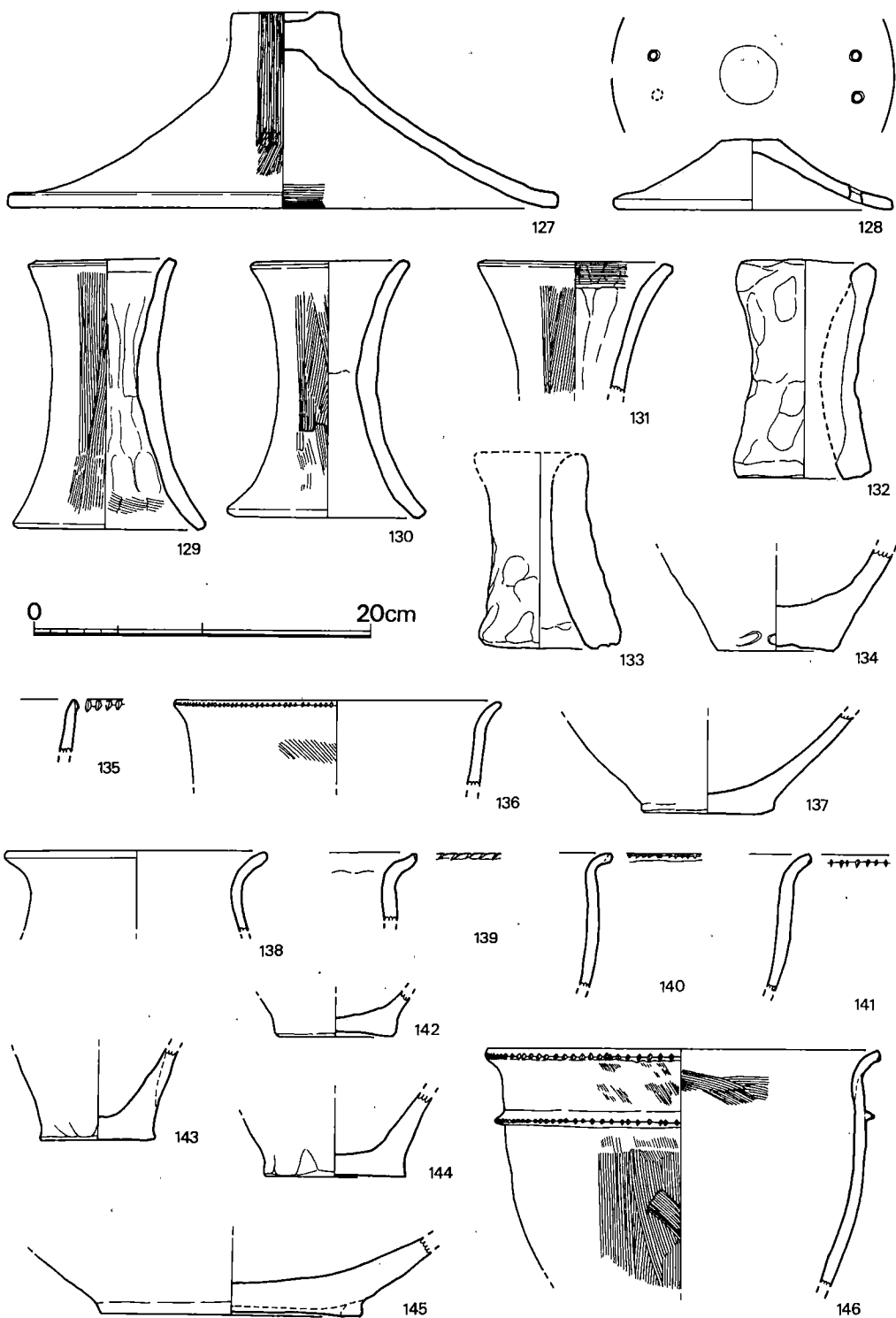
第 65 图 第27·28号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



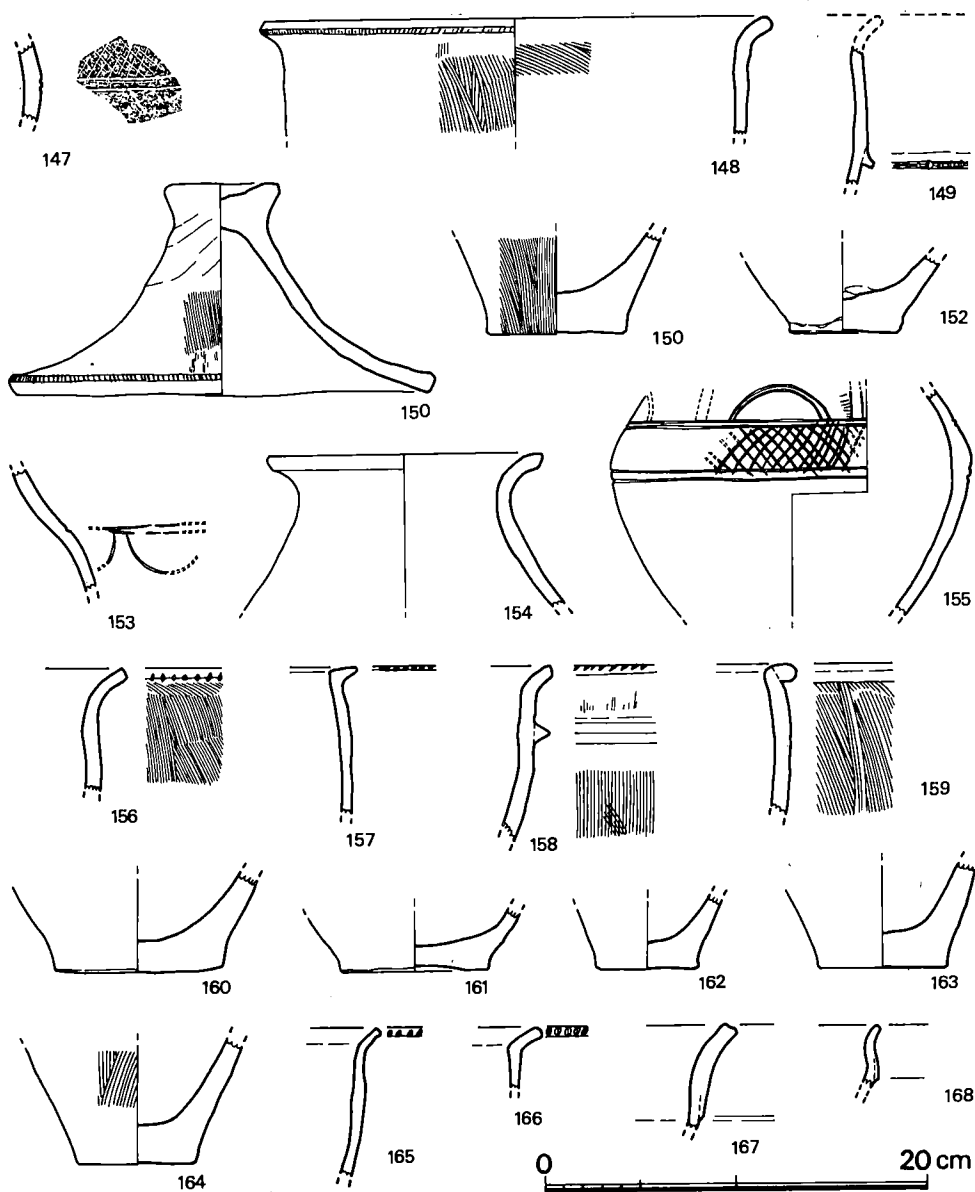
第 66 图 第29·30号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)



第 67 图 第30号貯藏穴出土土器实测图 (1/4)



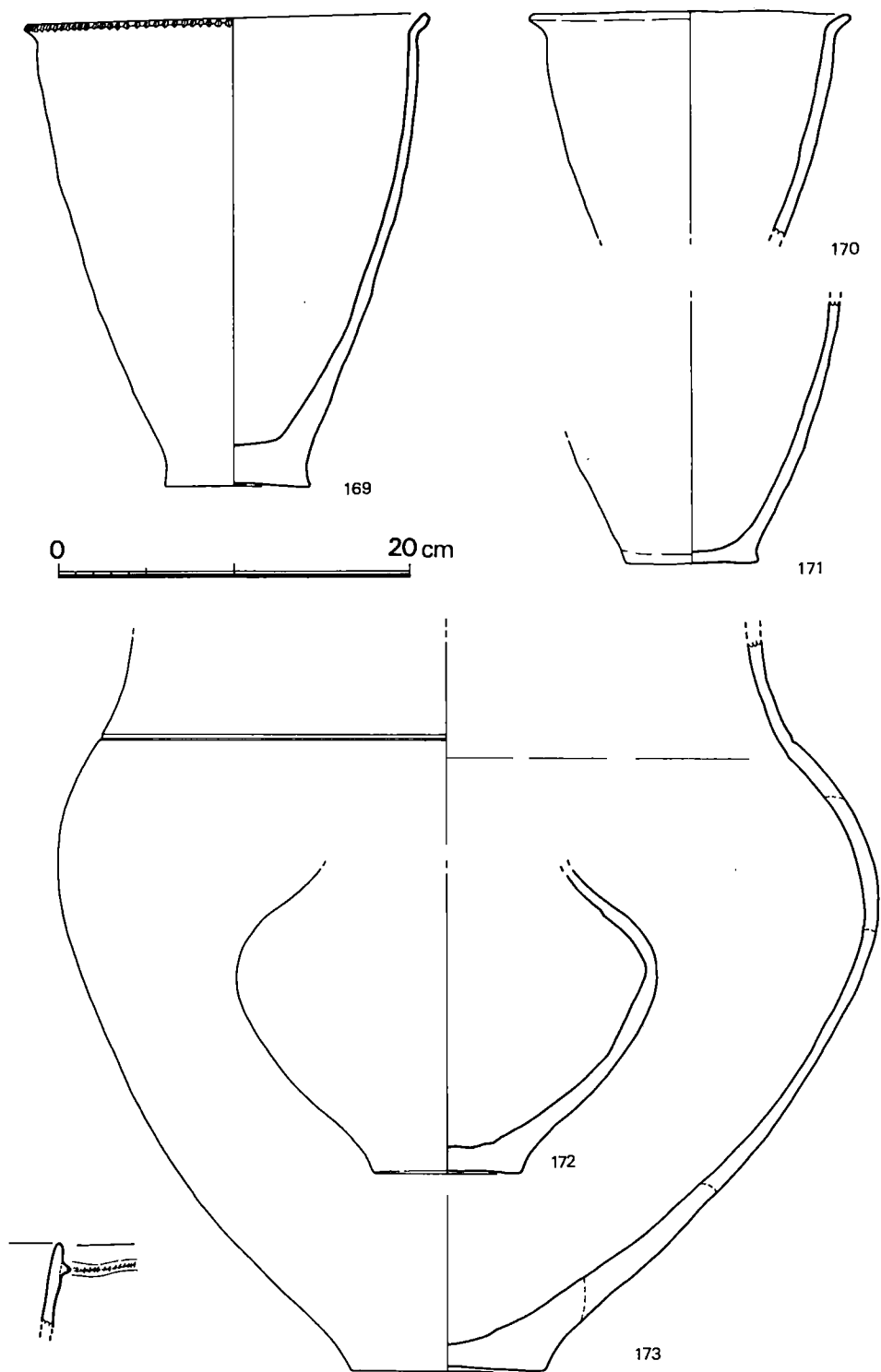
第 68 图 第30~32·34号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



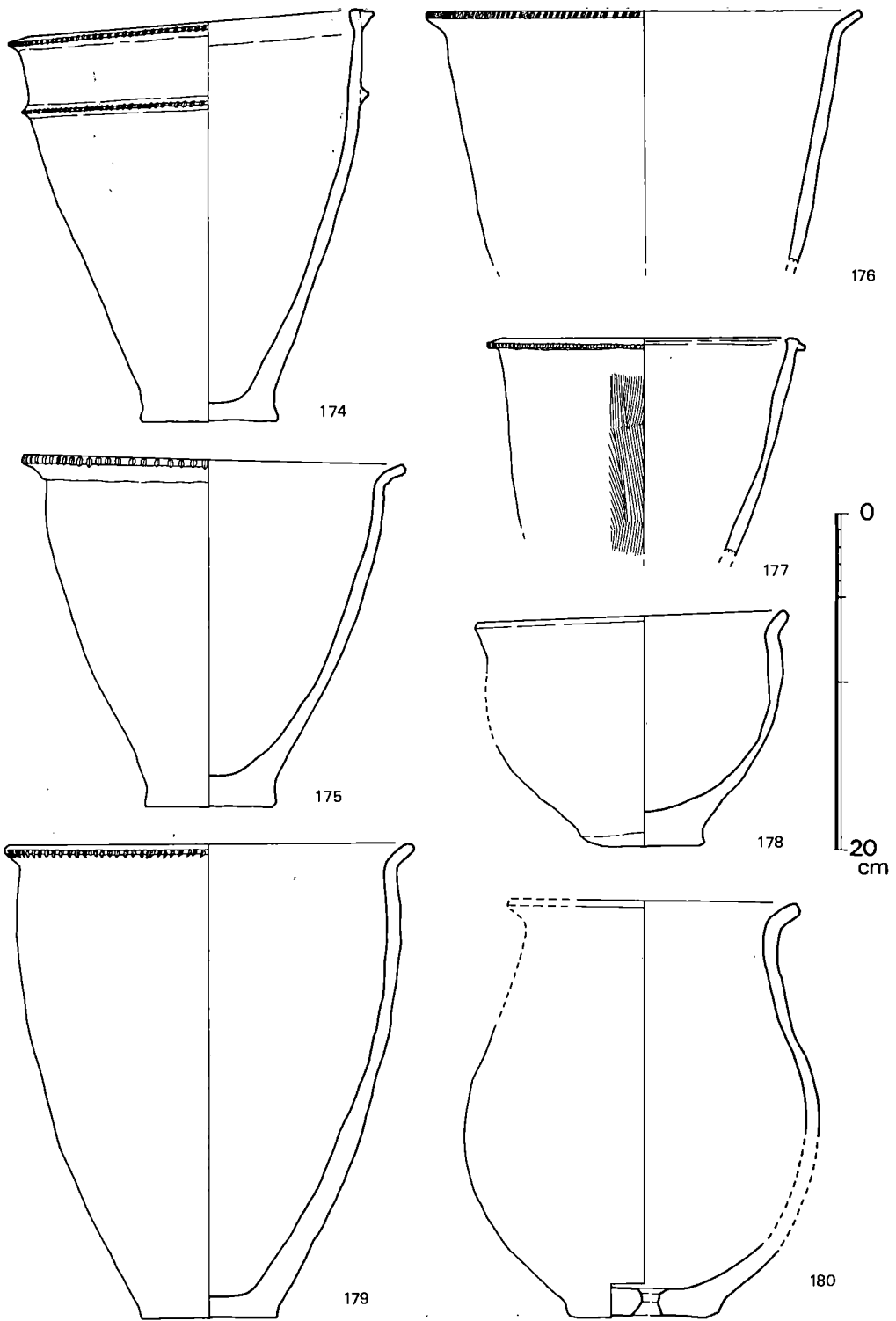
第 69 図 第35・36・38~40号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

甕は逆L字状口縁をなすものが主体である。口縁平坦面が内傾するものとそうでないものがあり、前者には口縁下に突帯をめぐらすものがある。120 の口縁は如意形口縁に近似するもので、口縁下内面に稜を有し、他とはやや異なるものであり、逆L字口縁より古いタイプのものであろう。全体に胴の張りはなく細身の形状をなし、底部は薄く平底である。胴部外面は刷毛目整形をなすのが通常である。

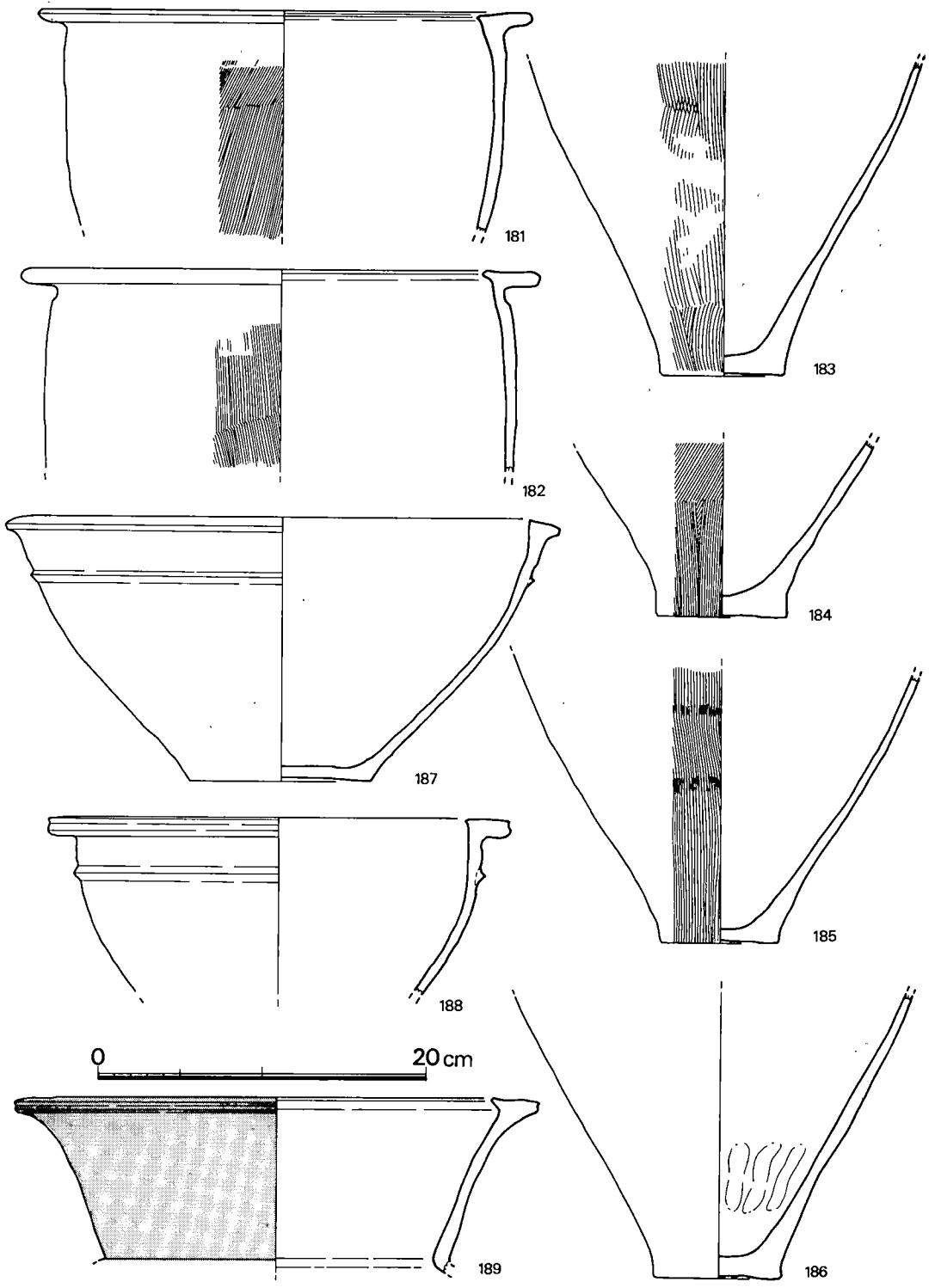
104 は甕の中でも短胴のもので、118 はこの種の甕の底部であらう。前者は板状工具の擦過



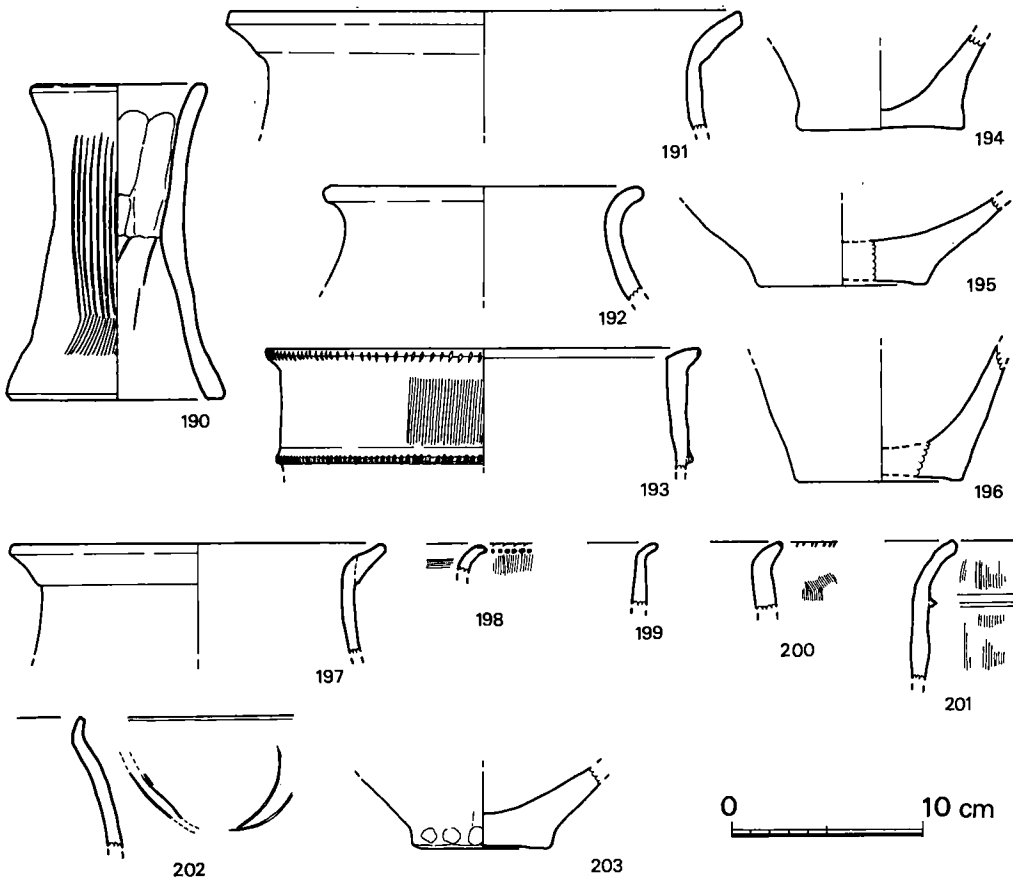
第 70 图 第43·44号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



第 71 图 第44·45号貯藏穴出土土器実測图 (1/4)



第 72 图 第46号貯藏穴出土土器实测图 (1/4)



第 73 図 第46～48号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

痕が整形痕としてみられ、後者はヘラミガキ整形で、いわゆる甕とは異なる整形を施している。

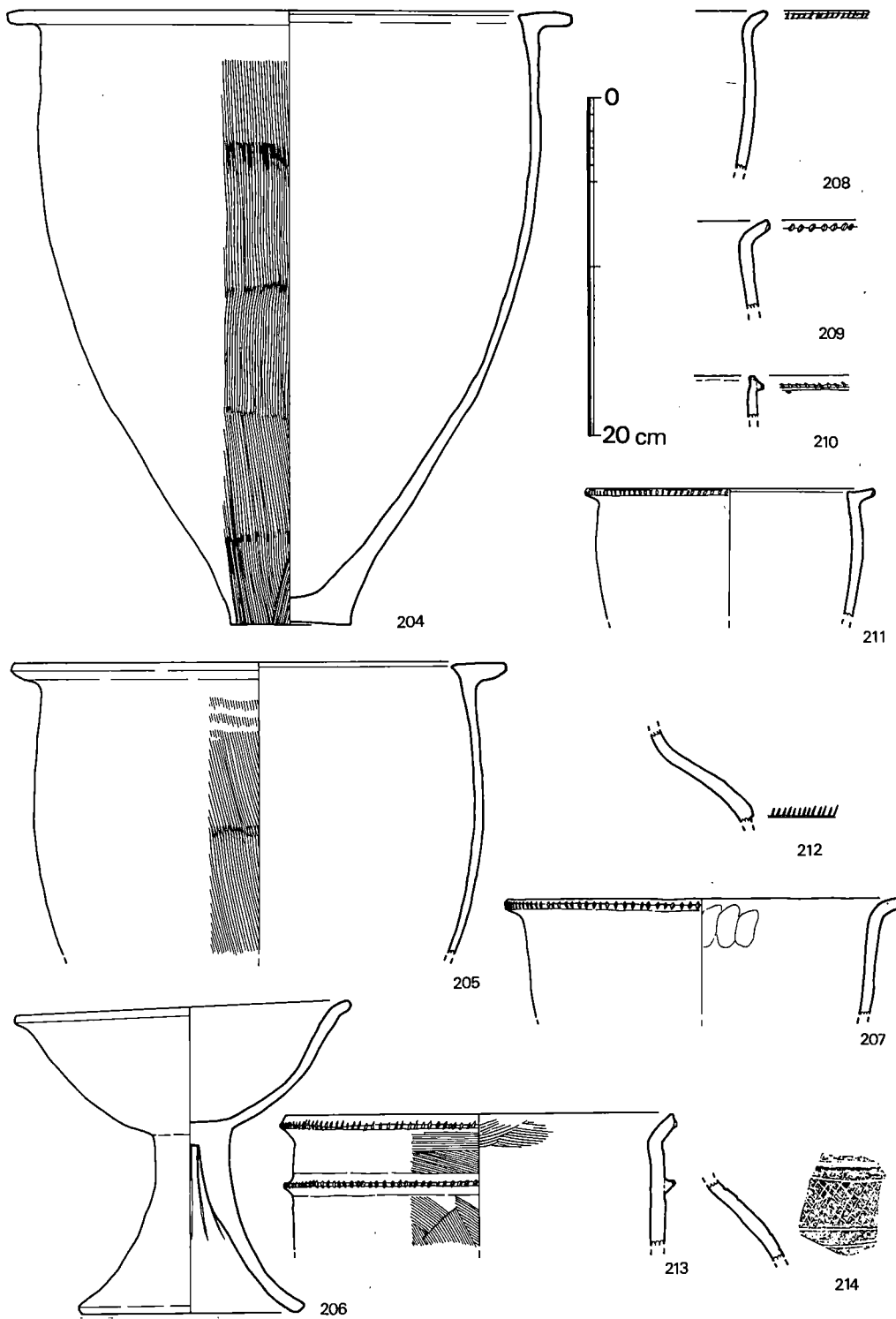
鉢は187・188の2例がある。口縁部に相違をみるが、両者とも口縁下に突帯をめぐらし、体部の整形はナデによるものである。

蓋は小型のもの(102・128)と大型のもの(127)がある。前者は孔を穿つもので、102はヘラミガキ整形である。無頸壺の蓋になるものであろう。127は天井部の形状が前期のものとはやや異なる。

器台は、薄手と厚手の2種がある。薄手のものは、外面に刷毛目を施し作りが丁寧である。厚手のものは、粗いヘラケズリ後にナデ整形を施す。全体に作りは雑である。同時期のものがある。

以上、貯蔵穴出土の土器を前期・中期に分けて概観した。詳しくは観察表に記すところであるが、前期の土器の中には古い様相を残すものもあり、いわゆる板付Ⅱ式の中でも古い時期のものであろう。

中期の土器については、前半期に位置し中葉に近い時期のものである。



第 74 图 第 2 ~ 5 号土城出土土器实测图 (1/4)

(3) 土壙出土の土器 (第74~76図)

土壙から出土の土器は量的に少ないが、前期・中期に分けることができる。

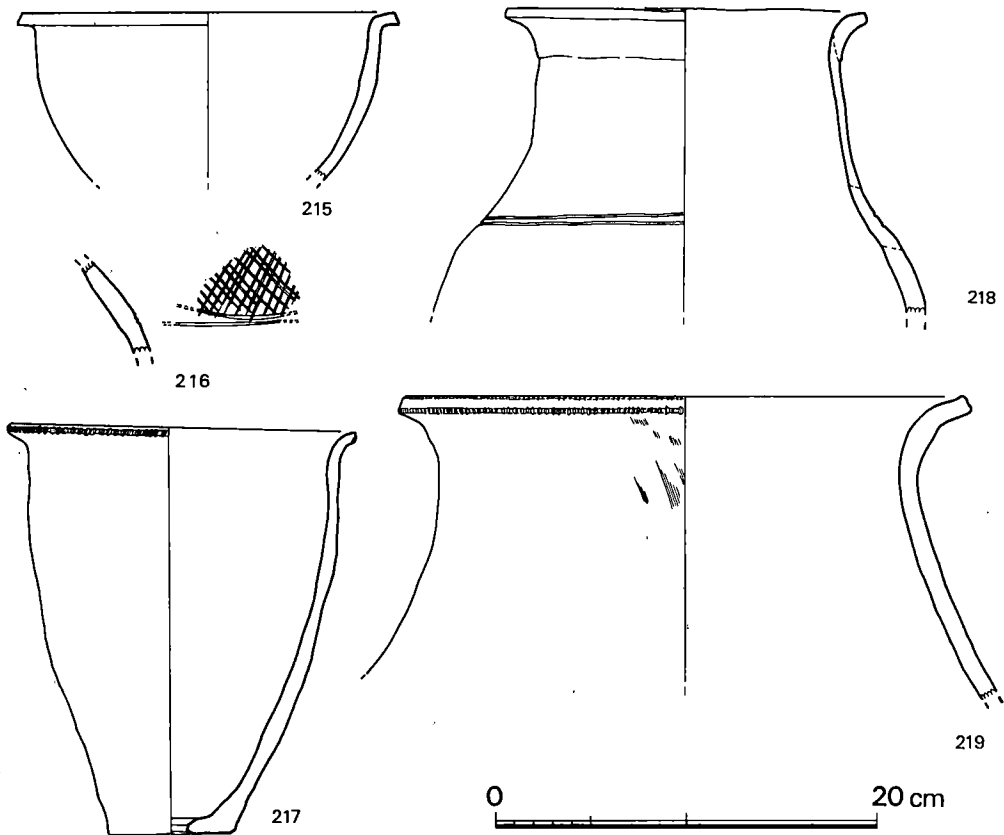
前期の土器

壺は如意形口縁をなす。223は口縁部が肥厚し、218は口縁下に粘土接合部が肥厚し段となつて残る。219は口唇部に細い刻目を施すものである。いずれもヘラミガキ整形である。214・215は肩部に篋描きの斜格子文を施す。底部(227・228)は、中央部がやや上げ底気味である。

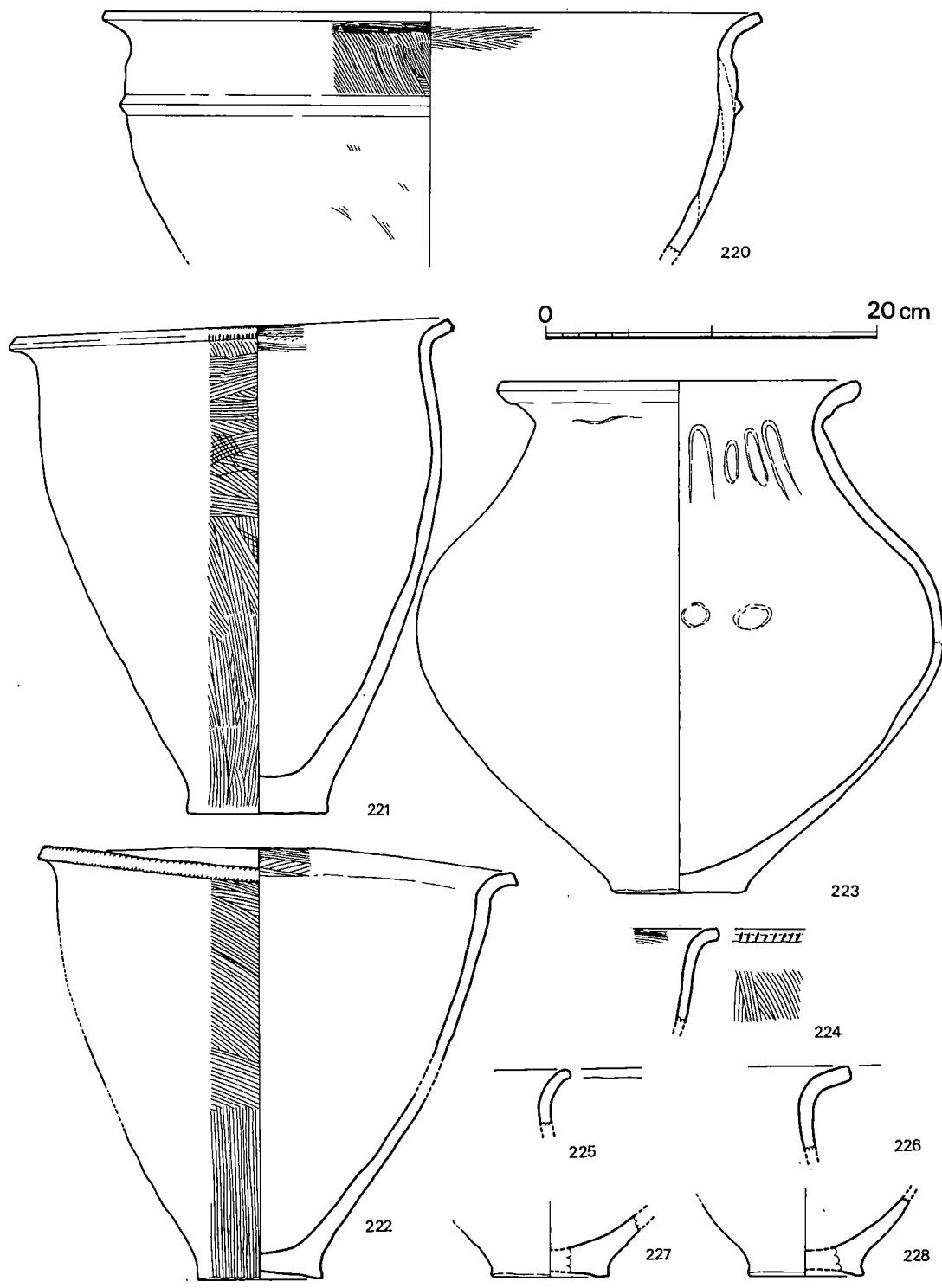
甕は、如意形口縁をなすもの(207~209・213・217・221・222・224)、平坦口縁をなすもの(211)と粘土帯を貼付けたもの(210)に分けることができる。いずれも口唇部に刻目を施す。210は古式の様相を呈すものである。

胴部の整形は、外面に刷毛目か、板状工具による軽いケズリをなすものがあり、221・222は内面を板状工具による軽いケズリ整形でその痕跡がみられる。

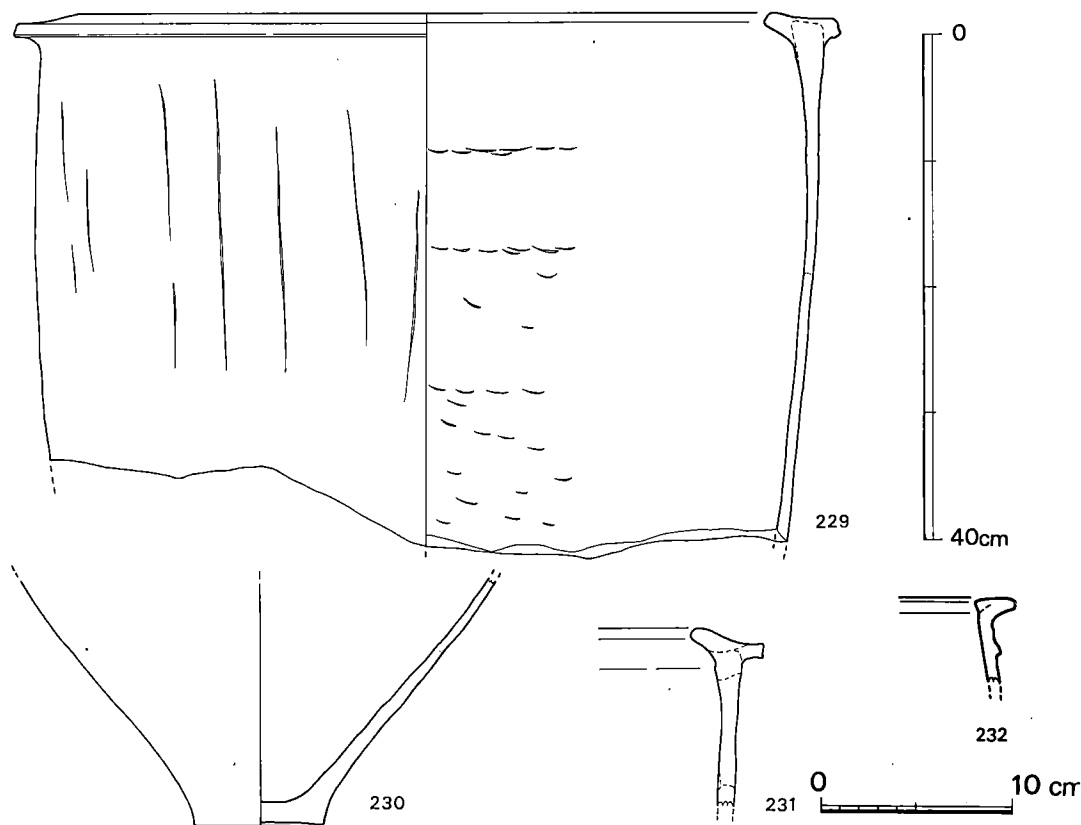
鉢は215・220がある。220は如意形口縁をなし、体部の器壁に比して薄くなっている。胴上部に断面三角形の突帯をめぐらす。



第75図 第6・9号土壙出土土器実測図 (1/4)



第 76 图 第11·12号土城出土土器实测图 (1/4)



第 77 図 第 2 号堅穴，溝出土土器実測図（1/6・1/4）

中期の土器

甕は平坦口縁をなし，205 の口縁部は厚く短い。内側にやや突出する。いずれも胴部には細い刷毛目を施すもので，全体に細身の胴部となっている。

高坏（206）は，坏部口縁が軽く外反するもので，平坦口縁をなすものではなく，全体に深みのある坏部で，脚は短いものである。器面の調整はヘラミガキによるものである。

以上，前・中期の土器は，貯蔵穴や溝出土の土器群と時期的な差はない。前期の土器は，板付Ⅱ式に属し，中期のものはその前半に置かれるものであろう。中期の高坏（206）は，小郡市花聳遺跡出土例に類似するもので，中期前半の甕形土器を伴っていた。

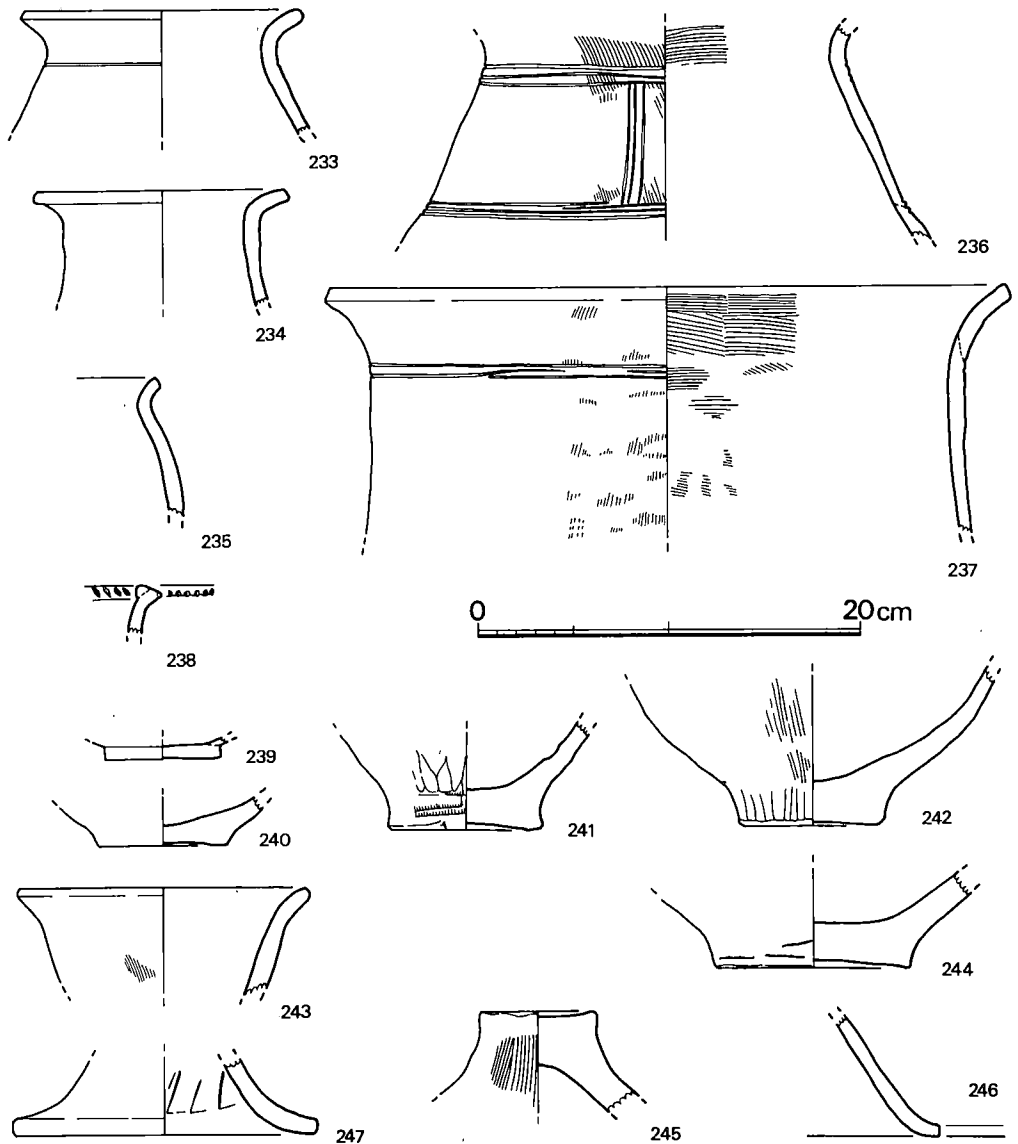
（4）溝出土土器

台地先端を区切る如く掘削される大溝は，更に連続する遺跡全体の調査に及ばないために，その性格は今ひとつ明確にならない。溝最下層には，厚さ10cm程度の酸化鉄で固まりかけた砂層がみられ，その中には弥生前期の遺物が包含されていた。これらは，全て小片で，周辺の同時期遺構（住居跡・貯蔵穴・土壇）の遺物片が溝掘削当初の流水により砂層に混入したものと

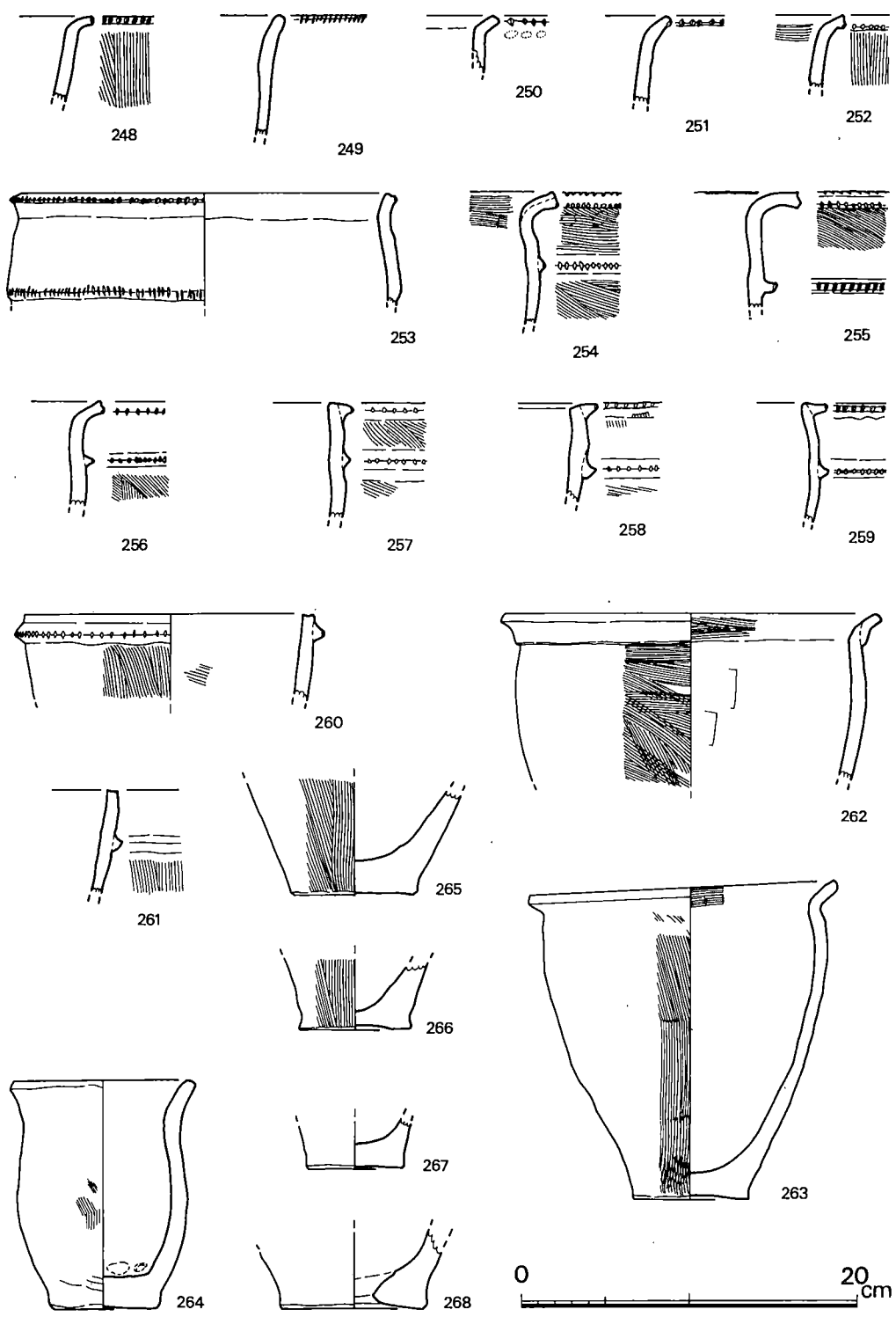
考えられる。上・中層は溝埋没中途に大量に投棄せられた中期前半土器が多量にみられる。これらことから、溝掘削の時期は、弥生中期前半の中でもより古式の段階であったと考えられる。

溝下層出土土器（第78・79図）

甕は、如意形口縁のもの（248～256）、亀の甲タイプのもの（257～259）などがある。刻目を口唇部全面に施す板付Ⅰ式に近いもの（248）もあり、胴上位外面に段をつくり、刻目を施すもの（253）等もある。口縁下やや下がって三角凸帯を付けるもの（260・261）は、東九州の下



第 78 図 溝下層出土土器実測図 1 (1/4)



第 79 图 溝下層出土土器実測图 2 (1/4)

城式の影響が考えられる。口縁外面下端を肥厚させ段をつくる、壺様の技法をみせる類(262)もみられる。

壺は、円盤貼付の精製小壺(239)等の古いもの、甕棺にも使用され得る大型のもの(236・237)などがある。235は内外面ヘラ磨きを行ない壺的調整をみせる。238は内側へ肥厚させた口縁の内外両端に刻目を施す特殊なもので前期末に近い。

蓋は、貯蔵穴出土品等と同類で、脚部と思われるもの(247)もあるが全形は明確でない。

以上の溝下層出土土器の他に石鏃等の石器類もみられるが、これらは後で記す。既述した如く、溝下層の遺物は混入品であり、前期の板付Ⅰ式に近いものから、板付Ⅱ式を中心とした後半期のものまで幅がみられる。

溝上層出土土器(第80～89図)

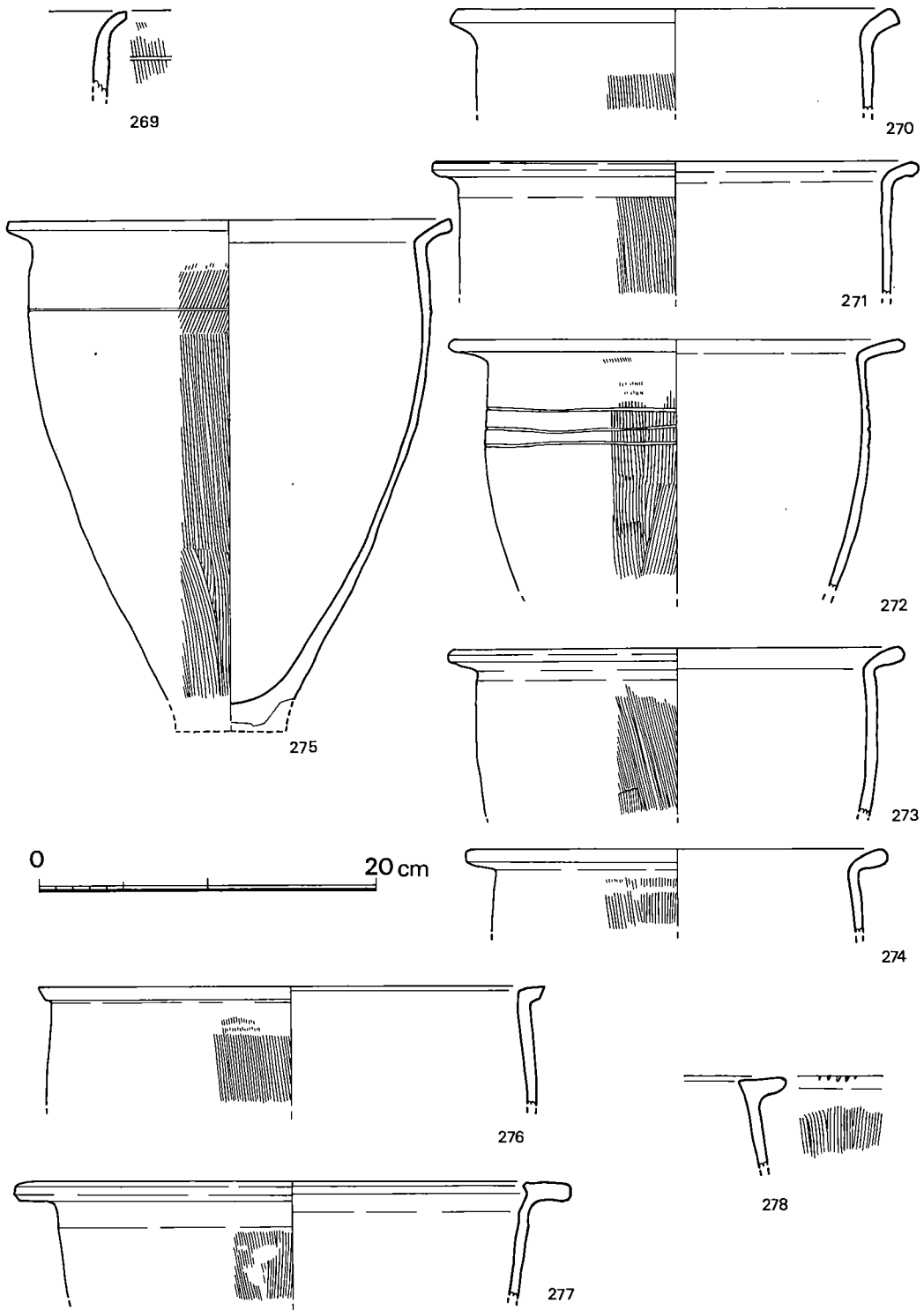
甕は、大きく3類に分けられる。如意形口縁の系統を残す中期前半の初頭に近いもの(270～275)、逆L字口縁で内端の突出が少なく上面幅もより狭く中期前葉の様相をみせるもの(276～292)、口縁内端の突出がやや強くなり、胴が張ってきて、凸帯を付けるものが多く、口唇状凸帯を付けるものも現われる中期中葉により近くなるもの(293～297)等である。後者2つの類は厳密に分け難いものも多い。

269は如意形口縁の中期初頭のもの、272・275は沈線を残すものである。276は口縁端をヘラ切りした特殊なもので、形態的には二丈町曲り田遺跡で夜臼式と共伴するものの系譜を引くものである。逆L字口縁のものでも、278のように部分的に刻目を施すもの、沈線を巡らすもの(279)のようにより古い様相を残す類もみられる。また、304のような胴の張るものもある。底部は充実して大きく上げ底となるものは無いが、306・307のような前期的な上げ底状のものもみられる。

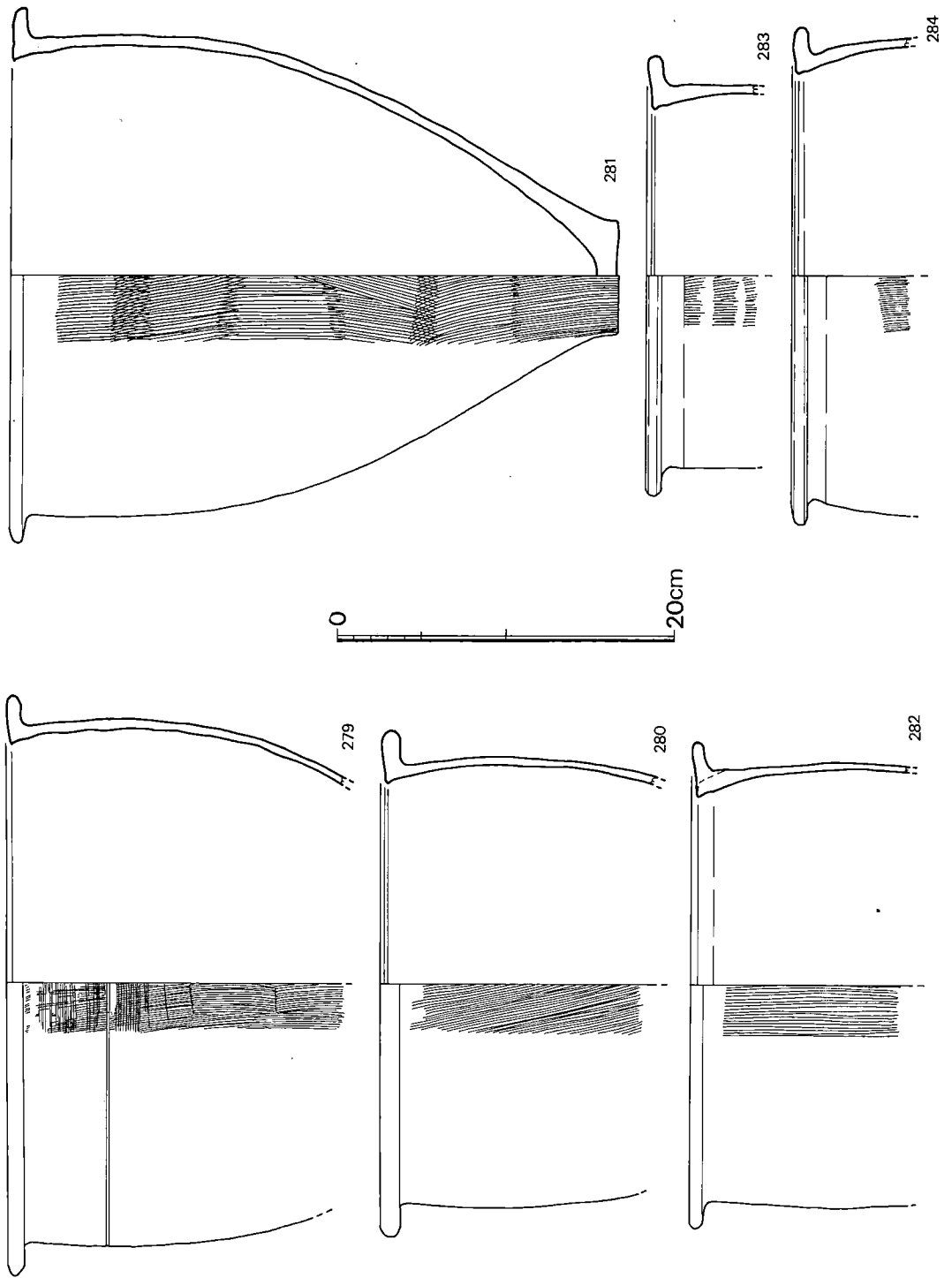
広い底の樽形をなす甕(298～300)は、内外面ヘラ磨きするものが多く用途も異なると考える。調整からみて301～303もこの類であろう。口縁形態から、298→299→301→302・303の変化が考えられる。

大型の甕口縁(309～311)は逆L字口縁のものと同様の張るものがみられ、中期前葉のもので、2号竪穴の例などからも、近隣に甕棺墓地の存在が推定されるところである。

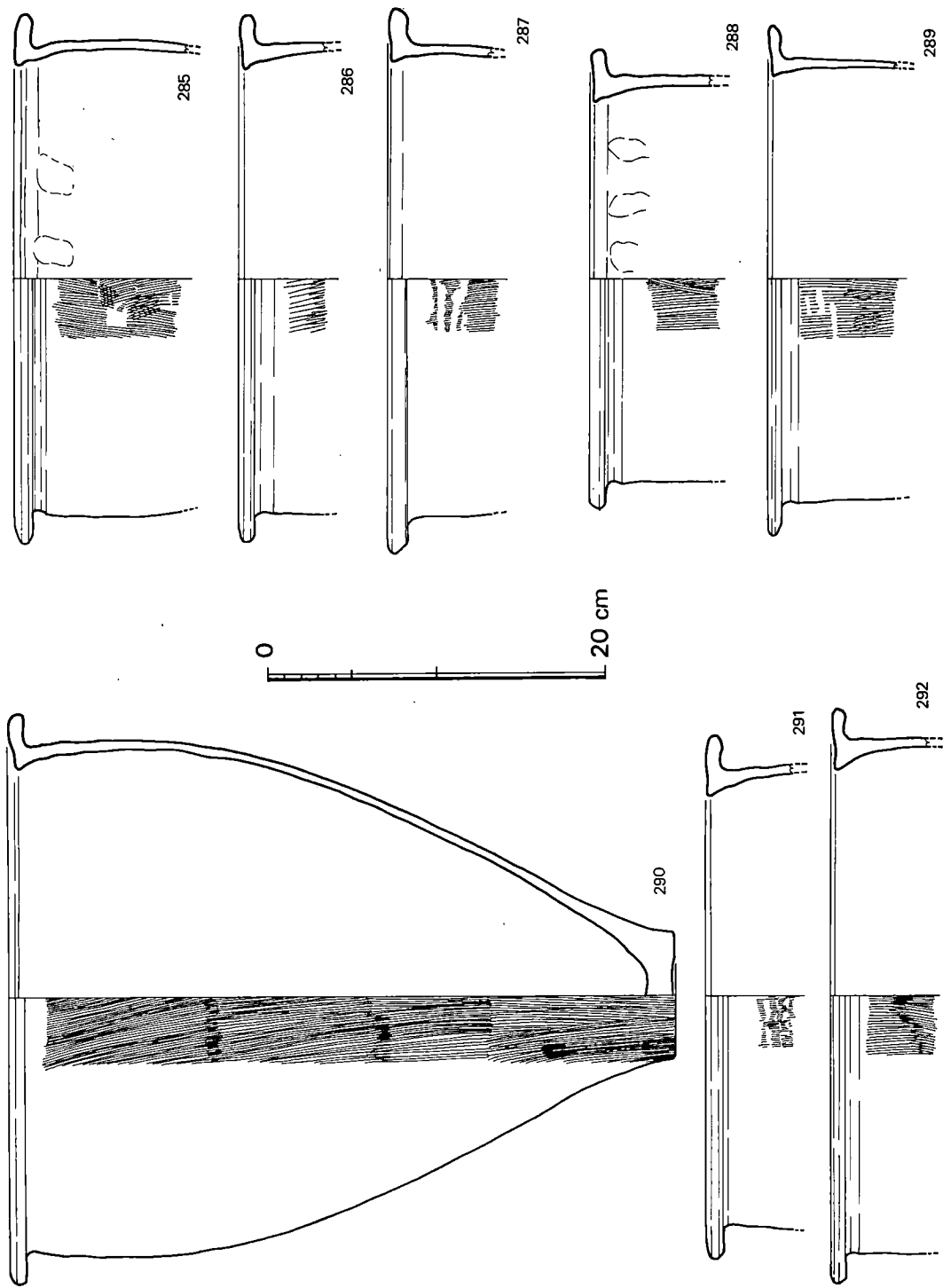
壺は313のような口縁肥厚して中期初頭の様相に近いもの他は、大別して鋤先状口縁となるものと、それをつくらずラップ状の開口壺となるものがある。前者は頸部に暗文を施すものは317のみでこれも雑に施すものであり、また黒塗りするもの(316・319)もみられ、後者の丹塗りと好対称を示す。鋤先口縁とならない開口壺は、323のようなまばらな暗文で口縁端が曲がるより古相を示すものから、325の類、更に間隔を置いて束状に暗文を施すもの(326・327・331)、全面に暗文を施すもの(334・335)などもみられる。332のような口唇状凸帯を付け胴上半に縦沈線を施文する特徴は、30号貯蔵穴で特殊な直口壺にもみられ、共伴する甕類をみ



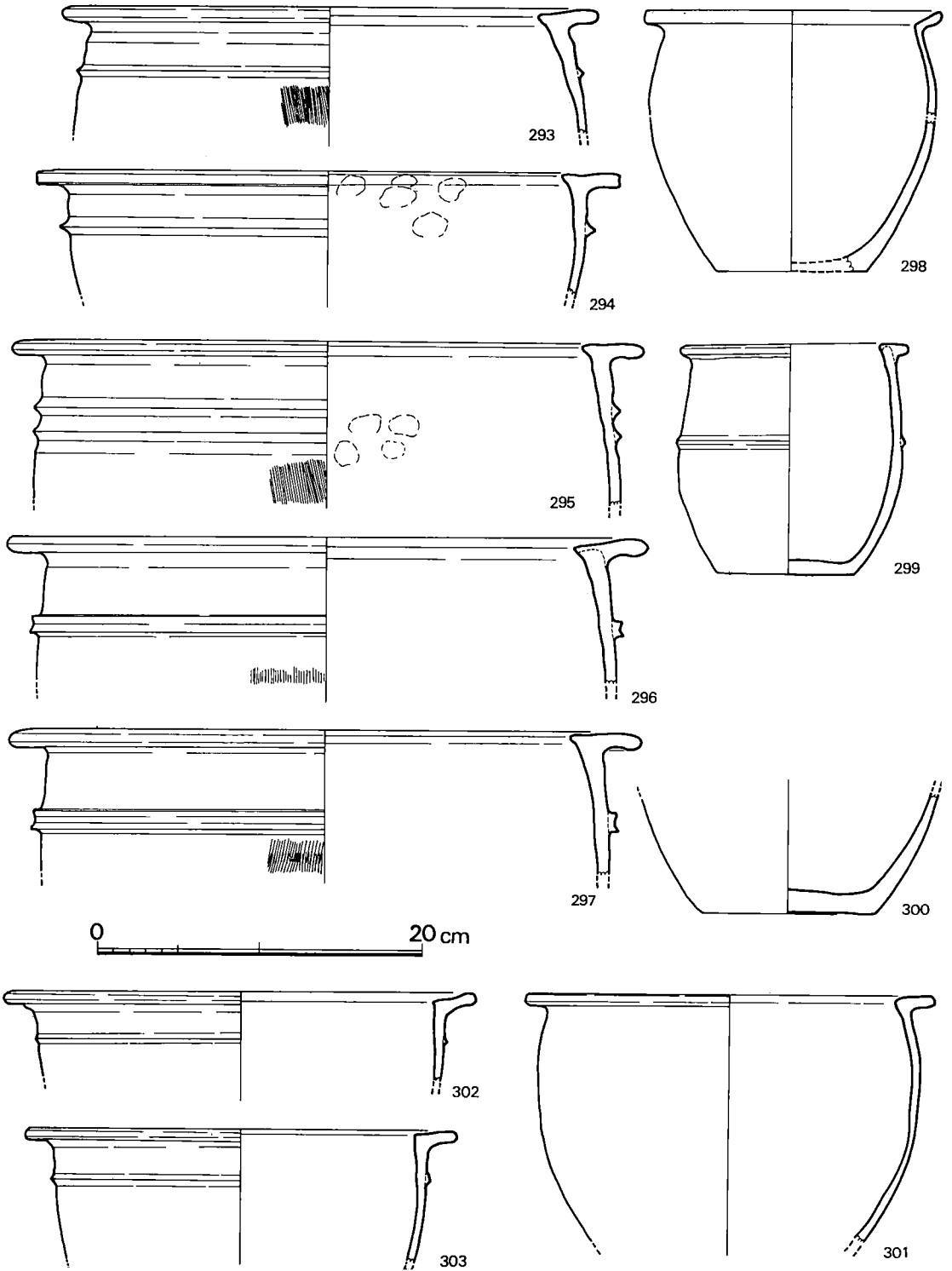
第 80 图 溝上層出土土器実測図 1 (1/4)



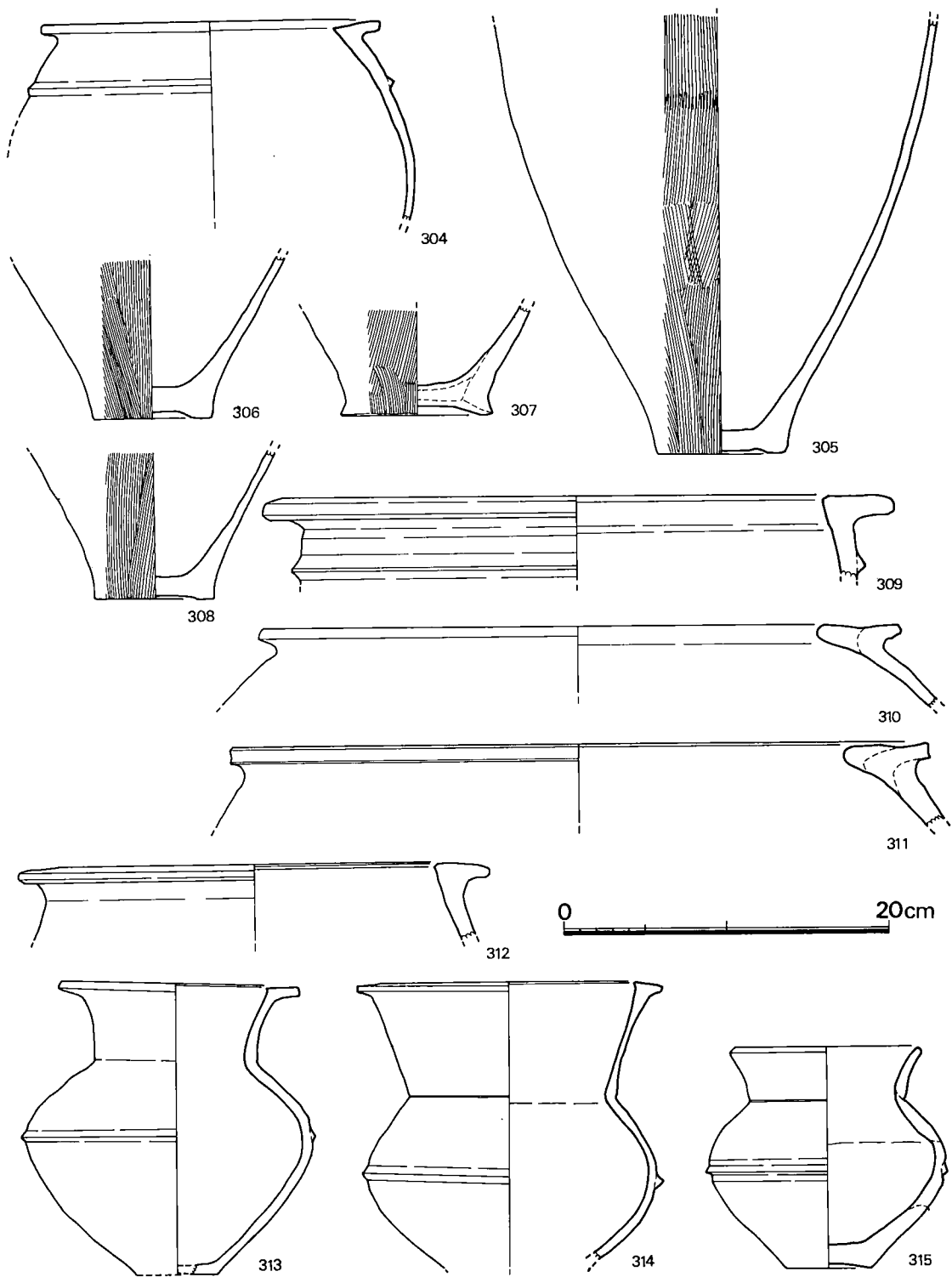
第 81 图 溝上層出土土器実測图 2 (1/4)



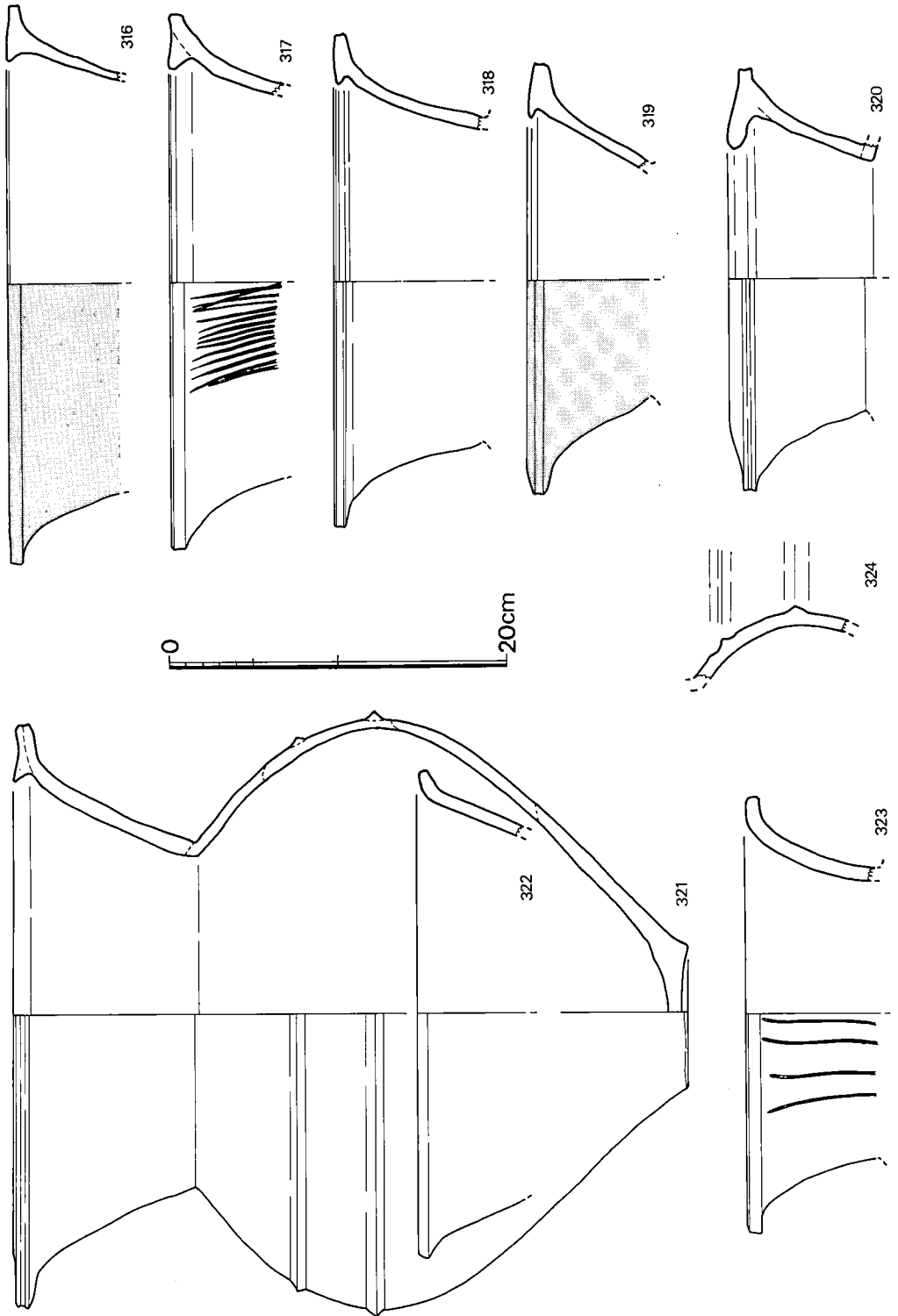
第 82 图 沟上層出土土器实测图 3 (1/4)



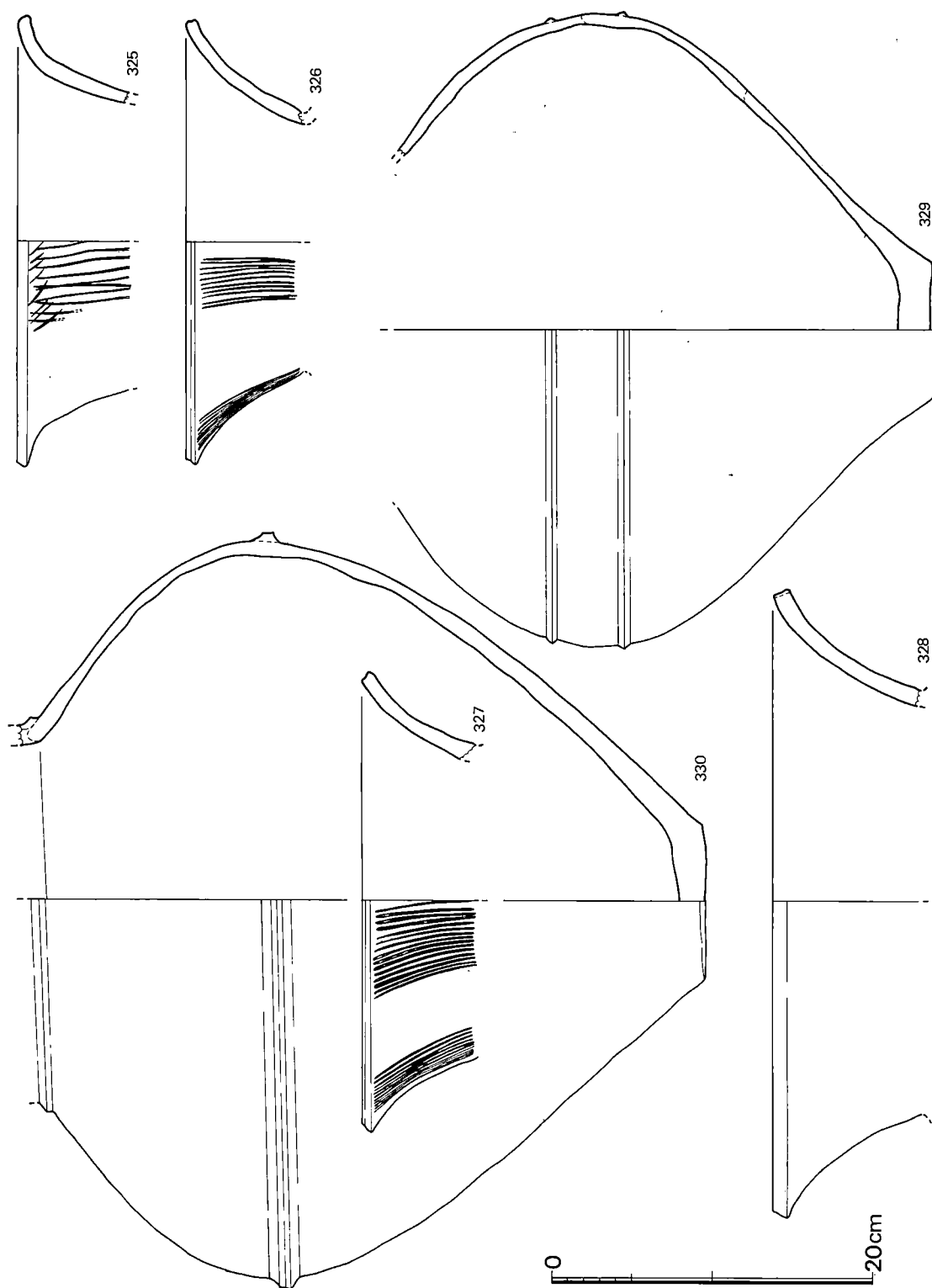
第 83 图 溝上層出土土器実測图 4 (1/4)



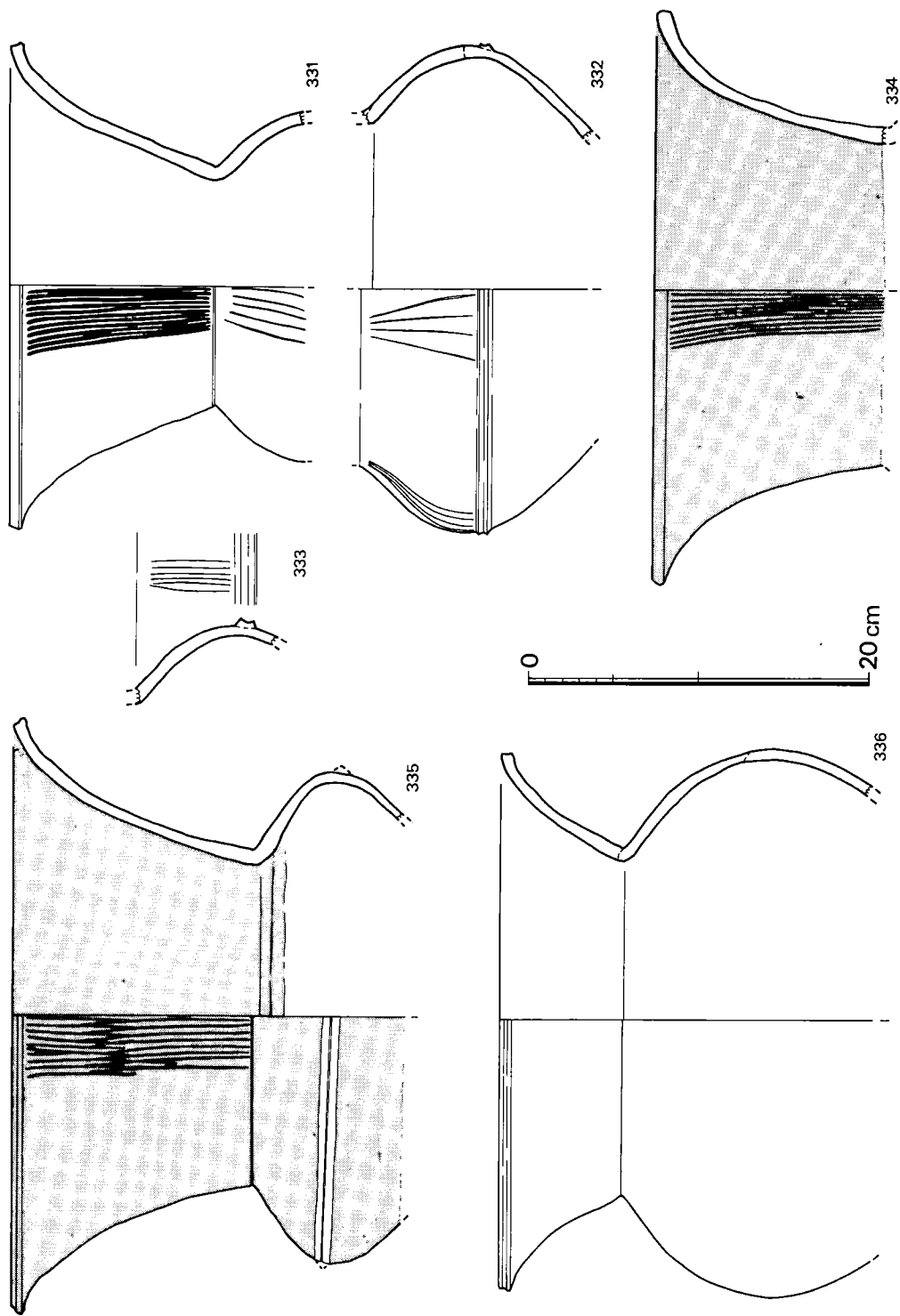
第 84 图 溝上層出土土器実測図 5 (1/4)



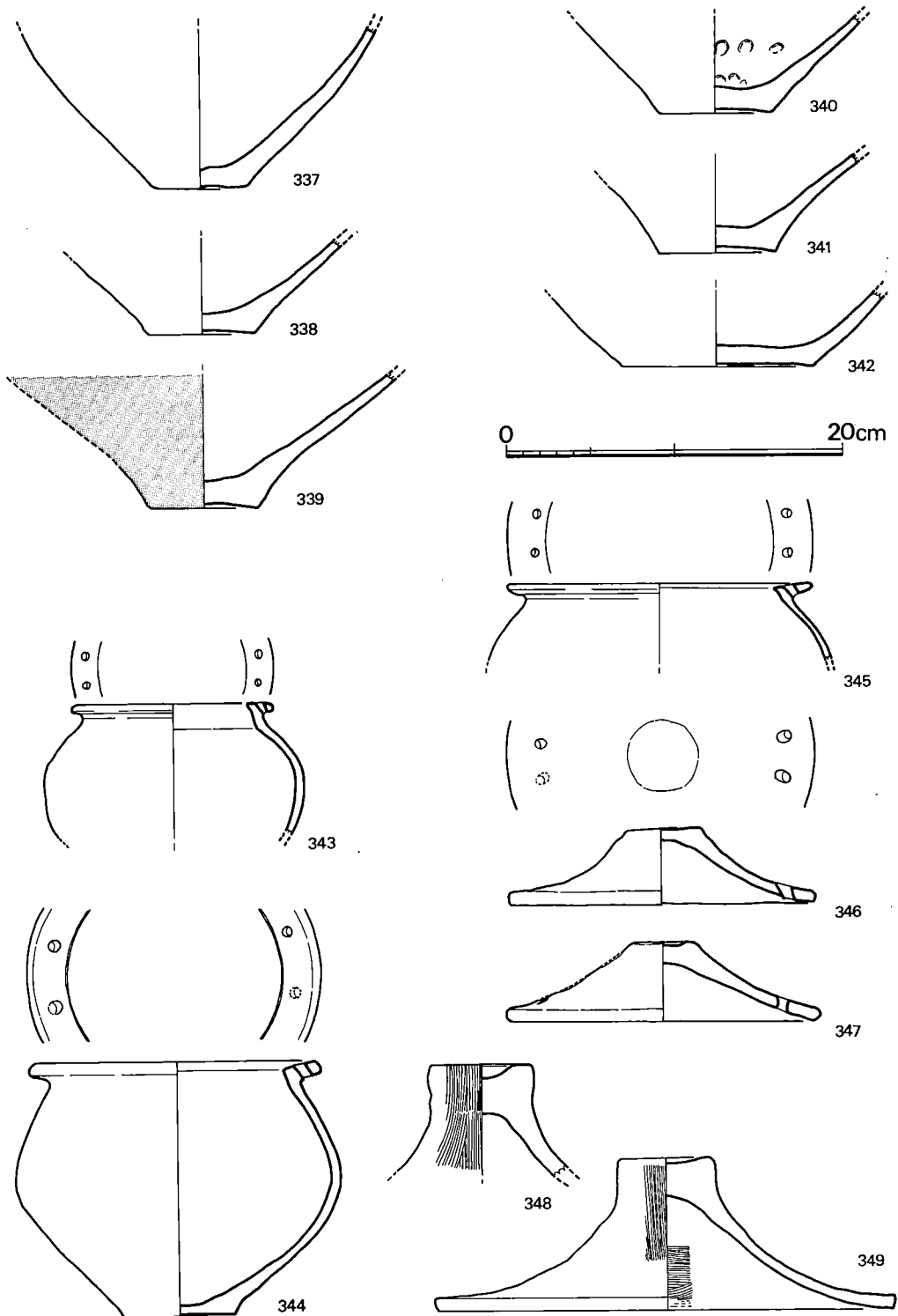
第 85 图 沟上层出土土器实测图 6 (1/4)



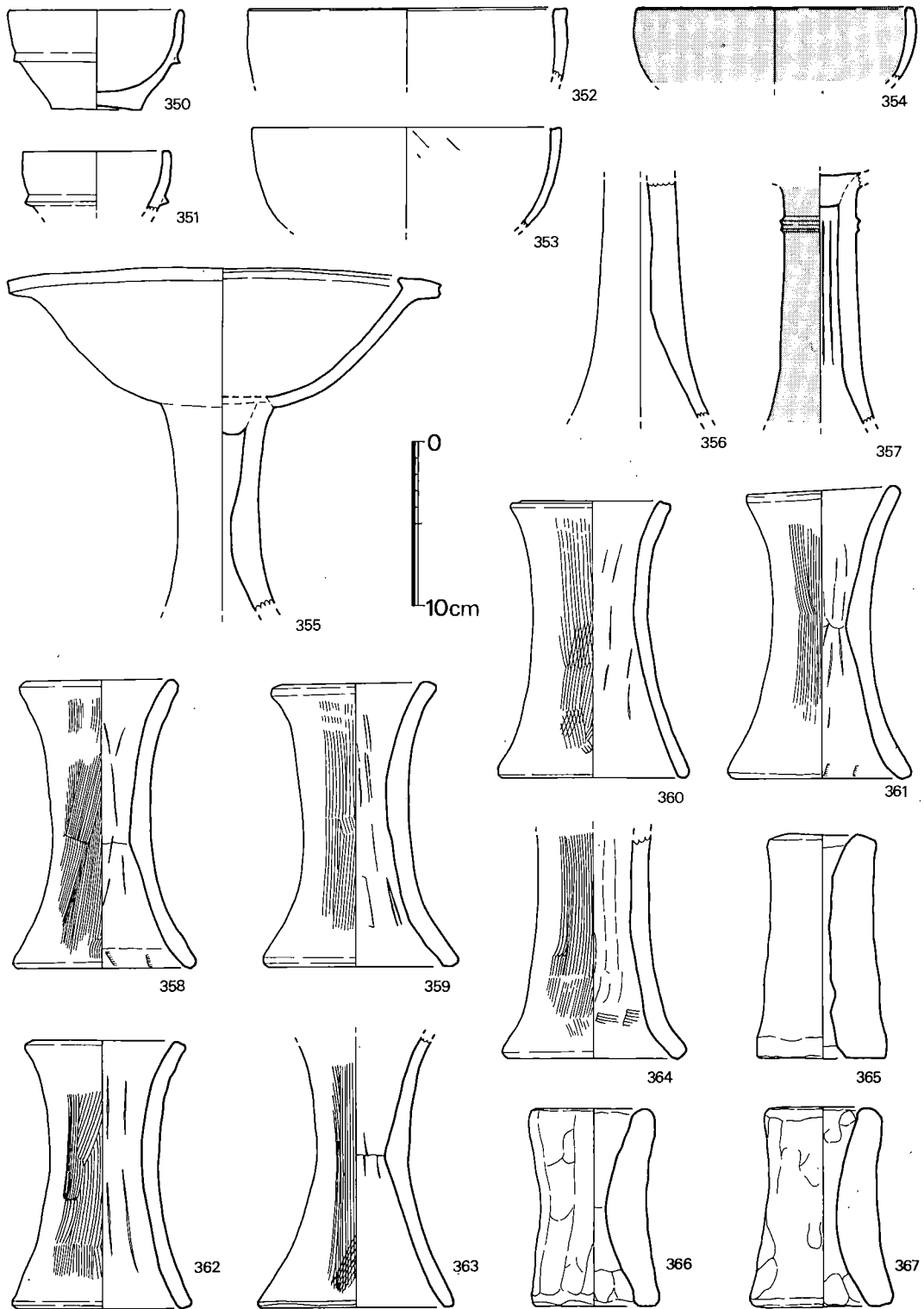
第 86 图 溝上層出土土器実測图 7 (1/4)



第 87 图 沟上层出土土器实测图 8 (1/4)



第 88 图 溝上層出土土器実測図 9 (1/4)



第 89 图 溝上層出土土器実測图10 (1/4)

ると、逆L字口縁で中期前葉のものであり、332・333もこの時期のものであろう。335 はやや扁平の胴に高く大きく開く丹塗りの類で、新しい様相を示し、中期中葉に近いものかと考えられる。

無頸壺は3種あり、形態的には343から344、345へと変化がみられるが、時期的には中期前葉の幅に収まるものであろう。この器種の蓋は346・347で浅い形態となる。

蓋は2個体あり、348のように頂部が強く凹状となる中期初頭の傾向を残すものもみられる。

鉢は、小型で体部中途に三角凸帯を付けるタイプ(350・351)や、やや大型でボール状となるもの(352・353)がある。354は丹塗り脚付となる可能性が強い。

高杯は数が少なく、脚上位に口唇状凸帯を付けるもの(357)、脚との接合に「へそ挿入法」を行ない、厚く短かい鋤先状口縁につくるもの(355)などがあり、僅かな差はあるがいずれも中期前葉の範囲に収められるであろう。

器台は精製・薄手で鼓状となるもの(358～364)と、厚手の手捏ね状の小型品とがある。支脚とする考えもあるが、ここでは、両類ともに明瞭に強い火熱を受けたものはみられない。両類が単に時期の違いとも断言し得ず、何らかの用途の違いを改めて考えなければなるまい。

以上の溝上層出土土器は弥生中期前半の範囲に含められ、そのうちの多くが前葉のものであり、その他の僅かが中期初頭と、中期中葉に近い部分のものである。稿を改めてこの期の細分を考えてみたいところである。

第4表 弥生期土器観察表

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
1	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	外反する口縁の口唇部に篋による幅広の刻目を施す。ナデによる整形を施す。粗砂粒を多く含むが、焼成良好である。暗茶色を呈す。	
2	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	外反する口縁の口唇部に篋による刻目を施す。胴部には刷毛目を施す。胎土に粗砂粒を含む。口縁部内面まで煤付着。	
3	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	外反する口縁の口唇部に篋による刻目を施す。頸内面に明瞭な稜線が入る。胎土に粗砂粒を含む。内外面ともに丁寧なヘラミガキである。	
4	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	外反する口縁の口唇部に篋による刻目を施す。胴部の内面に横位の、外面に縦位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒を含む。外面に煤付着。	
5	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	軽く外反する口縁部で、口唇部下端と口縁部下突帯に篋による刻目を施す。口縁部内面は横位の刷毛目整形。口唇部には横位の刷毛目整形で、口縁部下は刷毛目をナデ消している。	
6	1号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	外反する口縁部である。口縁部下の胴部最大径があり、ここに粘土接合による段が残る。口頸部外面に指圧痕らしい凹部がみられ、ここに刷毛目が残る。外面は刷毛目をナデ消している。	
7	1号住居跡	甕	口径 20 高さ 23.6 底径 7.8	前期	大きく外反する口縁の口唇部に篋による細かい刻目を施す。口頸部内面に指先によるナデ上げ痕が残る。内外面とも板状工具による擦過痕が残る。	
8	2号住居跡	壺	口径 23 高さ 底径	前期	頸部の上下にそれぞれ2条の沈線を描き、その間に3条の縦位の沈線文を7ヶ所に施す。外面は斜位のヘラミガキ整形。内面は器面剝落。胎土に粗砂粒多く器面に浮き出ている。焼成わるい。	
9	2号住居跡	壺	口径 10.9 高さ 15.1 底径 6.4	前期	小形の壺で、肩部に2条の篋描き沈線を施す。頸部から肩部に刷毛目が残る。口頸部の内外面とも丁寧な横ヘラミガキ。下胴部は雑な横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を含む。	
10	2号住居跡	壺	口径 18.8 高さ 底径	前期	頸部から大きく外反する口縁部である。内外面とも粗い横ヘラミガキである。胎土に粗い砂粒を含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
11	2号住居跡	壺	口径 22.3 高さ 底径	前期	軽く外反する口縁部は短い。内外面とも横ヘラミガキである。胎土に粗い砂粒多い。	
12	2号住居跡	壺	口径 15.4 高さ 底径	前期	小型の胴部に張りのない壺形土器である。器壁が厚く、胎土に粗い砂粒が多い。口縁部の内面は横ナデ。体部の外面は器面剝落し、内面は横位のヘラミガキである。	
13	2号住居跡	鉢	口径 15.5 高さ 底径	前期	小型の鉢形土器か。直口縁である。口唇部は横ナデ。体部外面は横位のヘラミガキで、内面は斜位の粗いヘラミガキである。	
14	2号住居跡	壺	口径 38.6 高さ 底径	前期	大型品である。口縁下面に粘土接合部が段をなし残る。肩部に篋描き沈線を施す。頸部内外面と胴上部は横ヘラミガキ、下胴部はやや斜めのヘラミガキ。胎土に粗砂粒含むも焼成良好。	
15	2号住居跡	甕	口径 25.0 高さ 25.8 底径 7.6	前期	口唇部の上下に細い篋による刻目を施す。口頸部内面および外面に粗い刷毛目を施すが、頸部外面は刷毛目をナデ消す。胎土は粗砂粒含むが、焼成良好。外面に煤付着。	
16	2号住居跡	甕	口径 22.6 高さ 19.2 底径 6.1	前期	口唇部下端に細い篋による刻目あり。口縁部内外面とも横ナデ。体部は内外とも板状工具による擦過痕あり。底部の立ち上り部はナデ上げ。胎土に粗い砂粒含む焼成ややあまい。胴上部に煤付着。	
17	2号住居跡	甕	口径 21.8 高さ 16.5 底径 5.1	前期	口唇部に太い刻目を施す。胴上部内面に板状工具によるケズリ痕が残る。体部はケズリの後にナデている。胎土に粗砂粒が多い。焼成ややあまい。下胴部を除く外面には煤付着。	
18	2号住居跡	甕	口径 17.6 高さ 16.1 底径 8.4	前期	口唇部にやや雑な刻目を施す。若干器壁の厚いものである。内外面ともにナデによる整形である。	
19	2号住居跡	甕	口径 19.8 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口頸部内面のほか外面は刷毛目整形である。口頸部内外面とも刷毛目をナデ消すが一部残る。胴上部に篋描き沈線をめぐらす。胎土に粗い砂粒を多く含むが焼成良好。	
20	2号住居跡	甕	口径 19.4 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口頸部内面に横位の、体部に縦位の刷毛目を施す。刷毛目整形後に沈線をめぐらす。胴下部は器面剝落。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
21	2号住居跡	無頸壺	口径 15.1 高さ 底径	前期	蓋受部を持つ無頸壺である。受部下に小孔あるが小片であるためその数は不明。内外面とも横ヘラミガキ。肩部に貝殻腹縁による弧文を施す。胎土は粗砂粒かなり含むが焼成良好。	
22	2号住居跡	蓋	口径 21.7 高さ (11.1) 底径 (7.4)	前期	天井部を欠する。器壁は厚く、胎土に粗砂粒多い。外面は縦位の刷毛目、内面は横ヘラミガキ。口縁部外面は刷毛目をナデ消している。	
23	2号住居跡	蓋	口径 24.3 高さ 11.3 底径 6.5	前期	やや丸味のある蓋である。器壁は薄く丁寧なつくりである。身受け部は内外面とも横ナデ、他は内外面とも細い横ヘラミガキである。胎土に粗砂粒を若干含む。二次加熱を受けもろい。	
24	2号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による細い刻目を施す。口縁部内外から外面は横ナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
25	2号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	大きく外反する口縁の口唇部上端に、刷毛目工具縁利用の刻目を施す。外面は斜位の刷毛目整形後に沈線をめぐらし、その下に篋によるものか刺突文を施す。胎土に粗砂粒多い。	
26	2号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に刷毛目工具縁利用の刻目を施す。口縁部内面に横位の、外面は縦位の細い刷毛目を施す。後に沈線をめぐらし、その下に篋による刺突文を入れている。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
27	2号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。外面に斜位の刷毛目を施す。口頸部内外面とも横ナデ。胎土に粗い砂粒多い。外面に煤付着。	
28	2号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太くて、やや雑な刻目を施す。口縁部内面は横ナデ、他の内外面とも丁寧なナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
29	2号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	直口の擬口縁に断面三角形の粘土帯を貼り付け口縁部とする。口縁部と突帯に篋による細い刻目を施す。内面は横ヘラミガキ。外面はナデによる仕上げ。胎土には粗砂粒若干含む。外面に煤付着。	
30	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径 7.4	前期	壺底部である。外面ヘラミガキ、内面は丁寧なナデ仕上げである。胎土は粗砂粒が多いが、焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
31	3号住居跡	壺	口径 高さ 底径 6.1	前期	壺の底部である。外面は細かい刷毛目整形後にヘラミガキか。胎土に粗砂粒多い。焼成ややあまい。	
32	3号住居跡	甕	口径 高さ 底径 6.2	前期	甕の底部である。内面はナデ、外面は細かい刷毛目整形後にナデ消すも、刷毛目が残る。	
33	3号住居跡	甕	口径 高さ 底径 6.5	前期	甕の底部である。内面はナデ、外面は細かい刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多い。	
34	3号住居跡	甕	口径 22.8 高さ 底径	前期	口唇部に細かい篋による刻目を施す。口頸部の内面に横位の、外面に縦位の刷毛目を施す。口唇部は横ナデ、胎土は粗砂粒が多く、焼成あまい。	
35	3号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に篋による極細の刻目を施す。内外面とも横ナデ仕上げ、外面は粗い刷毛目整形が先行する。胎土は粗砂粒多い。	
36	3号住居跡	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端にやや雑な篋による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。体部内面は横ヘラミガキ。外面は縦位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒が多いが、焼成良好。	
37	4号住居跡	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部である。口縁部内面と外面は横ヘラミガキ。頸部内面はナデ仕上げである。胎土に粗砂粒を含み、焼成あまい。	
38	4号住居跡	壺	口径 高さ 底径 8.2	前期	壺の底部である。外面はヘラミガキ、内面は丁寧なナデ仕上げである。胎土に粗砂粒を含み、焼成ややあまい。	
39	4号住居跡	甕	口径 高さ 底径 7.8	前期	甕の底部である。二次加熱により器面剥落がみられる。外面は丁寧なナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。焼成良。	
40	4号住居跡	甕	口径 高さ 底径 8.0	前期	甕の底部である。二次加熱により内面の器面剥落。外面は板状工具による擦過痕が観られる。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器量	法量	時期	特徴	備考
4 1	1号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部である。2条の篋描き沈線を施し、頸部には縦位に3条の平行沈線文を施す。外面はヘラミガキ整形である。胎土に粗砂粒を若干含む。	
4 2	1号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に篋による刻目を施す。内面は横位の、外面は縦位の刷毛目整形である。口唇部は横ナデで、刷毛目をナデ消す。	
4 3	1号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形の粘土帯を貼り付けた口縁で、先端はやや下り気味である。小片で器面が剥落しているため調整法は不明。	
4 4	2号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形の粘土帯を貼り、やや平坦な口縁部をつくる。口縁部は横ナデ、体部内面は雑なナデ、外面は横位の刷毛目仕上げである。粗砂粒を含むが焼成良好で、特異な器形である。	
4 5	2号貯蔵穴	鉢	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下に篋による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。内面はくびれ部に横位の刷毛目。体部外面には刷毛目整形後に突帯を貼り付け、刻目を施す。粗砂粒を多く含む。外面煤付着。	
4 6	2号貯蔵穴	甕	口径 22.3 高さ 14.8 底径 6.0	前期	外反する口縁部は横ナデ整形。体部内面は横ヘラミガキ、外面は刷毛目を消すように横ヘラミガキ整形である。胎土に粗砂粒を含むが焼成良好。	
4 7	2号貯蔵穴	甕	口径 19.8 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部内面は横ナデ、その下位は横位の刷毛目整形、外面は縦位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒多し。	
4 8	2号貯蔵穴	鉢	口径 14.4 高さ 9.1 底径 6.2	前期	蓋の可能性大なる土器である。口唇部に極細の刻目を施す。外面は縦位の粗い刷毛目整形で、内面は上部をナデ上げ整形で、その下位は板状工具の擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成ややあまい。	蓋か
4 9	4号貯蔵穴	壺	口径 18.5 高さ 底径	前期	頸部の上下に篋による沈線を施す。口縁部は横ナデ。頸部の外面は細い横ヘラミガキ整形、内面は板状工具の擦過痕がみられ、工具の圧痕(幅19mm)が残る。胎土は粗砂粒を含むが、焼成良好。	
5 0	4号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ、体部は斜位のナデ仕上げである。内面には指圧痕がみられる。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器量	法量	時期	特徴	備考
51	4号貯蔵穴	甕	口径 21.1 高さ 底径	前期	体部からゆるやかに外反する口縁である。口頸部内外面に指圧痕がみられる。口縁部内面は横位の刷毛目を、体部外面は縦位の刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多いが焼成良好。	
52	9号貯蔵穴	甕	口径 20.0 高さ 21.7 底径 7.1	前期	口唇部と胴部突帯に細くて雑な刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ整形である。体部は内面が横位の、外面は縦位の板状工具による擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含むも焼成良。外面の突帯上部に煤付着。	
53	9号貯蔵穴	甕	口径 22.0 高さ 21.6 底径 7.9	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ整形。体部も内外ともナデ整形であるが、内面にケズリ工具の圧痕が残る。	
54	10号貯蔵穴	壺	口径 6.0 高さ 8.7 底径 3.7	前期	頸部・肩部・胴部に2条の篋描き沈線を施す。内外面ともナデによる仕上げで、肩部内面に指圧痕がみられる。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
55	10号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦位の刷毛目整形。二次加熱により器面剥落著しい。胎土に粗砂粒が多い。	
56	10号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 8.0	前期	壺の底部である。外面は横ナデ整形、内面は器面剥落。胎土に粗砂粒を含む。	
57	12号貯蔵穴	甕	口径 24.2 高さ 底径	前期	口唇部に刷毛目工具による太い刻目を施す。口縁部内面は、斜・横位の刷毛目整形。体部は斜・縦位の刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多い。	
58	12号貯蔵穴	甕	口径 21.6 高さ 底径	前期	口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁部は内外とも横ナデ。頸部内面に横位の刷毛目を施し、若干ナデ消す。外面は縦位の刷毛目整形後に突帯を貼り付ける。胎土に粗砂粒多い。	
59	12号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口縁部は横ナデ。体部は縦位の刷毛目整形で、口縁部下はナデ消されている。胎土に粗砂粒多い。	
60	12号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	直口縁で口唇部に篋による刻目を施す。内外面とも横ナデ整形である。胎土に粗砂粒が多い。外面に煤付着。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
61	12号貯蔵穴	蓋	口径 19.8 高さ 10.1 底径 5.8	前期	体部の内面は横位の、外面は縦位の刷毛目整形であるが、その上・下端はナデ消されている。	
62	12号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部上端に極細の刻目を施す。体部外面に縦位の刷毛目整形を施し、口縁部内外面に横ナデを施し、刷毛目の一部をナデ消す。胎土に粗砂粒多い。	
63	12号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下に極細の刻目を施す。口縁部内面と体部外面に横位の粗い刷毛目を施す。刷毛目整形後に突帯を貼る。突帯にも細い刻目を入れる。胎土に粗砂粒多い。	
64	12号貯蔵穴	甕	口径 36.2 高さ 35.3 底径 9.0	前期	口縁部下3 cm強のところまで体部をつくり刷毛目整形後に口縁部をつくっている。刷毛目は貼り付けた粘土下に続いている。口縁部内面に横位の刷毛目を、口唇部に刻目を施す。体部内面は板状工具の擦過痕。	
65	14号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部と突帯に篋による刻目を施す。口縁部内面に横位の刷毛目整形を、体部外面に縦位の刷毛目整形を施す。内面に指圧痕あり。口縁部内面下部は横ヘラミガキ。突帯は刷毛目整形後に貼り付け。	
66	16号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に太い篋による刻目を施す。口縁部の内外面とも横ナデ。体部は内・外面とも斜位あるいは縦位の粗いナデ仕上げ。胎土に粗い砂粒を含む。外面に煤付着。	
67	16号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太い刻目を施す。口縁下部に粘土接合部が段となって残る。内外面とも横ナデ整形。胎土に粗い砂粒が多い。外面に煤付着。	
68	16号貯蔵穴	甕	口径 22.8 高さ 底径	前期	口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。体部外面は縦・横位の刷毛目整形、内面は丁寧なナデ整形。やや胴部の張る形状を呈す。胎土に粗い砂粒をかなり含む。	
69	16号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.6	前期	甕の下胴部である。外面は縦位の刷毛目整形。内面は板状工具の擦過痕が見られる。	
70	17号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部である。頸部に粘土接合部による段が残る。内外面とも横ヘラミガキ整形である。胎土に粗砂粒を若干含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
71	19号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太い刻目を施す。内外面とも横ナデ。外面には刷毛目が残る。胎土に粗砂粒が多い。	
72	19号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太い刻目を施す。口縁部内面は横位の刷毛目を施す。外面は縦位の刷毛目を施す。口唇部には横ナデを施す。胎土は粗砂粒多し。	
73	19号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋によるやや雑な刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。外面は煤付着。胎土に粗砂粒を含む。	
74	19号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太い刻目を施す。体部外面は横位の刷毛目整形である。口唇部下は刷毛目をナデ消す。	
75	19号貯蔵穴	甕	口径 16.6 高さ 底径	前期	球形の胴部となる甕であろう。やや特異な形状である。口縁部は横ナデ。体部は内面が横位の、外面が斜位のヘラミガキである。胎土に粗砂粒が多いが焼成良好。	
76	19号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の胴上部と思われる。肩部に2条の細い沈線をめぐらし、その上部に斜行文を施す。いずれも篋による施文である。内面はナデ、外面は斜位のヘラミガキである。胎土に粗砂粒が多い。	
77	19号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 8.6	前期	壺の底部である。外面は細い横ヘラミガキ、内面はやや雑なヘラミガキを施す。胎土は砂粒多い。焼成良好。	
78	19号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 8.0	前期	甕の底部である。外面は縦位の、内面は横位のナデ整形である。胎土は粗砂粒や雲母片多く含む。体部下端に刷毛目工具の圧痕があり、体部は刷毛目整形後にナデ消しているものと思われる。外面に煤付着。	
79	19号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 7.8	前期	甕の底部である。体部外面は板状工具による擦過痕かと思われ、内面はナデ仕上げ。胎土に粗砂粒含む。外面に煤付着。	
80	19号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 7.3	前期	甕の底部である。二次加熱による器面剝落が著しく、整形法不明。胎土に粗砂粒含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
81	19号貯蔵穴	脚付甕(?)	口径 高さ 底径 12.2 (脚部径)	前期	甕か鉢につく脚部であろう。内外面とも器面の剝落が著しいが、外面はヘラミガキか。胎土は粗砂粒多いが、焼成良。	
82	20号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の胴上部片である。肩部に2条の沈線をめぐらし、下部に3条の沈線で鋸歯状文を描く。恐らくその下にも1~2条の沈線をめぐらすものであろう。外面は横ヘラミガキ、内面はナデ整形である。	
83	20号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に刷毛目工具縁による太い刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ整形、体部外面は縦位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒多い。	
84	23号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太い刻目を施す。内外面とも横ナデ仕上げ。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
85	23号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。体部にやや斜位の刷毛目整形。口縁部は内外面とも横ナデ仕上げ。外面上部は刷毛目をナデ消す。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
86	25号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部内面に横位の刷毛目を施す。口唇部から外面は横ナデ、頸部は刷毛目が残る。胎土は粗砂粒多し。外面に煤付着。	
87	21号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下に細い刻目を施す。口縁部内外面と体部内面は横ナデ。体部外面は縦位の刷毛目整形。頸部下は横位である。胎土に粗砂粒多い。	
88	21号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部内外面は横ナデ。外面は斜位の刷毛目をナデ消している。体部は縦位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒多い。外面に煤付着。	
89	24号貯蔵穴	壺	口径 19.2 高さ 底径	前期	頸上部に1条の篋描き沈線をめぐらす。内外面とも横ヘラミガキ。胎土中の粗砂粒はわずかである。焼成ややあまい。	
90	25号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の頸部から肩部の破片である。肩部に2条の篋描き沈線をめぐらす。内外面とも横ヘラミガキ。胴部内面は横ナデ整形である。胎土はかなりの粗砂粒を含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
91	21号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 6.6	前期	壺の底部か。内外面とも横ヘラミガキである。粗砂粒若干含む。焼成ややあまい。	
92	21号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 6.9	前期	外面は縦位の刷毛目整形。底部の穿孔は焼成後に施す。甕に利用か。	
93	22号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 6.7	前期	外面は粗い刷毛目を施す。刷毛目工具の幅は約3cmを測る。内面は上部に横位の刷毛目が一部にみられるものの、下部は板状工具の擦過痕がみられ、底部はナデ整形である。	
94	24号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 8.5	前期	壺の底部である。外面は横ナデ整形である。内面に炭化物付着。胎土に粗砂粒多い。	
95	24号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 11.0	前期	外面は縦位の粗い刷毛目を施す。胎土に粗い砂粒が多い。	
96	22号貯蔵穴	甕	口径 25.1 高さ 底径	前期	口縁部内外面とも横ナデ。体部外面は縦位の粗い刷毛目を施す。内面は刷毛目工具痕が残る雑な横ナデ整形である。口唇部には刻目はない。胎土に粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
97	22号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.1	前期	外面は縦位の刷毛目整形。二次加熱により全体に赤変する。胎土に粗砂粒が多い。	
98	21号貯蔵穴	蓋	口径 高さ 底径	前期	蓋の小片である。内外面とも横ヘラミガキを施す。胎土に砂粒多い。	
99	27号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺肩部で、複線の弧文を篋描きしている。内外面とも横ヘラミガキである。胎土に粗砂粒多い。焼成ややあまい。	
100	28号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太い刻目を施す。内面横ナデ、外面は器面剥落。胎土は粗い砂粒多い。焼成やや不良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
101	28号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	軽く外反する口縁の口唇部に細い篋による刻目がある。口唇部内面は斜位の刷毛目を施す。器面剝落が著しい。胎土に粗砂粒多い。	
102	27号貯蔵穴	蓋	口径 16.8 高さ 底径	中期	体部下位に篋押えによる沈線状の凹みがめぐり、これより上部はヘラミガキ、下部と内面は横ナデ整形である。身受け部に、焼成前の穿孔がある。孔の数は他の例から2ヶ所に2個あるものと思われる。	
103	27号貯蔵穴	甕	口径 34.0 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁をなす。口縁部と胴上部は横ナデ、胴部外面は斜位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は細砂粒多い。焼成良好。	
104	27号貯蔵穴	甕	口径 23.6 高さ 18.7 底径 11.4	中期	短胴で底径の大きい形状を呈す。平坦口縁で、胴上部に断面三角形突帯をめぐらす。口縁と胴上部は横ナデ。体部内面は丁寧なナデであるが、外面は板状工具の擦過痕がみられる。内底面はヘラによる整形。	
105	27号貯蔵穴	甕	口径 28.1 高さ 底径	中期	やや内傾の平坦口縁をなす。口頸部は横ナデ。胴部外面は縦位の細い刷毛目、内面はナデによる整形である。胎土は細砂粒を含む。焼成良好。	
106	27号貯蔵穴	壺	口径 29.6 高さ 35.5 底径 6.8	中期	口唇部に篋押えによる凹みあり。頸部全面に篋による縦位の暗文を施す。口頸部は内外面とも横ヘラミガキ。胴部もヘラミガキと思われるが、器面剝落が著しい。下胴部は縦位のヘラミガキである。	
107	27号貯蔵穴	器台	口径 9.8 高さ 底径	中期	体部外面は縦位の細い刷毛目を施し、一部をナデ消す。端部は横ナデ整形である。内面に上下方向から篋状工具による押圧痕がみられる。胎土に粗砂粒含む。焼成良好。	
108	27号貯蔵穴	器台	口径 9.8 高さ 15.6 底径 11.2	中期	外面にやや粗い縦位の刷毛目を施す。上下端は横ナデで、刷毛目をナデ消す。内面はナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
109	29号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 9.2	前期	球形状を呈す壺の下胴部である。内外面とも横ヘラ磨きである。内底面に指圧痕あり。胎土に粗砂粒含む。焼成良。	
110	29号貯蔵穴	甕	口径 23.4 高さ 底径	前期	口唇部から頸にかけて、細長の刻目を施す。口頸部の内外面とも横ナデ、胴部外面は板状工具の擦過痕がみられ、内面には斜位の粗い刷毛目(幅2.1cm)を施す。胎土に粗砂粒を含む。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
111	29号貯蔵穴	甕	口径 20.0 高さ 底径	前期	口唇部下に細くて雑な刻目を施す。口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面は丁寧なナデ、内面は横・斜位の粗い刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多い。	
112	30号貯蔵穴	甕	口径 16.8 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁部をなす。口縁部は横ナデ。胴部内面はヘラケズリ。外面は器面剥落。胎土に砂粒含む。焼成あまい。	
113	30号貯蔵穴	甕	口径 31.6 高さ 底径	中期	平坦口縁部である。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面はナデ仕上げである。胎土は細砂粒多い。焼成良好。	
114	30号貯蔵穴	甕	口径 32.8 高さ 底径	中期	平坦口縁部である。口縁部は横ナデ。胴部は外面が斜位の刷毛目整形。内面は板状工具による擦過痕がみられる。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
115	30号貯蔵穴	甕	口径 30.2 高さ 底径	中期	平坦口縁部をなす。胴上部に断面三角形突帯をめぐらす。内外面とも横ナデ。胎土は砂粒が多く、焼成ややあまい。	
116	30号貯蔵穴	甕	口径 23.3 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁部で、胴上部に断面三角形突帯をめぐらす。内外面とも横ナデ。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
117	30号貯蔵穴	壺	口径 11.0 高さ 底径	中期	直口壺である。口唇部と頸部外面は横ナデ。頸部内面と胴部外面は横ヘラミガキ。胴部内面はナデ整形。頸部には篋による縦位の暗文を施す。胴上部に一ヶ所4条の沈線を6ヶ所に施す。	
118	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 10.6	中期	短胴の甕の底部と思われる。外面は縦位の、内面は横位のヘラミガキ。内底部は横ナデ。胎土は粗砂粒多い。焼成ややあまい。	
119	30号貯蔵穴	甕	口径 32.1 高さ 37.6 底径 7.2	中期	平坦口縁部をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の細い刷毛目、内面はナデによる整形である。	
120	30号貯蔵穴	甕	口径 27.1 高さ 底径	中期	く字状に外反する口縁部で頸部内面にやや稜がつく。口縁部は横ナデ、胴部外面は斜位の刷毛目で、内面はナデ整形。胎土に粗い砂粒が多く、焼成あまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時器	特徴	備考
121	30号貯蔵穴	甕	口径 29.8 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁部である。口縁部は横ナデ、胴部外面は縦位の細い刷毛目整形。内面は板状工具による擦過痕がみえる。胎土は砂粒を含む。焼成堅緻である。	
122	30号貯蔵穴	甕	口径 31.8 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁部である。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は細砂粒が多く、焼成ややあまい。	
123	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.6	中期	甕の底部。外面は縦位の刷毛目整形、内面は剝落。胎土は粗い砂粒が多いが、焼成堅緻。	
124	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.4	中期	甕の底部。外面は縦位の刷毛目整形、内面は器面剝落。胎土に砂粒が多い。焼成良。	
125	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.0	中期	甕の底部。外面は縦および斜位の刷毛目整形、内面はナデによる整形か。胎土に砂粒が多い。焼成良。	
126	30号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.0	中期	甕の底部。外面は縦位の細い刷毛目整形。内面は器面剝落。胎土に砂粒多い。焼成良。	
127	30号貯蔵穴	蓋	口径 32.6 高さ 11.6 底径 6.4	中期	外面上部は縦位の、下部は斜位の細い刷毛目を施す。受け部外面は横ナデ、内面は横位の刷毛目。体部内面はナデ仕上げ。胎土に砂粒を含む。焼成ややあまい。	
128	30号貯蔵穴	蓋	口径 16.4 高さ 4.2 底径 3.7	中期	器面剝落し整形痕不詳。対称する位置に計4個の孔がある。焼成前の穿孔。胎土に粗い砂粒多い。焼成不良。	
129	30号貯蔵穴	器台	口径 8.8 高さ 15.9 底径 11.4	中期	外面は縦位の刷毛目整形、後に上下端部は横ナデ。内面にナデツケによる指先圧痕が残る。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
130	30号貯蔵穴	器台	口径 9.6 高さ 15.2 底径 11.8	中期	外面は縦位の刷毛目整形。後に上下端部を横ナデしている。内面はナデ上げている。胎土に粗い砂粒を含むが、焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
131	30号貯蔵穴	器台	口径 11.6 高さ 底径	中期	外面は縦位の細い刷毛目整形、その後上部は横ナデ。口縁内面は横位の細い刷毛目を施す。内面にはナデ上げ圧痕がみられる。胎土に粗砂粒を含むが、焼成良好。	
132	30号貯蔵穴	器台	口径 8.1 高さ 12.9 底径 8.1	中期	器壁の厚いもので、器面は粗いヘラケズリ後にナデ仕上げである。凹凸が著しい。内面はナデ整形であろうが、接合部より粘土がはづれている。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
133	30号貯蔵穴	器台	口径 (6.4) 高さ (11.6) 底径 8.2	中期	器壁の厚い器である。体部外面は粗いヘラケズリ後にナデ仕上げ。内面上部はヘラ状工具によるナデつけ、下部はナデ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成ややあまい。	
134	31号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 6.9	前期	壺の底部。外面はナデか、器面剝落が著しい。内面には炭化物付着。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成良。	
135	32号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	若干外反し、直口縁に近似する。口唇部外側に篋による太い刻目を施す。内外面とも横ナデ。外面に煤付着。粗砂粒を若干含む。焼成良。	
136	32号貯蔵穴	甕	口径 19.5 高さ 底径	前期	口唇部に篋による細い刻目を施す。口頸部外面から胴部内面にかけて横ナデ。胴部外面は斜位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。外面に煤付着。	
137	32号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 7.8	前期	壺の底部である。外面は横ヘラミガキ。内面は粗い横あるいは斜位のヘラミガキである。胎土に粗砂粒多い。焼成良。	
138	34号貯蔵穴	壺	口径 15.6 高さ 底径	前期	内外面とも細い横ヘラミガキ。胎土に砂粒を含む。焼成良好。	
139	34号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。内外面とも横ナデ。外面に煤付着。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
140	34号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に細い篋による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。胴部外面は板状工具の擦過痕。内面は丁寧なナデ。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
141	34号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による細い雑な刻目を施す。口縁部の内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも板状工具による擦過痕。胎部は粗い砂粒が多い。焼成ややあまい。	
142	34号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 6.9	前期	甕の底部。外面は板状工具による擦過痕。内面は横ナデ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	
143	34号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.2	前期	甕の底部である。外面は横ヘラミガキ。内面はナデ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良好。	
144	34号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.5	前期	甕の底部である。外面は丁寧なナデ。内面は剥落。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	
145	34号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 15.6	前期	大型壺の底部である。胴・底部とも内外面横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を含む。	
146	34号貯蔵穴	甕	口径 23.4 高さ 底径	前期	口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁部から胴上部は斜位の細い刷毛目の上ナデ消す。下胴部は縦位の細い刷毛目。内面口縁下に斜位の刷毛目、それより下はナデ。胎土に粗砂粒多い。焼成良。	
147	35号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の胴部である。篋描きの2条の沈線をめぐらし、その上部に篋描きの斜格子文を施す。内外面ともヘラミガキ。胎土に粗砂粒を含むが、焼成良好。	
148	35号貯蔵穴	甕	口径 27.0 高さ 底径	前期	口唇部に篋による線状の刻目を施す。口縁部は内外面横ナデ。胴部外面は斜位の粗い刷毛目整形、内面は口縁下に斜位の粗い刷毛目。その他はナデ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
149	35号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	胴部に垂下する突帯を有し、刻目を施す。内外面とも板状工具の擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
150	35号貯蔵穴	蓋	口径 22.4 高さ 11.1 底径 5.6	前期	口縁部に篋による極細の刻目を施す。外面は刷毛目整形後に上下をヘラミガキにより消す。内面ヘラミガキ。胎土に粗砂粒を含むが焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
151	35号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.4	前期	甕の底部。外面は縦・斜位の刷毛目。内面はナデ整形。底外面はヘラケズリ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
152	36号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 5.8	前期	壺の底部。外面はナデ整形。内面は器面剝落。底部内面に指圧痕あり。胎土に粗砂粒を含む。焼成ややあまい。	
153	36号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部である。肩部に1条の篋描き沈線をめぐらす。その下に篋による弧文を施す。内外面器面剝落。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成ややあまい。	
154	38号貯蔵穴	壺	口径 14.5 高さ 底径	前期	内外面とも横ヘラミガキ。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
155	38号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	小片からの復原図。頸部と胴部に各2条の沈線をめぐらし、この間を斜格子文でうめる。また頸部に複線弧文を描き、この間に縦位の平行文を描き、その左右に条線を施す。内外面横ヘラミガキ。焼成良好。	
156	38号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に篋による細い刻目を施す。外面は斜・縦位の刷毛目、内面はナデ整形。外面に煤付着。胎土に粒砂粒を含む。焼成良。	
157	38号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	内傾する平坦な口縁は短い。口唇部に細い刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ、胴部は内外面とも板状工具の擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
158	38号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋によるやや細い刻目を施す。外面は縦位の刷毛目の後に突帯を貼りつける。突帯のやや下位より内面にかけては横ナデ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
159	38号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	内傾する擬口縁をつくり、刷毛目整形後に粘土帯を貼り口縁部をつくっている。口縁部は横ナデ、内面は板状工具による擦過痕がみられる。	
160	38号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 8.8	前期	壺の底部である。外面は横ヘラミガキ。内面はナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
161	38号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 7.8	前期	壺の底部。外面は縦位のヘラミガキ、内面はナデ、外底部はヘラケズリ後にナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
162	38号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 5.5	前期	甕の底部。外面は刷毛目後にヘラミガキ。刷毛目若干残る。内面もヘラミガキ。外底面はヘラケズリ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
163	38号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 6.8	前期	甕の底部。外面は板状工具による擦過痕がみえ、下端は横ナデ。内面はナデ整形である。胎土に粗砂粒を含む。	
164	38号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 6.2	前期	甕の底部。外面は斜位の刷毛目、下方は横ナデ、内面はナデか、器面剥落。胎土に粗砂粒が非常に多い。焼成良。	
165	39号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋によるやや細い刻目を施す。口頸部は内外面とも横ナデ。内面は斜位のナデ。外面は器面剥落。胎土に粗砂粒多い。焼成良。外面に煤付着。	
166	39号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	く字状に外反する口縁の口唇部に篋による太い刻目を施す。くびれに稜を有す。外面は斜位の刷毛目、口縁部は内外面とも横ナデ整形。胎土に粗砂粒多し。焼成良。	
167	39号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	器壁の厚い口縁部である。粘土接合部が段となって残る。内外面とも丁寧な横ヘラミガキ。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。鉢状をなす形か。口唇部に刻目はない。	
168	39号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	粘土接合部が段となって残る。内外面とも横ヘラミガキ。口唇部に刻目はない。粗砂粒を若干含む。焼成良。	
169	43号貯蔵穴	甕	口径 23.0 高さ 27.0 底径 8.3	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも板状工具による擦過痕が残る。外面底部付近はナデ上げ。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。外面に煤付着。	
170	43号貯蔵穴	甕	口径 18.2 高さ 底径	前期	口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は板状工具の擦過痕、内面はナデ整形か。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成ややあまい。外面上部に煤付着。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
171	43号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.7	前期	外面は板状工具による擦過痕が残る。内面は器面剥落。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。	
172	44号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 8.6	前期	やや肩部の張る形状を呈す。全体に強い二次加熱を受け器面剥落。調整不明。	
173	44号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 11.1	前期	大型の壺である。肩部に1条の篋描き沈線をめぐらす。肩から胴上位は内外面とも横ヘラミガキ。胴下位の外面は縦ヘラミガキ。下端は横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒が多い。二次加熱を受けている。	
174	44号貯蔵穴	甕	口径 22.0 高さ 24.4 底径 8.2	前期	口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁部は断面三角形の粘土帯を貼り付けたもの。胴部外面は板状工具の擦過痕残る。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。外面下半に煤付着。	
175	44号貯蔵穴	甕	口径 22.9 高さ 21.4 底径 7.8	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部下に粘土接合部が段になって残る。口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面は板状工具による擦過痕が残る。内外面の器面剥落がみられる。胎土に粗砂粒含む。焼成良。	
176	44号貯蔵穴	甕	口径 26.0 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部は内外面とも丁寧なナデ整形。内面は凹凸部が多い。胎土に粗砂粒が多い。二次加熱を受けている。	
177	44号貯蔵穴	甕	口径 19.0 高さ 底径	前期	直口の擬口縁に粘土帯を貼り付け、外傾の口縁をなす。口唇部に篋による刻目を施す。口縁部は横ナデ。胴部の外面は縦位の刷毛目、内面はヘラケズリ整形。胎土に粗砂粒を含む。二次加熱を受けている。	
178	44号貯蔵穴	鉢	口径 18.8 高さ 14.0 底径 7.4	前期	胴部の内面がヘラミガキであるほかは、全て丁寧な横ヘラミガキ。二次加熱により器面の剥落が著しい。胎土に粗砂粒を含む。	
179	45号貯蔵穴	甕	口径 24.4 高さ 28.2 底径 8.0	前期	口唇部下端に篋による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。他は器面の剥落著しく調整不明。胎土に粗砂粒含む。二次加熱を受け、外面中ほどに煤付着。	
180	45号貯蔵穴	壺	口径 (17.6) 高さ 24.6 底径 9.1	前期	口頸部内面から外面は横ヘラミガキである。頸部から胴部の内面は器面剥落。底部に小孔あり。焼成後に外側から穿つ。胎土は粗砂粒を含む。焼成ややあまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
181	46号貯蔵穴	甕	口径 30.2 高さ 底径	中期	平坦口縁部をなす。胴部外面は斜位の細かい刷毛目、内面はナデ整形。口縁部は横ナデ。胎土は砂粒多い。焼成良好。	
182	46号貯蔵穴	甕	口径 31.7 高さ 底径	中期	平坦口縁部をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	
183	46号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.6	中期	外面は粗い縦位の刷毛目、部分的にナデ消す。内面はナデか。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。外部に煤付着。	
184	46号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.0	中期	外面は細い斜・縦位の刷毛目を施す。内面は器面剥落。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良好。	
185	46号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.2	中期	外面は縦位の細かい刷毛目、内面はナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
186	46号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 7.9	中期	外面は器面剥落。内面はナデ整形で、下半に指ナデ圧痕が残る。胎土に粗砂粒を含む。二次加熱を受けている。	
187	46号貯蔵穴	鉢	口径 33.9 高さ 16.0 底径 11.1	中期	外傾する口縁部で、胴上位に断面三角形の突帯をめぐらす。二次加熱を受け器面剥落が著しく、下胴部内面はナデ整形。胎土は粗い砂粒が多い。	
188	46号貯蔵穴	鉢	口径 28.3 高さ 底径	中期	平坦口縁で胴上位に断面三角形の突帯をめぐらす。口頸部内外面と突帯下位まで横ナデ。胴部の内外面とも板状工具による擦過後にナデ整形か。胎土は粗い砂粒多し。焼成ややあまい。	
189	46号貯蔵穴	壺	口径 32.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。内外面とも横ナデ整形。口縁平坦部および外面は黒塗り。胎土に砂粒が多い。焼成良好。	口縁平坦部から外面は黒塗り。
190	46号貯蔵穴	器台	口径 9.2 高さ 16.5 底径 11.4	中期	外面は縦位の粗い刷毛目を施し、その下位には細い斜位の刷毛目を施す。器上下端は横ナデで刷毛目を一部ナデ消す。内面は両側よりナデ上げ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
191	47号貯蔵穴	壺	口径 27.2 高さ 底径	前期	焼成あまく器面剥落がみられる。口縁部内面は横ヘラミガキ。頸部内面にはケズリ痕が残る。胎土は砂粒が多い。	
192	47号貯蔵穴	壺	口径 16.8 高さ 底径	前期	内外面は横ヘラミガキ。頸部内面はナデ整形か、器面剥落。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
193	47号貯蔵穴	甕	口径 22.8 高さ 底径	前期	口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
194	47号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.8	前期	甕の底部。外面は縦位のヘラミガキ、下端は横ナデ整形。内面は板状工具の擦過痕がみられる。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
195	47号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 9.2	前期	壺の底部。器面が剥落し、調整不明。胎土は粗い砂粒が多い。焼成不良。	
196	47号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径 8.8	前期	甕の底部。外面は丁寧なナデ。外底部は横ヘラミガキ。胎土は粗い砂粒を含む。焼成良好。	
197	48号貯蔵穴	壺	口径 19.7 高さ 底径	前期	口縁下に粘土接合部が段状になり残る。内外面とも横ヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を若干含む。焼成良好。	
198	48号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下に篋による細い刻目を施す。外面に縦位の、内面に横位の刷毛目を施す。胎土に粗砂粒が多い。焼成良好。	
199	48号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に刻目は無い。器面剥落し調整不明。胎土に粗砂粒が多い。	
200	48号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に細い小さな刻目を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。外面は細い刷毛目整形。胎土に粗砂粒が多い。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
201	48号貯蔵穴	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に刻目はない。外面に縦位の刷毛目整形後に突帯を貼り付ける。刷毛目の上からナデ。口縁部内面は横ナデ整形。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
202	48号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径	前期	無頸壺片である。肩部に篋描き沈線による稚拙な複線弧文を描く。口縁部内外面とも横ナデ、肩部内外面とも横ヘラミガキ。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
203	48号貯蔵穴	壺	口径 高さ 底径 7.2	前期	壺の底部。底部に指圧痕が残る。器面剥落し調整不明。胎土は粗砂粒多い。焼成ややあまい。	
204	2号土塼	甕	口径 33.5 高さ 36.3 底径 7.2	中期	平坦口縁をなす。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目(幅約2.5cm)、内面は板状工具の擦過後にナデ整形。胎土は砂粒が多く、粗砂粒若干含む。焼成良。	
205	2号土塼	甕	口径 29.5 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部内外面は横ナデ。胴部は斜位の刷毛目、内面は削りの後にナデ整形。胎土は粗砂粒を含む。焼成堅緻。	
206	2号土塼	高坏	口径 20.0 高さ 18.5 底径 13.6	中期	軽く外反する坏部口縁である。口縁と脚端は横ナデ。器面剥落がみられるが、坏部内外面は横ヘラミガキ。脚部外面は縦位のヘラミガキ。同部内面はナデ整形で、篋状工具の圧痕がみられる。胎土は粗砂多い。	
207	3号土塼	甕	口径 23.5 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部は内外面横ナデ。胴部は内外面とも板状工具による擦過痕がみられる。口縁下内面に指圧痕あり。胎土は砂粒多い。焼成ややあまい。	
208	4号土塼	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に細い篋による刻目を施す。口縁部の内外面に横ナデ。胴部外面は板状工具の擦過痕がみられる。内面はナデか。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。外面に煤付着。	
209	4号土塼	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による太い刻目を施す。内外面とも横ナデ整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。外面に煤付着。	
210	4号土塼	甕	口径 高さ 底径	前期	直口縁に粘土帯を貼り付け、口唇部が垂下気味に口縁部をつくる。口唇部に刻目を施す。内外面とも横ナデ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
211	4号土壙	甕	口径 17.2 高さ 底径	前期	やや内傾する平坦口縁部をなす。口唇部には篋による小さな刻目を施す。口縁部は横ナデ。胴部の内外面には板状工具の擦過痕がみえる。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。外面に煤付着。	
212	4号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部片である。粘土接合部が段として残り篋で強く押えている。段部に細い刻目を施す。内外面ともヘラミガキ。胎土は粗砂粒を含むが、焼成良好。	
213	5号土壙	甕	口径 23.7 高さ 底径	前期	口唇部下端と突帯に篋による刻目を施す。口縁部内面に横位の粗い刷毛目、胴部内面は丁寧なナデ、外面は横・斜位の刷毛目(幅約2.7cm)整形に突帯を付ける。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。外面に煤付着。	
214	5号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺肩部片である。上位に1条、下位に2条の沈線をめぐらし、この間に斜格子文を施す。いずれも篋描き。内外面ともヘラミガキ。胎土は砂粒が多い。焼成堅緻。	
215	6号土壙	鉢	口径 20.1 高さ 底径	前期	口縁部は内外面横ナデ、胴部は内外面横ヘラミガキ整形である。胎土は粗砂粒を含むが、焼成堅緻。	
216	9号土壙	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の肩部片である。下位に2条の篋描き沈線をめぐらし、その上部に篋描きの斜格子文を施す。外面は横ヘラミガキ、内面は横ナデ整形。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成良。	
217	9号土壙	甕	口径 18.3 高さ 21.7 底径 6.8	前期	口唇部に篋による刻目を施す。口縁部内外面は横ナデ、胴部の内外面は板状工具による擦過痕が見える。胎土に粗砂粒が非常に多い。焼成ややあまい。外面上部に煤付着。底部の孔は焼成後に外側より穿つ。	
218	9号土壙	壺	口径 19.0 高さ 底径	前期	口縁下外面に粘土接合部の段が残る。肩部に2条の篋描き沈線を施す。口縁部と胴部内面は横ナデ、他は横ヘラミガキ整形である。胎土は粗砂粒が多い。二次加熱をうける。	
219	9号土壙	壺	口径 30.0 高さ 底径	前期	口唇部の上下端に細くて雑な篋による刻目を施す。口唇部は横ナデ、他は横ヘラミガキ整形である。外面は刷毛目をカキ消すも残る。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
220	11号土壙	鉢	口径 40.0 高さ 底径	前期	大型の鉢。口縁部の刷毛目は上部をナデ消す。外面は口唇下より横位・斜位の刷毛目整形で、突帯より下は横ヘラミガキで刷毛目を消す。胴部内面はヘラケズリ。胎土は粗砂粒が多いが、焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
221	11号土壇	甕	口径 27.1 高さ 29.9 底径 8.6	前期	口唇部の上端に細小の、下端に太い刻目を施す。口縁部内面は横・斜位の刷毛目、外面は上半を横・斜位の、下半を縦位の粗い刷毛目整形である。胴部内面はナデ整形か。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。煤付着。	
222	11号土壇	甕	口径 29.1 高さ 26.2 底径 7.5	前期	口唇部の上下端に小さい刻目を施す。口縁部内面は斜位の粗い刷毛目、外面は全体に粗い刷毛目整形で、内面は板状工具による擦過痕がみられる。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
223	11号土壇	壺	口径 12.0 高さ 30.9 底径 8.1	前期	やや肉厚の口縁部である。口縁部内面から外面は全て横ヘラミガキである。内面の頸部には指圧痕がみられる。胎土に粗砂粒が多い。焼成良好。	
224	12号土壇	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に細い篋による刻目を施す。口縁内面に横位の刷毛目を施し、上部をナデ消す。外面は斜位の粗い刷毛目整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
225	12号土壇	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部片である。内外面とも横ヘラミガキ。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
226	12号土壇	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部片である。口縁部外面が横ナデであるほかは横ヘラミガキ。胎土は粗い砂粒を含む。焼成ややあまい。	
227	12号土壇	壺	口径 高さ 底径 7.1	前期	壺の底部である。内外面とも丁寧なナデ。外面に煤付着。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
228	12号土壇	壺	口径 高さ 底径 7.0	前期	壺の底部である。内外面とも丁寧なナデ。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
229	2号 竪穴	甕	口径 66.0 高さ 底径	中期	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦ナデ整形で、上半部に篋による縦位の細い沈線をいくつも施し、下半部には叩き(幅1.5~2.0cm)が残る。胴部内面は縦・斜位のナデ整形で、刷毛目を消す。工具端部の圧痕が残る。	外面黒塗り
230	溝	甕	口径 高さ 底径 11.5	中期	229 と同一個体でその底部と思われる。内外面とも縦位のナデ整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
231	2号 竖穴	甕	口径 高さ 底径	中期	大型甕の口縁部である。内外面とも横ナデ整形。粘土接合部には指先の強い圧痕が連続する。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
232	2号 竖穴	甕	口径 高さ 底径	中期	外反する口縁の内側に粘土を貼り、内傾気味の平坦口縁部をつくる。器面剥落し、調整不明。胎土に粗砂粒が多い。	
233	溝 下層	壺	口径 14.9 高さ 底径	前期	頸部に篋描き沈線をめぐらす。頸部外面は横ヘラミガキ。他は器面剥落し調整不明。内面には指圧痕が残る。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成良。	
234	溝 下層	壺	口径 13.5 高さ 底径	前期	口頸部外面が縦位であるほかは横位で、いずれも細いヘラミガキ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
235	溝 下層	無頸壺	口径 高さ 底径	前期	無頸壺の口縁部か。内外面とも横ヘラミガキを施す。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
236	溝 下層	壺	口径 高さ 底径	前期	頸部の上下に各3条の篋描き沈線をめぐらし、その間に縦位の3条の沈線をおおむね4ヶ所に施す。口縁部内側に横位の刷毛目。外面の刷毛目は沈線間をナデ消す。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	
237	溝 下層	壺	口径 35.9 高さ 底径	前期	大型品である。頸部に2条の篋描き沈線を施す。口縁部内面に横位の刷毛目を施す。頸部内外面は刷毛目整形の後に横ヘラミガキ。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
238	溝 下層	壺	口径 高さ 底径	前期	壺の口縁部か。口唇部内側に刷毛目工具縁部使用の刻目を、外側に篋による刻目を施す。胎土は粗い砂粒が多い。焼成良。	
239	溝 下層	壺	口径 高さ 底径 6.1	前期	壺の底部で、円板状をなす。外面はヘラケズリ後に丁寧なナデ、内面はナデ整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。	
240	溝 下層	壺	口径 高さ 底径 6.8	前期	壺の底部である。外面はヘラミガキか。内面は丁寧なナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
241	溝下層	壺	口径 高さ 底径 8.1	前期	壺の底部である。外面は細い刷毛目をナデ消す。内面はナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良。	
242	溝下層	壺	口径 高さ 底径 7.7	前期	壺の底部である。外面は斜位の粗い刷毛目、下端は縦位のヘラミガキ。内面はヨコヘラミガキ。胎土に粗い砂粒を含む。焼成良。	
243	溝下層	鉢	口径 15.3 高さ 底径	前期	器壁の厚いものである。内面は丁寧なナデ整形。外面は器面の剝落が著しいが、刷毛目が観察される。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成良。	
244	溝下層	壺	口径 高さ 底径 11.2	前期	壺の底部である。外面は丁寧なナデである。刷毛目工具端部の圧痕がみられ、恐らく刷毛目をナデ消しているものと思われる。内面器面剝落。胎土に粗砂粒多し。焼成良。	
245	溝下層	蓋	口径 高さ 底径 6.2	前期	蓋の天井部である。外面は縦位の粗い刷毛目、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は粗い砂粒が多い。焼成良。	
246	溝下層	蓋	口径 高さ 底径	前期	蓋の小片である。受け部内面から外面全体は横ナデ。内面は横ヘラミガキ。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
247	溝下層	脚	口径 高さ 底径 16.0	前期	器壁の厚い脚部片か。外面はヘラミガキ、内面下位はナデ整形。同上位はヘラケズリ痕が残る。胎土は粗砂粒が多い。焼成堅緻である。	
248	溝下層	甗	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。外面は斜・縦位の刷毛目、内面は横ナデによる整形。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	
249	溝下層	甗	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による細小な刻目を施す。口縁部内面は横ナデ。体部外面は板状工具の擦過痕がみられ、内面は丁寧なナデ整形。胎土に砂粒が多い。焼成良。	
250	溝下層	甗	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に篋による刻目を施す。器面剝落が著しい。胎土に粗砂粒が多い。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
251	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部に篋による刻目を施す。内外面とも丁寧なナデ整形。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。	
252	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端に篋による刻目を施す。口縁内面下位は横位の、外面は縦位の刷毛目整形である。胎土に粗砂粒多い。焼成良好。	
253	溝下層	甕	口径 23.2 高さ 底径	前期	口唇部と胴上半の段部にやや雑な篋による刻目を施す。内外面ともナデ整形。胎土に細砂粒多し。焼成良。	
254	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下端と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁内面に横位の、外面は横・斜位の刷毛目整形を施す。後に突帯を貼り付ける。胎土は粗い砂粒多い。焼成良。外面に煤付着。	
255	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部の上下端と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁下外面に斜位の細い刷毛目を施し、他面は横ナデ整形である。胎土は粗い砂粒が多い。焼成ややあまい。	
256	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	口唇部下端と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁部の内外面は横ナデ。突帯下は斜位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
257	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形の粘土帯を貼り付けた口縁部である。口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。内面はナデ、外面は斜位の刷毛目整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良好。外面に煤付着。	
258	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	断面三角形の粘土帯を貼り付けた口縁でやや内傾する。口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。口縁下に刷毛目が残るがナデ消している。突帯下は横位の刷毛目整形。胎土は粗砂粒多い。焼成良。煤付着。	
259	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	内傾する体部に断面三角形の粘土帯を貼り付け口縁部をつくる。口唇部と胴部突帯に篋による刻目を施す。内外面とも丁寧なナデ整形である。胎土に粗い砂粒が多い。焼成良。外面に煤付着。	
260	溝下層	甕	口径 17.4 高さ 底径	前期	直口縁の下方に断面三角形の突帯を貼り付け、篋による刻目を施す。突帯部および内面は丁寧なナデ。内面は一部横位の刷毛目が残る。外面の突帯下方は縦位の粗い刷毛目整形。胎土は粗砂粒多い。外面煤付着。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
261	溝下層	甕	口径 高さ 底径	前期	直口縁をなす。胴上位に断面三角形の突帯をめぐらす。突帯より上部および内面は横ナデ、突帯より下は縦位のやや粗い刷毛目整形を施す。胎土は粗砂粒含む。焼成良。外面煤付着。	
262	溝下層	甕	口径 22.7 高さ 底径	前期	体部を刷毛目整形した後に粘土を接合し口縁部を造る。接合部が段となって残る。口縁部内面と胴部外面は横位の刷毛目整形。胴部内面には刷毛目工具痕あり、ナデか。胎土は粗砂粒多い。焼成良。外面煤付着。	
263	溝下層	甕	口径 18.4 高さ 18.9 底径 7.0	前期	口縁部内面に横位の、胴部外面に縦位の刷毛目を施す。口頸部外面は横ナデで、刷毛目をナデ消す。胴部内面はナデ整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。口縁下外面に煤付着。	
264	溝下層	甕	口径 10.3 高さ 13.5 底径 6.7	前期	全体に厚手の手捏ね状の土器である。内外面とも丁寧なナデで、外面は刷毛目を消す。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
265	溝下層	甕	口径 高さ 底径 7.7	前期	甕の底部である。外面は細い縦位の刷毛目整形。内面はナデか。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
266	溝下層	甕	口径 高さ 底径 6.7	前期	甕の底部である。外面は縦位の粗い刷毛目整形。内面はナデか。胎土は粗砂粒多い。焼成良。	
267	溝下層	甕	口径 高さ 底径 5.8	前期	甕の底部である。内外面ともナデ整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
268	溝下層	甕	口径 高さ 底径 8.8	前期	甕の底部である。外面は丁寧なナデ整形。底部の孔は焼成後に穿つ。胎土に粗砂粒多し。焼成良。	
269	溝上層	甕	口径 高さ 底径	中期	口縁下に篋描きの沈線をめぐらす。外面は斜位の刷毛目整形で、口縁下をナデ消す。口縁内面は横ナデ。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成良。	
270	溝上層	甕	口径 25.6 高さ 底径	中期	口縁部の内外面は横ナデ。胴部の外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形。胎土に砂粒を含む。焼成良好。外面に煤付着。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
271	溝上層	甕	口径 28.3 高さ 底径	中期	口縁部の内外面は横ナデ。胴部の外面は縦位の刷毛目、内面はナデによる整形。口縁下に稜がつく。胎土は砂粒多し。焼成良。	
272	溝上層	甕	口径 27.0 高さ 底径	中期	口縁部の内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目整形後に3条の篋描き沈線をめぐらす。口縁下の刷毛目はナデ消す。胎土は細砂粒多し。焼成良好。	
273	溝上層	甕	口径 27.2 高さ 底径	中期	口縁部の内外面とも横ナデ。胴部外面は斜位の細い刷毛目整形。内面には刷毛目工具縁の圧痕残るが、ナデ整形である。胎土は細砂粒を多く含む。焼成良。	
274	溝上層	甕	口径 25.1 高さ 底径	中期	口縁部の内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目を施す。内面はナデか。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
275	溝上層	甕	口径 26.5 高さ 底径	中期	口縁の内外面とも横ナデ。胴部外面は、斜・縦位の刷毛目(工具幅約2.3cm)を施す。篋描き沈線は刷毛目整形後に施す。内面はナデ整形。胎土は砂粒が多い。	
276	溝上層	甕	口径 30.2 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁で、口唇部篋ケズリ整形でシャープである。胴部外面は縦位の細い刷毛目である。他は横ナデ整形。胎土は粗砂粒を僅か含む。焼成良。外面に煤付着。	
277	溝上層	甕	口径 33.0 高さ 底径	中期	平坦口縁である。同部内外面は横ナデ整形。胴部外面は細い縦位の刷毛目整形である。短胴の甕形土器か。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
278	溝上層	甕	口径 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁をなす。口唇部上端に部分的にはあるが小さい刻目を施す。口縁部は横ナデ、胴部外面は縦位の刷毛目整形である。	
279	溝上層	甕	口径 34.5 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁である。口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面は縦位の細い刷毛目整形。後に篋による沈線をめぐらす。上部の刷毛目はナデ消すも残る。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
280	溝上層	甕	口径 30.1 高さ 底径	中期	やや内傾する平坦口縁である。口縁部は横ナデ。胴部外面は斜位の細い刷毛目、内面はナデによる整形。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
281	溝上層	甕	口径 31.7 高さ 36.1 底径 6.9	中期	平坦口縁をなす。平坦部の中ほどに粘土接合部を篋で強く押えた跡が凹部となってめぐる。胴部外面は縦位の刷毛目を数段に分け施す。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
282	溝上層	甕	口径 29.0 高さ 底径	中期	内傾する平坦口縁である。胴部外面は縦位の丁寧な刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成良。	
283	溝上層	甕	口径 26.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面の縦位の刷毛目はナデ消されている。胎土は砂粒が多い。焼成良。	
284	溝上層	甕	口径 29.3 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の細い刷毛目を施す。その上部はナデ消されている。胎土に細砂粒が多い。焼成良好。	
285	溝上層	甕	口径 31.1 高さ 底径	中期	やや外傾する平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面は斜位の細い刷毛目で、部分的にナデ消す。内面は口縁下に指圧痕が残り、ナデ整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
286	溝上層	甕	口径 31.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部はナデ。胴部外面は斜位の粗い刷毛目を施す。内面はナデ整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
287	溝上層	甕	口径 32.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面に縦位の細い刷毛目を施し、その上部をナデ消す。内面はナデ整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
288	溝上層	甕	口径 26.3 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の細い刷毛目を施し、その上部をナデ消す。内面は口縁下に指圧痕が残り横ナデ整形。	
289	溝上層	甕	口径 30.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
290	溝上層	甕	口径 33.9 高さ 39.5 底径 7.6	中期	内傾する口縁をなす。口縁部は横ナデ、胴部は外面を縦位の細い刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は粗い砂粒を含む。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
291	溝上層	甕	口径 31.1 高さ 底径	中期	口縁部は横ナデ。胴部外面は、縦位の刷毛目で、その上部をナデ消す。内面はナデ整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
292	溝上層	甕	口径 34.0 高さ 底径	中期	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土に細砂粒が多い。焼成良。	
293	溝上層	甕	口径 33.1 高さ 底径	中期	胴部の張る土器である。胴上部に断面三角形の突帯を貼りつける。突帯下に斜位の刷毛目整形を施すほかは全面ナデによる整形。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
294	溝上層	甕	口径 36.0 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。胴部の形状から鉢形をなす器形かとも思われる。全面横ナデによる整形である。内面に指圧痕が残る。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
295	溝上層	甕	口径 39.0 高さ 底径	中期	胴部に2条の断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。突帯下部が斜位の刷毛目であるほかは横ナデ整形である。突帯部内面は指圧痕が残る。胎土は細砂粒を含むが、焼成良好。	
296	溝上層	甕	口径 39.6 高さ 底径	中期	やや胴部の張る器形を呈す。胴上部に断面M字形の貼付け突帯をめぐらす。突帯の下部に縦位の刷毛目を施し、他は横ナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	
297	溝上層	甕	口径 39.0 高さ 底径	中期	胴部上位に断面M字形の貼付け突帯をめぐらす。突帯下位は縦位の刷毛目を施し、他は横ナデ整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
298	溝上層	甕	口径 18.3 高さ (16.0) 底径 9.2	中期	小型の甕で、底径の大きいものである。口縁部は横ナデ、胴部は内外面とも横ヘラミガキ整形である。胎土は砂粒を含む。焼成ややあまい。	
299	溝上層	甕	口径 14.1 高さ 14.1 底径 8.6	中期	小型の甕で、胴部は樽形をなす。胴中央部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。胴上部の内外面はヘラミガキ、下胴部は器面剥落。胎土は細砂粒を含む。焼成良。	
300	溝上層	甕	口径 高さ 底径 10.6	中期	短胴甕の底部であろう。外面は縦位のヘラケズリ後にナデ、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
301	溝上層	甕	口径 25.0 高さ 底径	中期	やや胴が張り、短胴気味の甕である。口縁部は横ナデ。胴部外面はケズリ後にナデ、内面は横ヘラミガキ整形。胎土は砂粒が多い。焼成あまい。	
302	溝上層	甕	口径 29.1 高さ 底径	中期	口縁下に断面三角形の低い貼付け突帯をめぐらす。口縁部と突帯部まで横ナデ。胴部の内外面はヘラミガキである。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
303	溝上層	甕	口径 26.6 高さ 底径	中期	口縁下に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。口縁部から突帯部は横ナデ。内面と外面下半はヘラミガキ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良。	
304	溝上層	甕	口径 20.9 高さ 底径	中期	胴が大きく張る甕である。胴上部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。口縁部と胴上部外面は横ナデ。胴下半と内面はナデ整形。胎土に粗砂粒を含む。焼成良好。	
305	溝上層	甕	口径 高さ 底径 7.8	中期	外面は縦位の細い刷毛目、内面はナデによる整形。胎土は砂粒が多い。焼成良。	
306	溝上層	甕	口径 高さ 底径 7.2	中期	外面は縦位の細い刷毛目整形。内面は器面剥落。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。	
307	溝上層	甕	口径 高さ 底径 9.4	中期	外面は斜位の刷毛目、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良好。前期に属するものとも考えられる形状を呈す。	
308	溝上層	甕	口径 高さ 底径 7.4	中期	外面は縦位の刷毛目整形。内面は器面剥落。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
309	溝上層	甕	口径 38.9 高さ 底径	中期	器壁が厚くやや大型の甕である。口縁下に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。整形は横ナデで、外面は刷毛目をナデ消している。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
310	溝上層	甕	口径 39.2 高さ 底径	中期	胴部が大きく張り出す器形のもの。口縁部内外面と胴部外面は横ナデ、胴部内面は縦ナデによる整形。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
311	溝上層	甕	口径 43.1 高さ 底径	中期	口縁部の内外面および胴部外面は横ナデ、胴部内面は横ヘラケズリ。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
312	溝上層	甕	口径 29.0 高さ 底径	中期	器壁の厚い土器である。口縁部は横ナデ、胴部内外面とも横ヘラミガキ。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
313	溝上層	壺	口径 14.6 高さ 18.0 底径 5.0	中期	平坦口縁をなす。胴部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。口縁部と胴内面を横ナデ。頸部外面は縦位の、内面と胴外面は横位のヘラミガキ整形。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
314	溝上層	壺	口径 18.8 高さ 底径	中期	やや外傾する短い平坦口縁部をつくる。頸部に篋状工具による押圧沈線がある。胴部には断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。内外面とも横ナデ整形で、胴部内面下方はケズリ痕が残る。胎土は砂粒が多い。	
315	溝上層	壺	口径 11.3 高さ 13.6 底径 5.3	中期	直口縁の壺である。胴部に断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。突帯下の胴部外面が縦ヘラミガキであるほかは横ナデ整形である。胎土は粗砂粒を含む。焼成良。	
316	溝上層	壺	口径 32.9 高さ 底径	中期	平坦口縁をなす。全面横ナデによる整形。口縁平坦部から外面は黒塗りである。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	黒塗り
317	溝上層	壺	口径 31.6 高さ 底径	中期	平坦部の中ほどがやや凹む口縁部である。内外面ともナデ整形である。頸部外面には篋による暗文を全面に施す。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
318	溝上層	壺	口径 29.1 高さ 底径	中期	平坦口縁をつくる。全面横ナデによる整形である。胎土は細砂粒が多い。焼成良。	
319	溝上層	壺	口径 25.4 高さ 底径	中期	外傾する平坦口縁部をつくる。内外面とも横ナデ整形。口縁平坦部から頸部外面は黒塗りである。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	黒塗り
320	溝上層	壺	口径 24.9 高さ 底径	中期	平坦部が内側に伸びる口縁部である。口縁部と頸上部内外面は横ナデ、頸下部内面は縦ナデ整形である。胎土は粗砂粒が多い。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
321	溝上層	壺	口径 34.6 高さ 40.0 底径 8.5	中期	平坦状をなす口縁は特徴あるもので、内傾の張り出しが高くなっている。全体に器面の剥落が著しいが、頸部および胴上部外面は横ナデ整形。外面は黒塗るか、部分的にみられる。胎土は粗砂粒多し。焼成良好。	
322	溝上層	壺	口径 28.4 高さ 底径	中期	軽く外反する口縁部である。口縁部および頸部内面は横ナデ。頸部外面はヘラミガキ整形か。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
323	溝上層	壺	口径 25.8 高さ 底径	中期	大きく外反する口縁部である。頸部内面は横ヘラミガキ、口縁部から頸部外面は横ナデ整形である。頸部には粗い篋による暗文を全面に施す。胎土は細砂粒を含む。焼成良好。	
324	溝上層	壺	口径 高さ 底径	中期	壺の胴部片である。2条の断面三角形の貼付け突帯がある。外面は横ヘラミガキ、突帯部は横ナデ整形である。胎土に粗砂粒若干含む。焼成ややあまい。	
325	溝上層	壺	口径 27.4 高さ 底径	中期	口頸部の内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ整形。頸部には粗く雑な篋描き暗文を施す。暗文は小片であるが、全面に施すものであろう。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
326	溝上層	壺	口径 27.1 高さ 底径	中期	口頸部の内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ整形。頸部には11条前後を1単位とし5ヶ所ほどに篋描き暗文を施す。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
327	溝上層	壺	口径 27.7 高さ 底径	中期	口頸部の内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ整形である。頸部には15条前後とする篋描き暗文を6ヶ所に施す。胎土は細砂粒が多い。焼成良好。	
328	溝上層	壺	口径 38.3 高さ 底径	中期	口頸部の上部内外面とも横ナデ、下部内外面ともナデ整形である。胎土は砂粒多い。焼成堅緻。	
329	溝上層	壺	口径 高さ 底径 8.4	中期	胴部に2条の断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。器面の剥落が著しい。外面はヘラミガキ整形か。胎土は粗砂粒が多い。焼成あまい。	
330	溝上層	壺	口径 高さ 底径 9.8	中期	頸部に断面三角形の、胴部にM字形の貼付け突帯をめぐらす。胴上部外面と頸部内面はやや粗い横ヘラミガキ。胴下部外面は縦ヘラミガキ。頸部は打ち欠いたようである。胎土は粗砂粒多い。焼成ややあまい。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
331	溝上層	壺	口径 28.1 高さ 底径	中期	頸部内面と胴部外面は横ヘラミガキ。頸部外面と胴部内面はナデ整形である。頸部には篋による幅2.5mmの暗文を全面に施す。胴部には5条を1単位とする篋描き沈線を4ヶ所に施す。胎土は粗砂粒が多い。	
332	溝上層	壺	口径 高さ 底径	中期	器面の剥落が著しく調整不明。胴部に断面M字形の貼付け突帯をめぐらす。肩部に4条を1単位とする篋描き沈線を6ヶ所に施す。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
333	溝上層	壺	口径 高さ 底径	中期	壺の胴部である。断面M字形の貼付け突帯をめぐらす。肩部は横ヘラミガキ後に鋭く細い6条の沈線を描く。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成良。	
334	溝上層	壺	口径 33.2 高さ 底径	中期	内外面とも横ヘラミガキ。外面に篋による細い暗文を全面に施す。内外面とも丹塗り。胎土は砂粒を含む。焼成ややあまい。	丹塗り
335	溝上層	壺	口径 34.2 高さ 底径	中期	頸部の内外面および胴部外面は横ヘラミガキ。胴部内面はナデ整形。頸部に篋による暗文を全面に施す。内外面とも丹塗り。胴部の突帯は剥落。胎土は細砂粒を含む。焼成ややあまい。	丹塗り
336	溝上層	壺	口径 31.5 高さ 底径	中期	内外面とも器面剥落し調整不明。胎土は粗砂粒が多い。焼成あまい。	
337	溝上層	壺	口径 高さ 底径 5.7	中期	壺の底部。外面はヘラミガキ整形か。内面はナデ整形。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
338	溝上層	壺	口径 高さ 底径 6.4	中期	壺の底部。外面は縦位のヘラミガキ、内面はヘラケズリ整形。胎土は砂粒が多い。焼成堅緻。	
339	溝上層	壺	口径 高さ 底径 6.3	中期	壺の底部。器面剥落が著しい。外面はヘラミガキ整形か、丹塗りである。胎土は細砂粒を含む。焼成ややあまい。335の底部か。	丹塗り
340	溝上層	壺	口径 高さ 底径 6.6	中期	壺の底部。外面は縦位のヘラミガキ、内面はナデ整形。内面には指先圧痕が残る。胎土は砂粒を含む。焼成良。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
341	溝上層	壺	口径 高さ 底径 7.0	中期	壺の底部。外面は縦位のヘラミガキ、内面は丁寧なナデ整形である。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
342	溝上層	壺	口径 高さ 底径 11.4	中期	壺の底部。胴部および底部の内外面は横ヘラミガキ、胴部外面は縦位のヘラミガキである。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
343	溝上層	無頸壺	口径 12.0 高さ 底径	中期	口縁の平坦部に、対称な位置に各2個の孔を穿つ。紐掛け用と思われる。孔は焼成前に上から穿つ。器面の剝落が著しく調整不明。胎土は粗砂粒が多い。焼成あまい。	
344	溝上層	無頸壺	口径 17.5 高さ 15.0 底径 6.8	中期	内傾する口縁の平坦部に、対称な位置に各2個の孔を穿つ。孔は焼成前に上から穿つ。内面はナデ整形。外面は器面剝落し調整不明。胎土は砂粒が非常に多い。焼成ややあまい。	
345	溝上層	無頸壺	口径 18.2 高さ 底径	中期	内傾する口縁の平坦部の対称的な位置に各2個の孔を穿つ。孔は焼成前に上から穿つ。器面剝落し調整不明。胎土は粗砂粒を若干含む。焼成ややあまい。	
346	溝上層	蓋	口径 18.0 高さ 4.7 底径 4.2	中期	対称的な位置に各2個の孔を焼成前に穿つ。343～345の土器群とセットになる土器か。内外面とも器面剝落し調整不明。胎土は粗い砂粒を含む。焼成不良。	
347	溝上層	蓋	口径 18.3 高さ 4.6 底径 3.6	中期	対称的な位置に各2個の孔を穿つ。孔は焼成前に上から穿つ。器面剝落が著しく調整不明。胎土は砂粒が多い。焼成あまい。	
348	溝上層	蓋	口径 高さ 底径 6.2	中期	蓋の天井部である。外面は縦位の刷毛目、内面はナデ整形である。胎土は砂粒を含む。焼成良好。	
349	溝上層	蓋	口径 27.2 高さ 9.0 底径 5.8	中期	外面は縦位の刷毛目を施し、下部はナデ消す。内面下部は横位の刷毛目整形である。胎土は粗砂粒を含む。焼成良好。	
350	溝上層	鉢	口径 10.4 高さ 6.1 底径 5.4	中期	小型の鉢である。内外面横ナデ整形。断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。胎土は砂粒を含む。焼成堅緻。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
351	溝上層	鉢	口径 9.0 高さ 底径	中期	小型の鉢である。内外面とも横ナデ整形である。断面三角形の貼付け突帯をめぐらす。胎土は細砂粒を若干含む。焼成良好。	
352	溝上層	浅鉢	口径 19.6 高さ 底径	中期	浅鉢か。内外面とも横ナデ整形。胎土に細砂粒を多く含む。焼成良。	
353	溝上層	浅鉢	口径 19.0 高さ 底径	中期	浅鉢か。口唇部は若干段がつく。内外面とも横ナデ整形である。胎土は細砂粒を含む。焼成良好。	
354	溝上層	浅鉢	口径 17.0 高さ 底径	中期	浅鉢か。内外面とも丁寧なナデの上、丹塗り。脚がつくものか。胎土は粗い砂粒を若干含む。焼成ややあまい。	
355	溝上層	高坏	口径 26.7 高さ 底径	中期	坏部のやや歪つなもの。坏部内外面は横ヘラミガキ。脚は縦位のヘラミガキ。脚内面は篋状工具の圧痕あり。坏部と脚部の接合状態がよくわかる。胎土は粗砂粒が多い。焼成ややあまい。	
356	溝上層	高坏	口径 高さ 底径	中期	高坏の脚である。外面は縦位のヘラミガキ。内面は篋状工具の圧痕が残り、ナデによる整形。胎土は砂粒多し。焼成良好。	
357	溝上層	高坏	口径 高さ 底径	中期	高坏の脚である。上部に断面M字形の突帯をめぐらす。外面は縦位のヘラミガキ、内面は篋状工具の圧痕あり、ナデ整形である。坏部底はヘラミガキ。丹塗りである。胎土は砂粒が多い。焼成ややあまい。	
358	溝上層	器台	口径 9.6 高さ 17.6 底径 11.2	中期	外面は細い縦位の刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面はナデ整形。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
359	溝上層	器台	口径 10.4 高さ 17.2 底径 11.2	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、上下端はナデ消す。内面は板状工具によるケズリか。工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
360	溝上層	器台	口径 10.0 高さ 16.8 底径 11.2	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面は板状工具によるケズリか、工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	

(単位 cm)

番号	出土遺構	器種	法量	時期	特徴	備考
361	溝上層	器台	口径 9.6 高さ 17.7 底径 10.7	中期	外面は縦位の刷毛目整形で、上下端はナデ消す。内面は板状工具によるケズリか、工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
362	溝上層	器台	口径 9.8 高さ 16.4 底径 10.5	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面は板状工具によるケズリか、工具痕あり。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
363	溝上層	器台	口径 高さ 底径 11.7	中期	外面は縦位の細い刷毛目整形で、上下端をナデ消す。内面は中央を起点にナデあげ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
364	溝上層	器台	口径 高さ 底径 10.4	中期	外面は縦位の粗い刷毛目整形で、下端はナデ消す。内部下方に刷毛目が施されているが、その上部は板状工具によるナデ整形。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
365	溝上層	器台	口径 6.4 高さ 13.6 底径 7.6	中期	外面は粗いヘラケズリ後に縦位のヘラミガキ、上下端と内面はナデ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良好。	
366	溝上層	器台	口径 7.0 高さ 12.0 底径 7.4	中期	外面は粗いヘラケズリの後にナデ整形。内面はナデあげ整形である。胎土は砂粒が多い。焼成良。	
367	溝上層	器台	口径 6.0 高さ 12.2 底径 8.4	中期	内外面ともナデ整形であるが、外面は前段階に粗いヘラケズリを施す。胎土は砂粒が多い。焼成良。	

(5) 土製品 (第92図22~32)

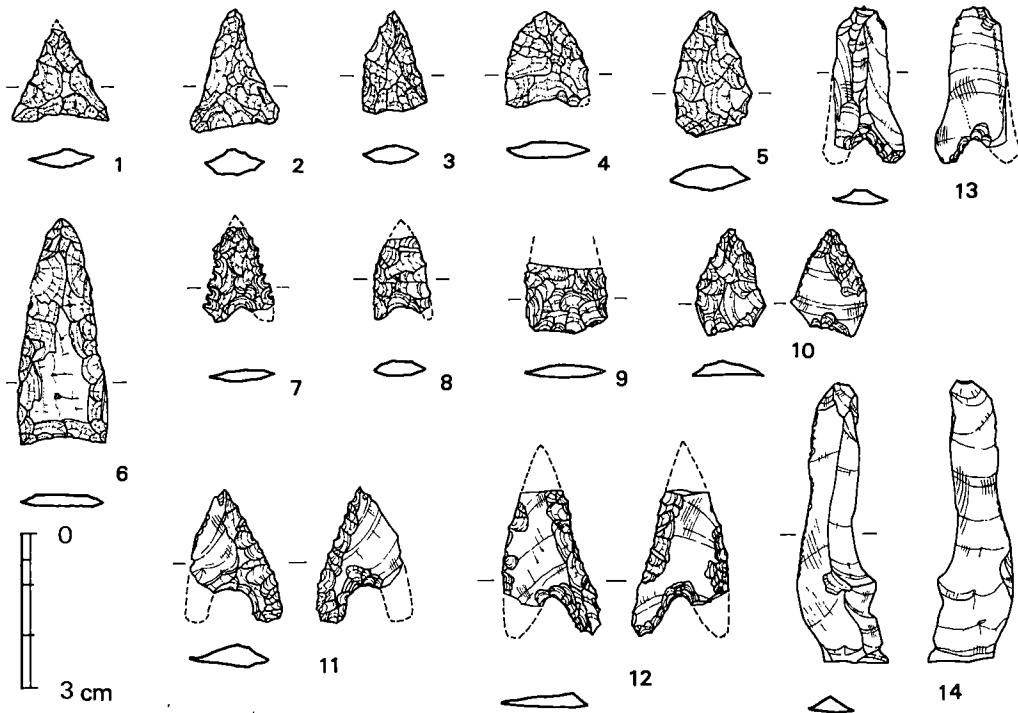
遺跡全体の各遺構出土の土製品を一括して記す。ミニチュアは、鉢或いは蓋かと思われるもの(22), 高坏の模造品(23), 高坏或いは器台(24)がみられ, 25も土製管玉の可能性ある。殊に24・25は2号竖穴の甕棺様遺構から出土したもので, 既述の如く埋葬遺構とも判然としない特殊な類であり, 打ち欠いた甕棺を不使用の事情のために投棄した際の祭祀的行為の所産であろうとも想像される。26は唐古遺跡例の如く, 頂部に撮状突起を有する前期蓋形土器であろう。

紡錘車は全て土製で, 大小あるが, 前期の所産であろう。夜臼式, 板付Ⅰ・Ⅱ式を出土する今川遺跡における紡錘車は, 平均45gで, 本遺跡では10.6gの小型を除くと平均31.7gとなり径においても小さくなる傾向にある。

(6) 石器 (第90~93図)

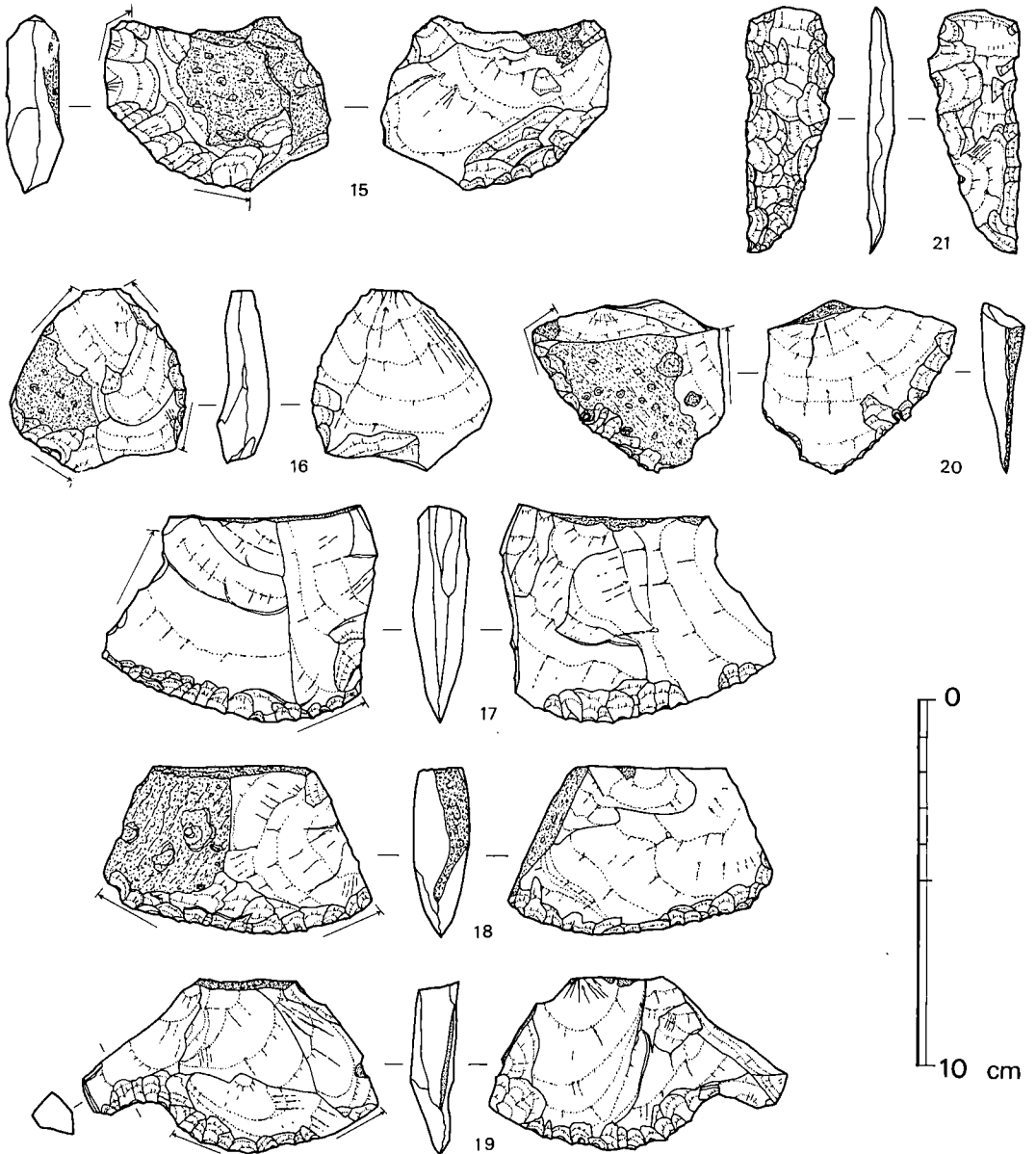
打製石鏃はサヌカイト製と黒曜石製とがあり, 三角形鏃の丁寧な調整のもの(1~5), 扁平長型のもの(6), 鋸歯状鏃(7), 剥片鏃(10~13)などがある。縄文後期土器の出土もあり, 縄文期の鏃も7を始め幾らか数えられるようである。

サヌカイト製の自然粗面を多く残し刃部のみ調整の雑なスクレイパーもかなりみられ, 北九州地方における弥生前期各遺跡の出土状況と同様である。19のようなつまみ状の突起部をもつものもあり, 縦形に使用されたものであろう。

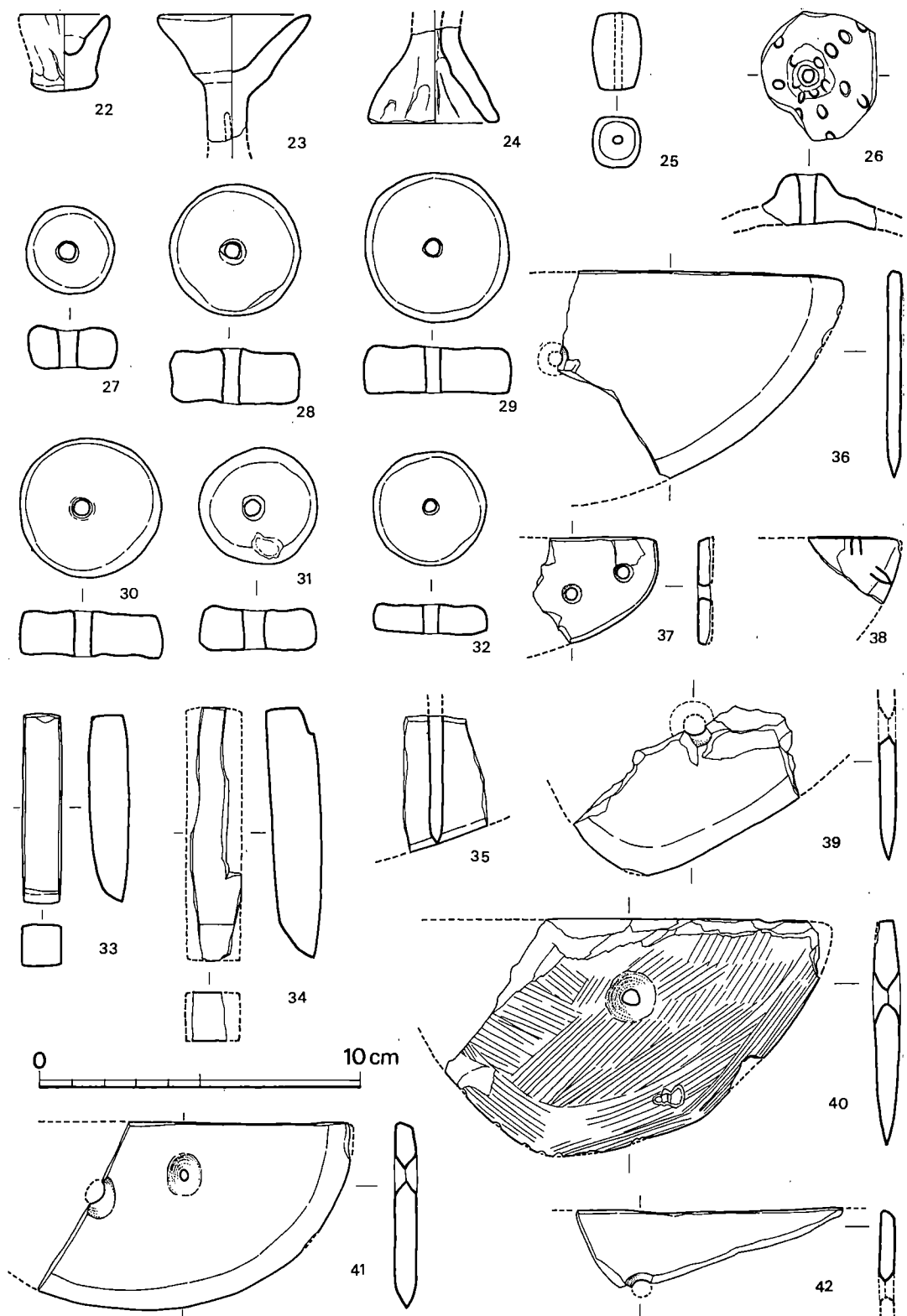


第90図 石 鏃 実 測 図 (2/3)

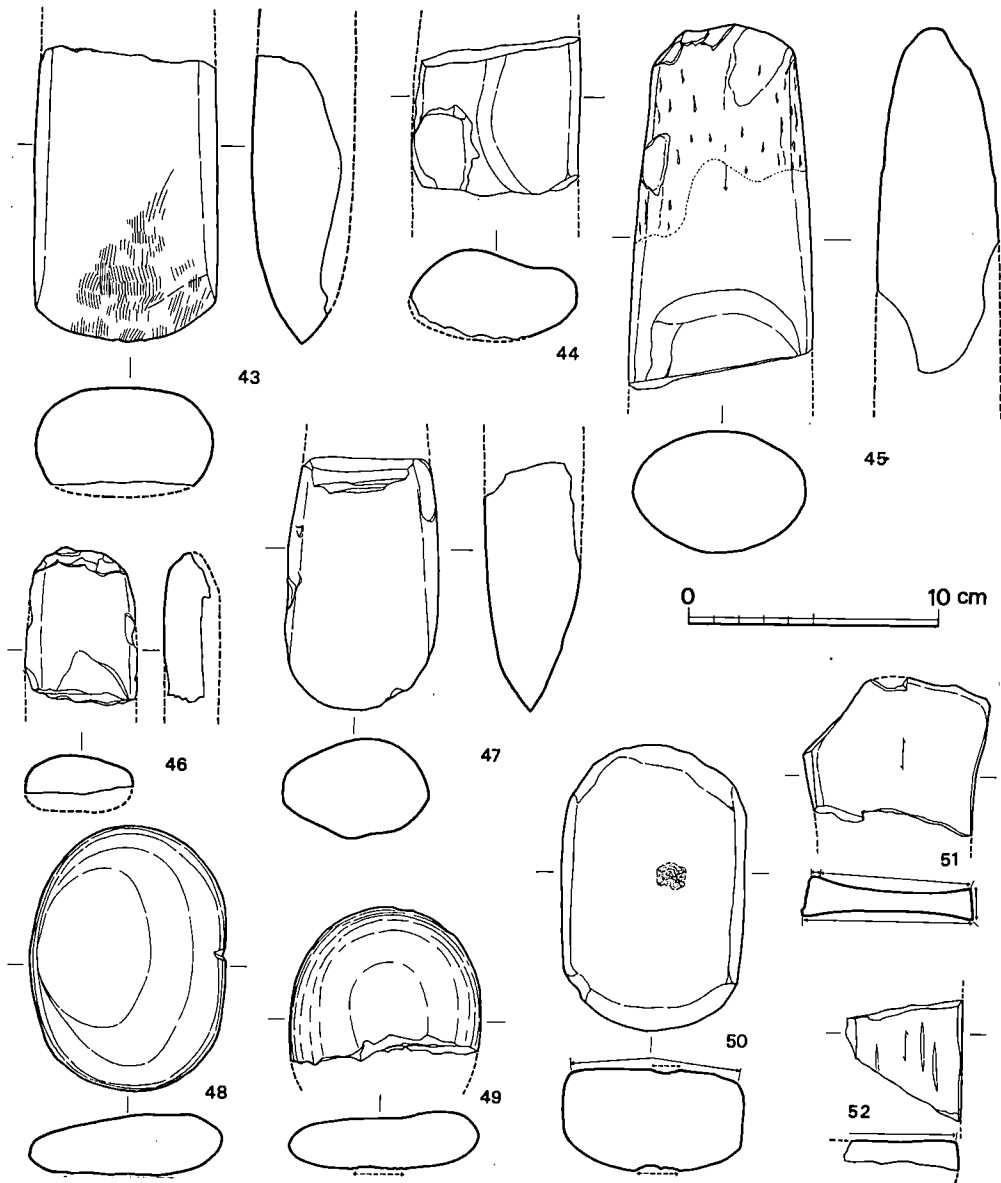
柱状片刃の石のみ状石器は、精製で2例ともに前期に伴うものである。石包丁は、8点出土したが、39・40の如く1孔で三角形気味となるものがみられ、より古相を感じる。これらを出土した11号土壌は前期板付Ⅱ式の中でも胴の張らない古式の甕を伴っており、石包丁の時期も決まる。石包丁全体として前期のものであり、37も共伴遺物より前期後半の再加工したものである。



第91図 スクレイパー実測図 (1/2)



第 92 图 土製品・磨製石器実測図 (1/2)



第 93 図 石斧・磨石・砥石実測図 (1/3)

磨製石斧は、43・45の今山産玄武岩太型蛤刃のもので、43は前期貯蔵穴中出土で、45は溝上層出土であるが43と異なり表面風化しており、中期前半の土器群と伴なうとは断言出来ない。他の蛤刃石斧は伴なう土器より前期の所産と考えられ、47のように使用による剝落後研ぎ直して歪つとなるものもみられる。

以上の石器類は、磨製石器を中心として殆んど弥生前期後半に属するものである。器種組成は扁平片刃石斧、挟入柱状石斧等がみられない他は北部九州弥生前期各遺跡の状況とほぼ同様

第5表 石器・土製品一覧表

(単位 cm, g)

番号	出土遺構	器種	材質	法量			特徴
				長(高)	幅(径)	重量	
1	30号貯蔵穴	打製石鏃	サヌカイト	(1.8)	1.85	(0.8)	裏面をもわりと丁寧調整
2	溝下層	〃	〃	2.4	1.75	1.8	裏面は幾らか粗く調整
3	〃	〃	〃	1.95	1.25	0.7	〃
4	表土中	〃	〃	1.85	1.6	0.9	裏面もわりと粗い調整
5	溝下層	〃	〃	2.4	1.5	1.8	・基部は未調整 ・裏面は原剥離面を残す
6	22号貯蔵穴	〃	〃	4.4	1.75	2.8	裏面も原剥離面を残す
7	3号住居跡	〃	黒曜石	(1.8)	1.4	(0.5)	・裏面も丁寧調整 ・鋸歯状となる
8	溝下層	〃	〃	(1.55)	(1.1)	(0.55)	裏面も同様やや粗い調整
9	36号貯蔵穴	〃	〃	(1.3)	1.6	(0.7)	裏面はより粗い調整のまま
10	31号貯蔵穴	〃	〃	2.05	1.4	0.55	剥片鏃
11	溝下層	〃	〃	2.6	(1.8)	(1.2)	〃
12	溝上層	〃	〃	(2.8)	(1.9)	(1.2)	〃
13	36号貯蔵穴	〃	〃	2.9	(1.35)	(1.1)	未製品
14	12号土城	石刃	〃	5.4	1.5	2.4	片側縁に使用痕あり
15	44号貯蔵穴	スクレイパー	サヌカイト	4.7	6.1	48.0	自然粗面大きく残す
16	6号土城	〃	〃	4.9	4.8	27.8	自然粗面幾らか残す
17	9号土城	〃	〃	5.9	7.5	57.9	上面のみ自然粗面
18	1号竪穴	〃	〃	4.6	7.3	52.3	自然粗面大きく残す
19	溝上層	〃	〃	4.7	8.0	43.9	つまみ状部を有する
20	溝下層	〃	〃	4.6	5.3	18.8	自然粗面大きく残す
21	10号貯蔵穴	〃	〃	6.1	2.4	11.3	縦長型
22	4号住居跡	ミニチュア	土製品	2.4	2.8		・手捏ね、淡褐色 ・蓋の模造品か
23	12号土城	〃	〃	(3.9)	4.8		・淡褐色 ・高環の模造品か
24	2号竪穴	〃	〃	(3.0)	4.1		・白褐色 ・器台・高環の模造品か
25	〃	土錘	〃	2.4	1.5	5.8	・或いは土製管玉か ・暗褐色
26	溝下層	蓋	土器	—	—		中心から六方へ放射状に竹管状刺突連点文施す
27	2号住居跡	紡錘車	土製	2.7	1.3	10.6	白褐～淡褐色
28	27号貯蔵穴	〃	〃	4.0	1.7	31.7	孔が中心より片寄る
29	7号貯蔵穴	〃	〃	4.6	1.5	41.0	〃
30	溝下層	〃	〃	4.4	1.4	33.5	〃
31	〃	〃	〃	3.7	1.3	21.3	〃

32	表土中	紡錘車	土製	3.5	0.9	13.6	孔が中心より片寄る
33	29号貯蔵穴	石のみ	粘板岩	5.9	1.2	19.6	
34	41号貯蔵穴	〃	硅質シルト岩	7.9	(1.6)		基部裏面に段をつくる
35	30号貯蔵穴	石包丁	頁岩質	(2.6)	(4.2)		
36	32号貯蔵穴	〃	安山岩質凝灰岩	(8.9)	(6.4)		風化著しい
37	47号貯蔵穴	〃	〃	(3.7)	(3.3)		2孔あり、刃部無し
38	〃	〃	〃	(2.9)	(2.1)		風化著しい
39	11号土壙	〃	〃	(7.2)	(5.5)		・1孔の可能性あり ・40と同類か
40	〃	〃	小豆色、凝灰岩 ホルンフェルス	(11.5)	7.3		1孔 三角形状をなす
41	溝上層	〃	安山岩質凝灰岩	(9.7)	5.8		風化著しい
42	溝下層	〃	硬質砂岩	(8.3)	(2.4)		〃
43	24号貯蔵穴	太形蛤刃石斧	玄武岩	(11.7)	7.4		擦痕残る
44	29号貯蔵穴	蛤刃石斧	硬質砂岩	(6.4)	6.7		
45	溝上層	太形蛤刃石斧	玄武岩	(14.5)	7.4		基部は敲打面残す
46	溝下層	蛤刃石斧	凝灰岩	(6.2)	4.4		風化著しい
47	48号貯蔵穴	〃	硬質砂岩	(10.0)	6.0		全体にやや歪つ
48	6号貯蔵穴	磨石	凝灰岩	10.5	7.8		
49	溝上層	〃	玄武岩	(6.3)	7.6		裏面中央には敲打痕あり
50	〃	〃	凝灰岩	11.3	7.3		・上面のみ磨面 ・両面中央に敲打痕あり
51	44号貯蔵穴	砥石	砂岩	(6.3)	7.3		・中砥 ・表裏とも極めて良く使用
52	30号貯蔵穴	〃	〃	(5.0)	(4.5)		粗砥

である。当遺跡中の古式段階より更に一段階古い土器群と夜臼式土器群がみられる津屋崎町今川遺跡においては、有茎磨製石鏃、局部磨製石斧等の当遺跡にみられないものが多く出土し、反対に今川遺跡にみられないものでは石包丁、磨製蛤刃石斧が特徴的であり、両者の時期的な差が明確に示されている。これらは、今川期における狩猟・漁撈の優越性を示し、本遺跡における稲作普及後の状況をも示すものかとも考えられ、或いは石包丁の有無等は立地的な背景による違いも若干あるかとも考えられる。

(7) 縄文土器 (第94～97図)

遺跡の北半部の住居跡・貯蔵穴等の集中している地域で、各遺構、包含層中に混入してかなりの量の縄文土器片が出土した。かなりの数の遺構の中にほぼまんべんなく少量ずつ混入した状態で、縄文期の遺構としては検出されていない。弥生期の遺構により壊滅したものか、また周辺の路線外の部分に中心が在るのかとも推定される。以下各類毎に順を追って記述してゆく。

1～5は、北久根式の特徴をもつ、口縁部の装飾及び突起部分である。1は、鳥嘴の如く先端が尖り、上面に刺突文を施す異様な形態をとる口縁装飾である。側面の沈線の状況から、鐘ヶ崎式的な特徴がみられるが、山鹿貝塚X類(月崎上層I)の系譜をひくものかと考えられる。2は北久根式に特徴的な肥厚した突起部分に直線的な短沈線を施すもので、3は突起頂部を凹状に窪ませたものである。4は口縁上に粘土紐を三つ組み状に組んで付けたもので、5は山形突起部で上端に斜めの短い押圧痕をみせる。5は突起部分のみがこぶ状となり他部口縁は肥厚しないと推定され、やや先行する1～4の概して北久根式の特徴をもつものと比べ、若干の退化形態と考えられる。

6～9は、口唇部に短い斜めの押圧痕を施すもので、北久根式の退化した、山鹿貝塚X類に類するものである。6は外面に曲線沈線文がみられ、鐘ヶ崎式の系譜を残す。7の外面には粗い横位条痕を残す。9も内面に条痕を残す。孰れも頸部で屈折して開く広口状の形態となるものである。

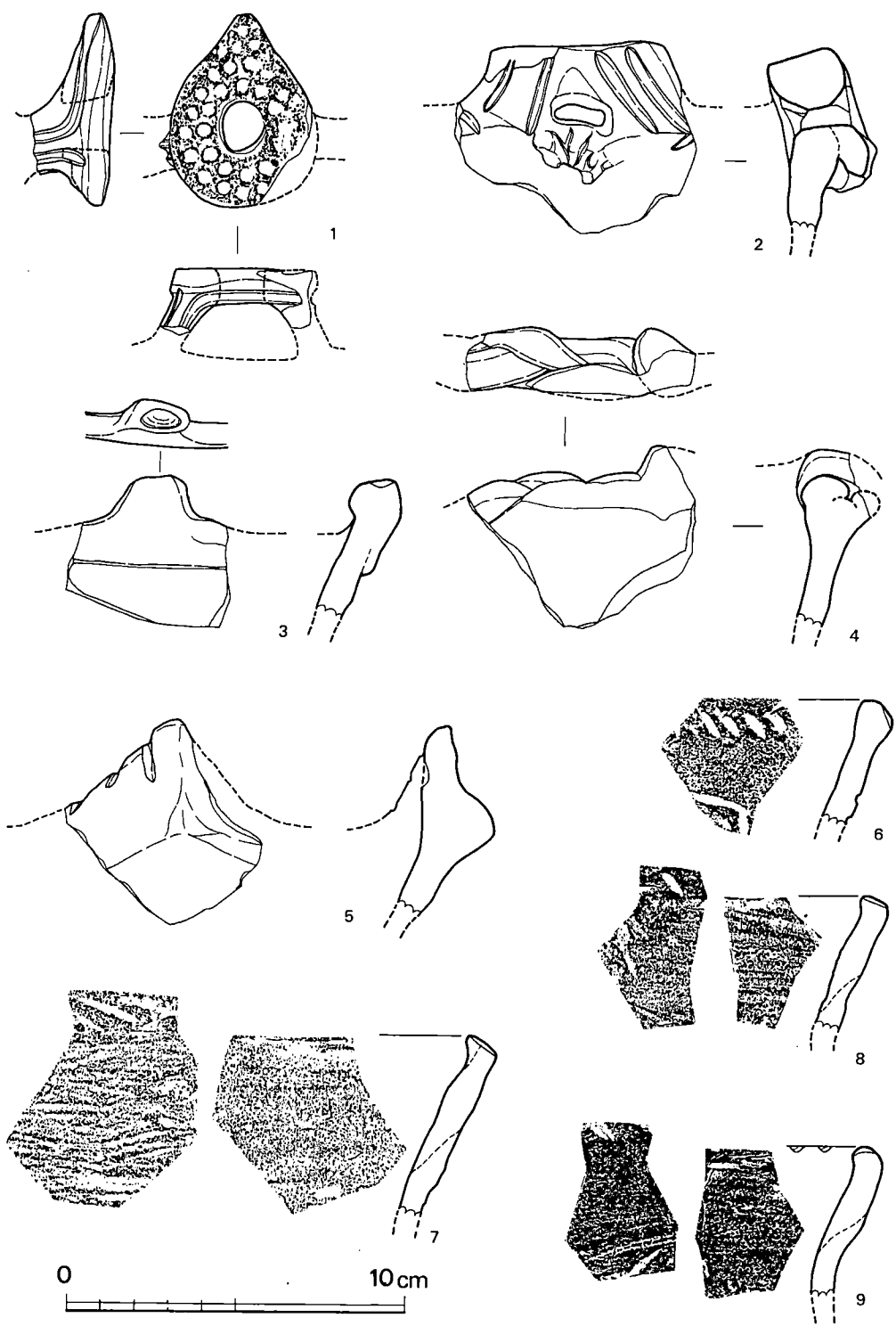
10～17は、磨消縄文系の鐘ヶ崎式の新期から西平式との中間の様相をみせるものである。10は口縁部が波状となり、その外端面に二条の沈線をめぐらし、その間に刺突状押圧痕を施す。上・下に縄文を、中位を磨消すものである。11は一条の沈線を施す。12は口縁の外面に二条の沈線を施し、その間には粗い目の縄文が残る。15はやや太めの沈線が三条みられる。13・14は沈線間に細かい縄文が施され、未だ鐘ヶ崎式的タイプを残す。16は曲線間に僅かに縄文を残すが、文様構成からみて、西平式にもなりきっていない。17は内面に横位条痕を残し、外面に沈線のみを施す。これらのグループは全体としての時期としては北久根式の新期から西平式直前にかけてのものと考えられよう。

18・19は、既述のグループに属さないもので刺突文を特徴とする。18は交叉する沈線間に竹管状の刺突文を施すものである。類例に乏しいが、宮崎県下弓田遺跡出土品に若干類似するものがある。19はやや肥厚させた口縁上端に竹管状の刺突連点文を深く施すものである。最初に記したグループの北久根式の退化した形態の一種かとも推定されるが、判然としない。

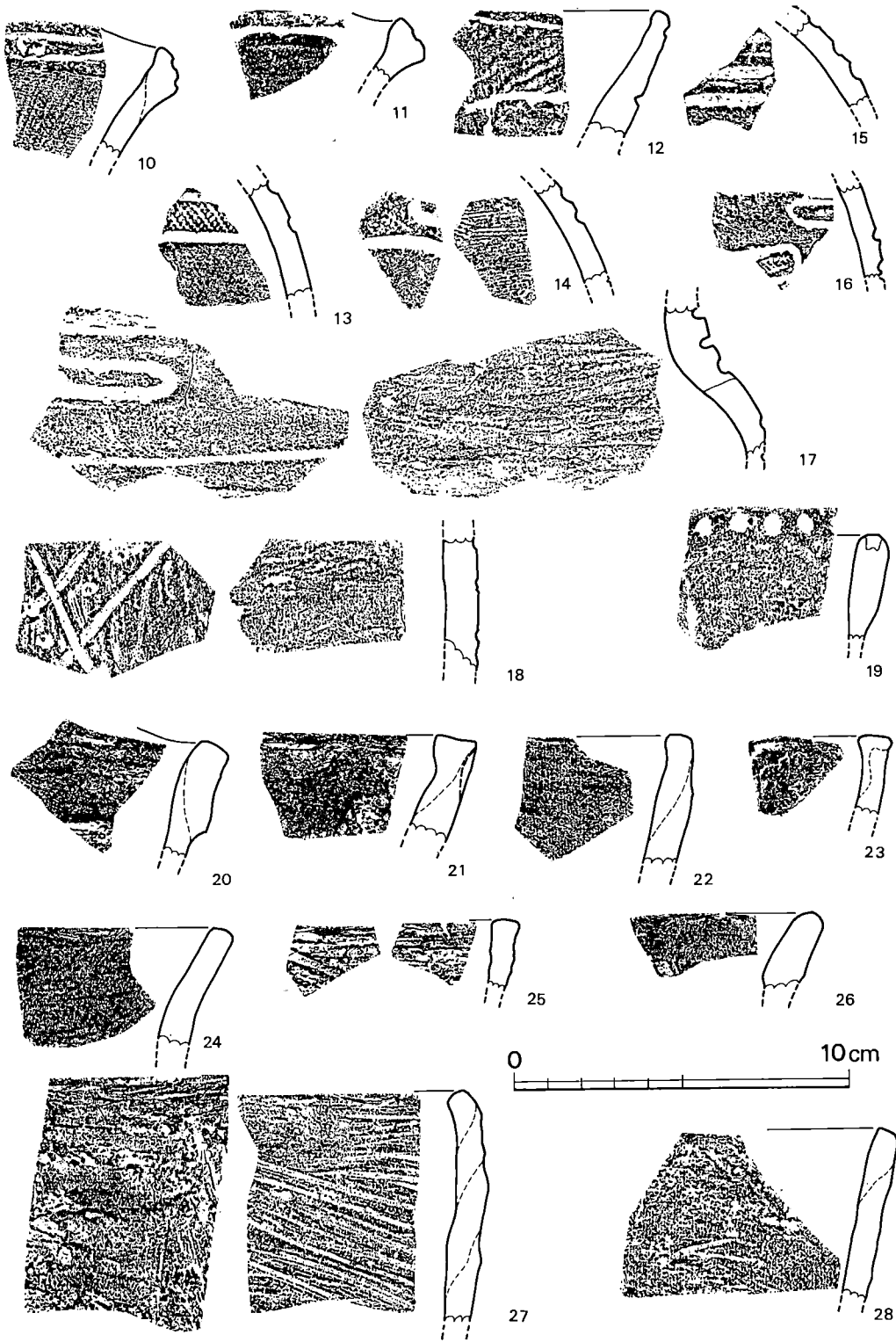
20～26は素文の口縁をまとめたが、前記グループに含まれるものや、粗製土器となるものもある。20は肥厚させた口縁が波状となるもので、山形口縁となる5のようなタイプの一部となる可能性もある。21は厚手で上面を平坦につくり、口縁直下外面に指押圧痕が認められるが、文様となるかどうかは不明である。25は内外面に条痕を施し、26と共に粗製土器となろう。

27～34は粗製土器口縁部である。口縁下は横位に条痕を施すものが多い。27・30・32のように口縁端部が僅かに内湾気味となるもの、28・31のように直線的に開くものなどがある。29は口縁端を欠き明確ではないが、山形口縁となる可能性がある。

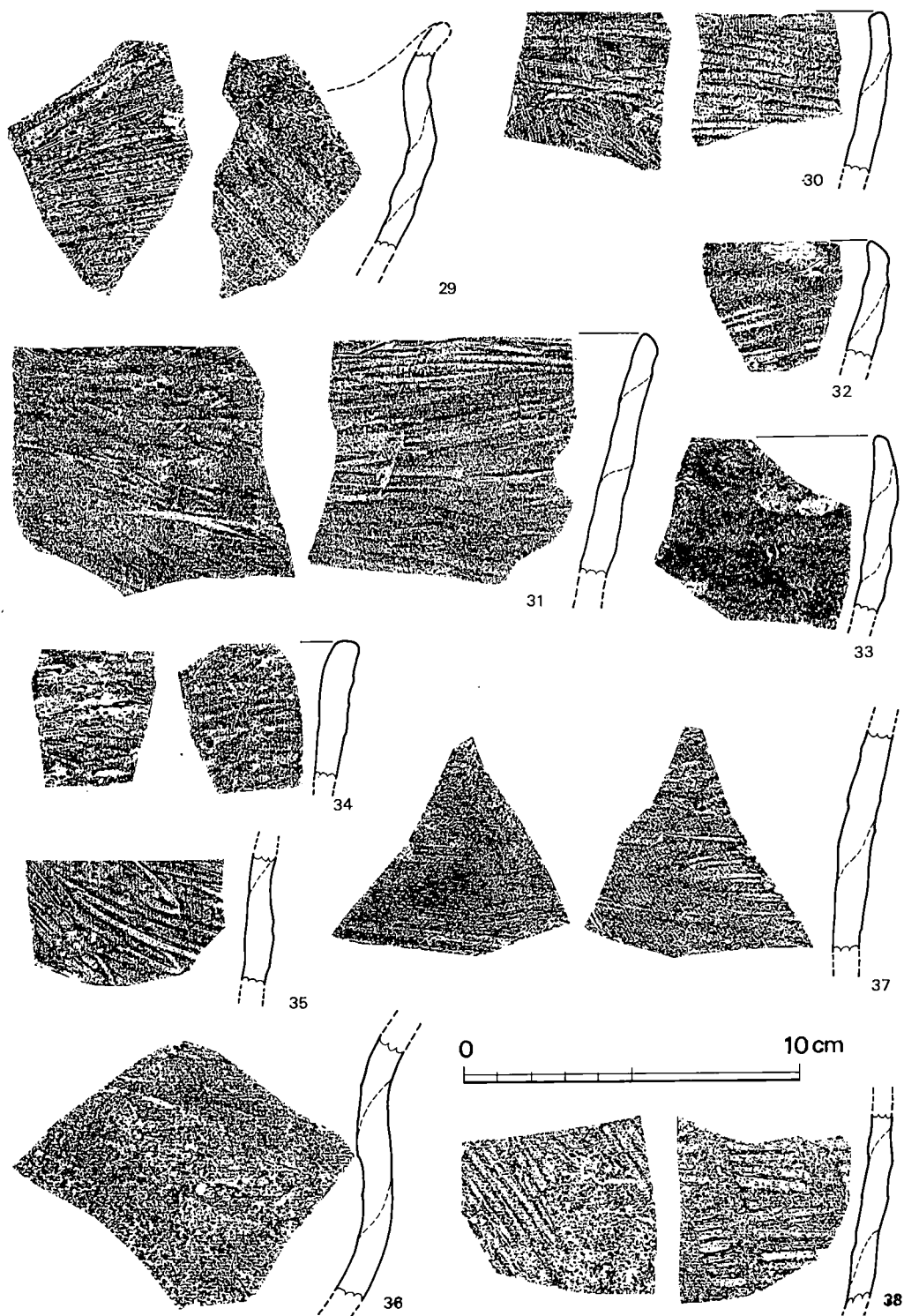
35～40は粗製土器胴部片としたものである。36は丸く屈曲反転して開くもので、39のように粗大な条痕を施すものもみられる。外面に煤が付着するものが多く、煮沸に使用されたことが



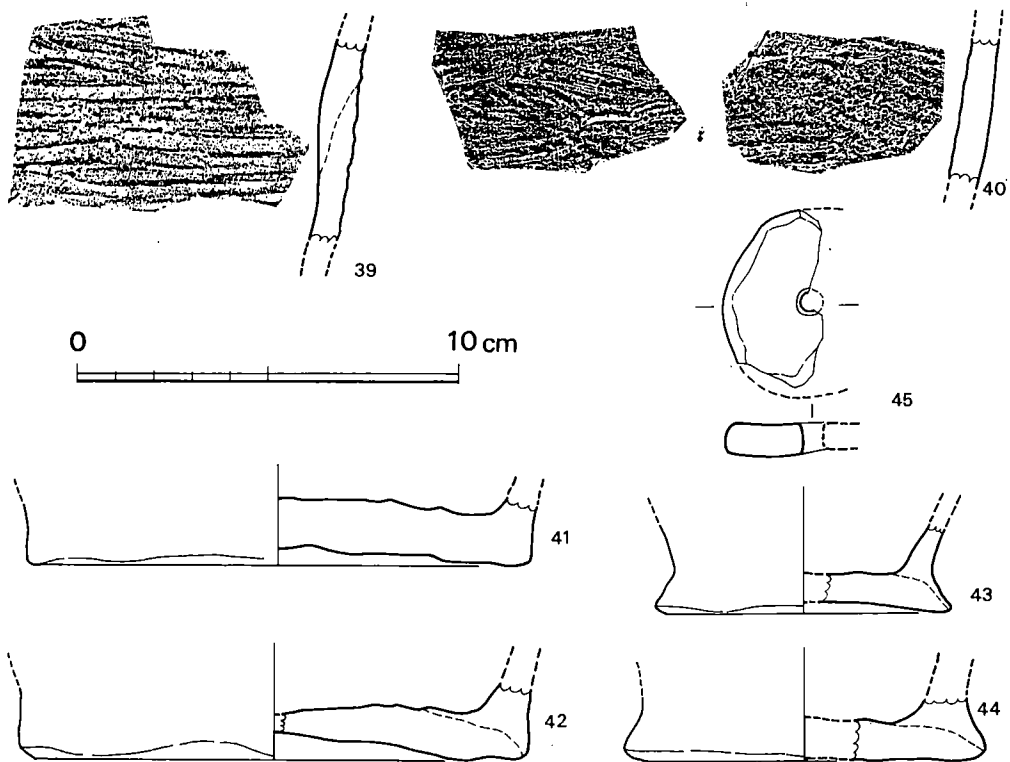
第 94 図 縄文土器'実測图 1 (1/2)



第 95 図 縄文土器実測図 2 (1/2)



第 96 図 繩文土器実測図 3 (1/2)



第 97 図 縄文土器実測図 4 (1/2)

わかる。

41～44は底部片で、孰れも平底で、僅かに全体に上げ底となるものが多い。底外面は凹凸著しい指オサエナデ、全体に雑な作りのものが多い。

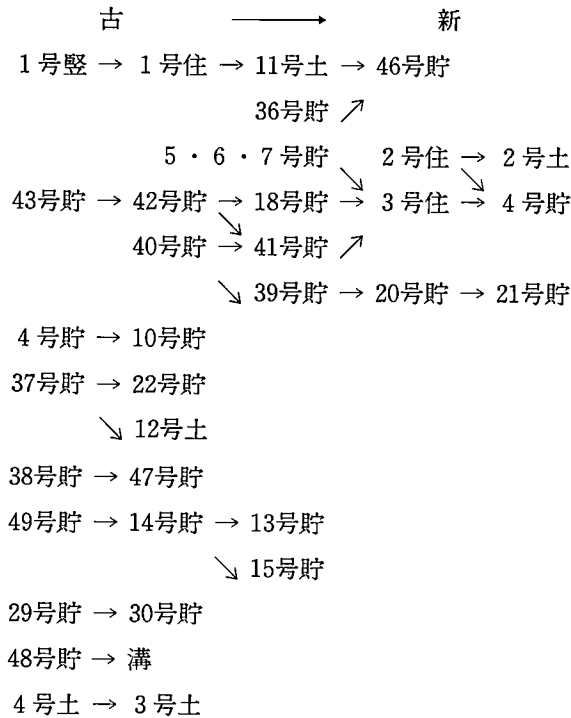
45は、土器片を再加工した有孔の円盤状品である。他の縄文土器片には全く認められなかった、胎土に滑石沫を含むもので、中期的な土器片を使用したものかと考えられる。弥生前期の時期に紡錘車として加工使用した可能性も考えられる。

以上の縄文土器群は、各グループ毎に若干のニュアンス的違いは認められるものの、総じて、縄文後期の中葉から後葉にかかる時期、即ち北久根式の後半から西平式に移行する過程までの時期の所産とされよう。ただ、各土器片が採集品同様の遺構的ままとりの確認も出来ない出土状況であり、まだ当該期の稀少な資料として十分に検討する対称としてもあまりにも小片のみすぎる点は如何ともし難い。今後の周辺遺構の確認の機会到来ありとすれば、それに期するところである。

4. 小 結

大島遺跡では、弥生時代前期から中期の遺構の発見があった。その内容は住居跡・貯蔵穴・土壇・溝からなるが、主に貯蔵穴群が多かった。当遺跡の調査や整理過程におけるまとめを記して結びとする。

① 遺構の前後関係は次のとおりである。但し、住居跡は住、貯蔵穴は貯、土壇は土、竪穴は竪とする。



② 当遺跡では、貯蔵穴が遺構の大半を占めるが、そのような遺跡の中で、貯蔵穴の数に比して住居跡の数が極めて少ない遺跡がよくある。貯蔵穴の量的な問題は、貯蔵穴の構造とつくられた地域の地質にもよるが、非常に壊れやすいもので、順次新しい貯蔵穴をつくっていたことにも起因していることも考えられる。

例えば、それらの数を対比してみると、1住居跡に対し数10基の貯蔵穴という場合があり、これが集落の中であって住居のそばに貯蔵穴を設けるということはなかったと思われる。この考えは、当時の集落形態・立地や社会の状態などの起因する問題があり短絡的でありすぎ、熟考を要するところであるが、生活すべく集落とは別途地域に貯蔵穴を集中して設置し、横隈山遺跡のように、それらの周囲に環溝をめぐらしあわせて数軒の番小屋の用途をなす住居を置くという、いわば食糧の集中管理というシステムが当時としてはあったものと思われる。この点

については、さらに資料の充実が必要かと思われる。

③ 当遺跡の場合、遺跡の全域を発掘調査していないので即断しかねるが、住居跡4軒に対して49基の貯蔵穴があるわけで、その比は1対12である。これに土壙としたもののうちの一部が貯蔵の用をなしていたとすれば、その比はさらに大きくなるわけで、貯蔵穴が多いように思われる。

④ 貯蔵穴の平面形については、当遺跡の場合は円形プランを呈すものが多い。貯蔵穴の平面形は、住居跡と同じように方形から円形と変遷するのではないかという考えがある。

住居跡は、前期板付Ⅰ式の頃は方形プランを呈し、板付Ⅱ式になると円形プランに変わり中期中葉頃まで続き、それ以後は方形プランに変るといふ経緯がみられる。

貯蔵穴については、確かに板付遺跡では方形あるいは長方形を呈すものが圧倒的に多い(註1)。大島遺跡周辺においては、やや時期的に遅れるが、方形・長方形と円形のいずれもみられ、遺跡によってはどちらが多い。例えば筑紫野黒坂遺跡では方形・長方形が多く(註1)、同市剣塚遺跡は円形で占められている(註2)。小郡市北内畑遺跡(註3)や横隈山遺跡(註4)では方形・長方形が非常に多い。いずれも前期から中期前葉頃の遺跡であって、平面形の時間的変化はみられず、周辺遺跡のうち小郡地区の貯蔵穴に方形長方形プランを呈すものが多い。また、遠賀川流域の飯塚市立岩遺跡群の貯蔵穴は円形プランばかりで(註5)、行橋市下稗田遺跡D地区(540基)では、ほとんど円形プランである(註6)。このように貯蔵穴の平面形は、時間的な変化はないと思われ、むしろ地域的な特徴があり、あわせて規模構造にも若干の地域差が表われるものではないだろうか。

⑤ 土器は、弥生時代前期後半から中期前半のものがあるが、厳密には中期初頭(所謂城ノ越式)の土器群の出土はなく、当遺跡での営みは一時中断したことになるが、恐らく広大な台地のいずれかにこの欠落した時期の生活が営まれていたものと考えられ、周辺地区での調査が望まれる。

⑥ 石器・土製品については、石鏃が打製品ばかりで、磨製品が全く見られないことに注目される。石包丁は前期の特徴を示すが、39・40はこれまで発見された稀例の品であって、朝鮮半島出土のものに類似し注目すべき石器である。

紡錘車は土製品のみで、石製品は全くない。比較的に小型で軽量なものばかりである。

以上、問題点は多々あると思われ、さらに今後の整理研究に待つべき点があると考えられる。浅学の身である由、先学諸兄の御叱責を乞うところである。

註1. 「野黒坂遺跡」 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会 1970

註2. 「剣塚遺跡」 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X IV 福岡県教育委員会 1978

註3. 「北内畑遺跡」 小郡市文化財調査報告第7集 小郡市教育委員会 1981

註4. 「横隈山遺跡」 小郡市教育委員会 1974

註5 筆者実見

「焼ノ正遺跡」 飯塚市教育委員会 1981

児島隆人編「嘉穂地方史」先史編 1981

註6. 「下稗田遺跡調査概報Ⅱ」 行橋市文化財調査報告 第10集 行橋市教育委員会 1981



1 大島遺跡東半全景（西より）



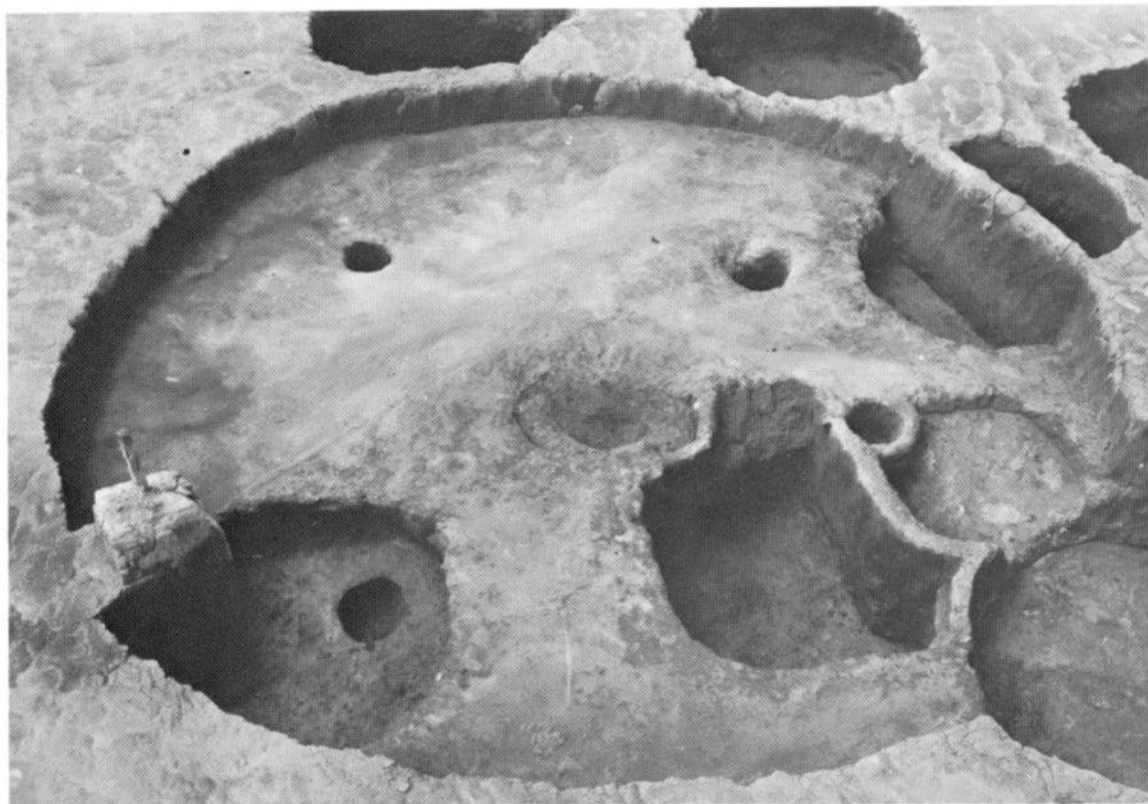
2 大島遺跡全景（東より）



1 第1号住居跡（西より）



2 第2号住居跡（北より）



1 第3号住居跡（南より）



2 第4号住居跡（西より）

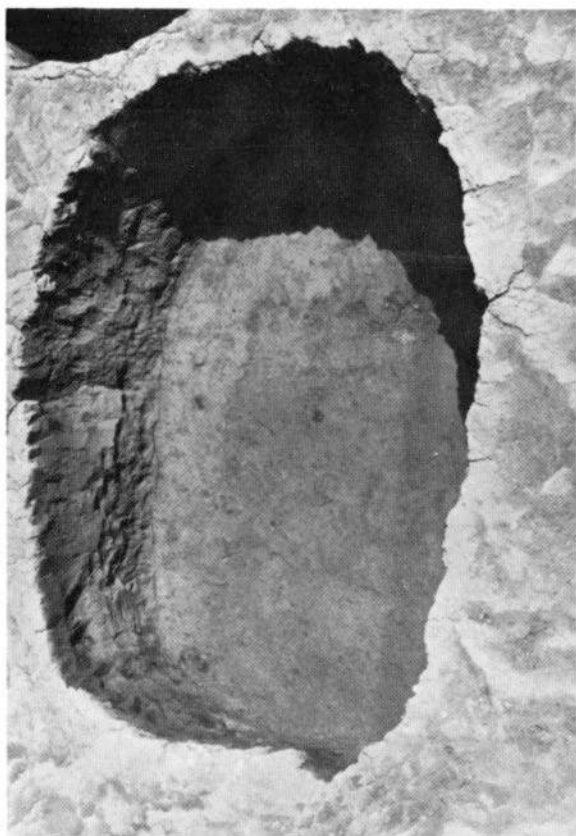


1 第19・21～24号貯蔵穴

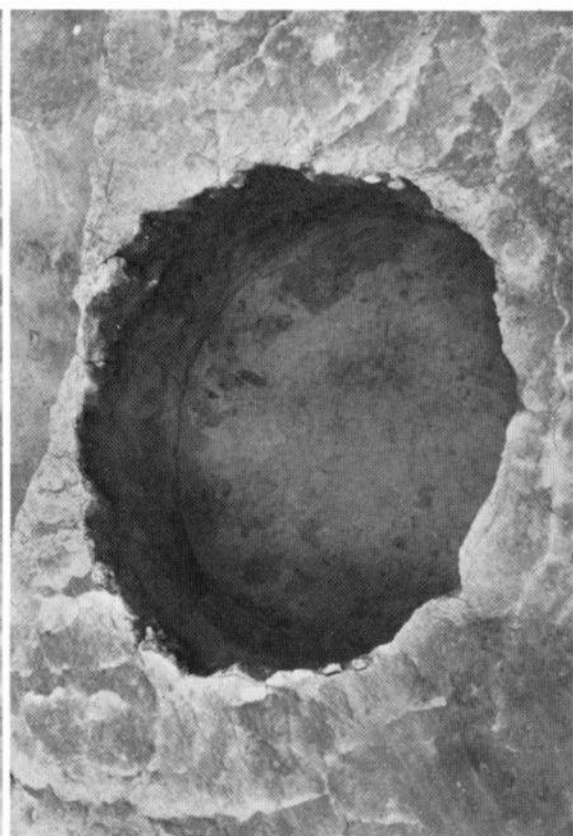


2 第26～31号貯蔵穴

1 第8号贮藏穴



2 第10号贮藏穴



3 第12号贮藏穴

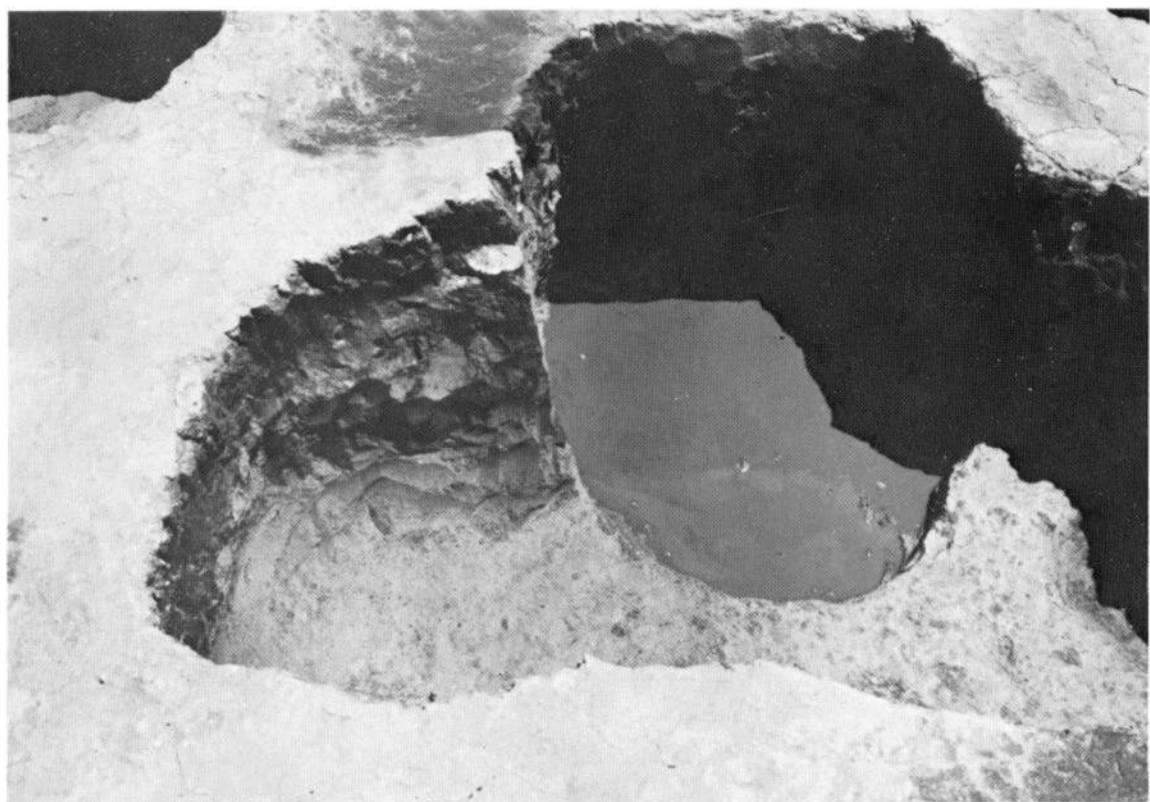


4 第22号贮藏穴



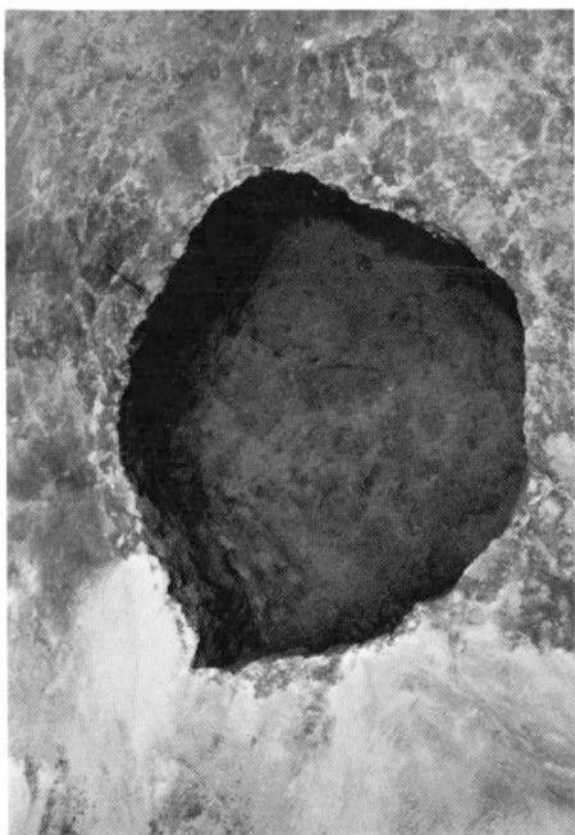


1 第12号土城, 37·22号贮藏穴

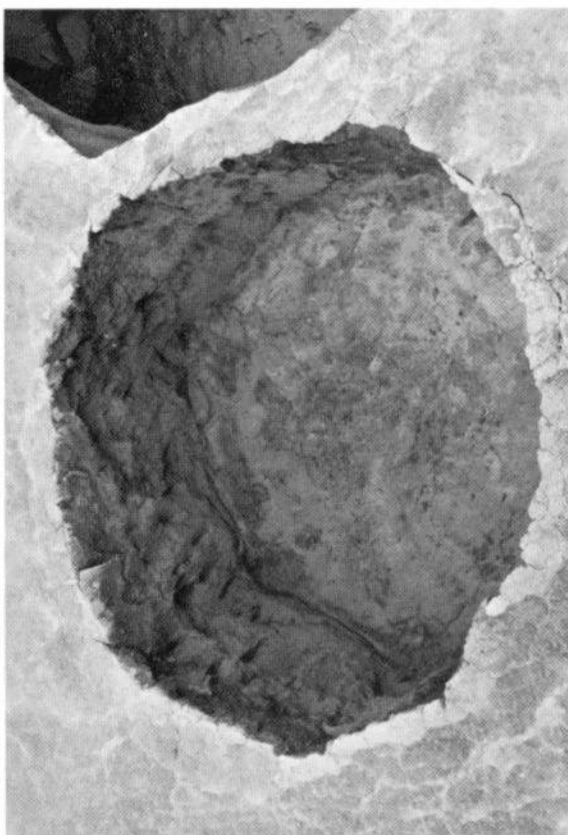


2 第39·21(中央)号贮藏穴

1 第26号贮藏穴



2 第27号贮藏穴



3 第32号贮藏穴



4 第33号贮藏穴



1 第34号贮藏穴



2 第41号贮藏穴



3 第46号贮藏穴



4 第47号贮藏穴



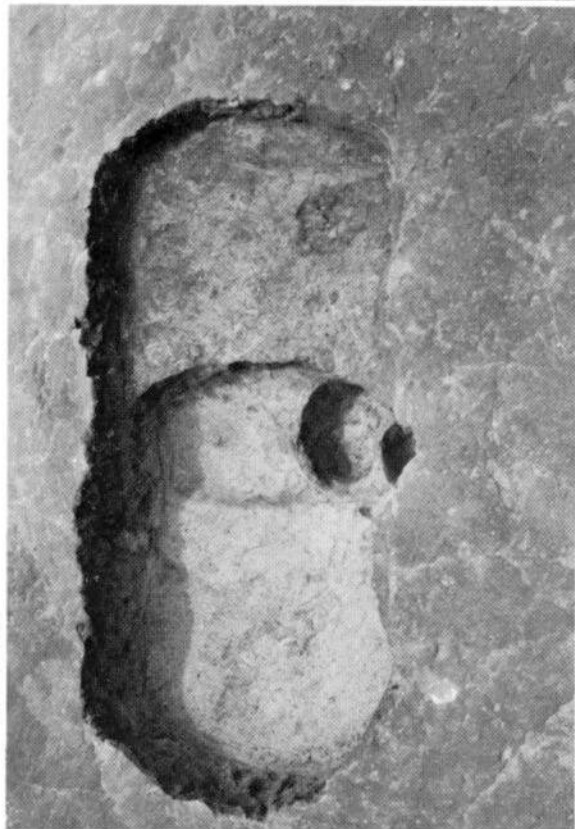
1 第1号土城



2 第6·7号土城



3 第9号土城



4 第12号土城



1 1号整穴

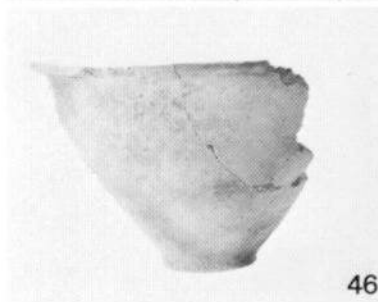
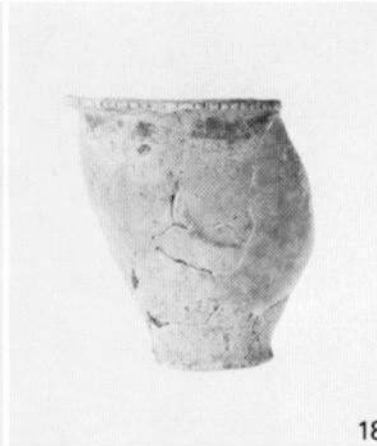
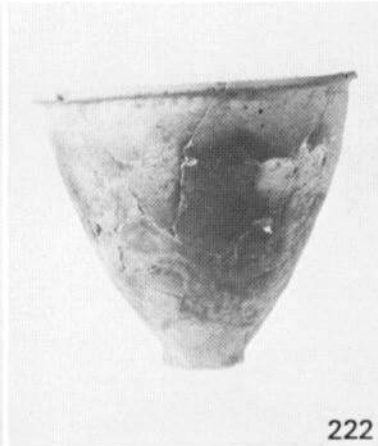
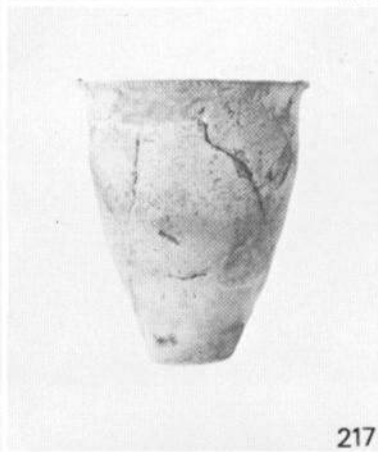
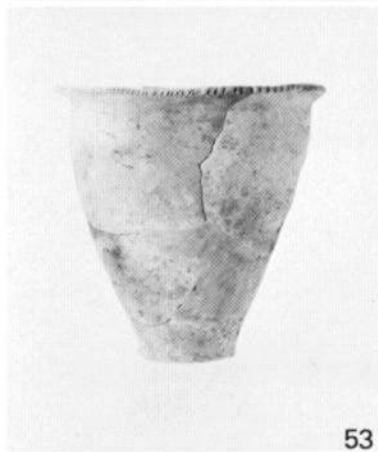
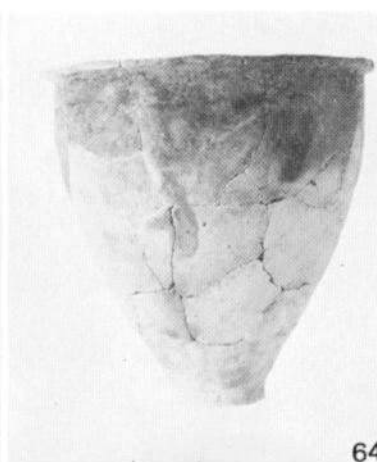


2 2号整穴

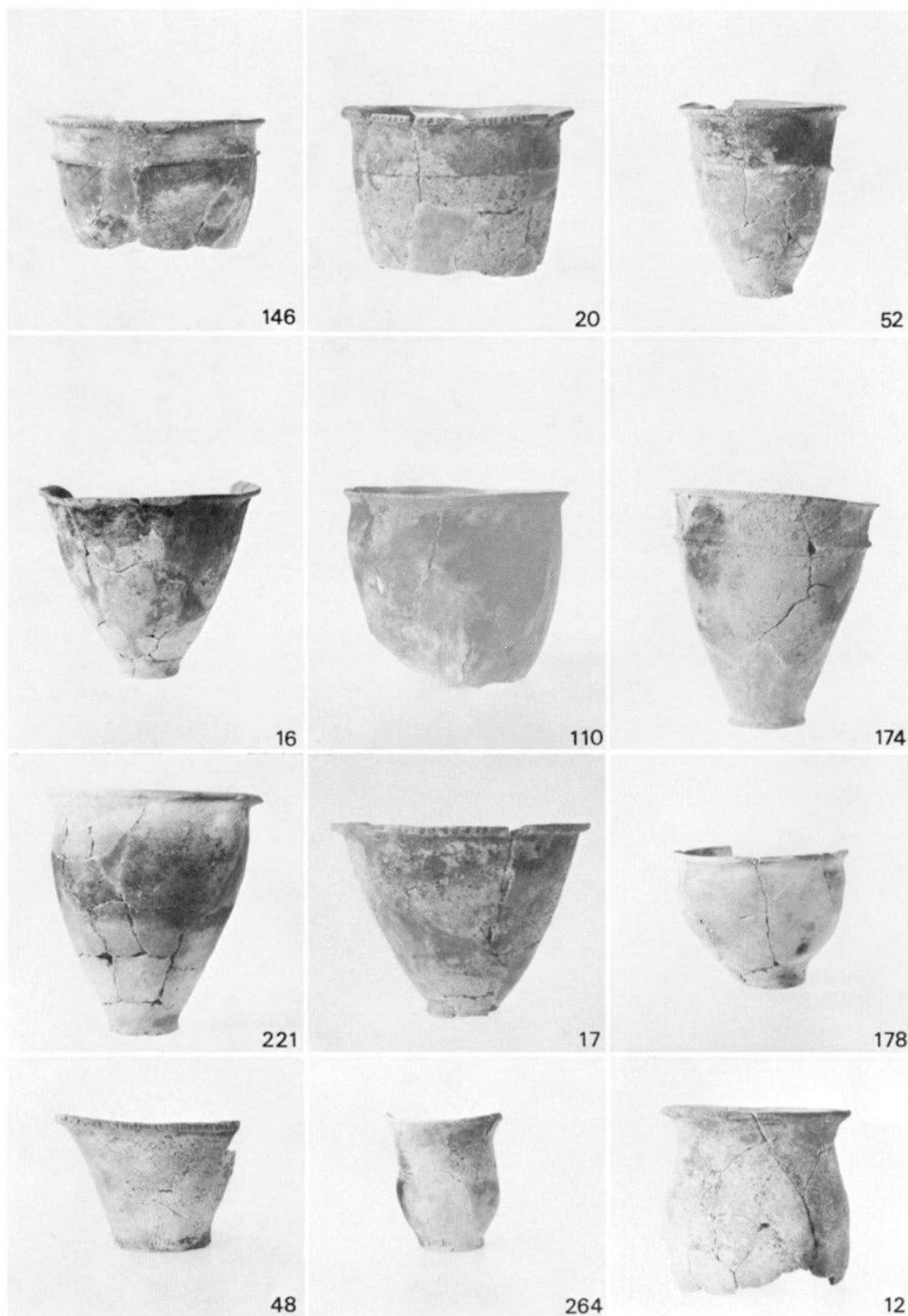


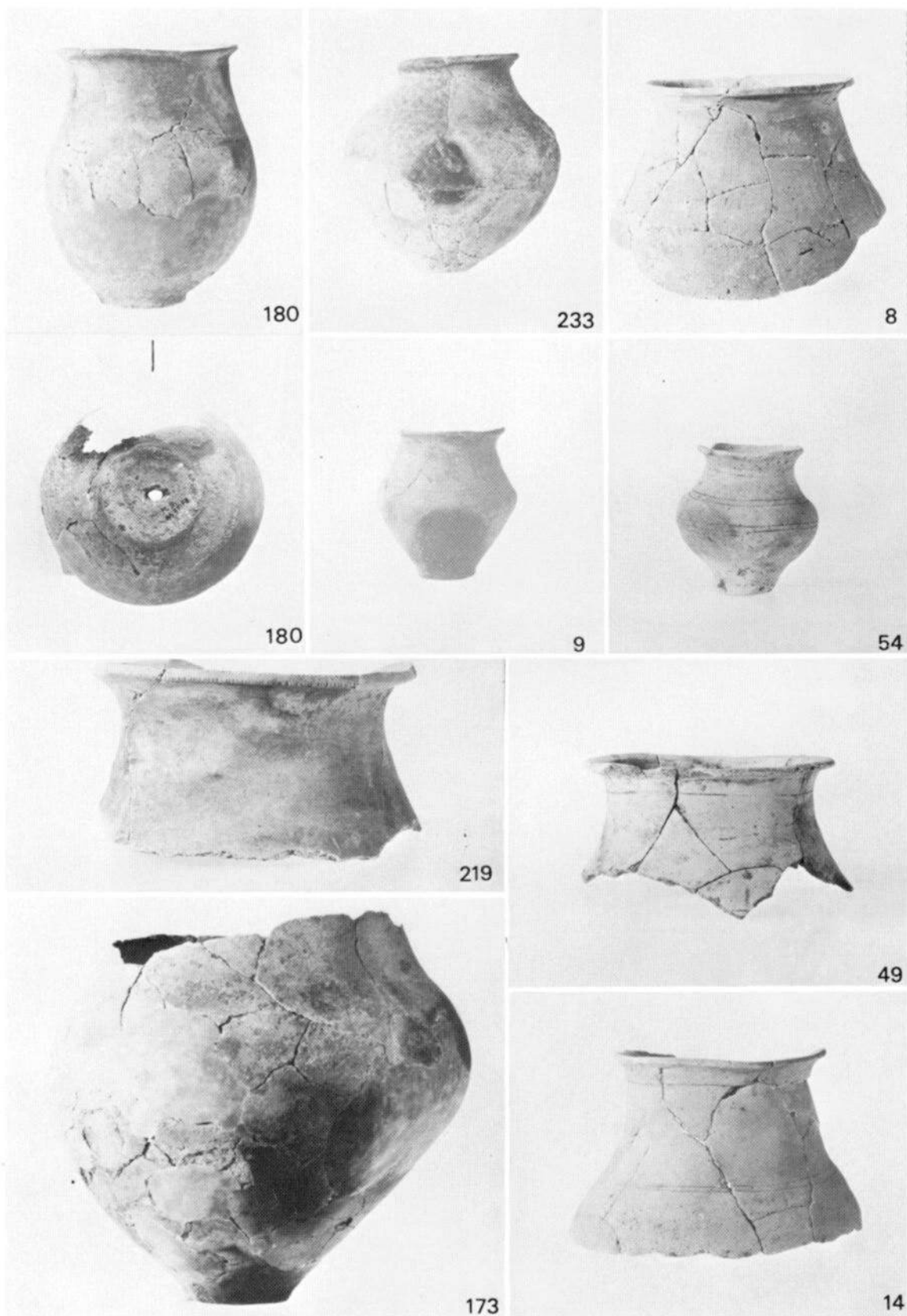
3 溝 (西より)



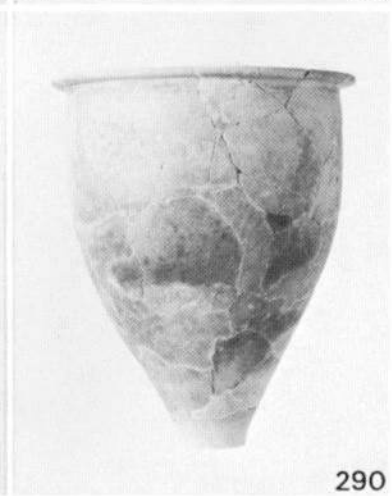
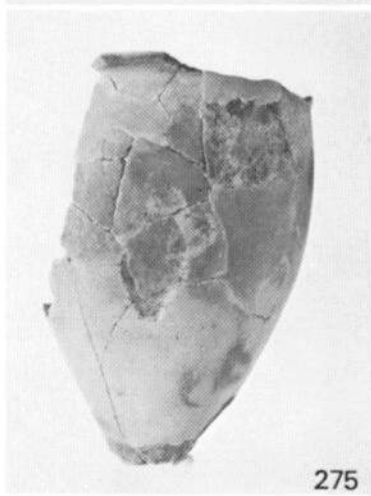
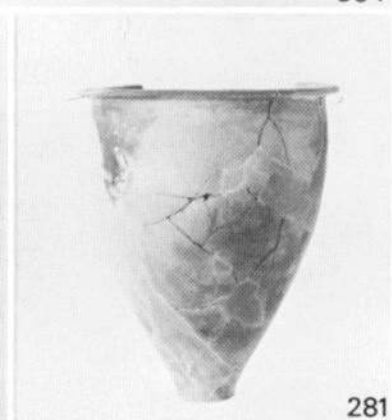
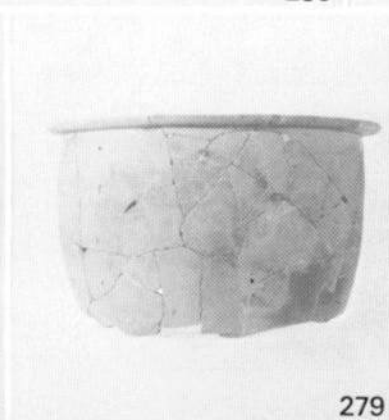
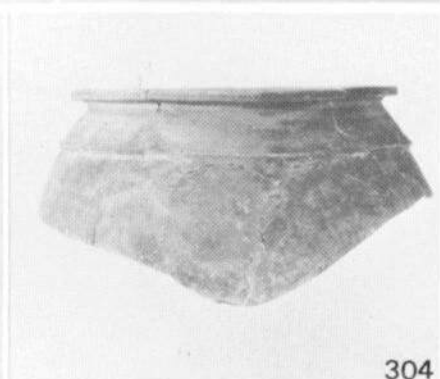
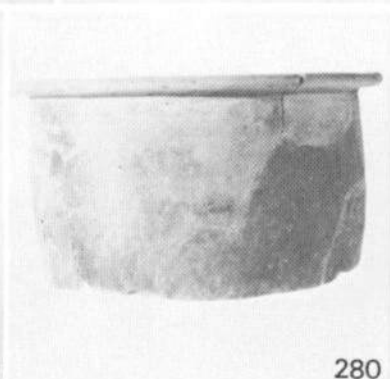
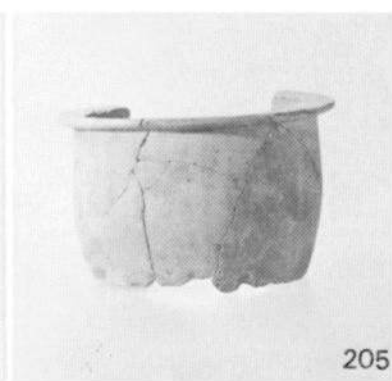
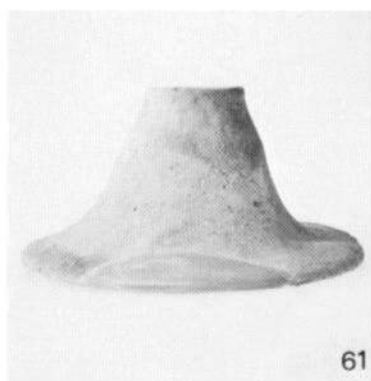


弥生時代前期甕

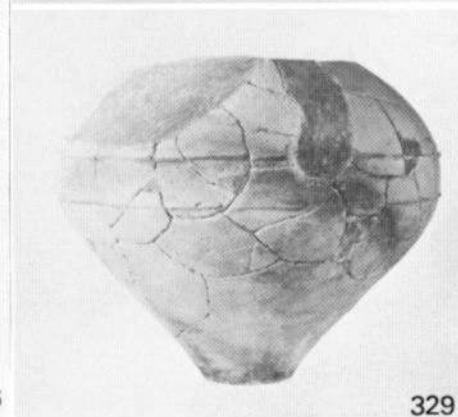
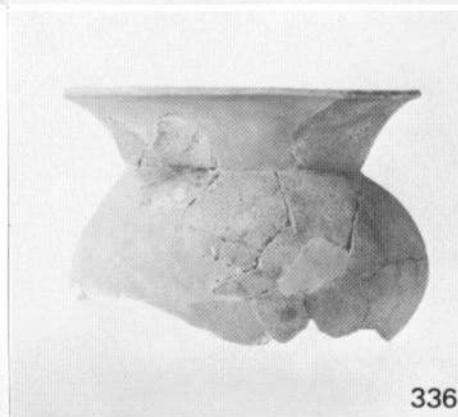




弥生時代前期壺



弥生時代前期蓋，中期甕



弥生時代中期壺



330



313



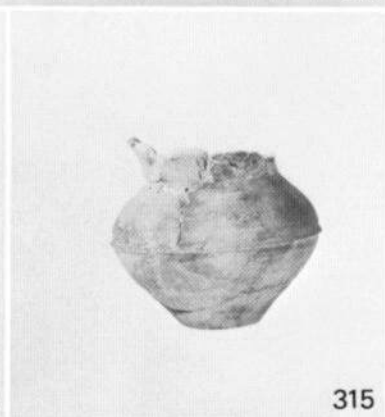
314



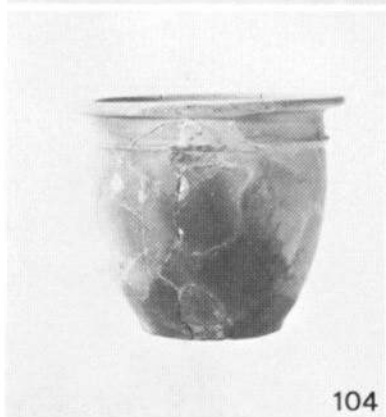
350



299



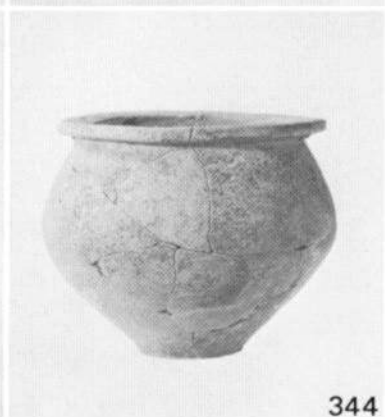
315



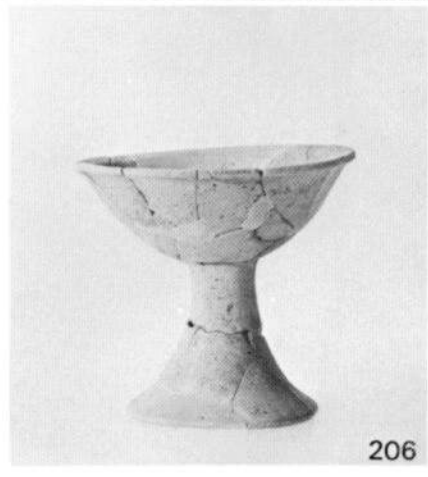
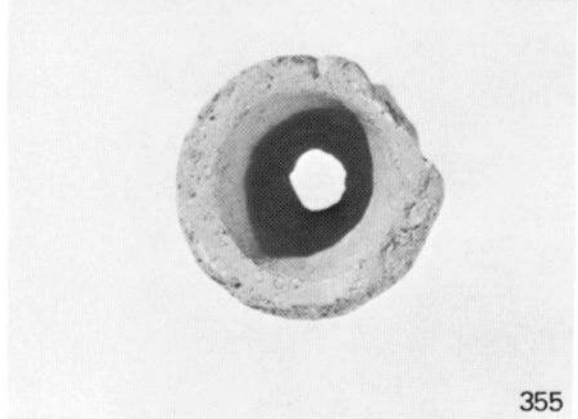
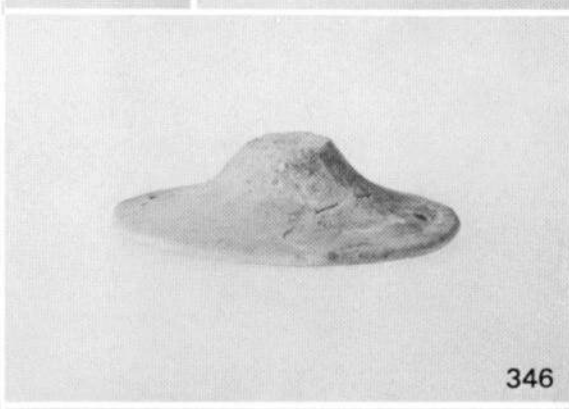
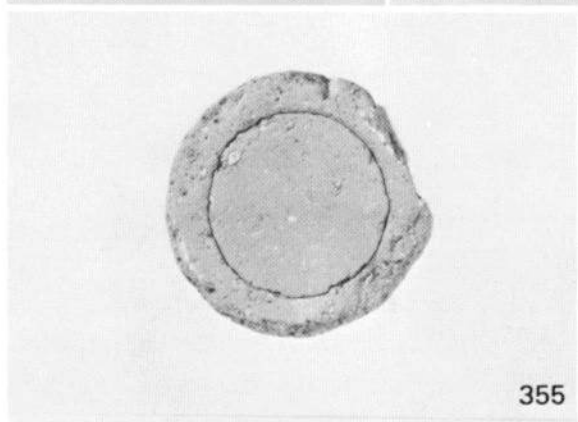
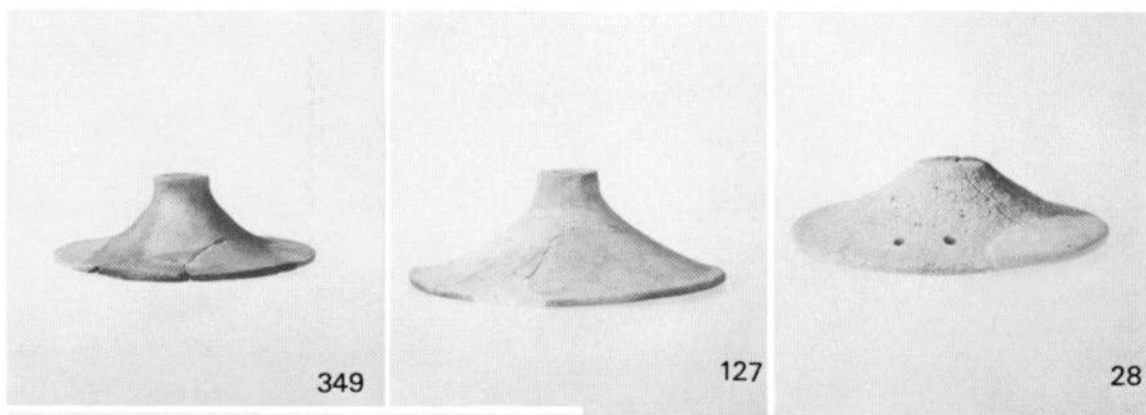
104



187

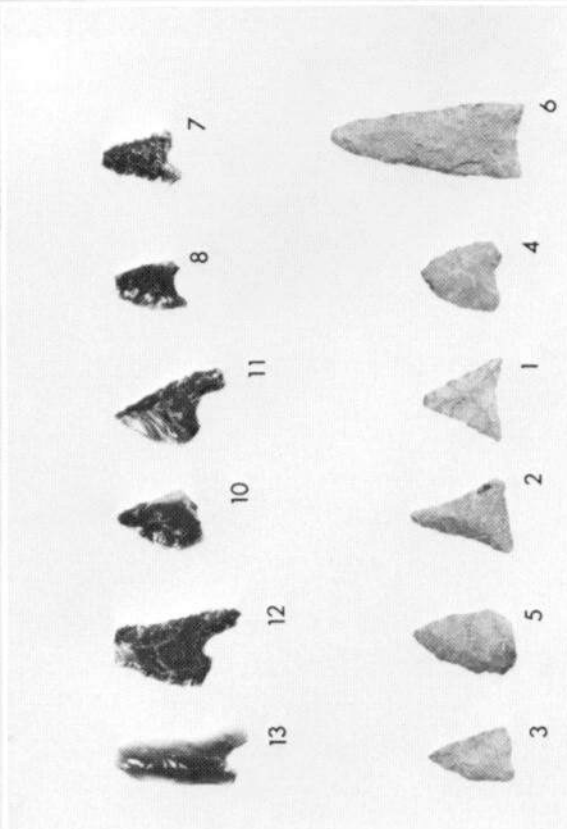
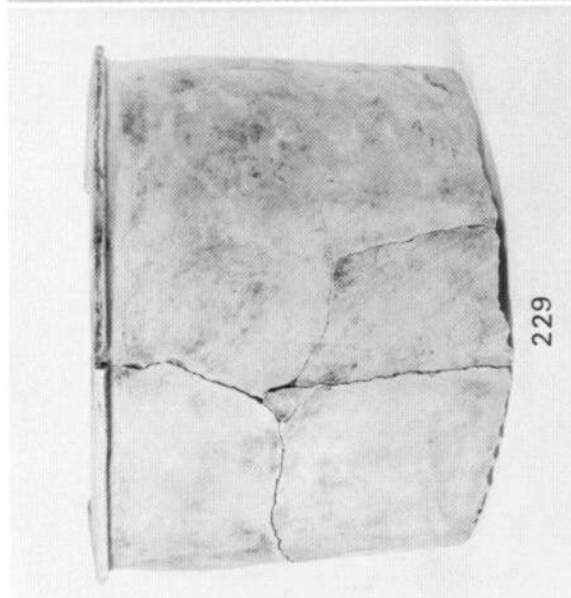
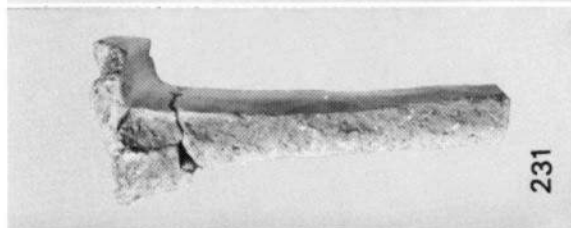
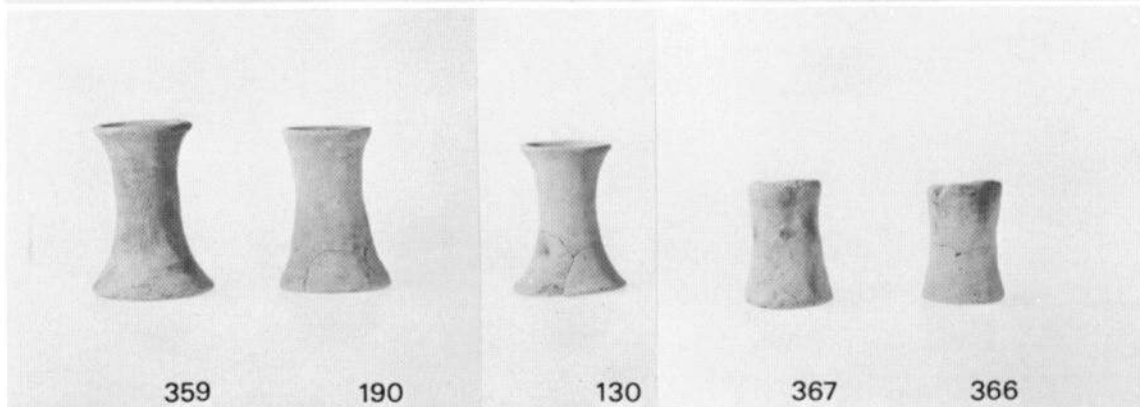
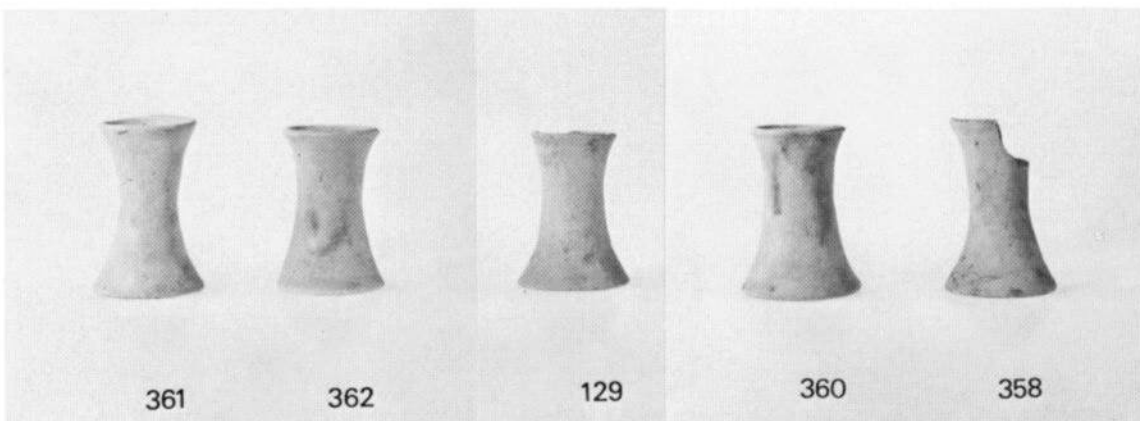


344



弥生時代中期蓋・高坏

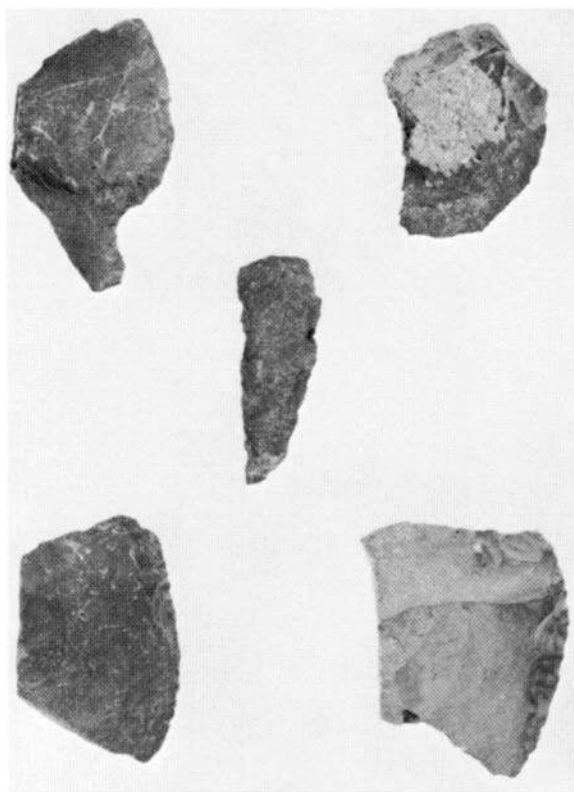
1 弥生時代中期器台



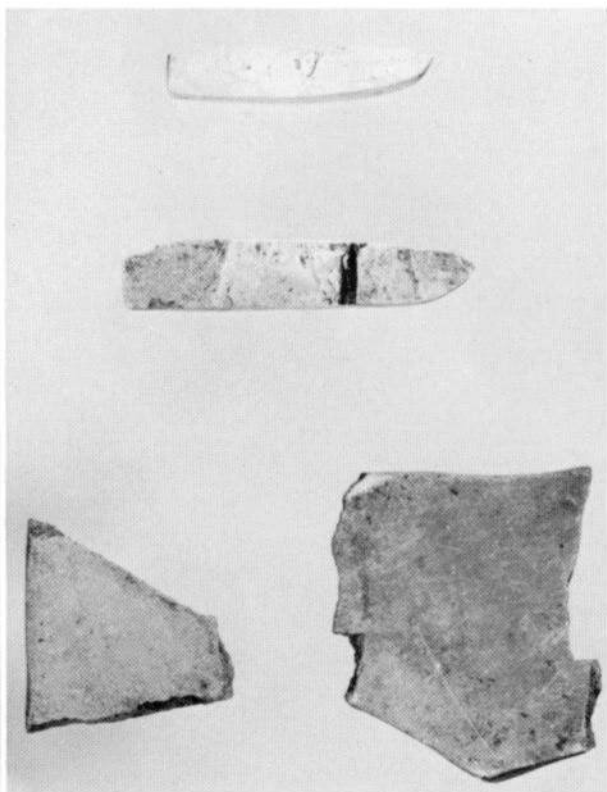
2 第2号竪穴出土

3 打製石

1 スクレイパー



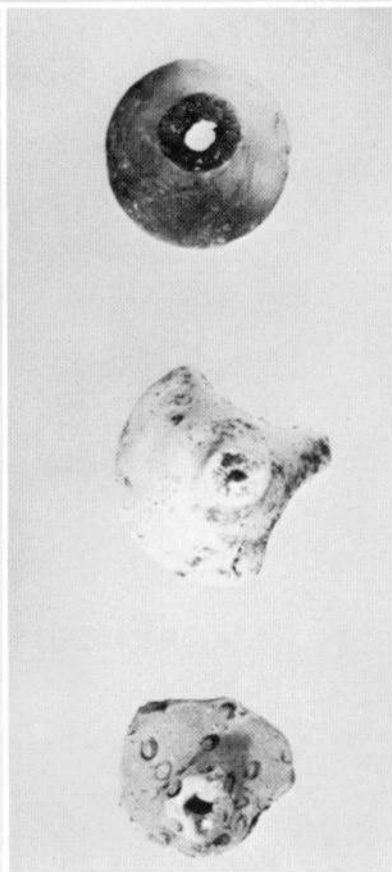
2 石のみ・砥石



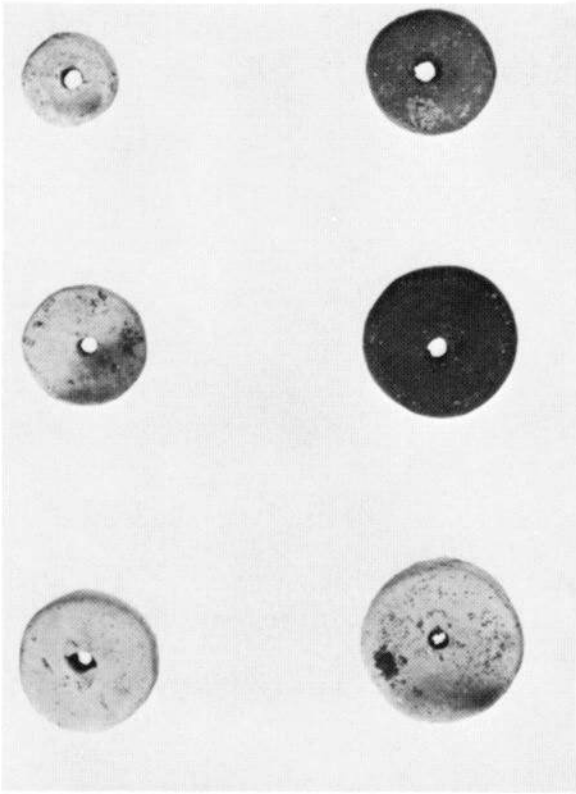
3 石包丁



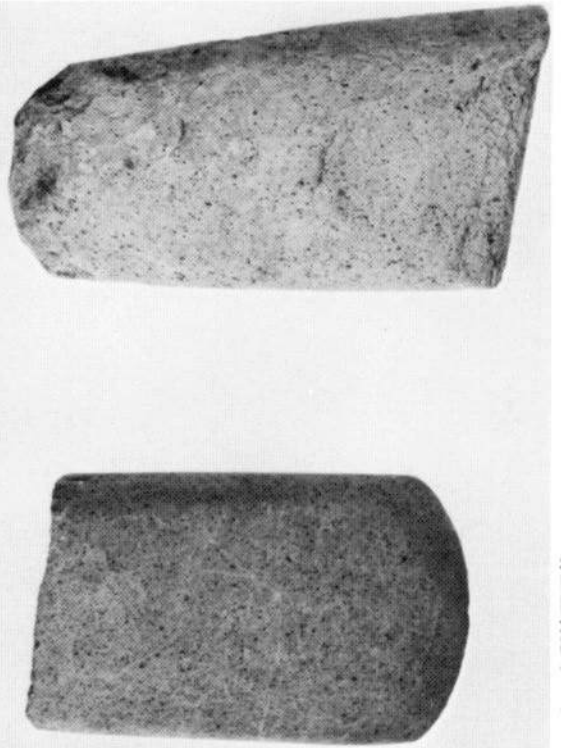
4 土製品



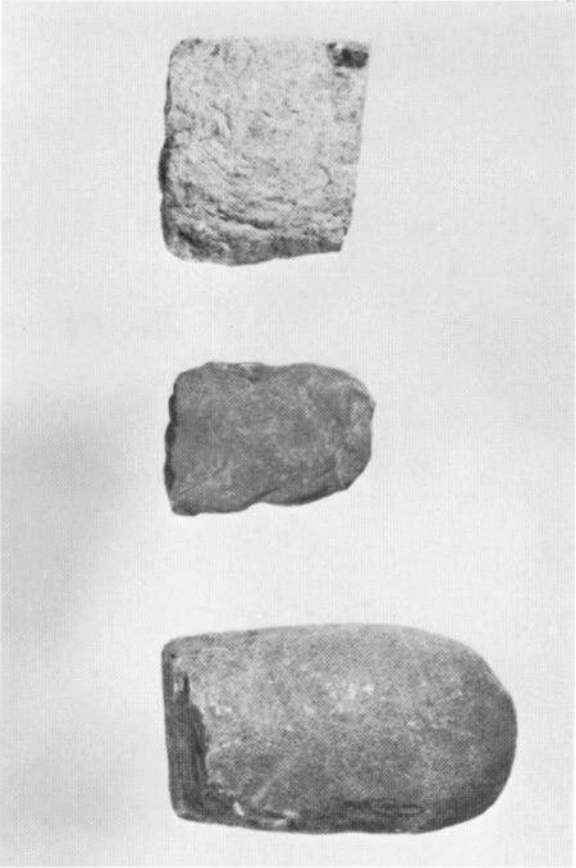
1 紡錘車



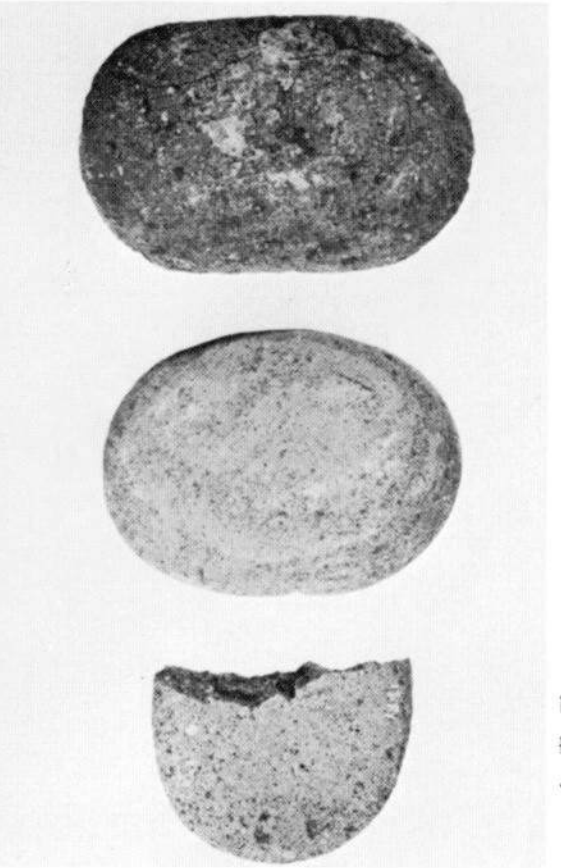
2 太型蛤刃石斧

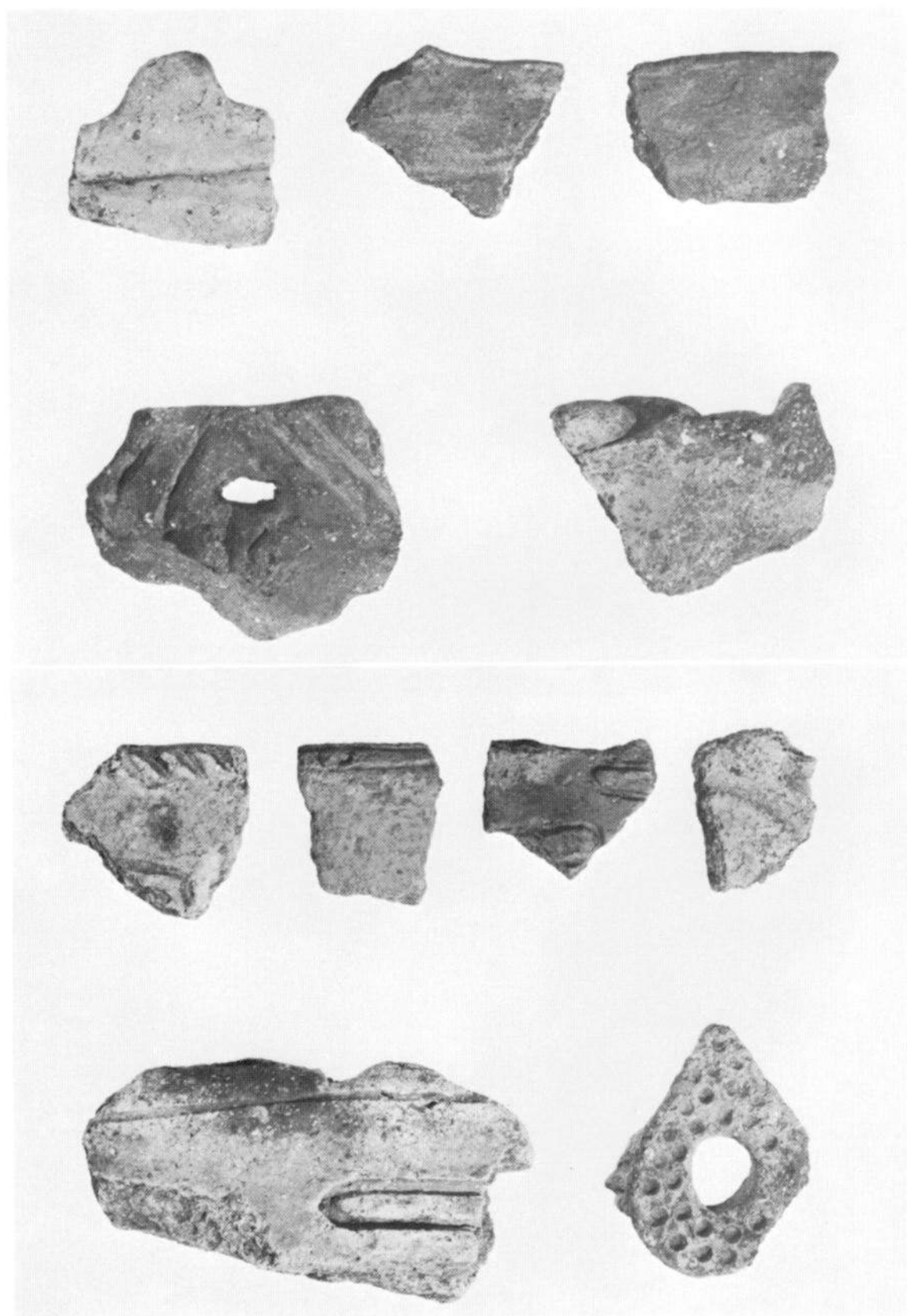


3 磨製石斧

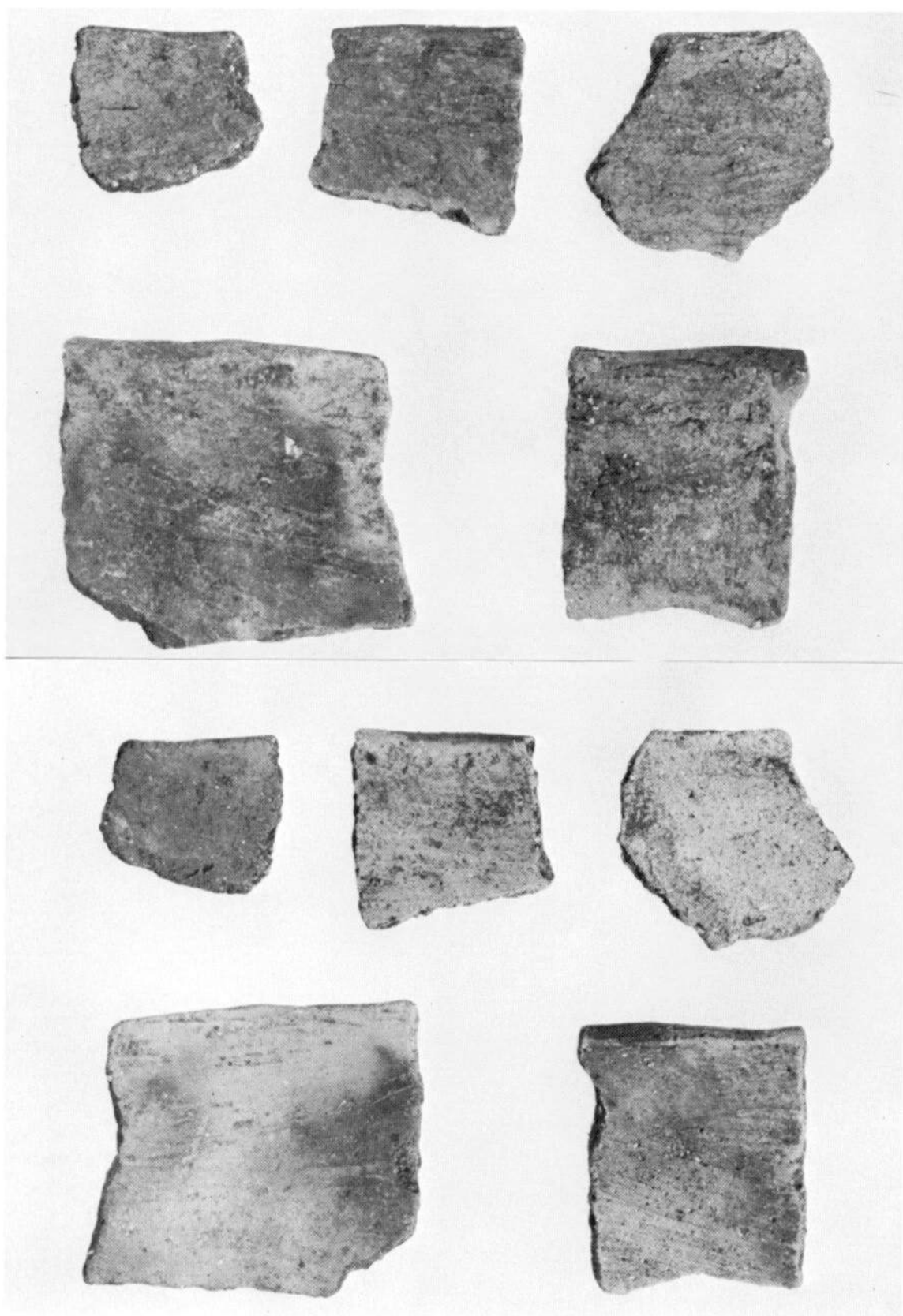


4 磨石





縄文土器



縄文土器（上：外面，下：内面）

Ⅲ 各遺跡の調査

8. 八ヶ坪遺跡

8. 八ヶ坪遺跡

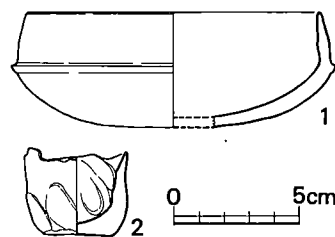
1. はじめに

国道 386 号線より北へ旧朝倉街道を越えて、筑紫野市との町境までの路線内を第14地点とした。用地内の各所に 3×20 m のトレンチを13本入れて、遺跡の範囲を確定する作業を行なった。その結果、旧朝倉街道より南側（夜須町中牟田・朝日）においては、遺物の若干の出土はみた。が、確実な遺構を伴わず、北端の町境近くの部分のみを「八ヶ坪遺跡」として本調査することとした。発掘総面積 $3,010$ m²、調査期間は例年になく希有なる雨続きにより昭和55年7月31日～10月27日に及ぶ。

第4地点各トレンチ出土遺物（第99図）

土師器椀（1） 須恵器杯身を模した外面黒色漆塗の土師器で、 $\frac{1}{2}$ 弱存。Bトレンチ出土。胎土精良で淡茶褐色を呈する。

ミニチュア土器（2） Dトレンチ出土で、全体に指押圧痕残り、胎土精良で淡茶褐色を呈する。



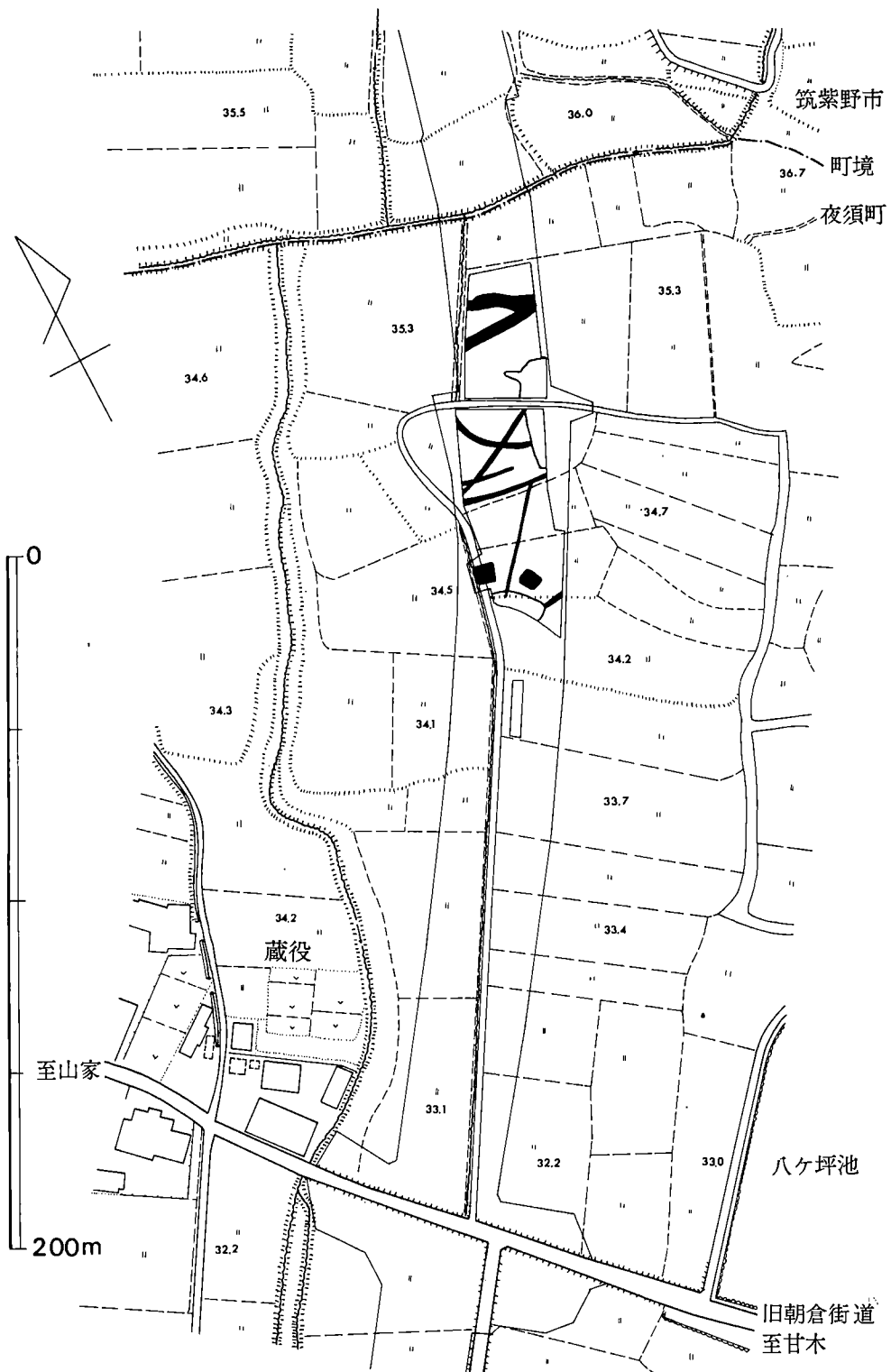
第 99 図
各トレンチ出土遺物実測図（1/3）

八ヶ坪遺跡は、朝倉郡夜須町大字中牟田字八ヶ坪に在り、筑後平野を南流する宝満川の支流山家川の左岸の段丘上に占地する。標高 35 m 前後で南・西へ緩かに低く下がってゆく微高地である。小結に記す如く、条里制の名残りの字名で、当該時期の遺構の検出も想定された。また往時本遺跡北西側の畑を地下げした時、「ハチヤツボ」が出土したとのことである。

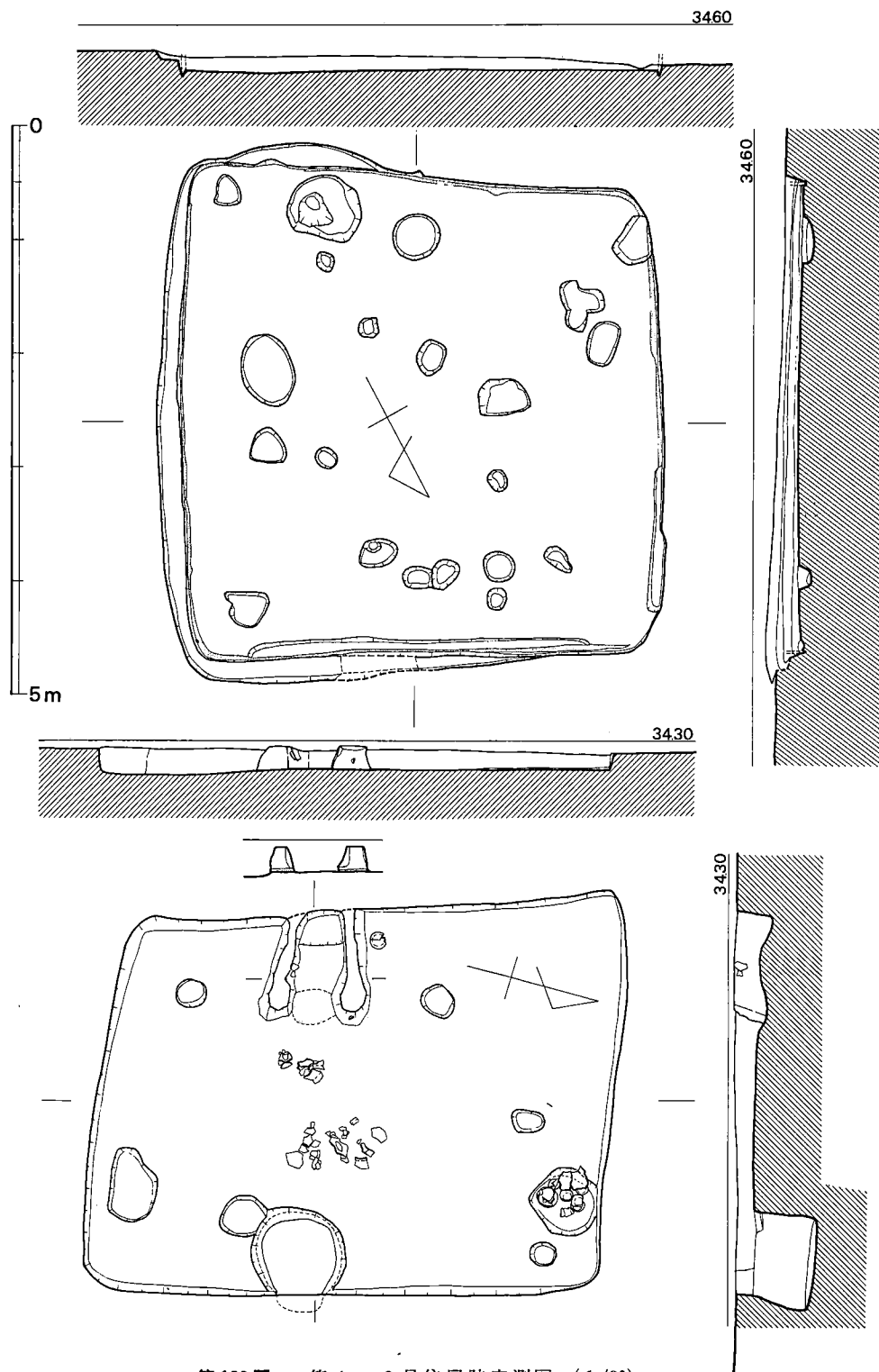
以下、遺構毎に項を分けて詳述する。

2. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡



第 98 図 八ヶ坪遺跡周辺地形図 (1/2,000)



第100图 第1・2号住居跡实测图 (1/60)

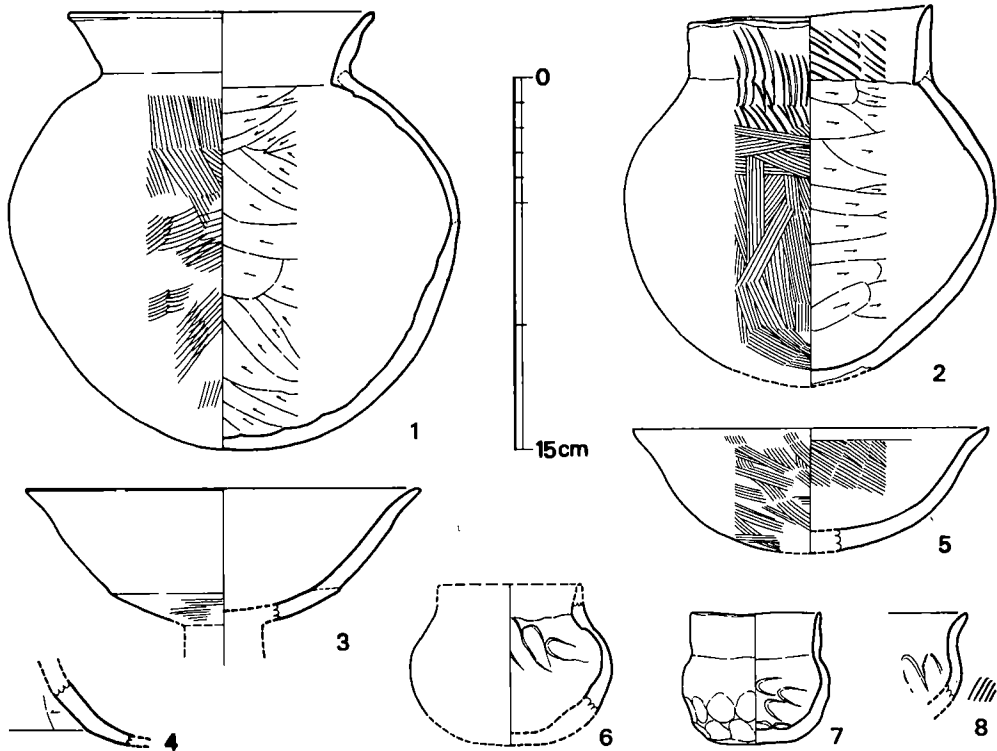
第1号住居跡（第100図上）

遺跡の西南寄りに方形竪穴住居跡が検出された。東辺がやや広く4.6m×4.5mで床面積20.7㎡，最深部で30cmを測る。支柱穴は不明で，炉も明確でないが，ただ東南隅寄りのピット中より土器片多くとともに炭化物多くがみられた。東辺及び，南辺と北辺東半分の壁沿いに，幅15～20cmの一段高い部分がみられ，壁際の物置き場所かとも考えられる。周壁溝は幅10～15cmのものが北辺と東辺にみられるのみである。更に壁際に密着して板材打ち込み痕が2～5cm幅でほぼ全周に認められる。（図版55—2）

土師器（第101図）

甕（1） 最大径をやや上位につくる球状胴で，内面ヘラ削り，口縁内外横ナデ，胴外面上半は縦・斜めの細かいハケ，下半は雑なハケ後部分的にナデ消す。口唇外端部は部分的に突出し，口縁外面中位は中ぶくらみをみせる。胎土に粗砂かなり含み，焼成良く淡茶色を呈する。1/2残存。口径12.3cm，器高17.5cm，胴部最大径18.0cmを測る。口縁外面と肩部以下に煤付着する。

直口壺（2） 口径9.7cm，器高14.9cm，胴最大径14.7cmで短かく直立する口縁を付ける。胴内面横方向のヘラ削り，外面上半は極めて粗い縦ハケ，以下は粗い斜め・縦ハケ調整。胎土に粗砂幾らか含み，焼成良く明茶～黄茶色で全体にやや歪つで粗い作りである。胴下半全面



第101図 第1号住居跡出土土師器実測図（1/3）

に煤がこびりつき、甕同様煮沸容器として用いられている。

高杯（3・4） 孰れも小片であり、3は内外面横ナデ、杯部外面に横ハケ残る。復元口径15.8cmで胎土精良、焼成やや甘く橙色を呈する。4は脚内面に上半の削りによる稜線をつくる。胎土精製され、焼成良く茶褐色をなす。

椀（5） 口径14.2cm、器高5.0cmで、口縁内側に半周程の明瞭な稜をつくり、僅かに外反させる。外面は細かいハケを荒く施す。胎土精良、焼成良く外面黄茶褐色、内面明茶褐色を呈する。

ミニチュア土器（6～8） 孰れも指圧痕を残し、胎土精良で各々暗茶褐色・明茶色・淡黄褐色を呈する。8の外面下半には粗いハケをみる。

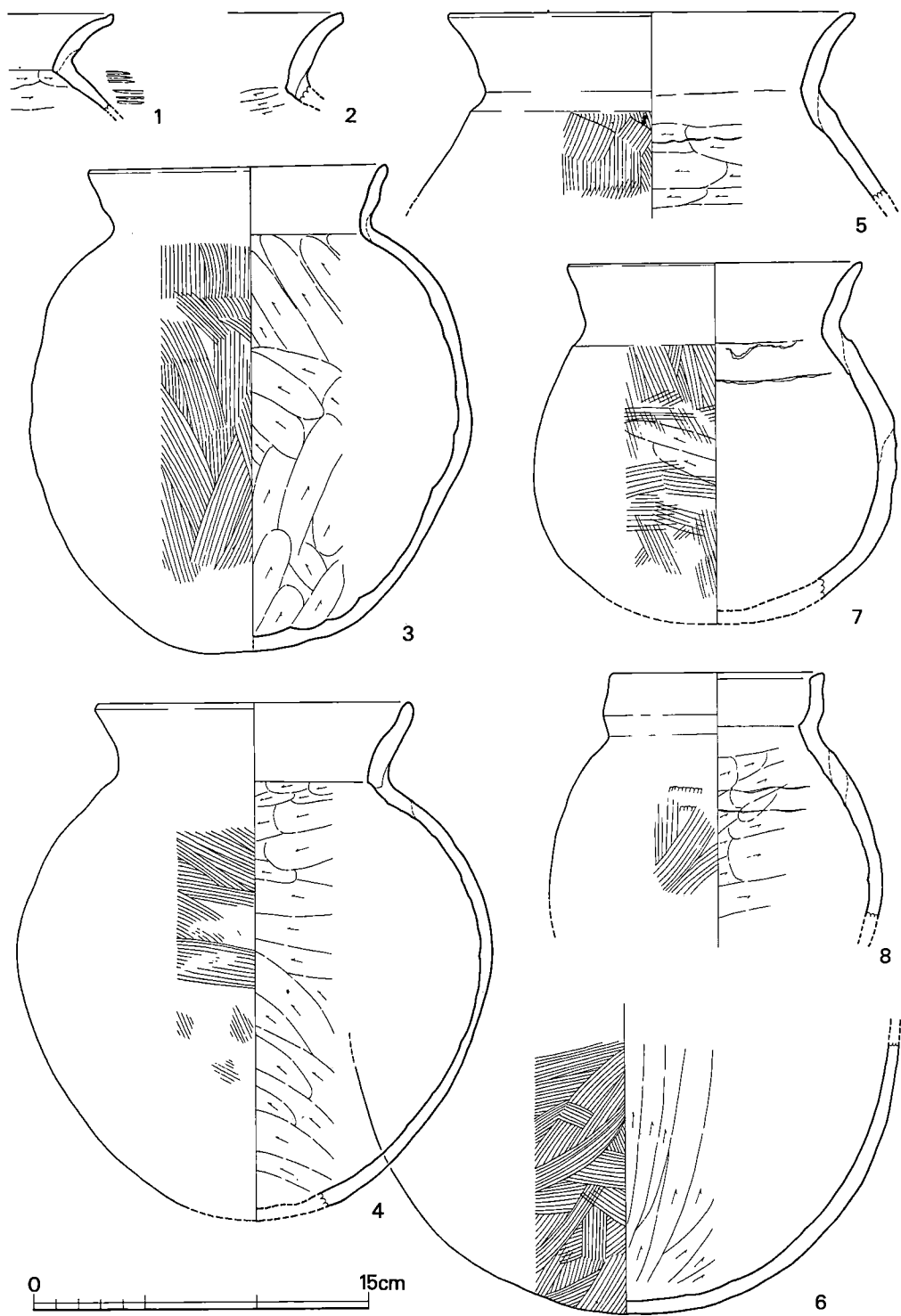
第2号住居跡（第100図下）

遺跡の南端近くに、3.4×4.6mの長方形の、竈を付ける住居跡が検出された。平面形はやや平行四辺形気味に歪み、床面積15.6㎡、深さ20cmを測る。主柱穴は不明で、4柱の可能性もある。西壁のやや南側寄りに、黄褐色粘土による竈が付される。竈体の地山面との間に炭を含んだ灰黒色土層が薄くみられ、住居跡を幾らか使用した後、竈を付設したと考えられる。竈体中には甕片を混入させ、焚口部は一段低くなり、その地山は赤変し、内側面も堅く黄・赤変する。最奥部も更に深く下がり、壁線外の煙道状構造はつくらない。竈と対する東壁際に径0.75m、深さ0.65mの袋状の形態をとる竈穴が検出され、炭・灰が多く混入し、ミニチュア土器、須恵器小片が検出されている。貯蔵用の竈穴であろう。

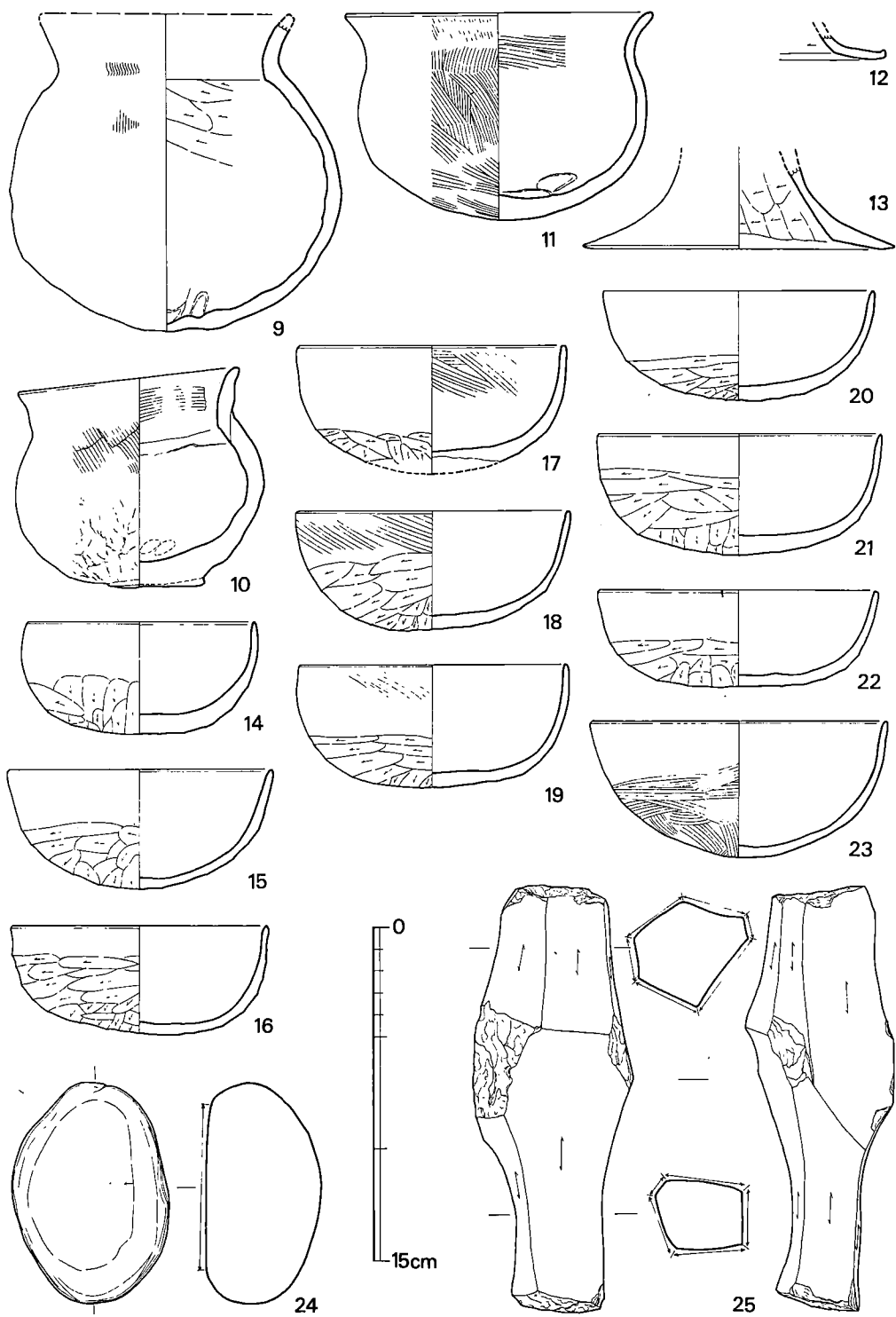
当住居跡は、覆土中に炭片多量に含み、焼失後に廃棄せられたと考えられ、残存遺物も多量ある。床面出土遺物は、竈前面の住居跡中央に甕を中心として椀等がみられ、北東隅近くの浅いピット中から椀6点と、甕2点が重ねられており注目される。竈北側際にも椀1点がみられた。覆土中からは床面より若干浮いて手鎌・手捏ね土製品・滑石製白玉類、甕片・椀等が検出され、焼失後の住居跡廃棄儀礼的な祭祀行為の形跡かと考えられる。

土師器（第102・103図）

甕（1～6） 1と2は覆土中出土で、他類と時期が全く異なり、1は庄内式系で4C代に上る。孰れも全体に精製で、内面へら削り、1の胴部外面には細い横方向叩きが残る。3は床面出土で口縁中途が中ぶくらみし、端部は丸くおさめる。胴内面へら削り上げ、外面は細いハケ調整を施す。胴中位に煤付着し、強い二次焼成による赤変部も多い。胎土に粗石英・雲母かなり含み、焼成良く、淡黄茶褐色を呈する。口径13.3cm、器高21.5cm、胴部最大径19.7cm。4も床面出土、口径14.2cm、復元器高23.0cm、胴最大径21.2cmの卵倒形気味の胴部につくる。胴内面へら削り、外面上半～中位は細かい雑な横ハケ、以下はハケをナデ消す。胎土に粗石英粒多く含み、焼成やや良好、内面灰褐色、外面淡褐～灰褐色を呈し、破片に割れて後も、二次的な熱を受けている。肩部以下には煤付着する。5は竈体内混入のもので、胴内面へら削り、



第102图 第2号住居跡出土土師器实测图 1 (1/3)



第 103 图 第 2 号住居跡出土土師器・砥石実測図 2 (1/3)

外面細かい縦ハケ施す。粗砂多く含み、焼成良く暗～灰褐色を呈する。この他に竈体内出土のわりと大形の甕胴部下半片がある。丸底で球形胴に近いものとなり、内面ヘラ削り、外面はわりと粗い縦・斜めハケの上ナデ消している。6は、床面出土で、球形胴に近くなりそうな胴下半である。内面ヘラ削り上げ、外面は全面に細かいハケを横・斜め・縦に交錯させる。粗石英粒かなり含み、内面暗褐色、外面淡茶～黒色（煤付着）。

小型甕（7～9） 孰れも床面出土で、7は内面上半横ナデ、下半は斜めナデ調整で、外面は粗く極めて雑なハケ調整で、中位には横方向削りのままの部分が残る。口縁外面僅かに中ぶくらみし、全体に厚手で下半には煤付着する。口径13.1cm、復元器高16.1cm、胴最大径16.2cmを測る。8は頸部の強い指ナデにより口縁が内面内湾気味に外面に稜をつくり立ち上がる形態となり、胴内面は頸の稜のやや下よりヘラ削り、外面肩部まで横ナデ、以下雑なハケ調整を施す。胴中位以下は煤こびりつく。内外に二次焼成による赤変部がみられる。9は復元口径11.5cm、器高14.1cm、胴部最大径14.8cmを測り、内面上半ヘラ削り、下半はナデ調整、外面上半は細かい縦ハケの上ナデ消し、下半は器表剥落し煤付着する。

小型壺（10） 薄い粘土板を雑に貼り付けて平底状にした厚ぼったいつくりで、口径10.0cm、器高9.3cm、胴最大径11.2cmを測る。肩部と口縁内面に細かいハケ、胴内面は斜めナデ上げ、底内面は指オサエ痕を残す。外面下半は手捏ねのままで粘土のシワがそのまま残る。胎土に粗砂幾らか含み、焼成良好で淡白褐色～黒褐色を呈する。

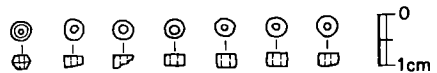
鉢（11） 小型甕或いは小形丸底壺の広口化したような器形で、底部が厚く、口径13.8cm、器高9.2cm、胴最大径12.9cmを測る。頸部内面は粗いハケ、口縁外面は縦ハケの上横ナデ、外面下半～底部は雑なハケとなり、内面はナデ調整。胎土に粗石英多く含み、内外面に二次焼成を受け淡茶～灰茶褐色をなす。床面出土。

高杯（12・13） 孰れも覆土中出土の小片であるが、内面に稜をつくり、その上は横方向ヘラ削りを施し、胎土精良で焼成良く橙茶色となる。13の外面上半は縦ヘラ磨きが行なわれる。

椀（14～23） 14は覆土中、他は床面出土。調整手法により、外面下半がヘラ削りによるもの（14～22）と、ハケ調整を行なうもの（23）に分かれ、前者は、内面上半にハケを残すもの（17）、外面上半にハケを残すもの（18・19）もみられる。14は小型で内湾気味のまり状をなし、16は僅かに端部が外反するが、他は大旨直線的に開く傾向を残す。23は不安定な鉢状をなし、全体に薄手で精製である。内底面はナデツケをみせるものが多い。15～22は口径11.7～12.8cm、器高4.3～5.7cmと規格性がみられる。

玉類

白玉（第104図1～7・第6表） 滑石製の小型の類で、ほぼ至近内に出土したもので7点のみを採集し得た。1のみ算盤玉状をなす。径3.7～4.1mm、厚さ



第104図

第2号住居跡出土玉実測図（2/3）

第6表 八ヶ坪遺跡第2号住居跡出土玉計測表

図番号	径 × 厚(mm)	重量(g)	備考
1	3.7 × 2.7	0.1	算盤玉状, 外面煤で黒変
2	4.1 × 2.0	0.08	白玉
3	3.9 × 2.6	0.06	〃 半欠
4	3.9 × 2.2	0.08	〃
5	3.9 × 2.9	0.1	〃
6	4.1 × 2.8	0.1	〃
7	3.9 × 2.4	0.09	〃

2.0~2.9mm, 重量0.06~0.1gを測る。

須恵器

甕胴部片 (第105図4) 小片で東壁際の貯蔵穴出土。内外面横・斜め方向のナデ調整。胎土に細砂かなり含み, 焼成堅緻で外面灰黒色, 内面暗灰色を呈する。

ミニチュア土器 (第105図2)

貯蔵穴出土の完形品で, 全体に手捏ねである。胎土精良, 焼成良く, 淡茶~黒色を呈する。

手捏ね土製品 (第105図3)

覆土中出土品で, 粘土を紐状にしただけの断片の如きものであり, 細砂若干含み, 焼成良好で淡灰茶褐色をなす。

鉄器

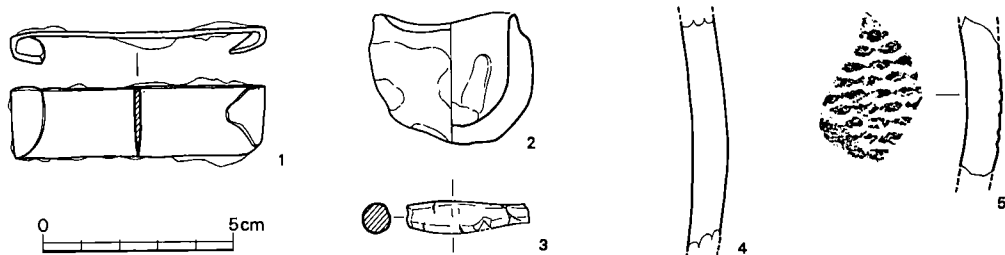
手鎌 (第105図1) 覆土中出土で, 両端を折り曲げ, 木質は残存しない。長さ6.6cm, 幅1.7cm, 厚さ2mm弱を測る。

縄文土器 (第105図5)

覆土中に混入していた小片で, 外面に横位に楕円形押捺文を施す。胎土に粗砂少量含み, 焼成良好で, 淡黄褐色を呈する。

石器

砥石 (第103図25) 覆土中出土で, 淡黄灰色の砂岩製の粗砥。極めて良く使用したとみ



第105図 第2号住居跡出土鉄器・土製品・須恵器・縄文土器実測図 (1/2)

えて、各面が凹状をなし、最終的な研磨面は上半に6面、下半に5面の計11面ある。

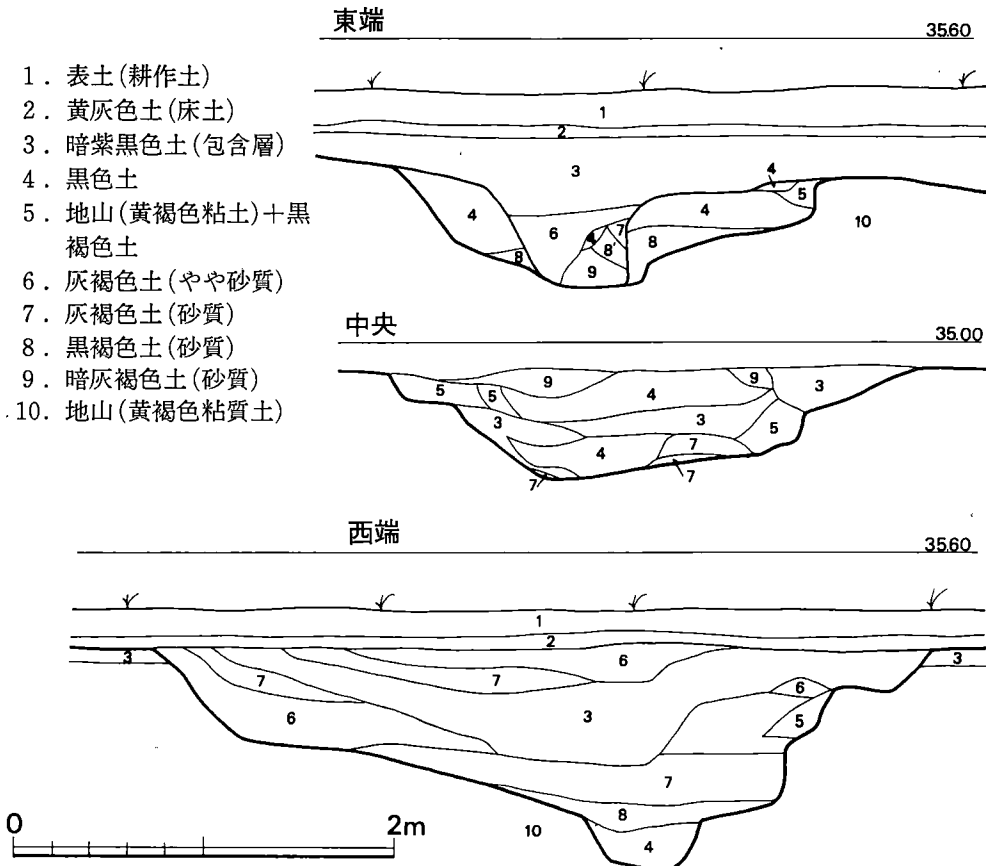
磨石(第103図24) 暗緑黒色の堅い自然転石の平坦面のみを使用している。やや中央が凹状となる。覆土中出土品である。

(2) 溝

発掘区域内に、縦横の溝状遺構8本が検出された。各々、形態・規模・時代ともに異なり、その性格も全容を掴み得ないままに不明な点が多い。

溝1(第106図)

北半発掘区のほぼ中央に、N83°Eのほぼ東西方向に掘削され、溝底は西へ低くなる。幅2.2m(東端)~3.0m(西端)と幅を拓げる。深さ60~115cmと深く、全体に北壁が急傾斜をなし、南壁は緩やかで、途中で段をなす部分もある。断面図でみるとおり、溝2に切られている。埋



1. 表土(耕作土)
2. 黄灰色土(床土)
3. 暗紫黒色土(包含層)
4. 黒色土
5. 地山(黄褐色粘土)+黒褐色土
6. 灰褐色土(やや砂質)
7. 灰褐色土(砂質)
8. 黒褐色土(砂質)
9. 暗灰褐色土(砂質)
10. 地山(黄褐色粘質土)

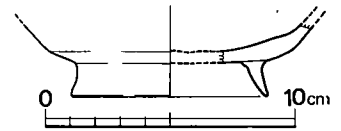
土は黒色土，砂質灰褐色土を主体としており，弥生終末期土器を多量に出土したA区東南隅段落ち部の埋土状況と似る。遺物は，最上面より弥生終末期土器小片少量をみるのみであり，ほぼその時期の遺構であろうと考えられる。

溝2（付図3）

溝1を東端で切り，大きく略東西方向に蛇行して，溝底は西へ低くなる。5～7mと幅広く，深さは20～60cmと浅い。茶褐色土及び砂を埋土とし，氾濫時の自然流水路的な様相も感じられる。遺物も殆んど無く，図示した1点のみである。平安時代前半期の遺構。

土師器（第107図）

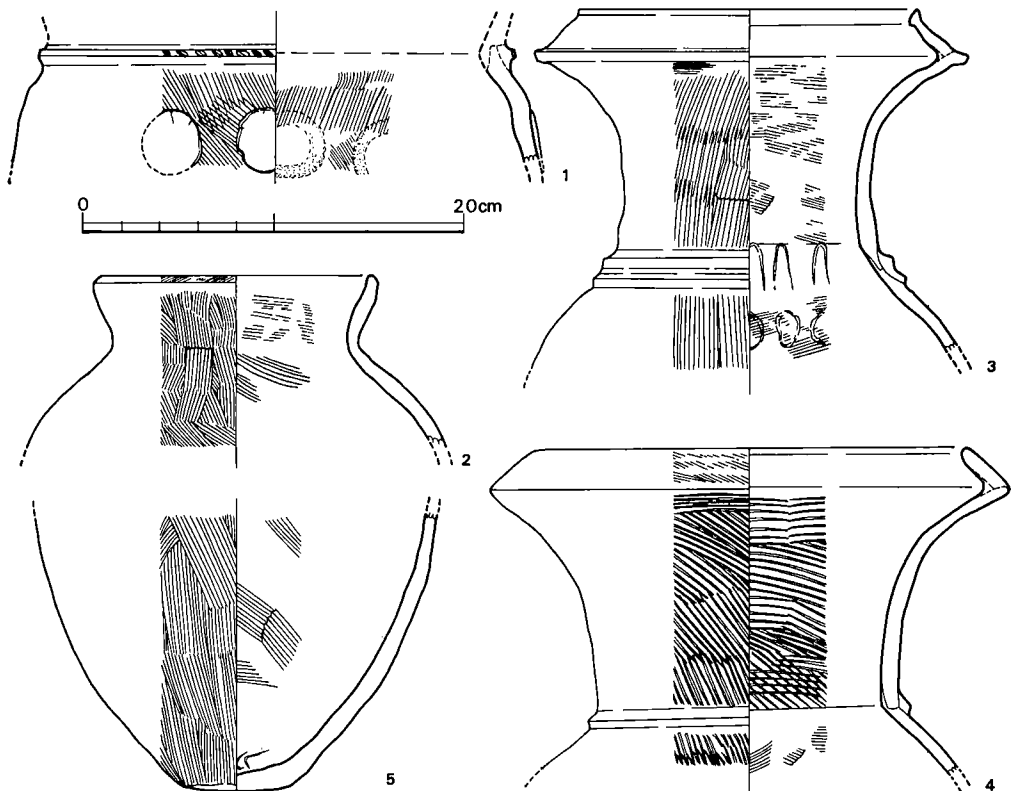
高台付椀 高く外へ張る高台を付け，体部との境に不明瞭な稜をつくる。¼程の小片で，器表磨滅著しく，胎土に細砂若干含み，焼成やや不良で淡白褐色をなす。



第107図 溝2出土土師器実測図（1/3）

溝3（付図3，図版58-1）

N55°Eのほぼ南西から北東に直線的に延びて，A区から続く段落ち部へ落ちる。幅0.5～1.5



第108図 溝3北端出土土器実測図（1/4）

m, 深さ30~40cmの断面V字状をなし, 黒色土の埋土である。溝4・5に切られており, その北東端で弥生終末期土器が出土する。

弥生土器 (第108図)

甕 (1) ややくびれた頸部に断面コの字凸帯を付け, あまり張らない胴部上端に円形浮文を連続して貼る。内外面粗い斜めハケを施し, 浮文内面は凸状をなす。胎土に粗砂多く含み, 焼成良く, 淡黄褐色を呈する。

壺 (2~5) 口縁が単に外へ開くもの (2) と, 複合口縁のもの (3・4) に分かれる。2は, 外面はやや目の細かい雑なハケ調整で, 内面はハケの上をナデ消す。口唇端面にも斜めハケの残る部分が多い。残存。粗砂幾らか含み, 焼成良く, 外面淡黄褐色, 内面淡茶褐色をなす。3は, 口唇部が内外に突出し, 頸部と胴部の接合部に接続した2条の三角凸帯を付ける。頸部・胴部外面にはやや粗い縦ハケを施し, 内面は, 横ハケの上をナデ消す。胎土に粗石英・雲母等多く含み, 焼成やや良く淡黄茶褐色をなす。4は, 口唇端部が丸味を持ち, 内外面に極めて粗いハケ調整を行ない, 胴内面はナデ消す。外面は丹塗布され, 胎土に粗石英粒かなり含み, 焼成良く淡茶~淡褐色をみせる。5は, 全体に厚手で不安定な小さな凸面をなした底をなし, 外面にやや雑な縦ハケ, 内面は部分的な斜めハケを施し, 内底部はオサエナデ。胎土に粗石英粒多く含み, 暗灰黄褐色を呈する。

溝4 (付図3, 図版58-2)

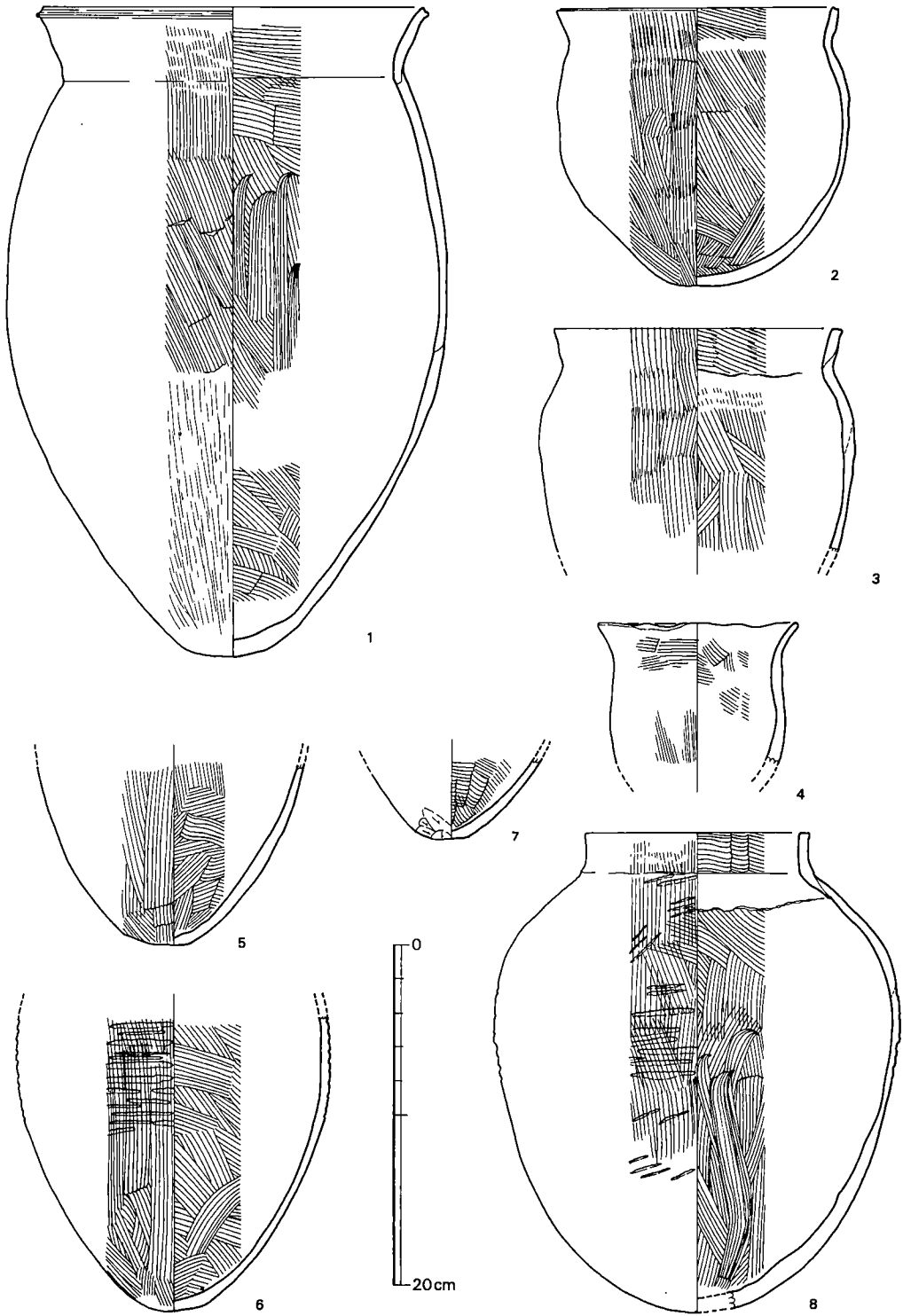
略北西から南東へ大きく円弧を描くように, 東端の段落ちへ流れる。その西半は幅80~40cm, 深さ30~10cmのおりと溝らしい溝であるが, 中央部で砂層となって浅く拡がり, 東半では, 水流によって大きく抉られて, 穴状の部分が連続した如くになっており, 粗い砂が堆積していた。その東半の最深部60cmほどの砂中より多量の土器が検出された。自然流水後に溝の大きく抉られた部分に次々に投棄したものであろう。

出土遺物 (第109・110・111図)

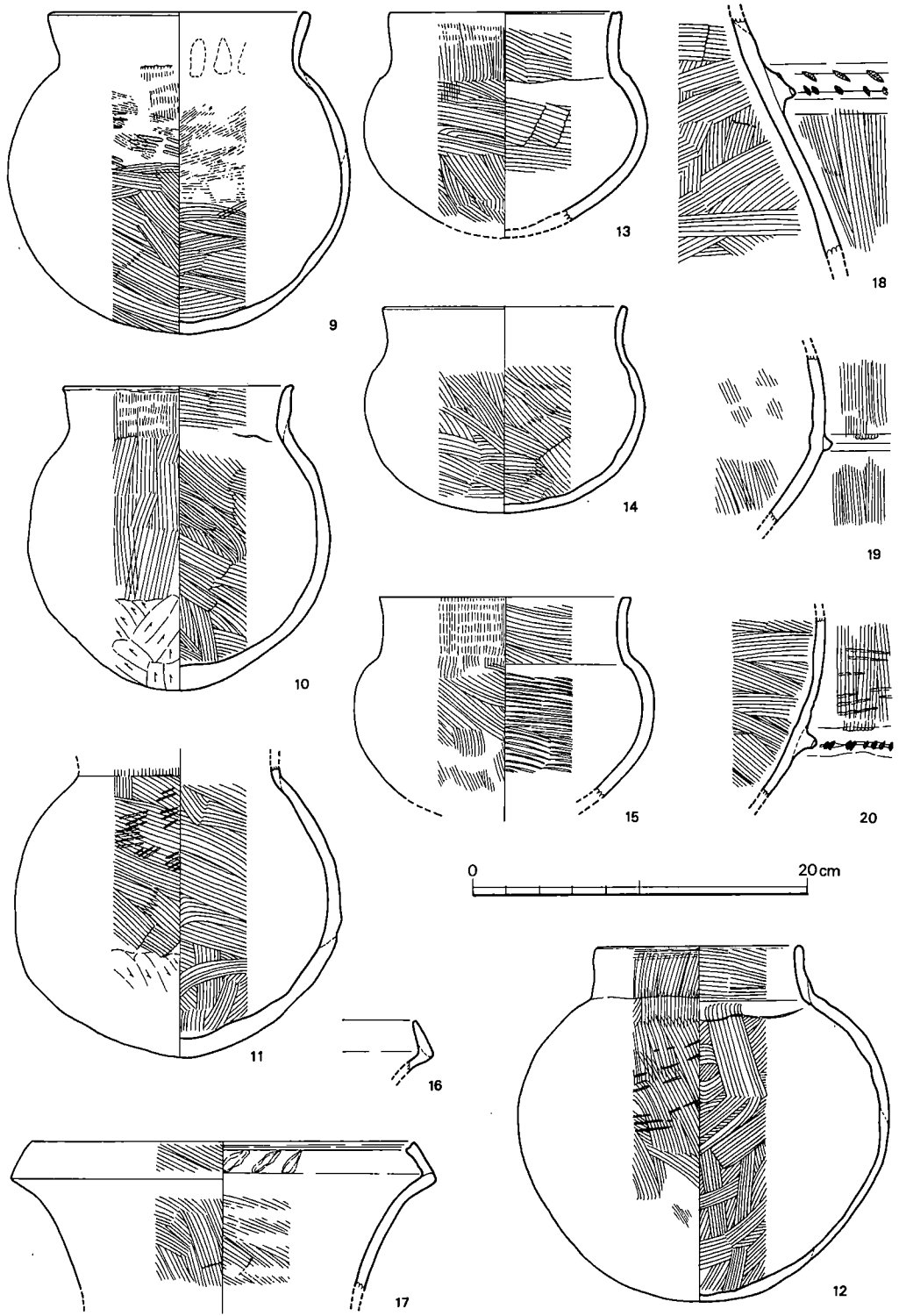
甕 (1~11) 大型で長胴の形態をなすもの (1・5~7), 大型で卵倒形の胴に短かく直行する口縁を付けるもの (8), 中形であまり開かない口縁をもつもの (2・3), 小型で丸く開く口縁をもつもの (4), 短かくやや開く口縁に球形胴を付けるもの (9~11) などがある。1は, 長胴の不安定な器形で, 口唇端部が凹状となり, 外端は突出する。口径22.5cm, 器高38.4cm, 胴部最大径25.6cmを測り, 胴上半と内面には粗いハケ調整を行ない, 胴外面下半は下から上へ板状工具により長く擦り上げるような擦過痕がみられ, 胴部内面中位は過度の使用のため器表が磨滅し以下は黒色炭化物付着する。外面は口縁まで煤がこびりつく。胎土に粗砂かなり含み, 焼成良く内面上半は茶~淡褐色をなす。2は, 口唇端面凹線状となり, 内外面にわりと粗いハケ調整を施す。口径16.6cm, 器高16.4cm, 胴最大径17.3cmを測る。焼きは良く内面灰

黄褐色，外面淡黄褐色を呈し，口縁の一端部と対称位の胴下半に黒斑部をみる。器表外面はかなり凹凸はげしく，1と同様ほぼ完形品。3は，内外面に粗いハケ調整後，口縁上端をヘラで削り取ったようで，口唇部はシャープな平坦面をなす。口縁外面は僅かに中ぶくらみとなる。口径17.0cm，胴最大径18.6cmで，胎土に粗砂多く含み，焼きは良く内面淡茶褐色をなす。外面は煤付着して黒色。4は，口径11.9cmの小型品で内外に雑なハケを残すが，全体に作り・器面調整ともに雑で手捏ね的である。焼成不良で，内面淡茶褐色，外面は二次焼成を受けて赤茶～暗褐色をなす。5は，僅かな平坦面を残すが不安定な長胴のタイプで，内外面に粗いハケ調整を施す。粗石英粒をかなり多く含み，焼きは良く内面淡茶色，外面淡灰黄褐色で，外面中位は煤付着し下半は赤変部が幾らかみられる。内底面には炭化物がこびりつく。6は外面中位に横位の太い叩きを行ない，その後内外面に粗い雑なハケ調整を施す。焼きは良く淡褐色を呈し，底内面に一粒の靱圧痕がみられる。7は，底外面がヘラ削りされ，外面ナデ，内面は押し引きによる放射状の粗い横ハケを行なう。焼きは良く淡黄褐色をなす。8は，卵倒形の胴に短かく直立する口縁を付けた直口壺状の形態をなすもので，外面に横位の太い叩きのあと粗いハケを施す。外面下半は上下方向の擦過状のナデ調整を行ない，粗砂多く含み，焼成良く淡褐色をみせる。9は，口径15.7cm，器高19.2cm，胴最大径20.5cmを測り，球形胴に直立して僅かに外傾する口縁を付ける。胴外面上半は横位の叩きの上により細いハケを施し，更にナデ消している。内面上半もナデ消し，焼成やや不良で，外面淡白褐色，内面灰褐色をなす。10は，口径13.8cm，器高18.2cm，胴最大径18.1cmの厚手の球形胴につくる。口唇外端は部分的に突出し，胴外面下半は粗いヘラ削りのままで，他は雑な粗いハケ調整を行なう。焼きは良く淡褐色をなす。11は，10と器形・調整が類似するが，やや下ぶくらみの呈をみせ，外面下半はヘラ削りのままで底面周辺は更にナデる。上半は細身の叩きの上により粗いハケ調整を施し，上半内面は淡茶褐色，下半は黒～灰色をなす。

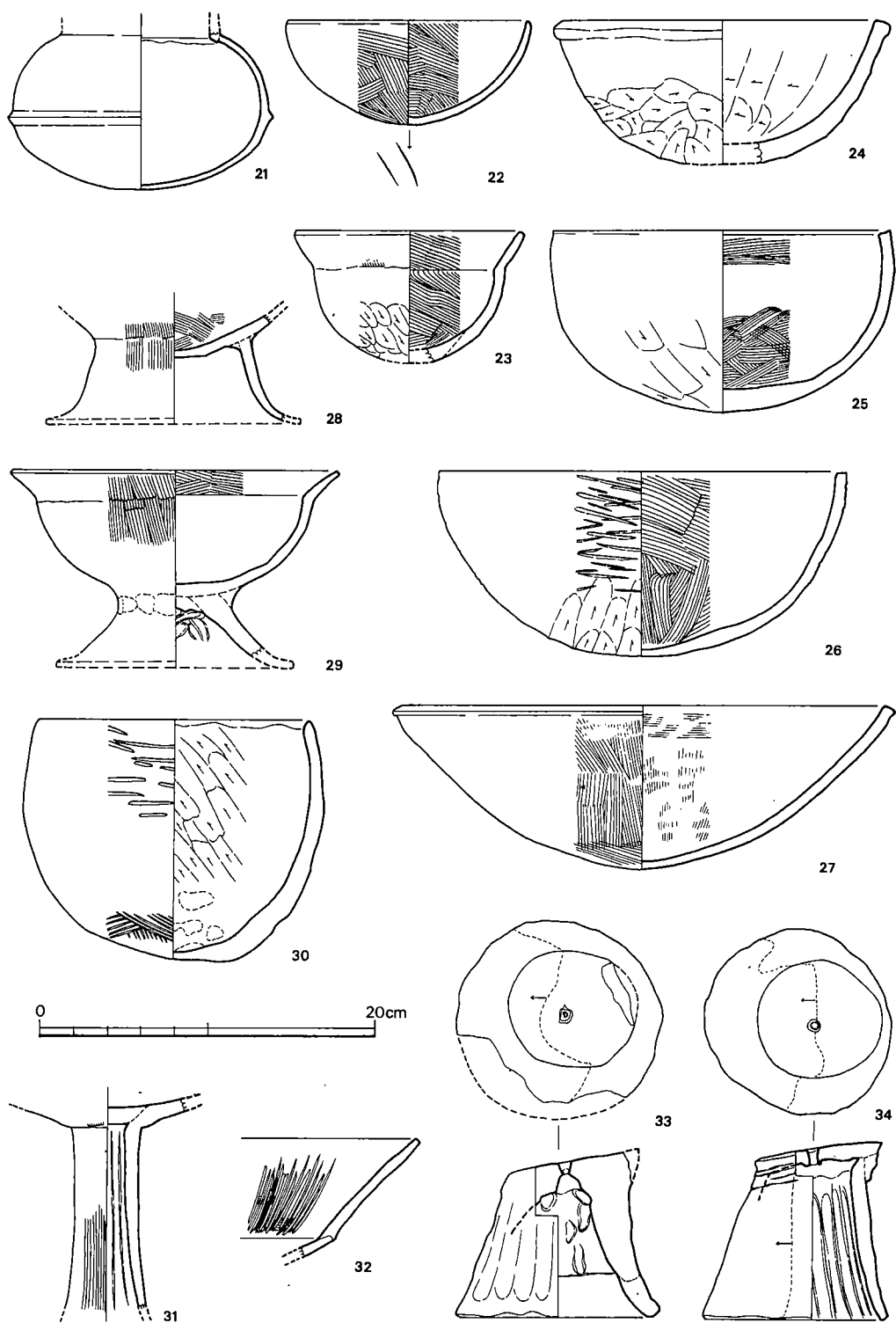
壺 (12・16～21) 球形胴の直口壺 (12)，複合口縁壺 (16・17)，長頸壺 (21) などがある。12はやや内傾する短かい口縁につくり，ほぼ完形で，口径12.4cm，器高21.3cm，胴最大径22.2cmを測る。胴外面上半に横位の叩きを施し，その後粗い雑なハケを行なう。下半は板工具による擦過状となる。焼きは良く，淡茶～白褐色をなす。16は，逆「く」字状に立ち上がる口縁部小片で，内外面横ナデ調整，胎土に粗砂かなり含み，焼成良く，淡茶色をなす。17は，口径23.0cm，口縁端凹状となり，内外面に粗いハケ調整を行ない，内面は後ナデ消す。口縁内面には強い指頭圧痕をみる。胎土に粗砂かなり含み，焼きは良く，淡茶褐色をなす。18は，やや幅広い「コ」字状凸帯の上下端にハケ工具端押圧による斜行刻目を施す。内外にやや細かいハケ調整を施し，胎土に粗砂かなり含み，焼成やや不良で赤茶色をなす。19は，胴部のやや下位に三角凸帯を付け，外面はやや細かい縦ハケ，内面は粗い斜めハケを施し，上半はナデ消す。粗砂少量含み，焼きはやや不良で内面淡茶，外面黒～灰褐色を呈する。20は，胴部下位に不整な



第109图 满4出土土器实测图 1 (1/4)



第110图 沟4出土土器实测图 2 (1/4)



第111图 溝4出土土器实测图 3 (1/4)

三角凸帯を付け、ハケ工具端押圧による刻目を施す。外面上半は横位の粗大な叩きの上を縦ハケ、下半は雑なナデツケ状とする。内面はやや目の細かいハケ調整を行なう。粗石英粒かなり含み、焼成やや不良で内面黒色、外面淡白褐色をなす。21は、通常の細頸扁平胴の長頸壺と異なり、頸部径9.6cmと大きく、肩部が丸く張り、胴中位よりやや下がって三角凸帯を有する。全体に薄手・精製で、粗砂若干含むが大旨精良、焼成やや良く外面赤茶色、内面暗褐色をなす。外面へラ磨きかと思われ、内面は丁寧なナデ調整を行なう。

鉢 (13~15, 22~27・30) 鉢と一括したが器形は多様である。直立或いはやや外傾気味の短い口縁に丸い胴を持つもの (13~15)、小型の椀 (22)、小型で屈曲して外反する口縁を有するもの (23)、粗作りで鉢状のもの (24)、半球状のボール状のもの (25・26)、大口径のもの (27)、粗作りの深いもの (30) などがあり、今後、用途により更に分類され得べきであろう。13は、口径14.0cm、復元器高13.3cm、胴最大径17.0cmを測り、内外面に粗いハケ調整を施し、内面頸部直下は横ナデで消し、下半はナデツケ状となる。粗砂かなり含み、焼きは良く内面淡黄褐色、外面淡褐~黒色をなす。14は、口径14.7cm、器高12.4cm、胴最大径16.8cmを測り、口縁内外面横ナデ、胴内外面は粗いハケ調整を施し、外底部はナデ消す。肩部以下に煤付着し、下半は器表剝落部分が多く、煮沸に使用されている。胎土に細砂多く含み、焼成やや良く内面上半灰褐色、下半は暗褐色をなす。15は、口径15.0cm、胴最大径18.0cmで、内外に粗いハケを施し、胴内面は特に太く粗い。口縁外面は後横ナデを施す。粗砂かなり含み、焼成良く淡褐色~暗褐色をなす。22は、口径14.7cm、器高6.2cmで、内外に粗い雑なハケ調整を施す。底外面に細い2本の平行線のへラ記号がみられる。23は、口径13.7cm、復元器高7.8cmで、内面は粗いハケ調整、口縁外面はハケの上ナデ消し、外面下半はへラ削りのままである。24は、厚手で全体に粗作りで、上半内外面は粗い横ナデ、内面下半は横方向へラ削りの上をへラでナデツケ状となし、外面は粗いへラ削りのままとする。胎土に粗石英粒多く含み、焼成良く暗黄褐色をなす。25は、口径20.1cm、器高10.9cmで、口縁端やや凹状となり、内面上端と下半に雑なハケ調整を行なう。外面上端は横ナデ、下半は削りの後、全体にナデまわしている。胎土に粗砂かなり含み、焼成良好、内面淡灰褐色、外面灰褐~黒色をなす。25は24と同様ほぼ完形で、内面にわりと粗いハケを施し、外面上半は横方向の粗い叩きの上をナデで、下半は粗い削りのままとする。口径24.4cm、器高10.9cmで、胎土に粗石英粒多く含み、焼きは良く、内面淡茶褐色、外面淡黄褐色をなす。27は、口径30.0cm、器高9.8cmの大形品で、内外面にわりと細かいハケ調整を施し、内面はナデ消す。粗大石英粒かなり含み、焼成良く、内面淡茶色、外面淡黄褐~灰褐色をなす。30は、内面へラ削り上げ、外面上半は粗い叩きの上ナデ、下端は粗く大きな雑なハケ調整を行ない、全体に歪つで凹凸著しく粗い作りである。粗砂かなり含み、焼きは良く暗茶褐~黒色をなす。

台付鉢 (28・29) 28は、径の大きい薄手の脚台を付け、脚上半と鉢部内外にハケ調整を

行なう。脚下半は横ナデを施す。29は、細かいハケを口縁内面と外面上半に施し、厚い裾拡がりの脚を付ける。粗石英かなり含み、焼成やや甘く淡褐色をなす。

高杯 (31・32) 31は、脚柱外面ヘラ削りのあと縦ハケ、杯部外面は縦ハケのあと縦ヘラ磨き、内面ヘラ磨きを施す。胎土は大旨精良、焼成やや不良で淡茶色を呈する。32は、杯部屈曲部から更に長く開く類で、内面横ハケの上に密な暗文状の縦ヘラ磨きを施す。胎土精良で、焼きは悪く、内面淡灰黄褐色、外面淡灰褐色をなす。

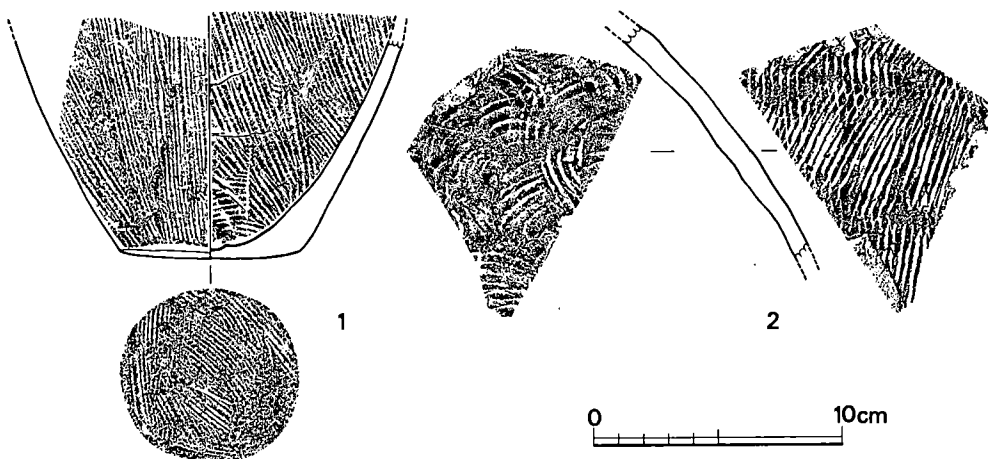
支脚 (33・34) 孰れも所謂沓形器台の類であるが、上面は楕円形となり舌状突起部を作らない。33は体部外面指ナデ上げ、内面は指オサエ痕が著しい。孔は小さく、上面の傾斜した側の約半分(図中点線・矢印)が強い二次焼成を受けて赤変する。これは34でも同様である。粗砂多く含み、焼きは良く外面淡褐～赤茶色、内面暗灰褐色をなす。全体に厚手で手捏ね状である。34は、内面に強い指縦ナデがみられ、薄手で、孔は棒状工具で穿つ。粗砂多く含み、焼きは良く淡白褐～茶色を呈する。

溝5 (付図3, 図版58—3)

B区のほぼ中央に溝6と平行してN81°Wのほぼ東西に走る。西端で溝3を切り、東端は地山面と同レベルとなり、幅50~80cm、深さ20~25cmの断面U字状をなし、底面は東へ低くなる。遺物は皆無で、埋土及び形態より、溝6と同時期かと考えられる。

溝6 (付図3, 図版58—3)

溝5の南に平行してやや弧を描くように、ほぼ東西に走る。東端で溝7を切り、底面は東へ低く下がる。幅0.5~1.6m、深さ0.2~0.5mで断面U字形を呈し、途中で2箇所南側へ不整形の張り出す部分がみられ、埋土下半は砂層となり水流により抉れた部分と判断される。遺



第112図 溝6出土弥生土器・須恵器実測図 (1/3)

物は少なく、下記の須恵器片より、古墳時代後半以降の溝と考えられる。溝5との間は約4.5m幅で、道の側溝説もあるが判然としない。

弥生土器 (112図)

甕 (1) 凸面状となる平底で、内・外面に、更に底面にまで粗いハケ調整を施す。粗砂多く含み、焼成良く外面暗褐色、内面黄茶褐色をなす。

須恵器 (第112図)

甕 (2) 肩に近い胴部片で、内面青海波で上半を部分的にナデ消す。外面平行線状叩きで、粗砂僅かに含むがかなり精良で焼成堅緻、外面灰黒色、内面暗青灰色をなす。

溝7 (付図3, 図版58—4)

B区の南半にN40°Eのほぼ北東から南西へ直線的に細く延びる。幅30~70cm、深さ20~30cmで、遺物の出土は少なく、第2号住居跡と同時期の所産かと考えられる。底面は殆んど変わらないが、南半では南西へ低くなる。北東端で溝6に切られ、南西端の第5号掘立柱建物より古い。

土師器 (第113図)

高杯 (2) 脚端部小片で、内面ヘラ削りにより稜をなす。胎土精良で焼成良く、橙茶色をなす。

須恵器 (113図)

埴 (1) 頸部~肩上部小片で、肩外面にカキ目の上ナデ、他は回転ナデ調整を行なう。胎土精良で焼成堅緻、外面灰かぶりで暗灰色、内面灰色をなす。



第113図
溝7出土須恵器・土師器実測図 (1/3)

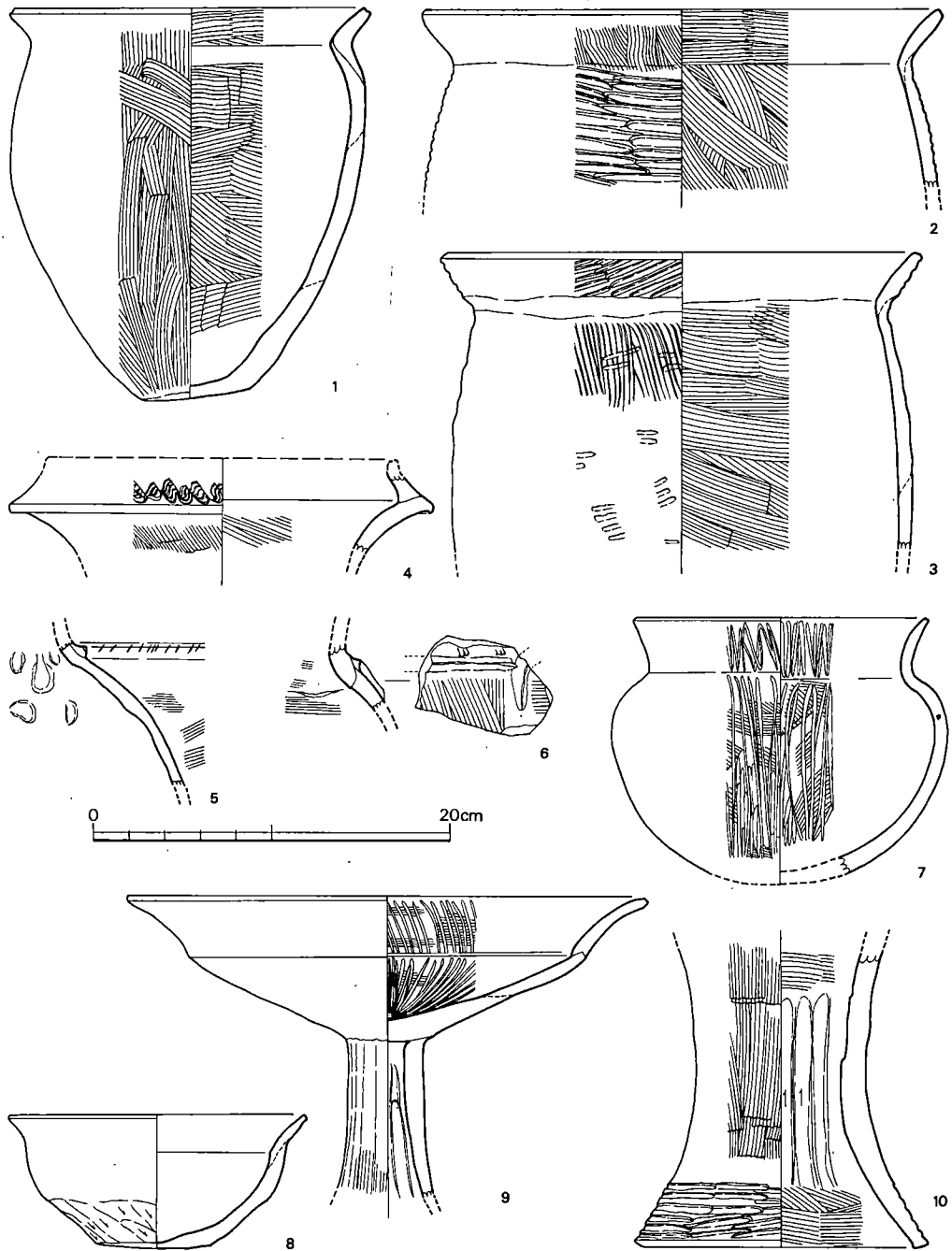
溝8 (付図3)

発掘区の南端にN85°Wのほぼ東西方向に走る。幅0.9~1.1m、深さ20~40cmで、底面は西へ下がる。遺物は皆無で時期は明確でない。

(3) A区東南隅包含層

A区東南からB区北東にかけて大きく段落ちとなる部分がある。これはB区東辺中央段落ち部とも継がって、南へ開く小支谷の谷頭及びその西辺にあたると考えられる。一段(50~80cm)下がって後はそれ程急に下がらず、緩やかに傾斜してゆき、往時の水田面へと続くものと想定される。黒紫色土の遺物包含層が厚く堆積し、段落ち部発掘範囲ほぼ全面に遺物がみられるが、段落ち直下周辺に特に多量に集中していた。遺物は総て、弥生終末~古式土師器に限られる。

甕 (第114図1~3) 1は、厚手の短かく「く」の字に外反する口縁で、上半でやや張る胴部につくる。底部は僅かに凸面状となる不安定な平底で、内外に粗い雑なハケ調整を施す。口径20.1cm, 器高21.9cm, 胴最大径19.9cmを測り、口縁端は凹状をなす。胎土に粗砂かなり含



第114図 A区東南隅包含層出土土器実測図 1 (1/4)

み、焼成良好で、内面茶褐色、外面灰茶褐色をなす。2・3と比べて古式で、弥生後期中頃の所産である。2は、あまり張らない長胴の大型品となるもので、復元口径29.3cmを測る。内面と口縁外面に粗いハケを施し、胴部外面は太く粗い叩き目のままとする。胎土に粗砂多く含み焼成良好で、内面暗茶褐色、外面煤付着して暗褐～黒色をなす。3は、口径27.0cmの張らない長胴の大型品で、口縁外面と胴部外面に粗く太い叩き目を施し、胴上半は極めて粗い縦ハケで、下半は縦ナデで叩きを消す。胴部内面は粗いハケ、口縁内面は横ハケの上を横ナデで消す。胎土に粗成多く含み、焼成良好で内面暗褐色、外面は煤付着して黒～暗褐色をなす。

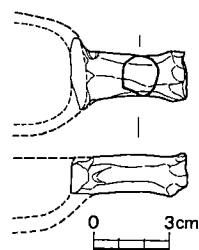
壺（第114図4～7） 複合口縁壺（4）と磨きをかけた短頸広口壺（7）とがある。4は、稚拙な櫛描反転連続による波状文を口縁外面に施し、頸部内外面に斜めハケ、他は横ナデとする。胎土に粗砂かなり含み、焼成良く灰褐色をなす。5は、頸部に三角凸帯を付け、鋭い工具による細い刻目を斜めに施す。胴外面には横ハケが残り、内面は指オサエで凹凸著しい。胎土に粗石英極めて多く含み、焼成やや不良で外面淡褐色、内面黒色を呈する。6は、頸部に断面三角凸帯を付け、その一端は下方へ垂れるように貼付する。内面は粗い横ハケの上をナデる。粗砂かなり含み、焼きは良く、淡白褐色をなす。7は、口径16.5cm、復元器高15.0cm、胴部最大径18.8cmを測る。胴部内外面に粗いハケを施した上から縦方向のヘラによる暗文状の磨きをかける。下半ではこれが密となってゆく。口縁内外面も鋸歯状に雑な暗文状のヘラ磨きをかける。胎土に粗砂若干含み、焼成良く淡赤茶色をなす。

鉢（第114図8） 凸面状の底部から丸味を帯びた体部へ、更に屈折して外反して開く口縁につくる。口縁端は僅かに凹状をなし、内外面横ナデで、体部下半は大きく抉るように削る。胎土に粗砂多く含み、焼成良く淡茶褐色をなす。口径16.7cm、器高7.4cm。

高杯（第114図9） 杯部口径29.2cmで、屈折して更に外反する口縁は全体からみてやや短かい。杯部内面は横ハケの上に放射状のヘラによる暗文が施され、外面は縦位の密な丁寧なヘラ磨きとする。脚柱内面は縦の指ナデ上げ、外面は縦削りによる面取り状の稜線を残して、上から縦ハケの上に更に縦ヘラ磨きを行なう。胎土に粗石英粒かなり含み、焼成良好で茶褐色をなす。

器台（第114図10） 上下に開く鼓形となり、外面下端に太く粗い横位の叩きを施し、中位は縦ハケを行なう。内面上下が粗い横ハケ、中位は強い縦ナデ上げのままとする。胎土に粗砂多く含み、焼成良く、茶褐色をなす。

土製品（第115図） 断面不整多角形をした手捏ねの短柱状品で、一端で折損がみられ、一応土匙の柄と推定したが、他のミニチュア製品の可能性もある。胎土精良で淡茶色をなす。



第115図
A区東南隅包含層
出土土器実測図 2
(1/4)

(4) B区東端段落ち

前記のA・B区東端に連なる段落ちが、B区東端の中央付近でも検出され、その出土品が前述遺物と全く異なる為、別にして記すこととした。わりと急な段落ちで、最深部まで90cmほどあり、遺物はその縁辺及び直下付近に集中した。その内容は、古式の須恵器、高杯などの土師器、土製模造鏡、ミニチュア土製品、滑石製有孔円盤・剣形模造品など、祭祀的な様相を示し、第2号住居跡との関連も注目される。

須恵器 (第116図1～5)

壺(1～3) 1は、内面稜線以下は粗い横方向のナデツケ状とし、他は回転ナデ。胎土に細砂僅かに含み、焼成堅緻で内面暗青灰色、外面灰かぶりで部分的に濃緑の自然釉がみられる。2は、胴部外面中位の沈線以上にカキ目を施す。胎土に細砂僅かに含み、焼成堅緻で外面灰色、内面青灰色をなす。3は、小形の壺の可能性もあるが、内底面に残る暗灰色の灰かぶり部分から、最小内径5cm程の頸部を有するものと考えられる。底外面はヘラ削りのあとナデしており、内面はあて具痕のため凹凸著しい。胎土に細砂幾らか含み、焼成良く、外面黒～暗灰褐色、内面淡灰色をなす。

甕(4) 頸部直下から肩部にかけての破片で、内面青海波、外面平行線状叩きを施す。頸部直下内外面は横ナデ、内面上半にも部分的に横ナデがみられる。胎土に粗砂かなり含み、焼成堅く外面暗青灰色、内面青灰黒色をなす。

器台(5) 裾拡がりで脚端部は丸味をもち、透し部はやや曲線的な1縦側辺のみ残り、全体に配置・形状等、明確でないが、台形状の透しとなるかと考えられる。透し部直下に両側を沈線状に押さえて僅かにつまみ出した凸線がみられる。胎土は僅かな細砂を含むが大旨精良で、焼成堅緻で外面灰黒色、内面淡青灰色をなす。

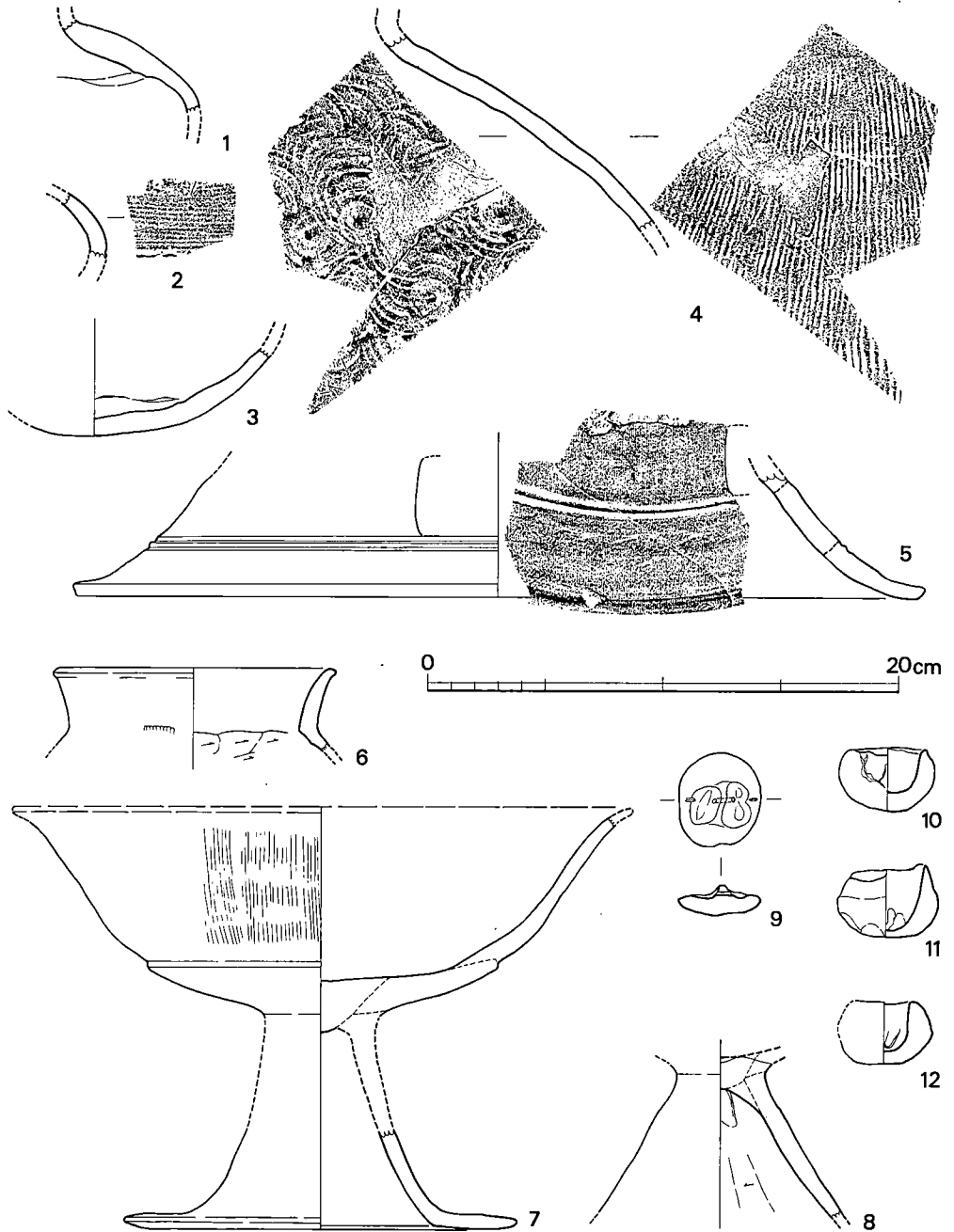
土師器 (第116図6～8)

甕(6) 外傾状に開く口縁の外端部が突出し、胴内面ヘラ削り、外面に縦ハケを残す。口縁内外面横ナデで、粗砂かなり含み、焼きは良く淡灰褐色をなす。

高杯(7・8) 7は、復元口径26.0cm、器高18cm前後と考えられ、脚下半部とは、胎土・焼成ともに同じで、同一個体と考えて図上復元を試みた。杯部は全体に丸味を帯びて端反り状となり、外面は縦ハケの上を横ナデ、内面は横ナデで中心付近はナデつける。胎土精良で焼成良好、淡黄白褐色をなす。8は、脚柱部分から大きく拡がる類で、内面下半は横方向ヘラ削りの上を縦にナデる。胎土精良で焼成やや良く、橙褐色をなす。

土製模造品 (第 116 図 9~12)

模造鏡 (9) 径 4.0~3.5cm の不整円形をなし、鈕上面までの厚さ 1.3cm で、指頭で鈕部をつまみ出し、細い工具で穿孔し、両端にその圧痕が残る。胎土精良で淡茶色をなす。



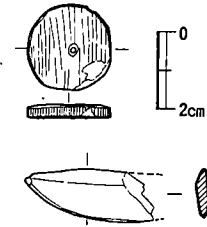
第 116 図 B 区東端段落ち出土須恵器・土師器・土製品実測図 (1/3)

模造品 (10~12) 孰れも手捏ね小品で、内外面に指頭圧痕・粘土のシワ等を残す。胎土精良で、最大径4.0~4.3cm、高さ2.6~3.0cmを測る。

滑石製品 (第117図)

有孔円盤 (1) 径2.2cm、厚さ0.3cmの小円盤に1孔を穿つ。乳橙色をなし片麻岩に近く、側面と表裏同方向の擦痕を残す。重量2.8g。

剣形模造品 (2) 下辺が湾曲し、表面中心よりやや上方にずれて稜線をつくる。縁辺は丸味を持ち、乳橙色の片麻岩質で、刀子様の模造品となるか。



第117図
B区東端段落ち石製
模造品実測図(1/2)

(5) 掘立柱建物

発掘範囲の北半に4棟分、南端に1棟が検出された。南端の第5号掘立柱建物は柱穴も小さく、全く他のものと様相が異なる。北半の4棟も他の官衙的性格をもつ遺跡のもの如き大規模なものではなく、後記する如く平安期を中心とした小規模な類である。

第1号掘立柱建物 (第118図上)

2間×(1+α)間で主軸は真北より17°31′東へふれる。梁行7尺等間、桁行9尺と考えられる。柱穴は径30~60cmで、深さ6~34cmと浅く全体に更に北へ延びると考えられる。第2号棟と直角方向となり、双方が関連した建物となろう。

第2号掘立柱建物 (第118図下)

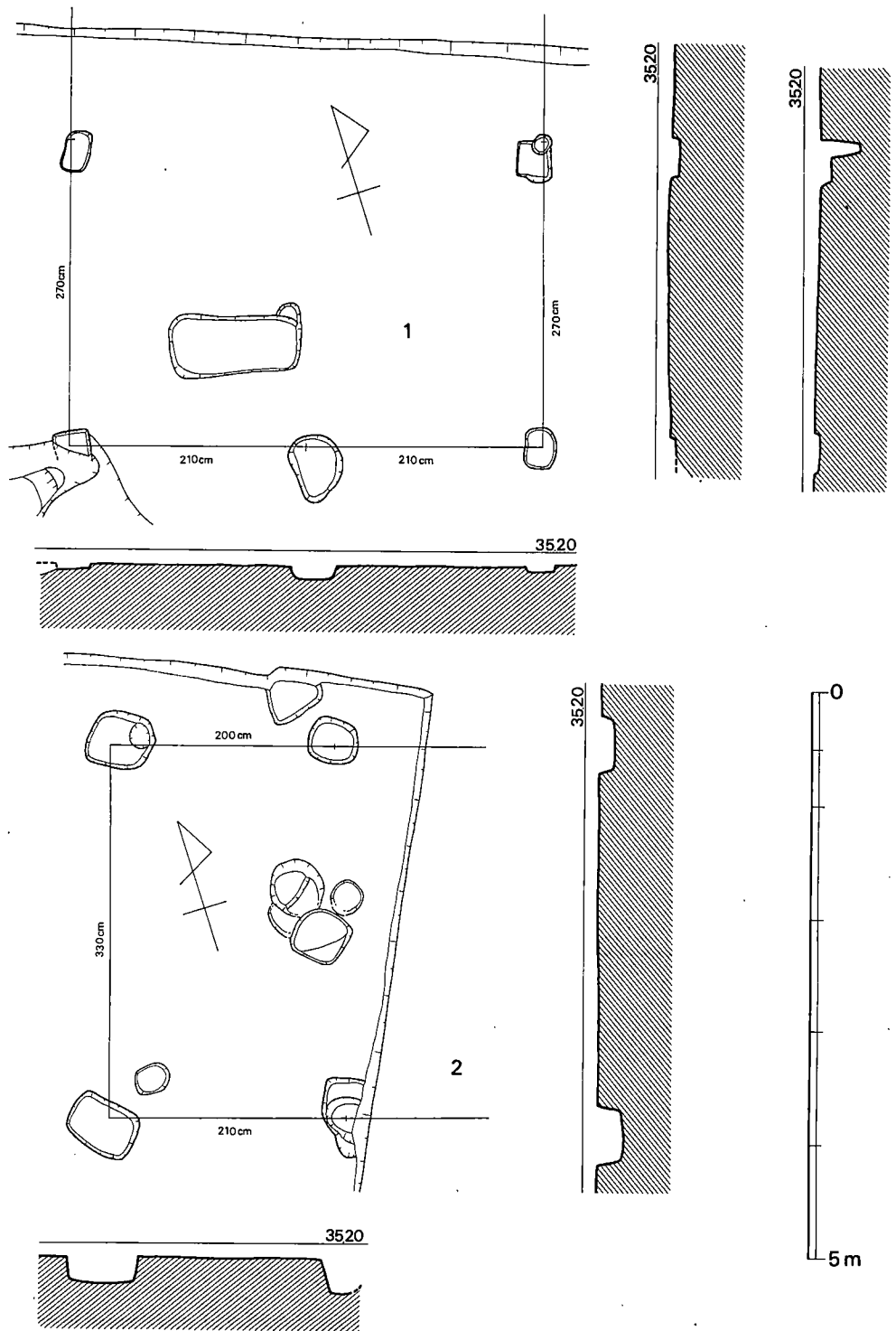
第1号棟の東にN72°30′Wの主軸をとり、1×(1+α)間の東西棟となろう。梁行10尺、桁行7尺となるものと推定される。柱穴掘立は不揃いで、径40~60cm、深さ15~30cmでレベルは一定しない。更に東方へ延びる可能性がある。

第3号掘立柱建物 (第119図上)

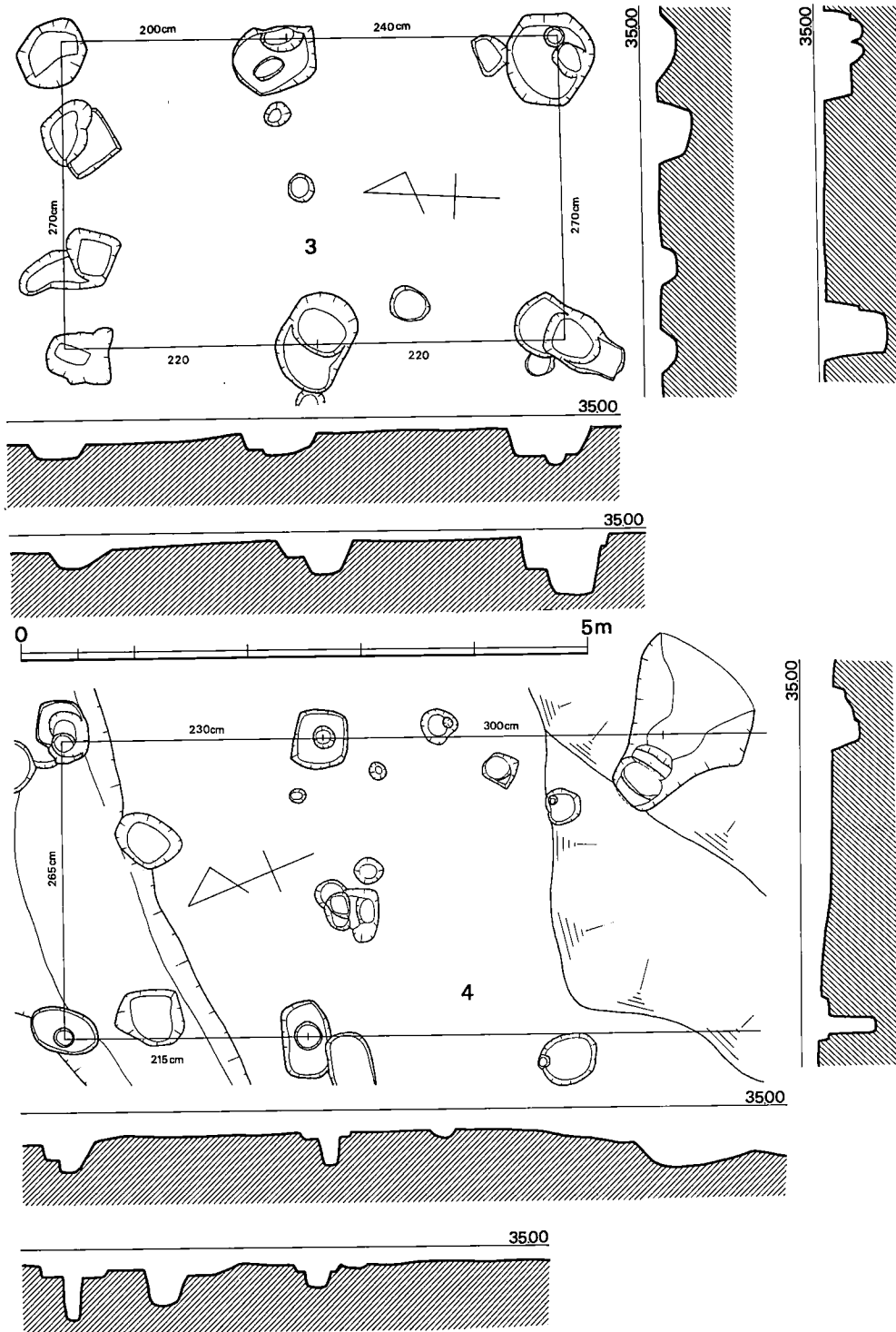
主軸をN4°Wにとる1×2間の南北棟で、梁行9尺、桁行7尺の基準が考えられる。柱穴掘方は不揃いであるが、径60~80cmと他棟に比べやや大きく、深さは14~55cmと揃わない。

第4号掘立柱建物 (第119図下)

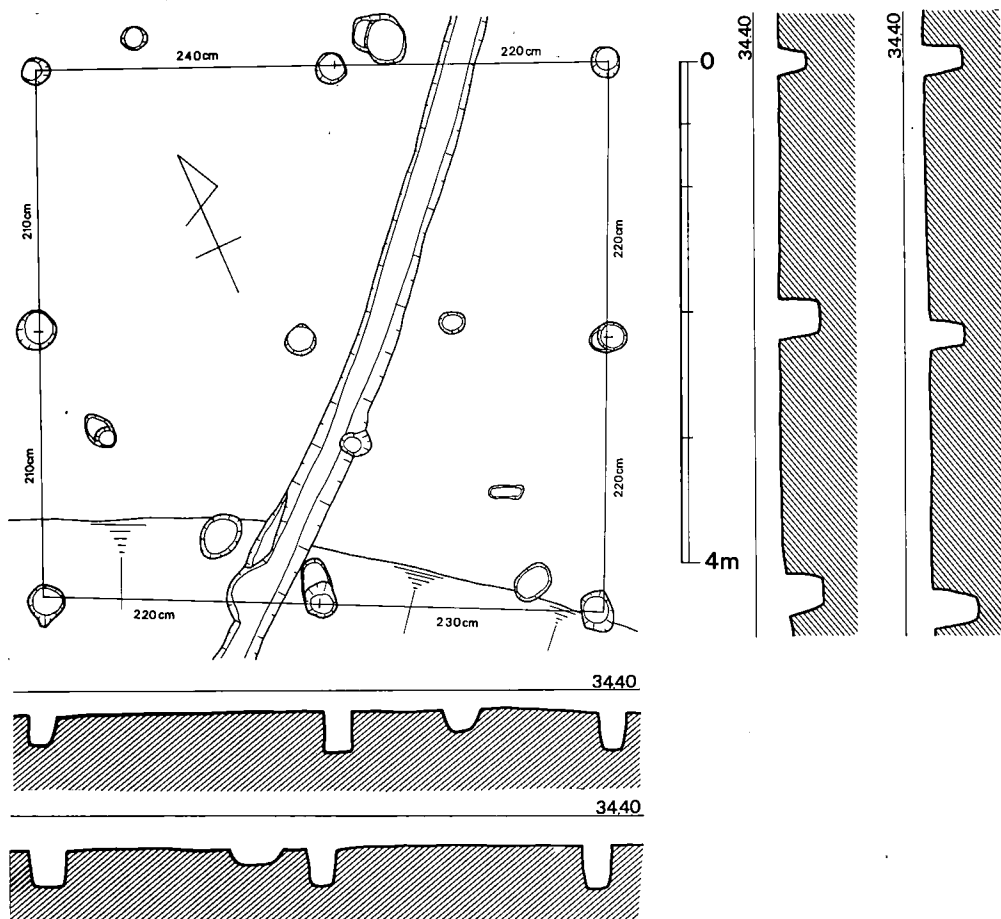
主軸をN22°30′Eにとる1×(1+α)間の建物で、南半は削平・段落ちによりどれ程延びるか不明である。梁行9尺、桁行7(8)尺が想定され、残存する4柱穴掘方間には各々ほぼ



第 118 图 第 1·2 号掘立柱建物实测图 (1/60)



第 119 图 第 3 · 4 号掘立柱建物实测图 (1/60)



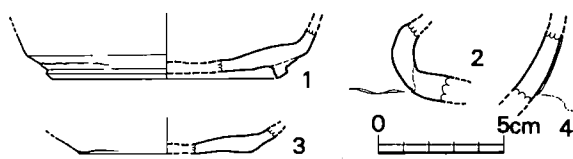
第120図 第5号掘立柱建物実測図 (1/60)

中心に、径15cm程の柱痕が残る。深さは20~50cmと揃わない。第3号棟の東隣に在るが、主軸方位も異なり、各々時期を異にする単独棟かと考えられる。

第5号掘立柱建物 (第120図)

遺跡の南端の段落ち上縁に営まれ、主軸をN23°Eにとり、2×2間の東西にやや長い方形に近く、梁行7尺、桁行7.5尺等間を基準とする。溝7より新しく、柱穴は径22~30cmと小さく、深さは22~35cmである。

以上の掘立柱建物の他に並ばない小ピットが多く散在する。これらのうち大部分は弥生終末期土器小片を含み、歴史時代の遺物を含むものは極く少数



第121図 A区各ピット出土須恵器・土師器・白磁実測図 (1/3)

である。以下A区各小ピット出土の遺物を、掘立柱建物群の時期判断の状況証拠として図示したい。(第121図)

須恵器杯(1) 低く内端で接地する高台を付け、体部への境に稜をつくる。胎土に細砂若干含み、焼成堅緻で体部外面暗灰色、他は灰色を呈する。P.21出土。

須恵器頸部(2) 平瓶或いは提瓶の頸部小片で、内径4cm弱となろう。細砂幾らか含み、焼成堅く、黒色をなす。P.20出土。

土師器小皿(3) 底部糸切りの小片で、復元底径6.9cmで器表磨滅し、細砂かなり含み、焼きは悪く灰白色を呈する。P.8出土品である。

白磁(4) 壺胴部下半の小片と考えられ、外面は横へら削りで、下端付近までややオレンジ色がかった釉をかけ、胎土は密で灰白色を呈する。内面は回転ナデで無釉のままとする。3と同じくP.8出土品である。

3. 小 結

a. 弥生終末期を中心とする土器群について

本遺跡では既述の如く、A区東南隅包含層、溝4、溝3北端等に弥生後期から古式土師器の時期の土器が多量に出土したが、各遺物には若干の時期差がみられる。

まず、A区東南隅包含層出土分(第114図)においては、甕1が後期中頃まで遡り得るものであり、高杯9も反転して開く口縁部がやや短く後期後半と考えられ、更に鉢8も凸状をなす平底につくり古相を残す。これらに対して、甕2・3は胴外面に叩き目を施し、長胴となるタイプで、後期終末の地元系の特徴を示すものである。

次に、溝3北端出土土器(第108図)は、包含層としてはA区東南隅包含層に連続するものである。5のような凸面をなした平底も残り後期後半となる。3のような響灘沿岸～遠賀川下流域に多くみられる複合口縁の壺の如く、4の壺とタイプが異なるものも出土するが、終末に近い時期に考えてよさそうである。

以上に対して溝4出土土器(第109～111図)は、長胴の甕も尖底の如き丸底となり、直口状で球形胴の壺の類(9～12)、或いは鉢の類(13～15)などでは器形・調整等の手法・法量等にも或る程度の共通性、更には規格性も認められてくる。台付鉢(28・29)や、各種の鉢(22～27)等においては薄手の精製品もみられ、古式土師器的様相が強くなってくる。高杯(31・32)は、いまだ長脚であるが、杯部口縁が長く開き、深くなっている。長頸壺(21)は、細頸扁平

胴のタイプと異なり、頸部径が大きく、肩が張り、凸帯をつまみ出すものである。このタイプは、春日市門田遺跡谷地区大溝Ⅰ（註1）より弥生終末土器多量とともに細頸扁平胴のタイプのものとともに出土しており、福岡市西区西新町遺跡（註2）からも出土している。

以上の各遺構出土土器を考える上で同地域として参考としなければならないのが近年調査された甘木市大字平塚所在小田道遺跡（註3）である。報告によれば、当該時期をⅠ～Ⅲ期に分けて編年されており、朝倉地方における成果が得られている。八ヶ坪遺跡出土土器は、大旨、A区東南隅包含層と溝3北端の古手のものが小田道Ⅰ期、溝4の大半が小田道Ⅱ～Ⅲ期に含まれるものである。ただ八ヶ坪遺跡は朝倉地方でも西端に位置し、細部において異なる点もかなりみられ、今後の検討課題として残る部分も多い。ただ、くの字口縁に長胴のタイプの甕においては、当地方から筑後・佐賀平野に特徴的に分布し、更に糸島平野～古賀の北部沿岸地域までも広くみられることから、畿内・瀬戸内系土器群との比較の上からもこの類の編年の必要性を痛感していたところであり、小田道遺跡において変遷の傾向を掴むことができたのは喜ばしい。前原町三雲遺跡においてもこの手の甕が多く出土し、後期後半から終末期、更に布留式期土器に伴うものまで地元系土器として残る。これらの各遺跡の例から概見してみると、この手の甕は、後期後半では胴最大径が上位にあり、凸状の平底を残し、終末期では中位近くまで最大径が下がり、更に長胴となり、丸底に近く、外面に叩きを施すものがみられる。その後は頸部内面の稜が不明瞭或いは丸味を帯びて、胴の張りが少なくなる傾向となる。当八ヶ坪遺跡においては、当該時期の確実な遺構が検出されず、現状での他遺跡に於ける研究成果に負う所大であった。今後の当地方の研究進展に期待する次第である。

b. 竈付設の竪穴住居跡について

本遺跡では、第2号住居跡に竈が設けられ、出土土器等からその時期が問題となる。また未だに竈を持たない第1号住居跡との時間的関連についても若干の問題点を示してみたい。

まず、出土土器より各住居跡の年代的位置付けを考察したい。第1号住居跡（第101図）では、甕（1）は胴最大径を上位に有し肩の張る器形をなし、口縁辺にシャープさを残す。高杯（3）は小径化するものがみられ、小型鉢（5）では口縁内面に稜をつくり短かく外反するタイプである。小型化・定形化しない手捏ね土器（6～8）もみられる。以上と比較して第2号住居跡（第102・103図）では異なる様相がみられる。甕では覆土中混入小片（1・2）の庄内式系のを除き、他は、胴部中位に最大径を有し、僅かに長胴化の萌しをみせるもの（3）もみられ、口縁中ぶくらみの特徴を残すものもかなりあるが、外反の度が弱くなり傾きが少なくなる傾向を示す。口縁辺は既にシャープさに欠け丸味を帯び、小型甕では器壁の厚くなるものが多い。更に8のように趣きを異にするものもみられる。椀においては、覆土中の14を除い

て他は、未だ明瞭に丸く内湾するものはみられず、孰れも、外面下半をヘラ削り又はハケ調整のままとする特徴が指摘される。高杯は脚柱部から広がる類である。

以上の観察から、第1号住居跡出土土器は第2号住居跡のものより、より古相を呈しており、本遺跡においては、各々、竈出現前夜と出現当初の住居跡であると位置付けられる。これらの土器は、甕においては、布留式新とされる春日市下原遺跡出土土器群(註4)の傾向を残しながらも明らかに新しい段階に入っているもので、春日市門田6号住居跡(註5)出土のものとの共通性が多くみられる。更に、那珂川町今光遺跡溝2(註6)のもの、甘木市池の上遺跡D-1棺外副葬土師器(註7)との近似性もみられ、全体に甕において、5C前半代の特徴を残す。ただ碗においては、丸味を帯びて、内湾的なものに近付いているものもみられ、貯蔵穴内の須恵器小片の存在をも勘案するに、本遺跡第2号住居跡は5C後葉に近い中葉期と比定されよう。第1号住居跡はより古く、5Cの前葉に近い中葉期に位置付けることができる。

本遺跡B区東端段落ち出土品についても若干言及しておく。須恵器は甕においても古式であり、甕は内面一部ナデ消しをみせ、器台は5Cの「中葉に近い後半」とされる大阪府野中古墳(註8)出土品等に端部や凸線の手法等に近似点をみることができ。土師器甕は口縁がかなり立ち、安徳・中原5号住居跡(註9)のものに近く、高杯は脚柱上部から開くもので、杯部は全体に丸味を帯びる。更には、土製模造鏡や定型化・小型化した手捏ね土器がみられる。全体としては第2号住居跡に近い時期から、遅れて、5Cの後半以降のものまでを含む時期の所産であると考えられる。

九州における竈付設の竪穴住居跡は、関東におけるそれよりも発見・研究史的にも遅れて一昔前までは珍しいものであったが、現在では、北半九州を中心に、300例を優に越える発掘が為されている。それらの殆んどは、7C代を中心に6C前半から8C中葉までに集中している。より古い例を探すと、春日市赤井手遺跡(註10)で須恵器Ⅰ-1型式を伴う例があり、また、太宰府町裏ノ田遺跡(註11)の須恵器Ⅱ型式を伴う2(3)例等があり、大旨、竈出現の時期は、このあたりに従来おさえられてきた。例外的なものとして、筑紫野市八隈9号住居跡(註12)で布留式を伴うものがみられるが、いまひとつ明確でない点もみられる。また、熊本県阿蘇町宮山1号住居跡(註13)では免田式の長頸壺等の弥生終末的な土器群が出土しており、一隅にベッド状遺構がみられ、著しく片寄った位置に竈が付設されるという。通有の竈の系列の中に位置付けるには異論を唱えるところではあるが、年代的には現在では最古の例であろう。また、未報告ではあるが、吉井町塚堂遺跡(註14)では5C前半代の時期の竈付設住居跡が16軒発掘され、陶質土器も伴っている。

北九州においては、弥生後期～古式土師器の時期までのベッド状遺構を伴う住居跡における中央炉の存在から、次に炉の位置が明確でなくなる時期を経て、竈が出現・盛行し、更に奈良時代に至って移動式土製竈の出現をみるという概略的な一連の流れがみられる。この中で、竈

の初見は、各地域によっても当然若干のずれも考えられるが、発生そのものは、その背景となる生活変革の原因を摺む必要にも継がる問題でもある。少なくとも当地方でみる限り、須恵器の初見(註15)、土器製作上の粗雑化・定型化傾向、鉄製農耕具(鋤・鋤)の普及による生産拡大、地域的にもみられるようになった大型古墳築造等の大土木事業にみられる技術進展とその動員力となる権力の集中化等の諸点と、竈の発生とほぼ期を同じくすることが考えられ、これらの社会的変革の中で、生活様式も一変していったことが認められるところである。(中間研志)

c. 掘立柱建物と条里について

発掘調査を実施した「八ヶ坪遺跡」の周辺、山家川付近では、土地割の方位をN28°Eにとる条里の方格子割が存在している。この周辺の条里遺構については、日野尚志によって「筑後川中流域右岸における条里について」として調査・検討が加えられた論巧がある。(註16) 部分的に紹介するならば、『坪付小字名は、松延に小字「三十六」、中牟田に「八ヶ坪」(遺跡所在地)、東小田に「五ノ坪」、隈に「六ノ坪」、常松に「八ヶ坪」、下見に「三十六」、山家に「ヤツエ」がある。坪並は、西北隅を一ノ坪、東北隅を三十六ノ坪とする千鳥式で、条・里が坪並の数え方と一致する場合には、遺構は条は十四条、里は九里まで存在していたことは確実である。』とされている。

八ヶ坪遺跡の掘立柱建物1～5号棟は、その性格や時期に明確に出来るものは少ないが、少なくとも、遺跡の時期では、最も新しい時期に入る。しかも、偶然かもしれないが、条里遺構にきわめて近い棟方向を示す。

遺跡から、出土している遺物について見るならば、平安期頃まで遺構の存在が考えられよう。この事実は、この周辺の開田の時期を暗示しているようである。(栗原和彦)

- 註1 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第11集」1979
- 2 朝日新聞西部本社「古代を掘る」所収 1978
- 3 副島邦弘・内田俊和「小田道遺跡」甘木市教育委員会 1981
- 4 井上裕弘「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集」福岡県教育委員会 1977
- 5 井上裕弘「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第7集 下巻」福岡県教育委員会 1978
- 6 佐々木隆彦「今光遺跡・地余遺跡」東急不動産株式会社 1980
- 7 橋口達也「池の上墳墓群」甘木市教育委員会 1979
- 8 北野耕平「河内野中古墳の研究」臨川書店 1976
- 9 前掲書(6)の中に井上裕弘・森田勉調査の資料として示される。
- 10 佐々木隆彦・他「赤井手遺跡」春日市教育委員会 1980
- 11 酒井仁夫「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XVII」福岡県教育委員会 1977
- 12 松村一良「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 VII」福岡県教育委員会 1976

- 13 緒方勉「宮山遺跡」阿蘇町教育委員会 1972
- 14 国道 210 号線バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が1980年夏～1981年秋に調査した。馬田弘稔氏の御教示による。
- 15 ここでは、従来陶質土器と呼称されるもののうち 5 C 代の日本生産品の可能性をも考え得る類の時期をも一部含めたものとしたい。
- 16 日野尚志「筑後川流域右岸における条里について」佐賀大学教育学部研究論文集 第23集 1975

後 記

筑紫野の、かつて殿様が女中の両肩にすがりつつ越えたという長崎街道中の難所、冷水峠にトンネルぶち抜いてバイパスが出来るげなという噂を耳にして久しい。

文化財調査も、当課内での担当者の交替などもあり、やっとここまでこぎつけたという感慨でいっぱいである。しかしそう感慨にばかりにはひたってもいられないというの厳しい現実でもある。がんばらねば。

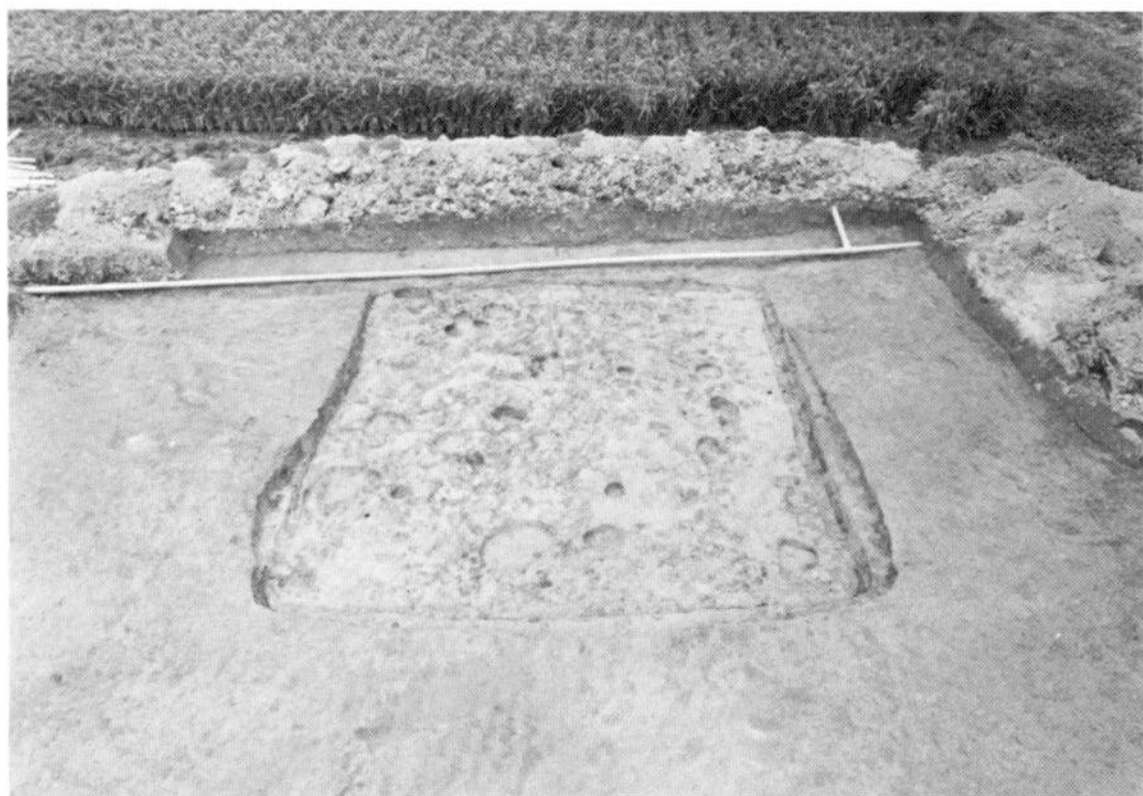
最後に、当バイパス関係担当者で事業途中で帰天された故前川威洋氏の冥福を祈り、本書を捧げたい。



1 八ヶ坪遺跡全景（南より）



2 八ヶ坪遺跡B区全景（北より）



1 第1号住居跡（東より）

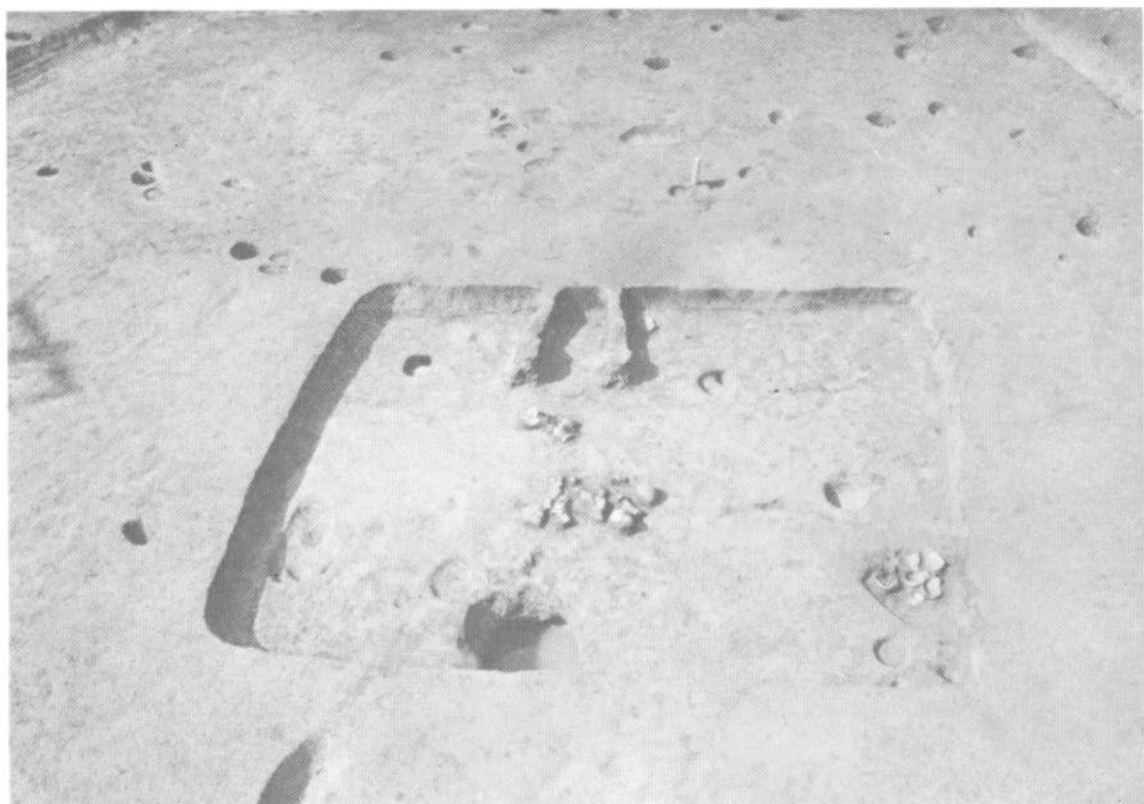


東 壁

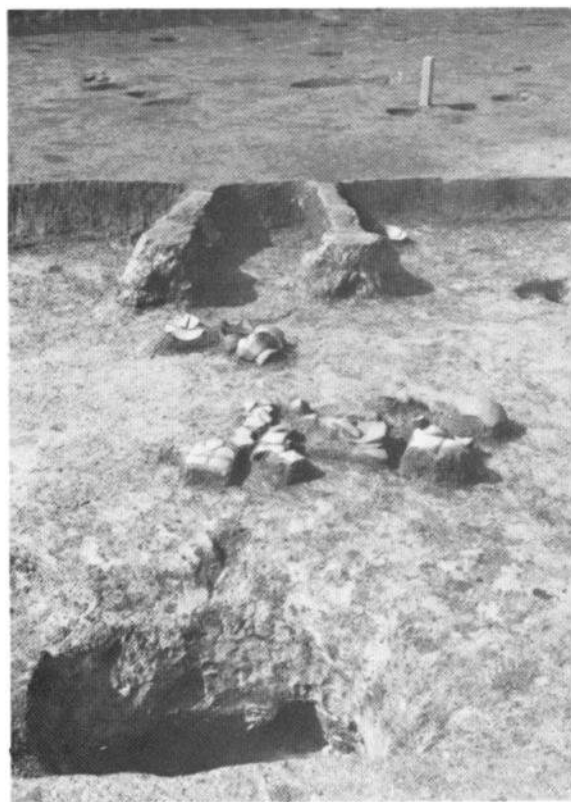
南 壁

北 壁

2 第1号住居跡周壁溝



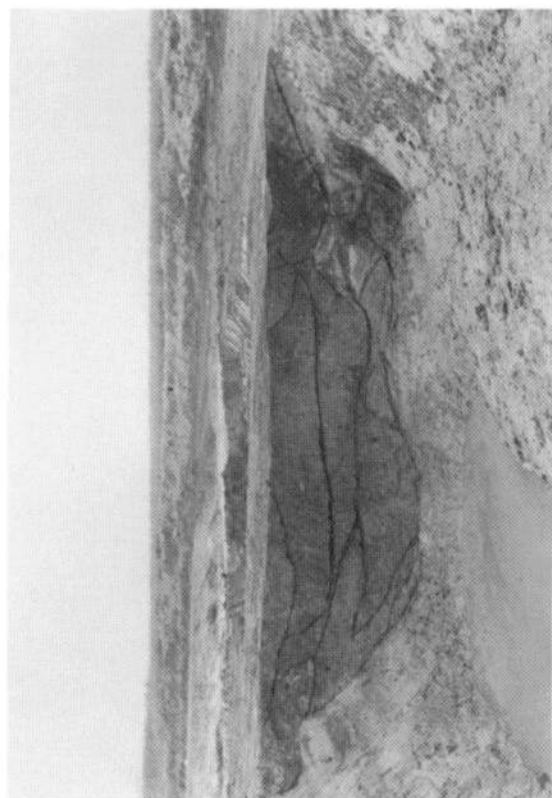
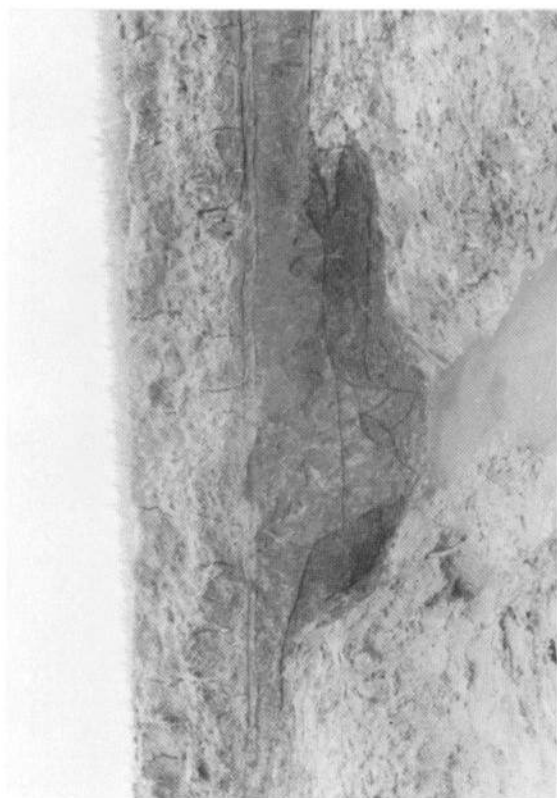
1 第2号住居跡（北より）



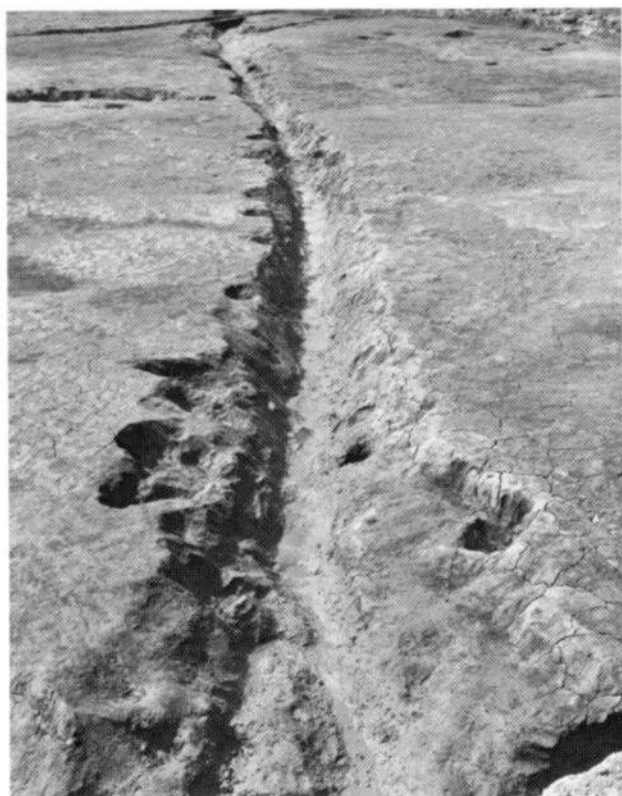
2 第2号住居跡床面土器出土状態



1 A区全景 (南より)



2 溝1土層断面 (上: 東端, 下: 中央)



1 溝3 (北より)



2 溝4 (東より)



3 溝5・6 (東より)



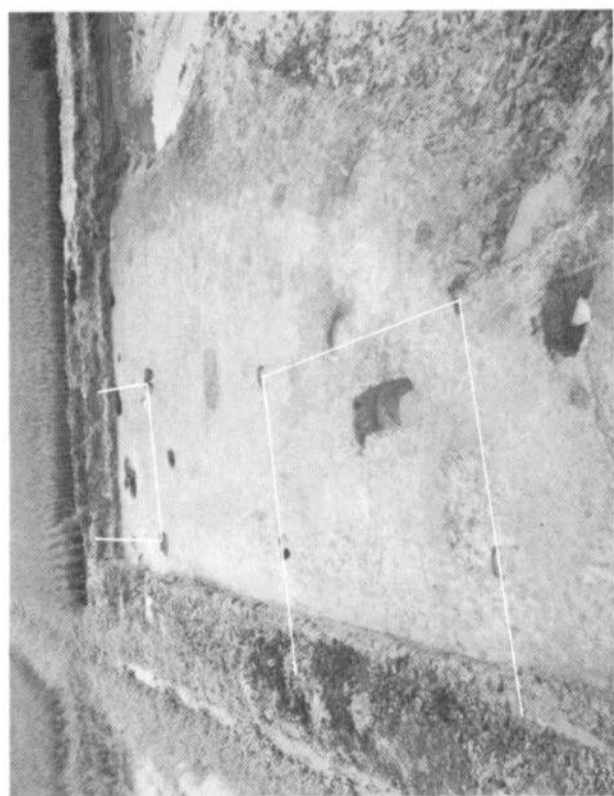
4 溝7 (北より)



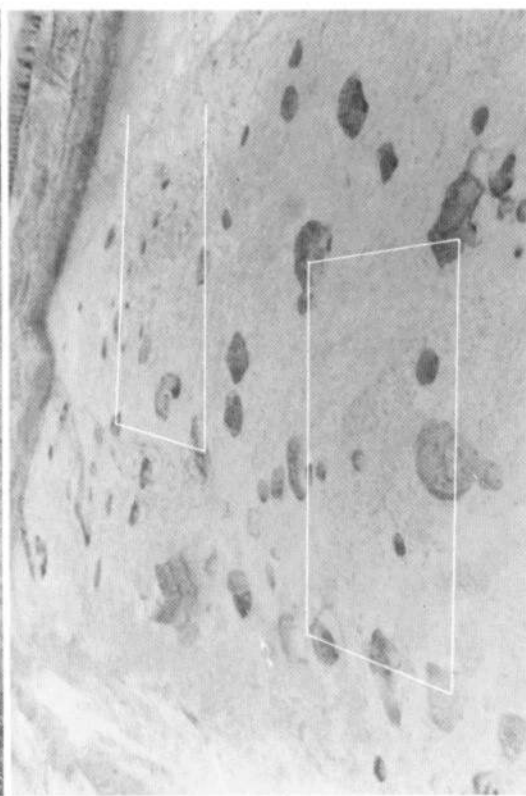
1 溝3北端土器出土狀態



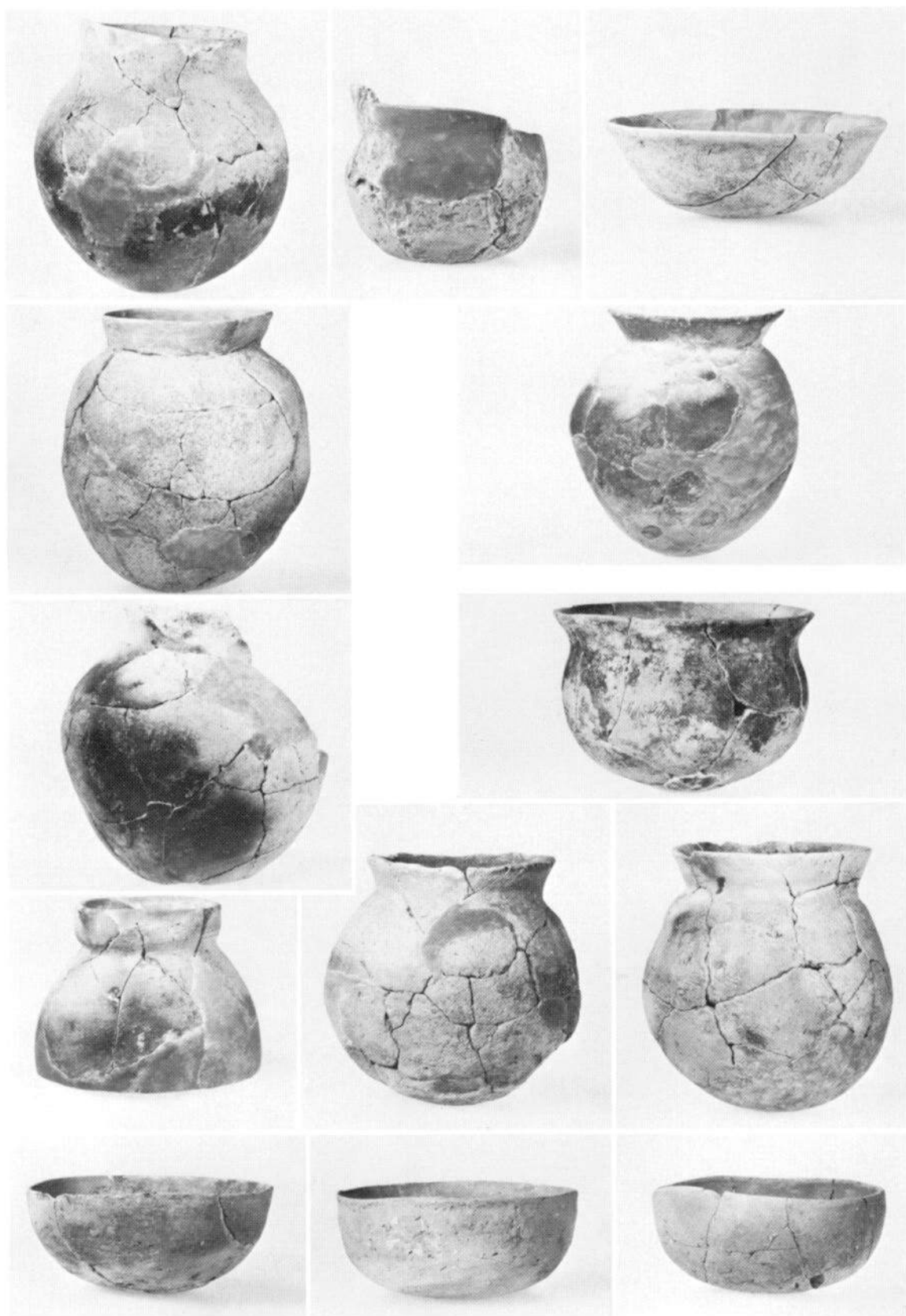
2 A区東南隅包含層土器出土狀態



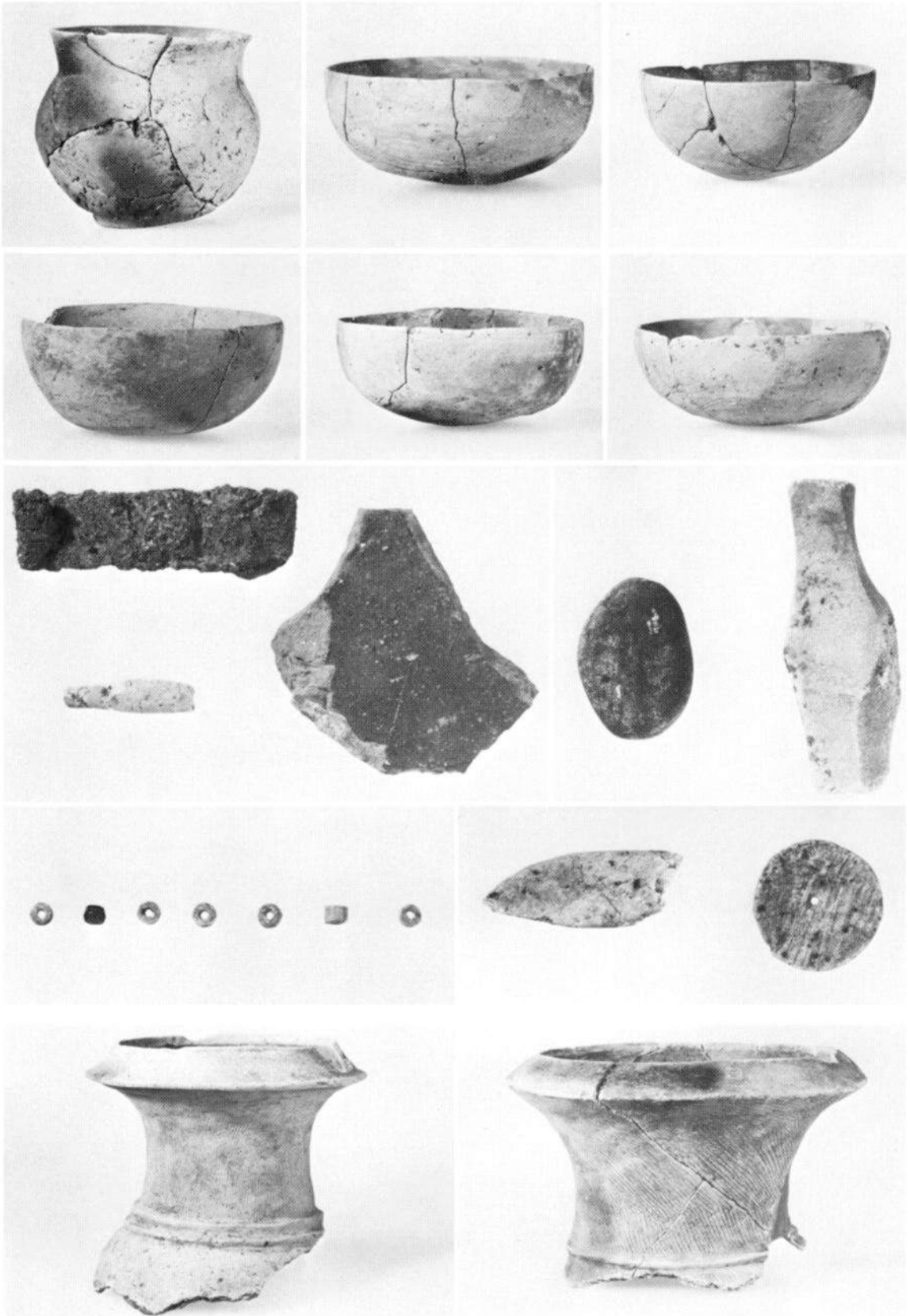
3 第1・2号掘立柱建物



4 第3・4号掘立柱建物

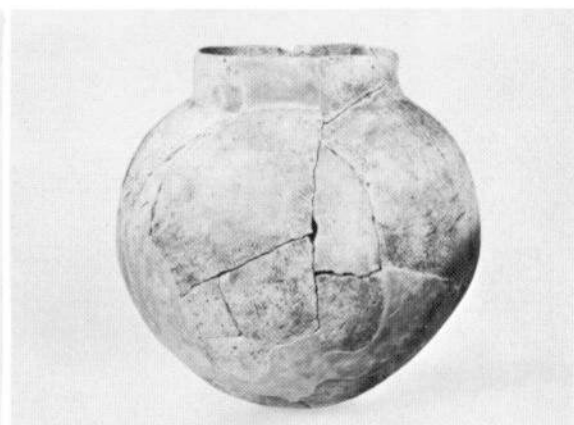
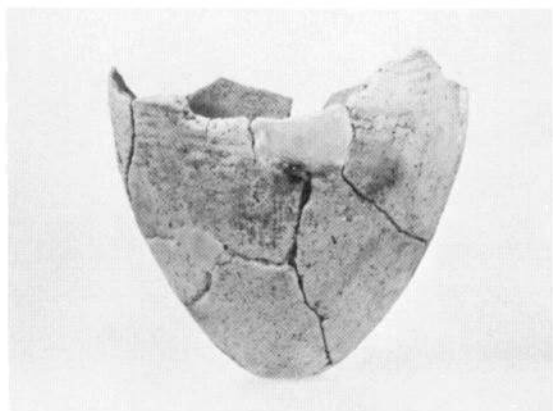
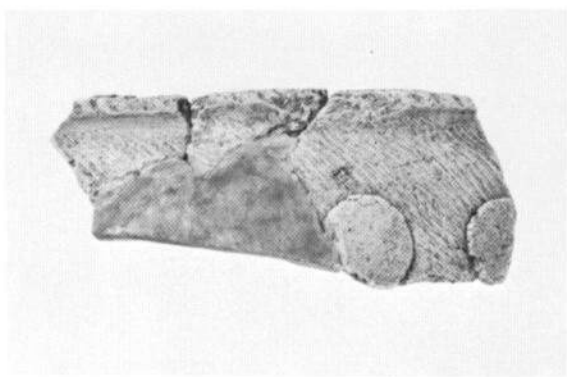


2 第2号住居跡出土土師器

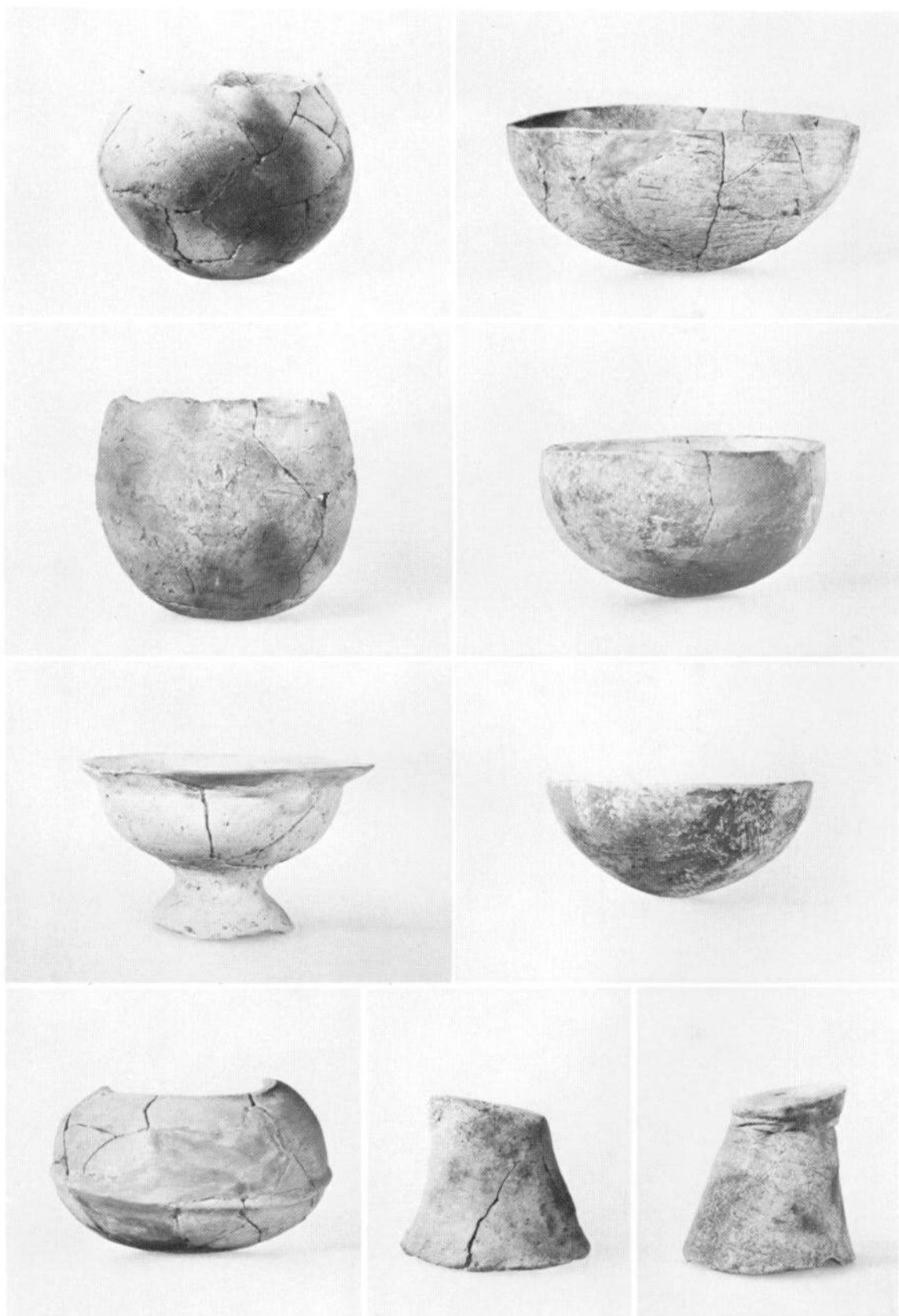


2 溝3北端出土土器

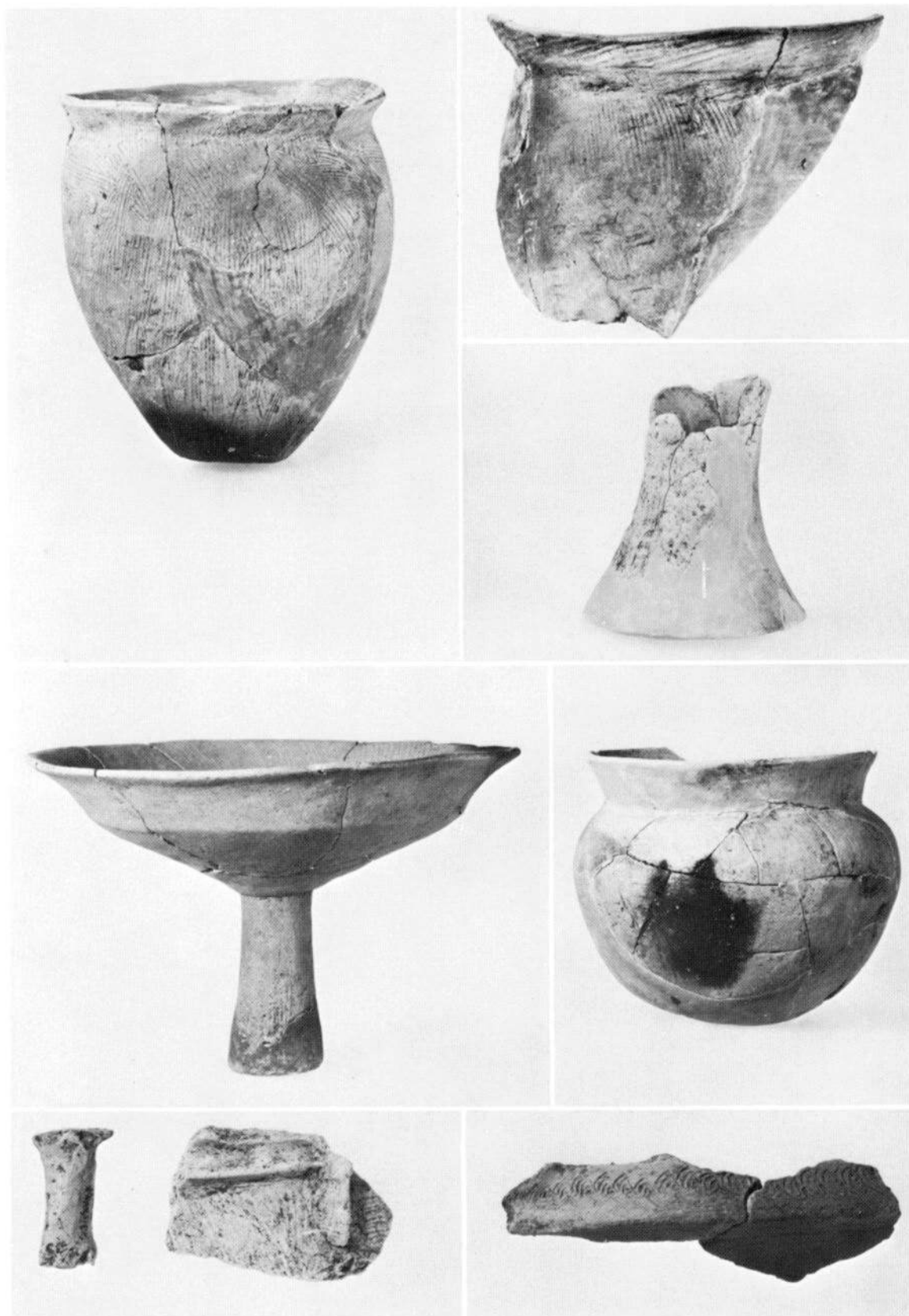
1 沟3北端出土土器



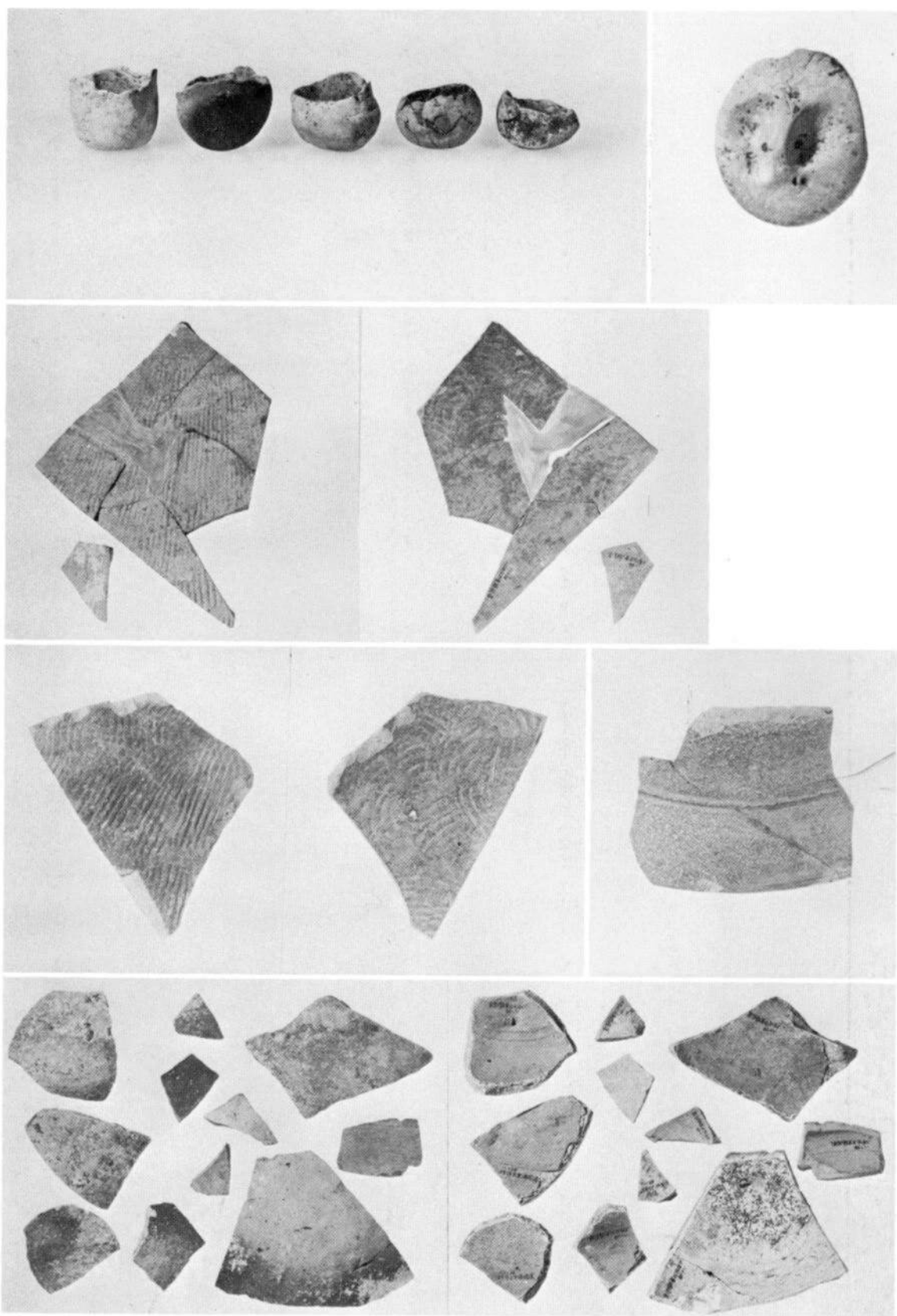
2 沟4出土土器



溝4出土土器



A区東南隅包含層出土遺物



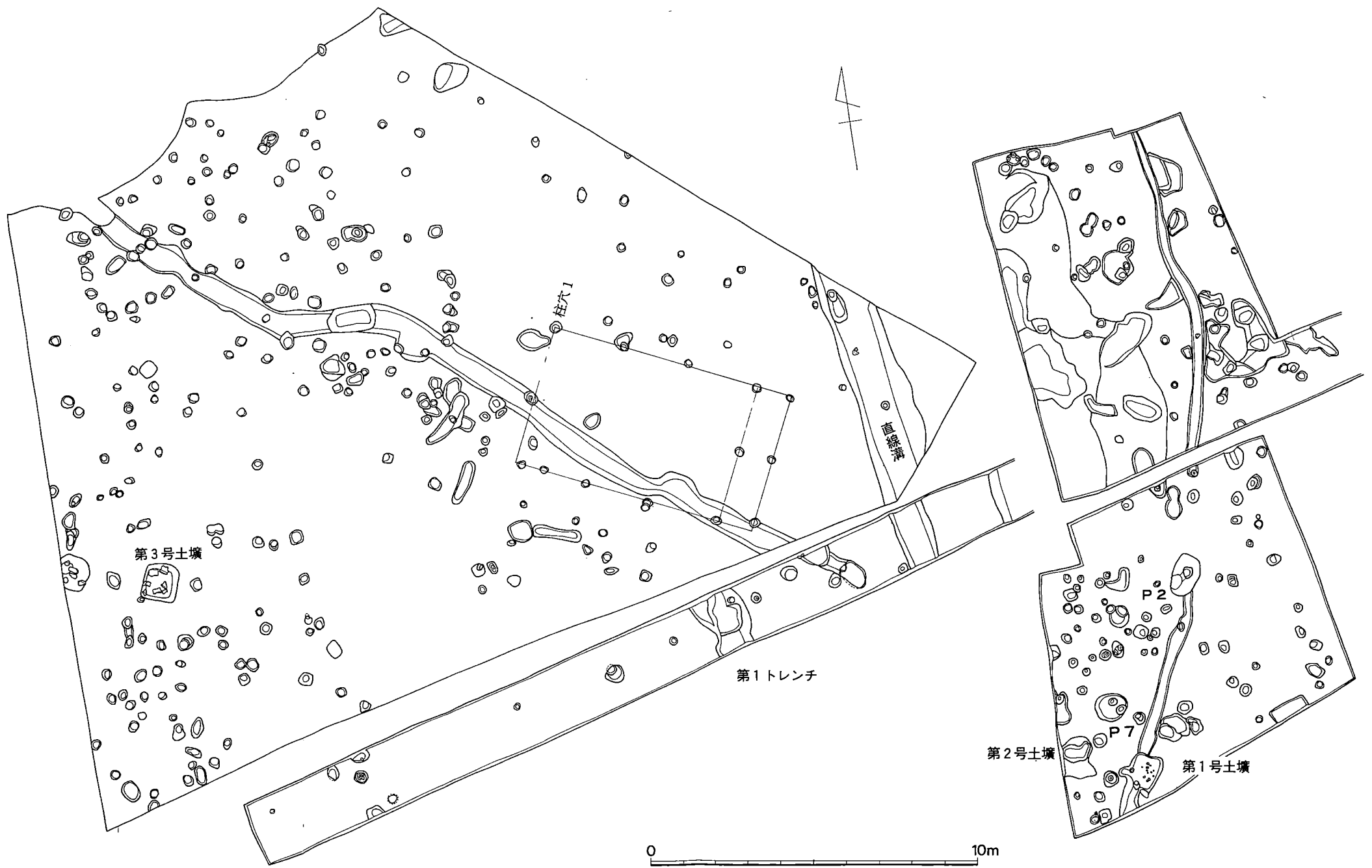
B区東端段落ち出土遺物

冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告

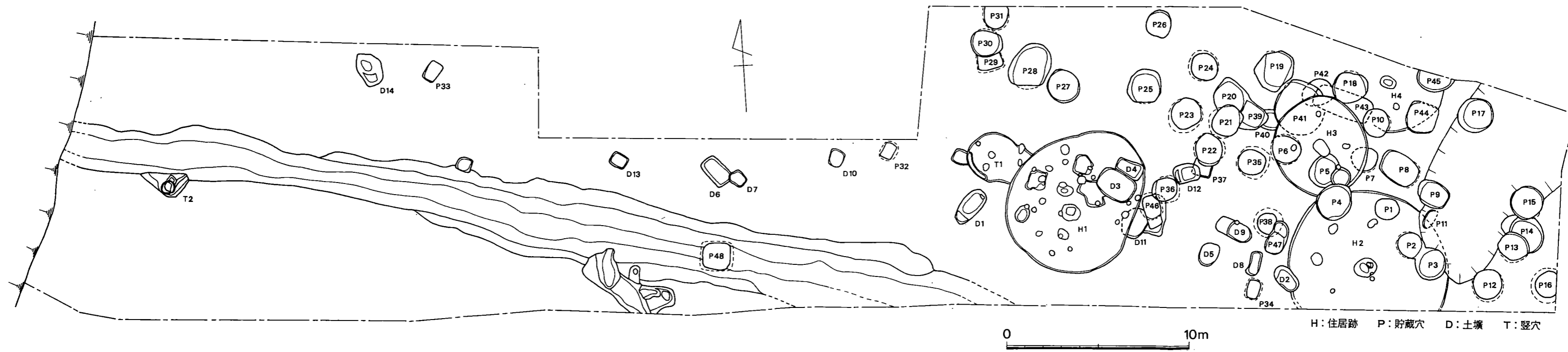
昭和57年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

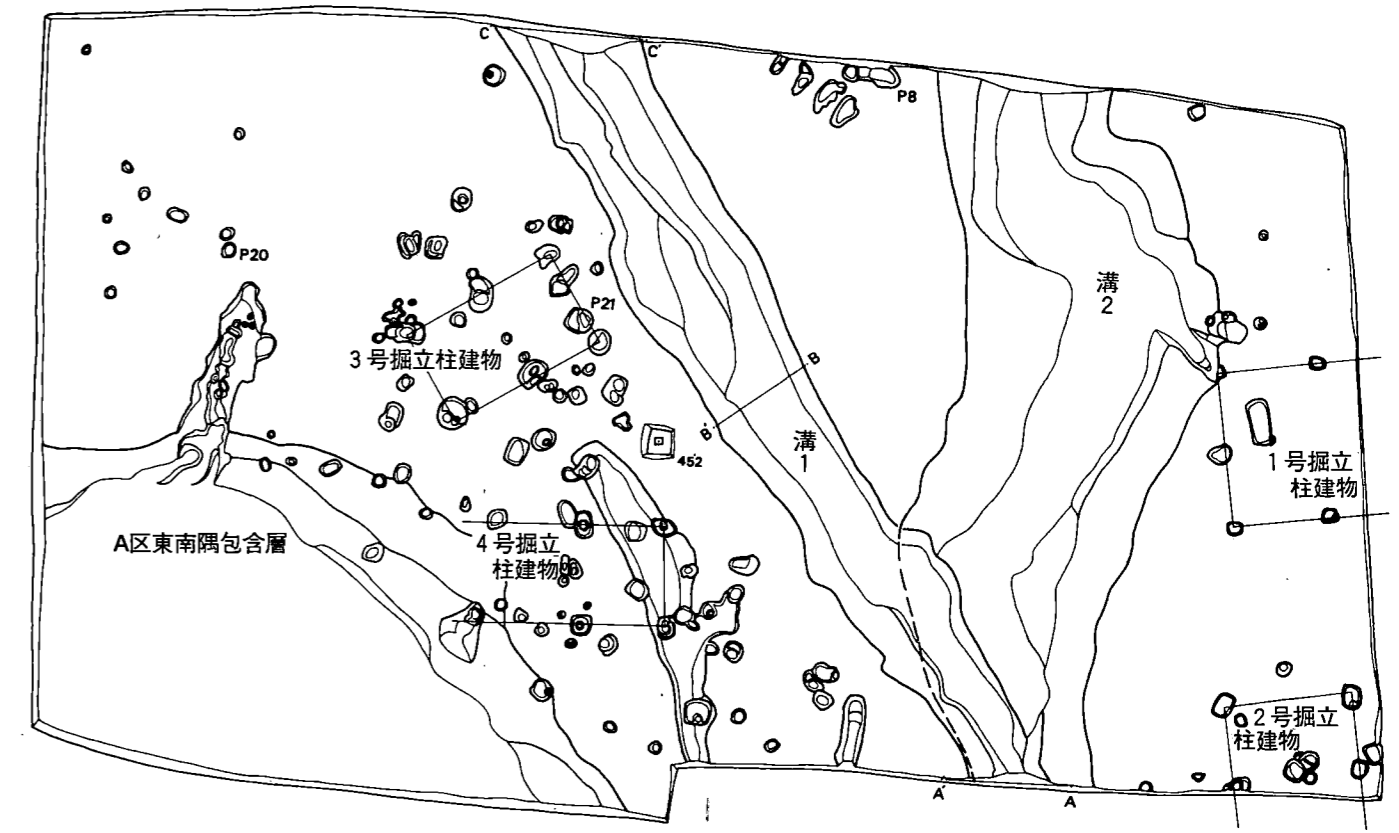
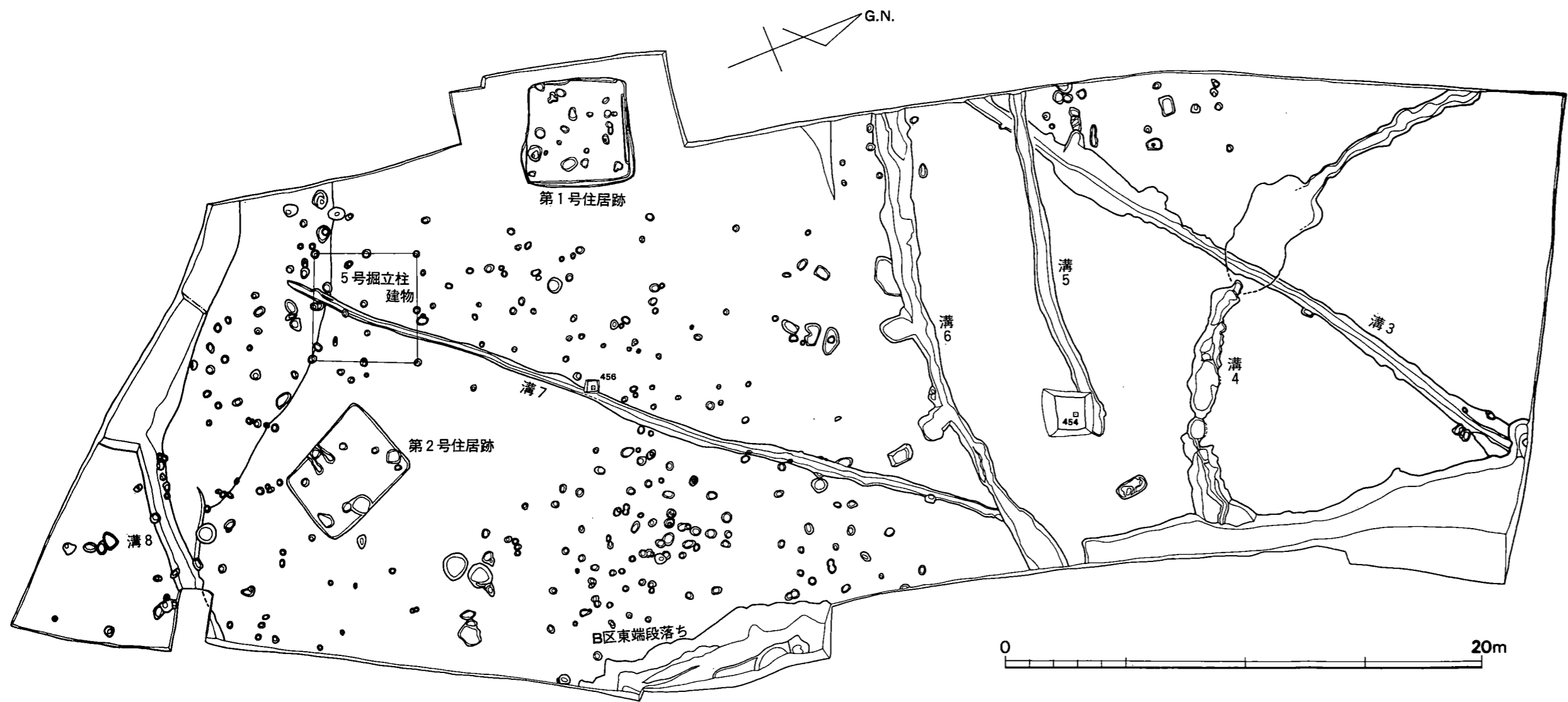
印刷 (株)天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大手町10番18号



付図1 浮殿D遺跡遺構配置図 (1/150)



付図2 大島遺跡遺構配置図 (1/200)



付図3 八ヶ坪遺跡遺構配置図 (1/200)